Devil Nano Cry

ignited

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｅｖｉｌ　Ｎａｎｏ　Ｃｒｙ

【Ｎコード】
Ｎ０７４２Ｈ

【作者名】
ｉｇｎｉｔｅｄ

【あらすじ】
管理局の魔王とデビル ハンターが出会った時、事件は動き出す。

プロローグ

「“Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ”」

お決まりの文句と共に、ダンテは鳴っていた電話を取った。

受話器ごしに聞こえた“合言葉”に、ダンテの口元が綻ぶ。

「ああ、いいぜ。そういう仕事は大歓迎だ」

“合言葉”付きの仕事の依頼は久しぶりだ。自然、対応する口調もはずむ。

「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．任せときな」

短い電話を切り、ダンテはゆっくりと立ち上がる。

愛用の黒と銀の拳銃を腰のホルスターに収め、トレードマークの真っ赤なコートに袖を通し、身の丈の半分以上はある大剣を担ぐ。

そして最後に、彼はデスクの引き出しの奥から、薄っぺらい手帳のような物を取り出した。

“Ｔｏｎｙ・Ｒｅｄｇｒａｖｅ”

表紙を開けた１ページ目にはそう書いてある。

それは、彼の構える店“Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ”ができるよりも更に前。思い出すのも面倒なくらい昔に作った、偽造のパスポートであった。

「懐かしいな。まだ使えるといいんだが」

コートのポケットにパスポートを突っ込み、古くなって立て付けの悪くなった扉を蹴り開ける。夜の風がダンテの銀色の髪を僅かに揺らした。

主の居なくなった事務所の床には、山ほどのピザの空箱が汚く散らかっている。

僅かに開いている扉から吹き込む風に乗って、その上に一枚のメモが落ちた。ダンテが電話で話を聞きながら取ったメモだ。

そこには乱暴に、そして短く、こう残されていた。

“ＵＭＩＮＡＲＩ　Ｃｉｔｙ　ｔｏ　Ｊａｐａｎ”

コートとうさぎのｏｎｅ'ｓ　ｆｉｒｓｔ　ｍｅｅｔｉｎｇ

薄い雲がかかる夜空。その陰に隠れた月がおぼろげな光を地上に降らせている。
時刻は既に夜。静寂と停滞が世界を支配しはじめる時間。

まるで静止したかのような町の外れに一つ、足音が響く。ジャラジャラと揺れるシルバーのアクセサリーがその足音に僅かなアクセントをつけて、暗闇に溶け込む事のない、深紅のロングコートが一歩を踏むたびに揺れていた。

皮のグローブを着けたその手にもシルバーは光っている。荷物は身の丈よりも長い特注のトランクケース。旅行鞄にしては特徴的にすぎる形であり、何より、その人物自体がとても旅行者には見えなかった。

ふと、一定のリズムを刻んでいた足音がぴたりと止まった。

「Ｈｕｎ，こっちは長旅で疲れてるってのに、早速お出迎えか？」

けだるそうに発せられた言葉は、独り言とは思えぬニュアンスを含んだ口頭語だ。
しかし、ここは夜の町外れ。語りかけた先に誰かが居るわけでもなく、その言葉は何も無い暗闇の空間に吸い込まれるように消えていった。

しん、と静まり返る闇。変化が起こったのはすぐさまの事であった。
闇が、まるでしずくの様に溶け出し、地面に落ちたのだ。それも

一つではない。二つ、三つ、とその数は音も無く、しかし、気配だけを増大させて増えていく。

虚空から垂れ落ちた闇のしずくは蠢く様に立ち上がり、かろうじて人型と分かる程度に、不定形にその輪郭を歪ませ、おぼろな光を宿す双眸が一斉にこちらを向いた。

「ヘイヘイ、たったこれだけか？どうせならもっと派手（クレイジー）に行こうぜ」

ダンテは面白くもなさそうに、その闇に向かって言葉を吐きかけた。

日常とはまるでかけ離れた光景に、しかし、ダンテは欠片の動揺も狼狽も見せない。

それもその筈であろう。元より彼は平凡な日常では生きてはいないのだから。

日常の裏側。けして光の届かない深淵に巣食う、悪魔と呼ばれる存在に彼は牙を剥き続ける。己が身一つ。ただそれだけをもって。

言うなれば、この非日常こそが、彼の生きる世界であり、現実であり、全てなのだ。退屈を押し殺した日常は白昼夢程度の価値しか持たず、気が向かなければ最低限の仕事すらしない。ジャンクフードばかり食べる彼の生活に言及する者も少ないながら存在するが、さりとて彼が何をあらためる訳でもない。

身体の半分を染め上げる血の赴くままに、彼は夜と闇の狭間で踊り続ける。

いつしか、彼はある一つの異名で呼ばれるようになっていた。そ

れはいつの間にか、誰ともなしに語られるようになった呼称である。恐怖と、畏敬と、そして若干の羨望をも含んだ、もう彼にとっても聞きなれた呼び名である。

曰く、悪魔狩る者（デビルハンター）と。

オォオォォーーン……！

唸りは、地の底から響くかのような怨嗟の叫び。苦痛と憎悪と、あらゆる負を内包する響きが、夜に高鳴る。合図の一声。闇が、唐突に弾けた。

「Ｃｏｍｅ　ｏｎ　Ｂａｂｙ！」

来いよ、悪魔ども！

夜にまぎれる悪魔の攻撃に対し、ダンテはほとんど身構えもせずにそれを迎え討った。

初めの一撃は、右足を突き出しただけの踏み倒すかのような前蹴り。

半実体化しかしていない悪魔の身体はもろい。その蹴りの一発で悪魔は崩れ落ち、薄氷を踏み抜いたかのような軽い感触に少しだけダンテは、強く蹴り過ぎたな、と顔をしかめた。

足を引き戻す一瞬の間にダンテを囲んだ悪魔は3体。手を振り払うだけの単純な攻撃に、ダンテは避ける動きも見せずにトランクケースを振り回した。鉄のフレームに木とプラスチックで補強されたケースは重く頑丈だ、脆弱な悪魔を薙ぎ払った程度で壊れはしない。

払われた悪魔の腕は飛び散るように消えてなくなり、またも、ダンテは手に残る反動の小ささを噛み締める事になる。

ふん、と。つまらなさそうに、一息。

そして、闇が凝縮する、その合間を、赤い旋風が吹き抜けた。人外の速度と反応を持った踏み込みは、開けた間合いを吹き飛ばすかのように、悪魔とダンテとの距離を0にする。目前。動揺、というものがこのレベルの悪魔にあるのかどうかは判断に困るが、ダンテは気にせず反応の鈍い悪魔に強烈なハイキックを見舞った。

吹き飛ぶ前に散り消える悪魔にくれてやる目は無い。デビルハンターの豪腕は、既に次の悪魔を刈り取りに動いた。

「ｙｅｅｅ－ｈａｗ！」

叫びはせめてもの景気付け。踏み込む歩数は二歩。声がしぼんでしまうよりも早く、ダンテの体が宙を舞った。

ドロップキックは弾丸のような速度で文字通りに悪魔を蹴散らし、弾き飛ばされた悪魔たちは隊列を崩し、消え去り、体勢を整える必要も無く、ダンテは手当たり次第に悪魔の身体を拳でぶち抜いていっている。

「なんだよ、こんなんじゃ準備運動にもなりゃしないぜ！」

腕を広げたそのポーズは明確な挑発だ。ほら、俺は隙だらけだぜ？全身の雰囲気でダンテはそう語りかける。そう見えるのではなく、実際に気を抜いて立って、隙だらけにしているのだから彼は凄い。彼にとってのそれは、戦闘という料理にふりかけるスパイスのようなものだ。味付けは濃いほうがいい。そして気軽に食えれば文句は

無い。

そう思う彼の背後。暗闇から迫る悪魔に、一閃、回し蹴りを見舞う。死神の鎌よりもよりもさらに鋭い蹴撃に、悪魔の身体は両断され、機先を制したダンテはさらにその後ろの悪魔に向かって追い討ちをかける。蹴りの連打。ミドルから跳ね上がるハイキック、引き戻し、突き出した足で悪魔を弾き飛ばし、その足ではかった間合いの内側をトランクケースで薙ぎ払う。

続く動きで振り向いたダンテの挙動と、その左腕の鉄拳の動作が重なり、また一体の悪魔が塵となった。

圧倒的、とはまさにこういう事を言うのであろうか。

緩急自在のその動きに、影達はまったくついていけないでいた。雷光の速度で打ち抜き、流れる水のごとく避け、風のように駆ける。

その動きの中に、拳が、蹴りが、投げ技が入り混じる。

無骨で荒々しく、しかし無駄の無い動きは、まるで演舞を踊るかのようである。

……気付けば、数分前までは４０を数えていた悪魔達が、もうすでに両手で数えられる程度の数にまで減っていた。

「Ｔｏｏ　ｅａｓｙ．もっとガッツのある奴はいないのか？」

平然と。そして悠々と。電柱に身を預けたダンテが言葉を紡ぐ。

悪魔達は、恐怖というものを今初めて思い出したかのように立ち尽くしている。もっとも、塵とゴミで造られたような、下級の悪魔どもに感情などという上等な代物が存在するのかどうかは相変わら

ず分からないが。

――――どうやら、今夜はこれで打ち止めらしいな

ダンテが、ゆっくりと足を進める。

その夜に起きた怪異に、決着が着こうとしていた。

・

・

・

「たく、明日から休暇だってのに！」

地上本部での、報告書やら決済やら面倒な室内業務をまるっとグリフィスに押し付けて、早々に帰ってきた久々の海鳴市。お気に入りのアイスを食べながら散歩をしていたヴィータの感覚に無数の魔力異常が引っ掛かったのは、今から１０分ほど前の出来事である。

これも本部に報告だけして、今現在、デスクで頑張っているであろうグリフィスに任せてしまおうか、という誘惑を最後の良心で圧し留めたヴィータが向かうのは市内にある藤見町の外れであった。

真紅のバリアジャケットに身を包み、夜空の風を切る。眼下に見える光はどんどん少なくなっていく。それは、人が生活している場所から離れていっていると言うことだ。

その事に、ヴィータは一つだけ安心する。民間人を巻き込む危険は少ないに越したことはない。空間凍結の要請もいらなそうだな、

と。

「何だ…？」

そう思いながら高度を落とした彼女は、一瞬だけ言葉を無くした。広がる光景は、一言で表すならば、戦闘だ。対抗しているのは赤いコートの大男と、正体の分からない影のような一団。

蹴り、殴り、投げ、薙ぎ払い、コートの男の動きはヴィータの目から見ても超絶的だった。思わず人間なのかと疑ってしまいそうになる。挙動の一つ一つが連なり、あるいは予想もしないところで途切れ、敵を翻弄している。

戦闘、と表現した光景ではあるが、実際には、それは圧倒的な力による蹂躙にも等しい一方的な展開だった。

見事、と賞賛してもいいだろう。ヴィータは息を呑み、その光景に見入っていた。

「Ｇｏ　ｂａｃｋ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｈｅｌｌ！」

最後の影を力任せに地面に叩き付けて、その男は身の丈以上もある長細いトランクケースを担ぎなおした。急速に、ヴィータに通常の時間の感覚が戻ってくる。長く、永く感じたそれは、時間にすれば一息が気管を通って肺に入るまでの、ごく短い一瞬でしかなかった。

言葉も無く、呆然とするヴィータの視界の中心で、男は緩慢な動きでコートの乱れを整えると、ゆっくりとした動作でこちらを見上げた。

ぞわり
背筋を這い登る冷たい感覚に、思わず、ヴィータは身震いをした。
――――コイツ……！
何者だ。
人間なのか。
疑念と疑問が頭の中で反芻される。
外見で判断するならば、その答えは“イエス”であろう。しかし、鋭敏に反応するヴィータの第六巻が“ノー”であると告げている。
ヤバイ。ただ漠然とそう思った。言いようのない、現しようのない、恐怖に似た感情がヴィータの腹の奥底に沈殿していく。
僅か、彼の口元が動いた。
「ッ！？」
身を硬くするヴィータの耳に届いたのは、
「うさちゃん（ラビッツ）柄か。いい趣味だぜ、おチビちゃん」
などという、緊張もクソもない男の言葉であった。

「――――……～～……」

限界にまで張っていたヴィータの心はその言葉一つで千切れた輪ゴムのようにどこかへと飛んで行ってしまった。飛行の魔法も解ける。地面に落ちてしまったヴィータは、スカートの裾を押さえながら、睨み付けるようにその男を凝視した。

「あんまり見つめるなよ、照れるぜ」

「ウルセーよ変態！」

「ヘイ！こんないい男を捕まえて変態はないだろ？それに、覗いた訳じゃないぜ。見上げたらそこにおチビちゃんのうさちゃん（ラビッツ）が居ただけだ」

「うさちゃんうさちゃん言うな！恥ずかしいだろうが！あと、おチビちゃんもやめろ！」

「Ａ－ｈａ？お嬢ちゃん（リトルレディ）は背伸びしたい年頃かい？そのうさちゃんが居なくなったら、俺がデートに連れて行ってやるよ」

大人の遊びを教えてやるぜ？と、ウィンクを一つ。

飛んできたそれを咄嗟に避けて、ヴィータはさらに男を睨んだ。非常に腹が立つ。

先程まで感じていた悪寒はとっくの昔に消え去っていた。その替わりにあるのは、腹の底から湧き上がる煮えるような激しい感情だ。

キザったらしい仕種に。モデル並みに整ったニヒルな笑顔に。人を小馬鹿にしたようなその口調に。

とにかく、目の前に居る男の何もかもがヴィータを心底イラつかせた。ぶん殴ってしまいたい。グラーフアイゼンのラケーテンフォームであの顔をぶち抜いてやったらどれだけ気分が良くなるだろうか。

「ヘイヘイ、表情が険しいぜ？将来はとびきりの美人になるだろうが、そんなキツイ目つきじゃ男が逃げちまう。笑顔（スマイル）と泣き（クライ）落としは美人の最高の武器だぜ」

言って、男はトランクケースを肩に担ぎなおした。
ヴィータに背を向け、後ろ手に腕をひらひらと振って、

「じゃ、夜更かしせずにお家に帰りな」

Ｇｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ，Ｂａｂｙ.
言い残して去って行く。

「……はっ」

思わずヴィータがその背中を見送ってしまったのは、その男があまりにも自然に歩いて行ってしまったからだ。咄嗟に口をついた制止の言葉は、時空管理局に所する義務感、というよりも単なる個人的な感情によるものだった。

「おい止まれ！待て！待てー！」

待たない。

叫ぶヴィータの言葉も虚しく、男は振り向きもせずに歩き去る。

「待てって――――」

だがヴィータも負けてはいない。

我慢は苦手だ。彼女のたいていの交友関係は殴り合いから始まる。その例にもらす事無く、とは言っても交友を深める気など毛頭無く、ヴィータは自らのデバイス、グラーフアイゼンを振りかぶった。

「――――言ってるだろーが！！」

叩きつける！

「おいおい、物騒なものは振り回すなってマミーに言われたろ？」

不意をついた筈の一撃は、男の持っていたトランクケースによって防がれた。剣撃のつばぜり合いよろしく、顔を突き合わせての押し合いになる。

後足で地面を抉り、前足は地面を削る。

予想はしていたが、ヴィータはそれでも驚いた。

――――圧し、返せねえ…！

身に刻まれた歴戦に覚えた体術は、バリバリの力押し一辺倒。叩いて壊す。守って逃げる。単純明快に確立された自身の戦闘スタイルは、それ故に、並大抵の相手に押し切られる事は少ない。

その自分が、押さえ込まれている。上から押さえつけている有利を抜きにしたとしても、男の腕力は相当なものだった。

「てめえ、何者だよ」

「見たまんまさ。ただの、いい男だよ！」

男がトランクケースを跳ね上げた。弾かれ、ヴィータは一旦の距離を取る。

本当ならば間髪も挟まずに反撃を切り返したいところだが、力負けしたという事実がヴィータの沸騰しそうな頭を冷静にさせている。

「さっきの魔力異常はお前が原因だな？」

ヴィータは考える。この只者ではない男と、どのように切り結ぼうか、と。

邂逅は一瞬で、まだ本気でぶつかり合った訳ではないがそれは向こうも同じ事だろう。生半可な覚悟と力で拮抗できると考えるほど自信過剰ではない。

「さてね。あいにく、覚えが無い」

ニヒルな笑みと飄々とした態度からは、この男の何かを読み取る事は出来ない。ヴィータは腹の読み合いと駆け引きも苦手だった。

「ふざけやがって。こっちは真剣（マジ）モードだってのに」

「Ｅａｓｙ　ｄｏｅｓ　ｉｔ．落ち着けよ。今日は、あとは酒飲んで寝るだけなんだ。一日の締めくくりにガキと殴り合う訳にもいかないだろ？」

「あたしだって、もう晩飯の時間はとっくに過ぎてんだ。腹が減っ

てんだよ」

だから、

さっさと――――

「正体を吐きやがれ！」

跳ね上がるアイゼンのハンマーヘッド。

人外の速度で踏み込む足は経年劣化した舗装を踏み砕き、アイゼンのスピードが風を纏う。

これが、散々考えを巡らせたヴィータの答えだ。

得体の知れない相手だが、とにかくぶん殴って、話はそれからしよう、と。

ぶちのめされた後にも絆は育まれるもの。過去に実際にぶちのめされた彼女はその事をよく知っている。腕を突き出すなら握手も拳も似たようなものだ。

ヴィータは、一直線に動く視界の中、グラーフアイゼンで縦に一線を切った。半円の起動を描くアイゼンの攻撃に対する男の反応は、半歩身を引いた回避の挙動。

既に半ばまで以上振り抜かれたアイゼンの速度はもう止まらない。目標を外れ、アイゼンの頭は地面を叩き砕く。捲れた舗装と砕けた礫が巻き上がる。

反動はヴィータの手に返り、その一瞬の硬直時間に男が割り込んだ。

地面にめり込んだアイゼンの頭が跳ね上がるよりも速く、男のブーツがその頭を押さえつける。

右の手にはトランクケース。空いている左手で銃の形を作り、その銃身をヴィータの額に押し付け、Ｂａｎｇ！と引き金を引いたまねをする。

「だから、子供がこんな物を振り回すなよ」

「子供じゃ――――ねーよ！」

押さえている足をもろともに、アイゼンを跳ね上げた。

男は、身軽な動きでそのアイゼンの動作に自身の挙動を合わせて地面を蹴り、跳ね上げたヴィータの膂力さえもを利用して、高く跳び上がった。

たなびくコートが風を切る音と、男のブーツが瓦張りの屋根に着地する音がした。パチン、と指を鳴らす音も。無駄にキザったらしい仕草で指を弾いた男は、

「Ｇｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ，Ｂａｂｙ．うさぎのお嬢ちゃん」

赤いコートを翻して、夜の暗闇に消えてしまった。

「あ！？待て！」

やっぱり待たない。

真紅の魔力光を散らして飛び上がった先に、男の姿は無かった。

「～～～～……！！！」

喩えようの無い敗北感が全身を駆け巡る。

非常に惨めな気分だ。
パンツまで覗かれて。
結局、最後まで子ども扱いだったし。
うさぎうさぎって。

「ちっくしょーーーーーー!!」

人気の無い町外れ。
その日の夜は、遠吠えする犬の鳴き声に混じって、女の子の泣き声が聞こえたとか聞こえなかったとか。

コートとうさぎのｏｎｅ'ｓ　ｆｉｒｓｔ　ｍｅｅｔｉｎｇ（後書き）

【おまけＳＳ】がんばれヴィータちゃん・帰宅編

「…ただいま……」

「あ、ヴィータちゃん。もう、駄目じゃないの、こんなに遅くまで出歩いちゃ！心配したんだから。遅くなるならちゃんと連絡を入れなきゃ駄目でしょう？もし危険な目に逢ったりとかしたら……」

「お前もあたしを子ども扱いするのか？ぅ、ぅう……」

「ヴィータちゃん？な、泣いてるの！？どうしたの！？何かあったの！？」

「シャマルが……、シャマルが、うさちゃんパンツなんて買ってくるから悪いんだ！シャマルのバカーーーーー！！」

「え、ええ！？な、何があったの！？ヴィータちゃん！？待って、ヴィータちゃーーーーん！！」

「ここかな、一番良く海が見えるのは」

という、なのはの言葉に、その後ろについて来ていた二つの影が嬉しそうに声を上げた。

場所は海の見える展望公園。観光向けに造られた公園では何人もの人が入れ違い、そこから見える水平線を目に映して楽しんでいる。なのはもその一人。他の二人が誰かというと、

「あ、あれが、あの伝説の！？」

スバルと、

「なのはさんと、フェイトさんの海上最終決戦が行われたという……！」

ティアナであった。

「さ、最終決戦て……。確かに海の上で戦ったけど……」

初めて訪れる海鳴市を案内してあげよう、となのはが提案したのが昨日の夜の事。即座に返ってきたのは肯定の返答と、海が見たい、という要望であった。

そうして、昨夜の就寝間際、子供の頃から１０年余り以上を過ごした故郷の情景を思い描きつつ、具体的なのか漠然的なのか判断に困るその注文を満たすためになのはが選んだ場所がここだった。

直接海に連れて行くのは芸が無い、と思い、時期的に海水浴では無いだろう、と思い、それにしても何で海？と思い、泳ぐならプールしかないな、と思ってわざわざネットで季節外れの水着特集に目を通していたなのはだったが、その二人の言葉を聞き、そういう事か、と多少納得する。

「当時９歳で、既にＡランク以上の戦闘技能を持ち、魔力量に至ってはＳランクオーバーにも手が届くほどの驚異的な数値を叩き出し、管理局の歴史にその名を残したなのはさんの伝説が、あの、海の上から始まったんですね！！」

興奮して鼻息を荒くするスバルを、まあまあ、とたしなめる。

そんなに過大評価されても困る、というのは、なのはが幼少期からの逸話を持ち出された時の決まり文句だ。年端もいかない、という一文から始まる過去の話は、妙な尾ひれ背ひれをつけて管理局内を右往左往泳ぎ回っている。

曰く、口論は拳で解決する。
曰く、魔力開放で時空振を起こす。
曰く、空間凍結を魔力波でぶち抜いた。

などなど。さすがにそれは無いよ、というような事から、それは……、合ってるかな？というような事柄まで様々。仕舞いには第六次元から現れた魔王の眷属だ、などといった噂がまことしやかに流れている始末。

この年まで言い寄ってくる人物が誰一人として現れないのもその辺りに原因があるのではないか、と最近少し真剣に考える。同室で親友のフェイトにその事を相談した時は、

「え!?そんな!なのはには私が…、あ、いや、何でもないよ!そうだね、うん、私が何とかするよ!」

と言ってくれたのだが、どうやらフェイトの力でも人の噂だけはどうにもならないらしく、それ以後の状況は特に変わっていない。どころか、逆に変な噂が増えたのではないかと思うこともしばしばだったりする。

「でも、管理局に入った時にＡＡ相当の魔導師ランクを与えられたのは、間違いでも噂でもないですよね。それに、海上での決戦映像の一部も無限図書館の隅の隅にありましたよ。手足縛られたフェイトさんがスターライトブレイカーに呑まれるシーンがコメンタリー付きで」

それは初耳だ。帰ったらきっちりとどういう事か無限図書館の責任者を問い詰めよう。

「ん～、まあ、確かに私の“今”が始まった場所ではあるかなぁ」

今は懐かしき過去の日々。大切な絆と力の両方を手に入れ、そして育んだ町。

「いい所だよ、ここは」

そんなこの場所が大好きだ、となのはは笑った。

・
・
・

さて今日は、機動六課に与えられた久々の休暇の、その初日である。

多忙を極める機動六課にはこれまでほとんど休暇らしい休暇は存在しなかった。試験運用中の実験部隊である事と、どんな事件をも即座に解決・粉砕・大喝采してしまう優秀すぎる魔導師が雁首を揃えている事がその主たる原因なのだが、それはそうとしていかに人外の能力を開発してきた彼女らにも、休息は必要不可欠である。

「まあでも、各部に相当な無理を通してもらって結成した部隊だからね。休暇が欲しいとは言い難いんだよねぇ」

公園のベンチで一息入れながら、なのははスバルが買って来てくれたたこ焼きに舌鼓を打つ。

「たまの休みも、休暇っていうか、自由待機（オフシフト）ですもんね」

いざ何かあれば駆り出され、遠出もままならない。基本は自由だが、それでも管理局の仕事に縛られている事に変わりの無い休日。

――それでも、隊長陣の人達よりはよほどマシだけどね

と、ティアナは思う。
休日に制服姿の彼女らとすれ違う事はけして珍しい出来事ではないし、自分自身が繰り出すことも二度や三度ではなかった。

結局、どうもこうもなく、きちんとした休暇など取る事は出来ないまま月日は流れ、かの大犯罪者ジェイル・スカリエッティの引き起こした一連の時空管理局へのテロ行為、通称“ジェイル・スカリエティのゆりかご大事件”を得意の力技で解決したのが、ちょうど先月の話。

「いやー、あれはまさに時空管理局発足以来の危機でしたよね。地上本部壊滅なんて、だれも予測出来なかったですよね？」

うーん、となのはは少しだけ考え、そうだね、と軽い返事を返した。
その“事態の予測”は、もともとの機動六課設立の理由に深く関わる部分なのだが、その事をスバルやティアナは詳しく知ってはいない。一応、極秘事項扱いの情報だからだ。いつか、恐らく、過去の話としてその事を語れる時が来ると思う。その時はこっそりと、けれど何も隠さずに、全ての真実と経緯を教えてあげようと思う。
まずは、ごめんなさい、と言って。

「うん、スバルもティアナも、あの時は本当に頑張ったよね」

「いやー、そんな～、えへへ……」

「スバル、海苔をつけたまま笑わないの。でも、あの時に本当に凄かったのはやっぱりなのはさん達ですよ。戦いも、その後も」

空前絶後の世界の危機を、機動六課は救った。だがしかし、相応の戦果には相応の代償がつき纏うもの。機動六課がその身に受けた被害も相当なものだった。

「そうそう。私らなんかと違って、隊長陣の人達は満足に入院とか休養とか取れなかったですもんね」

戦闘を終えて帰ったはやてをはじめとする戦闘部隊の隊長のデスクには翌日から既に様々な事後処理の書類が詰まれており、その後の数週間あまりもまた彼女らにとっては厳しい戦いであった。

比較的、戦闘での傷が浅かったシグナムやはやて、フェイトなどは寝る間も無くデスクに向かい、各所を回っていたのだ。一応、戦闘ダメージレベル大と判断されて入院していたなのはも、動けるようになってからはレイジングハートのブラスタービットに点滴のパックを吊るしながら走り回っていた。

中でも、特にかわいそうだったのはヴィータだ。

重症で緊急入院となった彼女は事件以後の数日を絶対安静で過ごし、ようやく目覚めた彼女が初めに目にしたのはその数日分の書類の山だったという。物理除菌。魔力除菌。術式抗菌。三重クリーンアップをほどこされて無菌室に運ばれてくるピカピカの書類にヴィータは、ありえねえ、と言って涙しながらサインとチェックを入れていた。

その光景を見た時なのははは、つくづく、この戦いの虚しさと悲しみを思い知ったという。

胸に穴があいたみたいだったぜ、というのは退院したヴィータが開口一番になのはに告げたジョークだ。笑っていいものかどうか。

にゃはは……、となのはが困った顔でお茶を濁したのは言うまでも無いだろう。

「事件の現場よりも戦争だったかもね……」

三日間を栄養ドリンクのみで過ごしたその日々を思い出さぬよう、なのはは幾つかのたこ焼きを一気にほおばった。しみじみと噛み締める。食事は大事だ。栄養だけで生きていけるほど人の身体はファンタジックには出来ていない。

「大変…、でしたね」

うんうん。ティアナの言葉にスバルが頷く。
でも、となのははそこに一言だけ継ぎ足し、

「終わってみれば、だよね。どんなに大変でもさ。それに、その後のはやてちゃんも同じくらいに大変そうだったし」

過ぎ去ってみればそれも光陰矢の如し。何はともあれ解決した大事件だ。個人的に忙しいくらいは大目に見ようと思うなのはだったが、それを是としない者もいた。はやてだ。

傷ついた隊員達の為にとはやては最後の力で奮起し、自由待機（オフシフト）などではない、本物の休暇を取りつけるために関係各所を巡りに巡りまわったのだった。

機動六課は傷ついとる。
どんなに優秀でも休暇は必要なんや。
今までどれだけ休日を返上してきたと思てるんや。
やかましい、休ませろ。

なかなか首を縦に振ろうとしない各部署のボスを前にして、それはそれは見事な説得であったという。最後の一人を陥落させて休暇を勝ち取った時などは管理局広報誌の号外で報じられるほどであった。見出しにはでかでかと、

“機動六課、休む！！”

自分達はいったいどんな目で見られているのだろうか、となのは自身の身のあり方に一抹の疑問を持ったという。

「本当にね、私達って同じ人間として見られてるのかなって、たまに疑問に思ったり……」

「そ、それは……」

「人間離れしてるのは事実ですし……」

「む～。ティアナまでそんな事言って。……まあ、自分でも自覚はしてるんだけどね」

それはそれとして。

結果と事実に目を向ければ、そこには、休暇の二文字が燦然と輝いている。仕事に埋没した日々を受け入れるには、まだまだ彼女達は若い。

なので、と言うべきか。数日前に前夜祭として開かれた機動六課全メンバー合同の宴会は大いに盛り上がった。

「あれは楽しかったですね。はやて隊長の持ち込んだお酒で酔っ払

ったシグナムさんが、ずっとエリオの事を小脇に抱えててね」

「そうそう、で、そのまま何でか泣きながら服を脱ぎだして、フェイトさんに思い切り絡んでたよね。困ってるのか嬉しいのかよく分からない表情のエリオくんは可愛かったなあ」

「にゃ、にゃはは……。お酒には弱いみたいだよね、ヴォルケンリッターのメンバーって」

それからの展開もまた騒がしく、シグナムを止めようとしたスバルとティアナとキャロが、これまたはやてに飲まされて酔っ払ったヴィータのラケーテンハンマーで宴会場を転がり、さすがにこれは、と思ったなのはもはやての魔手に落ち一口でダウンしてしまった。

「フェイトちゃんが介抱してくれたんだよね、確か。あんまり覚えてないんだけど」

「はい、フェイトさんが“このなのはに触っていいのは私だけだから！”って、なぜか鼻血を出しながら言ってて誰の手にも預けようとしなくて」

そんな事になっていたのか。初めて知った事実だが、まあ、楽しかったからそれはそれでいい思い出にはなるのだろう。

その翌日、悪乗りしすぎだとグリフィスに散々怒られたはやてと、昨日の下着と記憶が無いとのたまうシグナムと、ポケットに入ってたんですと白い下着を持って来たエリオの三人にそれぞれ別口で相談された時はさすがに辟易としたが。

「まあでも、休みが取れてよかったよね」

手にした休暇は、１日や2日で終わってしまうようなチンケな代物ではない。まずはフォワード部隊とシャマル、ザフィーラ、はやてらが療養休暇の名目で二週間休み、その後、残りのロングアーチ陣はその後に年末休暇申請の形式で二週間休むという、実質的な総日数ならば約一ヶ月間という破格の休暇だ。

「遠慮も謙虚もなんも要らん！皆、思う存分気の向くままに怠惰に休むんや！怠けすぎて魔導師ランクが一個くらい下がっても今回ばっかりは何も言わへんで！」

と、部隊長として、この大勝利の報告をするはやての姿は今までのどんな現場での姿よりも輝いていた。

そうして、第一陣のフォワードメンバーが大々的に立てた計画の予定は、スバルやティアナ、エリオ達も常々行きたいと興味を思っていた、管理局の第９７管理外世界“地球”の観光である。

提案は様々出た。海外めぐりの絶景ツアーに屋台めぐりの絶品ツアーからお店めぐりのショッピングツアーまで。

「世界の刃物展に行きたいって言ったのはシグナムさんだっけ？」

「そうそう。で、シャマルさんが世界のメイドゴスロリ展に行きたいって言って、ザフィーラは世界の子犬展に行きたいってね」

会議室を2時間の予約で貸し切っての議論の末、全部やろう、との決断が下されたのは席について２０分後の事だった。その後の１時間と４０分は詳しい旅行の日程と行程を決める事に終始して、今日はその大いなる計画の第一日。

海鳴市で旅支度を整え、明日は市内の温泉に入り、明後日からはいよいよ旅行に出発する算段だ。

「いい所ですよね、ここって」

スバルが言って、ティアナも頷く。

買い物がてらにと提案した町の案内で、これほどまでに喜んでくれるとは思わなかった。

慕われているな、と思うのは自惚れだろうか。

機動六課は実験部隊だ、発足から解散までの期限はきっちり一年間と定められている。この月を休暇で消費したら、残りはもうあと半分も無い。

だからせめて、その時間の間だけは尊敬されるなのはさんで居ようと思う。この二人を連れて。

さっと、少しだけ冷たい風が海の方から吹いてきて、なのは達の髪の毛を優しく撫でていった。

「気に入ってくれて、よかった」

笑顔は心の底から。つられて、二人からも穏やかな笑顔がまろび出た。

手にある白いパックの中の最後の温もりを一口。

じゃあ、これからどこに行こうか？

二人にそう聞こうとしたなのはの声は、不意に、後ろからかかった別の声によって発生を中断させられた。

「あの、すみません」と。

まずスバルとティアナが振り向き、なのはも振り向こうとして、口元にまだ青海苔とソースがついてるのに気付いて、ハンカチで口元を押さえながら、少しだけ遅れて後ろを向いた。

「少し、よろしいですか？」

それは美しい女性であった。

柔らかそうな髪はなのはと同じ栗色。白を基調として清楚に纏められた服装は、彼女の華奢な体躯と合わさって、見る者にか細く儚(はかな)い天使のイメージを連想させる。

年のころはなのはよりも少し年上であろうか。けして小さくはない胸には羽のモチーフを象ったペンダントが輝いている。

「どうかされましたか？」

聞いたのはスバル。

その言葉に促されて、女性も口を再び開く。

「銀髪で、黒いコートの男の子を見ませんでしたか？私の弟なんですけど、はぐれてしまって」

不安げにゆがめられた表情の奥、髪とおそろいの瞳が悲しそうに揺れている。

可憐、という言葉をスバルは一瞬で連想した。まるでふれれば砕けるガラス細工のような、危うい雰囲気を持った女性である。

守ってあげたいオーラとでもいうのだろうか。この人を泣かせてはいけない、悲しませてはいけない、と人に思わせる何かが彼女にはあった。

そのオーラに中(あ)てられた訳ではないのだろうが、

「よければ、私達も一緒に探しましょうか」

と、心優しいなのはがそう言ったのはごく自然なことであった。傍らの二人も同意して頷いている。

「え、でも、そんな悪いです」

そう言う彼女だったが、困っている、しかもこんなか弱そうな女性を見捨てることなど3人にできる訳もなく、

「私たちのほうがこの町に詳しいですから。遠慮しないで、任せてください」

というなのはの一言で、半ば無理やりに女性の弟を探す事となった。

「ところで、お姉さんの名前は?あと、弟さんも。あ、私はスバルって呼んで。こっちがティアナで、そして、なのはさん」

よろしくね、と。自己紹介は簡潔に促す。

「私は、キリエ。弟は、ネロと言います」

子猫のｂｏｙ　ｍｅｅｔｓ　ｇｉｒｌ

「旅行に行こう」

数ヶ月前。故郷であるフォルトゥナの街で起こった凄惨な事件の後、落ち込むキリエにネロはそう言った。
単純だが、嫌な気分を一新するにはその地を離れて休養するのが一番だと考えたからだ。
キリエもその計画に乗ってくれた。

それから数週間。

彼の企画は、概ね成功したといっていいだろう。
無事に目的地には着けたし、その場所は事前に調べた以上に静かで落ち着いた場所だったし、商店の食べ物もおいしかった。

ただ一つ、問題があるとすれば――――

「……参ったな」

当のキリエがどこかへ行ってしまった事だった。

「どこへ行っちまったんだ?」

それは数十分前の出来事だ。
風船を風に飛ばされてそれを追いかける子供を見つけたキリエが、

「危ないわ!」

などと言ってその子を追いかけて行ったのが事の始まりで、そして最後だった。
馴染みの無い土地で人一人を見失うことは簡単だ。あっという間にネロは彼女を見失い、おまけとばかりに自分自身の位置も見失ってしまった。

「Ｈｕｈ…」

自然、ため息も出よう。
そんな気の滅入る状況の中、青々とした芝生の広がる自然公園を見つけられたのは落ち着いて休める場所の欲しかったネロにとって幸運であった。
公園の周囲を巡る大きな広葉樹の木陰に腰を落ち着ける。
公園の中にあまり人影は見えなかったが、もう少し経てば昼飯で腹いっぱいになった子供（ガキ）どもでここも賑わうだろう。

――キリエの好きそうな場所だ

その彼女を見失ってしまった自分が、妙に情けなくなる。急に走り出して何処かへ行ってしまう彼女も彼女だが。

「…Ｈｕｈ」

またため息。
どうしたものかと寝転がった、視線の先に――

「…助けて……」

女の子が居た。

泣きそうな顔で。

泣きそうな声で。

「……Ｗｈａｔ？」

どういうことだろうか。

一瞬、ネロには状況が呑み込めなかった。あんまりにも唐突に視界に現れるものだから、思わず悪魔なんじゃないかと疑ってしまったほどだ。

だが、女の子の腕の中で、当の女の子と同じように震えている子猫を見とめて、ネロは状況を理解した。

つまり、木から降りられなくなった子猫を助けようとして、自分も木から降りられなくなった、と。

そういう事で間違いないだろう。

確かに、女の子の居る枝は地上から４メートル近くはある。まだ幼い彼女が恐怖で動けなくなるには十分な高さだ。むしろそこまで登って猫を助けようとした彼女の勇気を称賛すべきかもしれない。

「オーライ、ちょっと待ってな」

立ち上がり、改めて女の子のしがみついている枝を見る。太くて

頑丈そうな枝だ。人間が一人余計にぶら下がっても折れることはないだろう。
ただ、高さが問題だった。さすがのネロも垂直飛びで４メートルは無理だ。
ならば、と彼の取った行動は至極単純なものだった。
「少し揺れるからな。しっかり掴まってろよ！」
助走をつける。
樹の幹を足がかりに、三角飛びの要領で女の子の枝まで――――跳ぶ。
「きゃっ！」
思った通りの頑丈な枝だった。ネロがその枝に飛び移っても大きな揺れはおきない。
腕の力だけで上体を押し上げて、彼は女の子に手を伸ばす。
「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？」
大丈夫か？
月並みな言葉だが、相手の無事を確認するのにこれ以上最適な言葉も無いだろう。
女の子は、軽く頷き、そっとネロの伸ばした手に掴まる。
未だ瞳いっぱいの涙を湛え、それでも子猫をしっかりと抱いて離さない彼女に、軽く微笑みかけてネロはその子を子猫ごと胸の中に抱いた。
「降りるぜ」

言葉とほぼ同時に、枝を捕まえていた右手を離す。

「ひゃっ」

という女の子の声を耳にしながら、ネロは重力に身を投じた。

落下は一瞬。

膝と身体のバネを存分に使い、着地。足は多少痺れたが、大きな衝撃は女の子には伝わっては居ないはずだ。

「ありがとう、おにいちゃん！」

地面に降ろしてやった女の子は元気そうにそう言った。怪我も無い。子猫も無事だ。

「ああ、もう無茶はするなよ？」

心配するのは、いつも自分じゃない誰かなんだとネロは語る。

――ま、オレの言えたセリフじゃないがな

「さて、オレも心配してくれる誰かさんを探さなきゃな」

そうして立ち去ろうとするネロのコートを引っ張る、小さい手がある。

「ん？」

明るいオレンジの髪の下。左右で色の違う紅（ルビー）と翠（エメラルド）のオッドアイがこちらを見つめて輝いていた。

「あ、そ、ぼ！」

彼女の腕の中で、子猫が鳴いた。

・
・
・

淡いパステルカラーのスカート。
オレンジ色の長い髪に揺れる、青いリボン。
左右で色の違う紅（ルビー）と翠（エメラルド）のオッドアイが特徴的なその女の子は、名前を高町ヴィヴィオと言った。

「じゃあ、ねろおにいちゃんはまいごなの？」

歩く。
傍らにその少女を連れて。

「まあ、気付いたらな」

何故こんな女の子にそんなことを話しているのだろうか。

自分でもよくわからないまま、ネロはヴィヴィオと共に町を歩いていた。

「じゃあ、ヴィヴィオがたすけてあげる！」

そう言って彼女はくりくりと動く大きな目を輝かせる。

にゃあ

その頭の上で、すっかりヴィヴィオに懐いた子猫が無責任に彼女の提案に同意していた。

「ありがたいが、その提案は却下だ。知らない人について行ったら駄目だって教わったろ？」

「えーー…。でも、しらない人じゃないよ？」

「それは……、はあ…」

ヴィヴィオに聞こえないよう、息をつく。

先ほどからずっとこの調子だ。

家に帰ったほうがいいと諭すネロに対して彼女は、

「だいじょうぶだよ！」

「ヴィヴィオがたすけてあげる！」

「あそんでー！」

と、まるで帰る気を見せない。どころか、ネロの後をにぱーと笑いながらとことこ着いて来るのだ。

無防備すぎる、純粋な少女の好意をネロはまったく持て余していた。

――キリエが居ればな…

そう思わずには居られない。

故郷の孤児院で子供の相手をすることは少なからずあったが、ネロの担当は当然のように男の子ばかりだった。女の子の遊び相手になるのは、決まってキリエだ。

――Ｉ　ｃａｍｅ　ｂａｃｋ　ＫＹＲＩＥ……

「……ちゃん、…おにいちゃん、ねろおにいちゃん！」

「あ、ああ？何だ？」

ヴィヴィオの小さな手がネロのコートをくいくいっと引っ張っている。

足を止めると、そこは若者で賑わうお洒落なデザートカフェの前であった。

「……？」

「（きらきら）」↑すごく期待した目で見ている。

「…」

「（にゃーん）」↑すごく期待した猫が見ている。

「…」↑コートの中の小銭を確かめている。

「…」↑結構あったらしい。

「…」↑オーライ、行くぜ

「ｏ（≧≦）ｏ」↑わーい

「にゃーん」↑にゃーん

・
・
・

それは、非常に奇妙な光景だった。

時間は太陽も傾きかけた昼下がり。おやつの時間。

場所はうら若い女性で賑わう、人気のデザートカフェ。その一画。

窓に面した一席。
そこに、二人の男と一人の女の子が座っていた。
別にそれ自体は不思議ではない。

だが、その二人の男性が共に異国の風貌を漂わせていたらどうだろうか。

共に身長１８０以上はある巨躯だったらどうだろうか。

共にそれぞれ赤と黒の暑苦しそうで派手なコートを着ていたらどうだろうか。

共にモデル顔負けの端正でワイルドな美貌を持っていたらどうだろうか。

それはもう、まるで異空間のような光景であった。

しかもその同じ席でオッドアイの可愛らしい女の子が生クリームたっぷりのプリンア・ラ・モードを美味しそうに頬張っているのだから、異空間絶賛増量中である。

そんな中、

「…なんであんたがこんな所に居るんだよ……」

うんざりと。ぐったりと。
ネロは対面で機嫌良さそうにストロベリーサンデーをパクつく派手な赤コートの大男――ダンテにそう言った。

「観光だよ。前から日本（ジャパン）には一度来てみたかったんだ」

「剣と銃を持ってか？」

コートに隠れて見えないが、彼の腰には常のように拳銃のホルスターが吊られていて、黒と銀のゴツイ拳銃がそこには納まっている。無論、モデルガンみたいな可愛らしいおもちゃではない。

さらにテーブルの下には馬鹿でかいトランクケースが転がっており、その中に入っているものが着替えや財布や観光マップなどではなく、分厚い刃を持つ大剣だという事にもネロは感づいている。

どれもこれも、観光には必要の無いものだ。

「お守りみたいなものさ」

「知ってるか？そのお守りはどっちもこの国じゃ違法なんだぜ」

「ヘイヘイ、固いことは言いっこなしだぜ。お前ももう道徳を振りかざす歳じゃないだろ？」

これだよ。

いつもこの男は人を小馬鹿にしたように喋る。

嫌いではないが、ムカツク。それがネロの、ダンテに対する心象評価であった。

「それに、こっちだって驚いてるんだ」

フォークに刺さったイチゴをネロに向けて、ダンテは急に神妙な顔になった。

「まさかお前が、あの彼女とこんな大きな子供を作ってたなんてな」

ダンテの視線の先には生クリームを鼻の頭につけて、幸せそうに頬を緩ませるヴィヴィオの姿がある。

「Ｗｈａｔ!?　何言ってやがる!冗談もほどほどにしろよ!」

「何だよ、恥ずかしがるなよ。別に俺はいいと思うぜ。お前ならいい父親になれるさ」

「だから、違うって言ってるだろ!」

「おいおい、娘の前で違うはないだろ。何か悩みでもあるのか?相談なら乗ってやるぞ。ん?ほら、遠慮しないで言えよ」

「いい加減にしろよ……!」

ぺきり。

握っていた金属製のスプーンが軋む音がした。

「ねろおにいちゃん、おこっちゃだめだよ!」

そんなネロを戒める声がある。

言わずもがな、ヴィヴィオだった。

相変わらず鼻の頭に生クリームを付けて、こちらをきっ、と睨んでいる。

迫力などまるで無くただ単に愛らしいだけなのだが、それに逆らえるかと言われればそんなわけもなく。

結局、

「……Ｓｏｒｒｙ…」

理不尽に屈するしかないのであった。

にゃーん

黙れ子猫（シャラップ）。

「まったく、冗談（ジョーク）を本気（マジ）にするなよ。大人気ないぜ」

この野郎…！

調子が狂う。ずっとこの二人に翻弄されっぱなしだ。

その二人と言えば、

「ん？いちごが欲しいのか？オーケイ、口開けな」

「あーーーーん、（ぱくっ）」

「美味しーーー！」

「そうだろ？ここのサンデーは中々イケてる。日本（ジャパン）の食い物は美味いって聞いてたが、本当だったな」

「ヴィヴィオのプリン、少し分けてあげる！」

「いいのかい？そりゃ嬉しいな」

と、出会ってたかだか２０分そこらですっかり打ち解けている。
なんという適応能力だろうか。どっちも。
――まあ、二人とも子供だしな
「ヘイ！今なにか失礼なこと考えなかったか？」
「知らないね」
ぶっきらぼうに言うと、ネロも自身の前に置かれている黒いスープに手を付けた。
「泥水か？」
「ぜんざいだ。この国のデザートだよ」
「なるほど」
少しばかり、静かな時間が三人に訪れる。
プリンアラモードと、ストロベリーサンデーと、ぜんざいが順調に減っていく。
「――で？」
器をあらかた空にして、ネロは再び声を上げる。
「何で、あんたがこの町に居るんだ？」

繰り返すのは、先と同じ質問。
しかし、今度は若干ニュアンスが違っている。
マジに聞いてるぜ？
そんな意思が彼の目から読み取れた。

「ま、そうだな……」

ダンテは腕を組んで何かを考えているようであったが、やがて少し真剣な目つきになってネロの質問に答えた。

「仕事だよ。いつも通りのな」

「やっぱりかよ。ヤバイ事件でも起こるのか？」

「そうさせないために俺が居るんだ。お前はゆっくり観光でもしてろよ」

「そうしたいのは山々なんだが、どうもな…」

「何だよ、信用しろよ」

「あんたは一々騒ぎを大きくしすぎなんだ」

「俺のせいじゃないさ。奴らが勝手にテンション上げて向かってくるんだ」

やれやれだぜ、とダンテは頭を振る。

「じゃあ、あんたに一つ頼みがある」

「なんだよ」

「オレの銃と剣を運びたい。いざって時に丸腰じゃ格好悪いだろ？」

「宅急便で送ってもらえよ」

「馬鹿言うな。どうせ、あんたのそれもまっとうな方法で持ち込んだ訳じゃないんだろ？」

「Ｈｕｎ，あんまり勘がいいと女に嫌われるぜ」

空になったガラスの器にフォークを戻し、ダンテはおもむろに立ち上がった。テーブルの下に転がしてあったトランクを担ぐ。

どこか行っちゃうの？と寂しそうな顔をするヴィヴィオの頭をぽんぽんと撫でて、ダンテはその席を離れた。

「ま、考えといてやるよ」

それだけを言い残し、店の扉をくぐるダンテの背中を、ネロは黙って見送った。

・　・　・

「そろそろ夕方だね、エリオくん」

「そうだね。そろそろ帰ろうか？」

場所は海鳴市中心部の繁華街。
時刻は夕方の手前。
雑多に行き交う人々の中に、エリオとキャロの小さな影が混じる。

「地球ってはじめて来たけど、何だか不思議な所だよね」

「そうだね。魔法の無いミッドチルダって感じがするよ」

ショッピング。食事。映画。男女の過ごす健全な休日をあらかた楽しんだ二人は、こちらの世界でお世話になっているなのはの家に足を向けている。

はじめて来た地球の感想。思い出。話のネタは尽きない。
手なども握って。
小さな恋人たちは朱色の注しはじめた太陽を背景に、大通りへと続くパステルカラーの歩道を歩いて行く。

「あれ？」

はじめにそれに気付いたのはキャロであった。

「どうしたの？」

「ねえ、あれってヴィヴィオちゃんじゃない？」

「え？」

キャロの指差す先。エリオが視線を向けたそこには、

「こっちにはね、おっきいデパートがあるんだよ！」

頭の上に子猫を乗せて満面の笑みではしゃぐヴィヴィオの姿があった。

「本当だ。なんだか楽しそうだね」

――猫？

「なのはさん達と一緒なのかな」

――あの猫なんだろう？

おーい、と軽く手を振りつつ。二人はヴィヴィオに近づいていく。

こちらに気付いたヴィヴィオが可愛らしい笑顔を見せた。

「あ！キャロちゃんにエリオくん！」

わーい、とばかりに両腕を広げて、てててーとヴィヴィオは走り出し、

「あ――――！」

危ない！

二人がそう言う間も無く、路面の段差に躓いてしまった。

こける×泣く＝助けてなのはママ！　自分で立つのよ！×なのは
は少し厳しいよ…もうフェイトちゃんたら…

の方程式を一瞬で思い浮かべる二人。

どっちかと言えばキャロはなのは寄りでエリオはフェイト寄りの
意見だ。

将来授かるであろう子供の教育方針について一度話し合う必要が
あるな、とキャロの想像が無駄に飛躍しかけた、その時である。

「だから走るなって言ってるだろ？」

ひょいっと。

まるで小動物を拾い上げるかのような気軽さで、転びかけたヴィ
ヴィオを助けた青年が居た。

「ありがとー！」

ヴィヴィオも嬉しそうだ。

にゃーん

子猫もありがとうと言っている。

そして二人はこう思った。

――誰！？

人の目を引く派手な銀髪と黒いレザーコート。モデルと見間違えるほどの端正な顔立ちで、身長も１８０をゆうに越える長身だ。右手にだけはめられた革の手袋が少し気になったが、まあ、そういうファッションなのだろう。

（エリオくん、あの人知ってる？）

（知らないよ。でも、ヴィヴィオが懐いてるし、なのはさんの友達かな？）

（そうなのかな？あまりそうは見えないけど）

（う～ん……）

ひそひそと思念通話を交わす二人。

その間にヴィヴィオは謎の青年を引き連れてキャロ達の元へと駆け寄ってきた。

「おかいもの？」

二人の手にあるおしゃれな紙袋を目に留めて、そう聞くヴィヴィオ。

うん、と軽い相槌をうち、二人は質問を返す。

「ところでヴィヴィオちゃん、その人は？」

「ねろおにいちゃんだよ！」

にぱー、と笑いながら言うヴィヴィオ。
誰なのだろうか。その答えでは二人の疑問は解決されない。名前だけはわかったが。

「ネロ、さん？」

「ネロでいい。それよりも、お嬢ちゃん達はこの子の知り合いかい？」

どこかほっとしたような表情でネロは二人に尋ねた。
その期待通り、二人の反応は“イエス”である。

「助かった。知り合いならこの子を引き取ってくれ」

？マークを浮かべるエリオとキャロ。まだ二人には話が見えてこない。

「え～～……。でも、まだねろおにいちゃんまいごのままだよ？」

「迷子？ネロさん、迷子なんですか？」

キャロが聞くと、ネロはバツの悪そうな顔で視線をそらした。

「あ～、まあ、それはそうなんだけど…」

なるほど。
そうキャロは思った。徐々にヴィヴィオの話が見え始める。
要するに、迷子になったこの人を助けてあげよう、とそういう事なのだろう。

「いいんだよ、オレは自分で何とかするさ。それに、もう子供はお家に帰る時間だ」

もっともだ。

そうエリオは思った。

朱の挿しはじめた太陽は、これから駆け足で沈んでいくだろう。

もう二時間もせずに空の主役は月に取って代わる。

ヴィヴィオや、それに自分達も。小さな子供が出歩いてもいい時間はあと僅かだ。このネロという人は子供ではないのだから、本人の言うとおり、自分でなんとかできるだろう。

とはいえ、放って置くのも気が引けるが。

「でも～～……」

いやいやとばかりに首を振ってネロのコートを握り締めるヴィヴィオ。

困った表情でそれをなだめるネロ。

どうしたものかと思案に暮れるエリオとキャロ。

「あ！」

と、突然。

「じゃあ、なのはママにたすけてもらおうよ！」

めいあん！

とばかりにヴィヴィオが表情を輝かせた。

「なのはさんに？」

きいたキャロに、うん！と元気な返事をヴィヴィオは返す。

困った時のなのはママ頼り。

ヴィヴィオはなのはに相談すれば何でも解決すると思っている。

まあ大抵の事はそれで解決するが、今回はどうだろう。どうにもならない気がするが、ここで立ち往生しているよりもその方が建設的ではあるかもしれない、とエリオは漠然と思った。

「うーん、そうだね。それがいいかも」

じゃあ、とりあえずなのはさんの家に行ってみようか。エリオがそう促す。

「待て待て待て、お前ら」

それを全力で止めるネロ。

ちびっこ三人＋子猫は、え？なんで？みたいな目をネロに向ける。

「オレはもうガキじゃないんだ。お前らはそのヴィヴィオって子だけママのところに連れて帰ってくれ。あとは一人で何とかするさ」

確かにそれもそうだが。

「ま、嬢ちゃんに感謝はしてるさ。ありがとうな」

言って、ネロはヴィヴィオの頭を優しく撫でてやると、そのまま踵を返した。人ごみに紛れようと一歩を踏み出して、

「……ぁぅ」

そんな声に後ろ髪を引かれた。

「なのは、ママにたのめば、なんとか、してくれるのに…！」

震えるような声に後ろ髪どころか首根っこを押さえられた気分になる。

見なくてもわかる。おそらく、今あの綺麗なオッドアイにはこぼれる程の涙が溜まっているのだろう。あとの二人がオロオロする気配も背中から伝わる。

どうしたものかと考える時間もなさそうだ。

「……はあ」

女の涙は卑怯だ。ガキだろうとそれは変わらないらしい。融通が効かない分、そちらのほうが厄介かもしれない。

返した踵を、再び返して、ネロは降参だとばかりに両手を挙げた。

子猫のｂｏｙ　ｍｅｅｔｓ　ｇｉｒｌ（後書き）

【おまけＳＳ】たたかえネロくん・喫茶店編

「お会計はこちらになります」

「ああ、ちょっと待ってくれ」

――ん？何か、一人分くらい高く……

「！？ダンテあの野郎！」

「お、お客様！？」

「だめだよ、ねろおにいちゃん！むせんいんしょくはだめだって、なのはママが言ってたよ！」

「……Ｓｏｒｒｙ…」

「に、似合うか？」

カーテンレールが滑る軽い音に合わせて、洋服屋の中に設けられた試着室の幕が開かれた。

その奥に居るシグナムは、いつものてきとうに合わせただけの上下を脱ぎ捨て、スリムのＧパンとレザーのジャケット、そして幾つかの装飾品を身に纏っていた。

反応を問う声は恥ずかしいのか僅かに上ずっており、視線は正面を見れずにやや斜に向いている。

そのシグナムに返答の役割を任されたのは、フェイトとシャマル、それに、脱いだ上着のポケットから僅かに顔を覗かせるアギトであった。

「うんうん。やっぱりボーイッシュなのも似合うね、シグナム」フェイト

「カッコイイぜ、シグナム！」アギト

「うーん。でも私はやっぱり、もっとフリフリでヒラヒラな方がいいと思うんだけどな～」シャマル

三者三様の反応に、シグナムは顔が熱くなるのを感じた。

こういうのは苦手だ、と思い、けれども、悪い気分じゃないな、とも思った。

――――姿を褒められて、悪くない、とはな

忘れかけていた事を思い出したような気がする。長く厳しい戦いの記憶の中に置き忘れていたものが。自分は、女だったのだな、と。

「よくお似合いですよ」

店の店員もそう言ってくれる。自然と顔が綻ぶのが分かった。購入を促す世辞だろうと、嬉しくない訳ではないし、何より自分自身がこの姿を気に入っているのだ。鏡に映した顔は穏やかに緩んでいる。

――女の顔に見えるか？レヴァンティン

首に下げた剣のブローチが僅かに震えた。イエスかノーか、よく分からなかったが、ここは好意的な方向に解釈しよう。

「いかがなさいますか？」

と、店員が肩越しに聞く。購入か否か。問われているのはその意思の有無だ。

少しだけ迷い、もう一度だけ鏡に自分を映して、シグナムは結局、否、と意思を答えた。

怪訝そうに眉をひそめるシャマル達と店員の方に振り返り、

「……もう少し、他の服を見てみたい」

・
・
・

機動六課の休日。その初日。明後日より始まる一大旅行計画に何の憂いも持たせない為に取られた、準備のための一日である。

とはいえ、ほとんどの準備は皆、ミッドチルダを発つ前に済ませている筈だ。

だから、なのはとスバル達は町の散策に、はやても同じくヴィータと一緒に散歩に出かけており、特別何かを買いに中心部の街まで足を運んできたのは、シグナムら一行だけであった。

一行の顔は、シグナム、シャマル、フェイト、それにこっそりと上着のポケットに入っているアギトと、途中までは一緒だったエリオとキャロ。後ろの二人とは昼食を共にした後に別行動を取っている。いや、フェイトが別行動を取らせた、と言うべきか。

恋人には恋人の時間が必要なんだよ、とはフェイトの言葉。

そう深く考えてやるほど年端もいってないだろうに、と思うシグナムだが、色恋沙汰は苦手分野の一つ、それについては特に何も言及しなかった。好きにすればいいと思う。何を楽しみ、楽しみにするかは個々人の自由だ。

「う…む……とはいえ、これは自由すぎるぞ」

店員とシャマルに選んでもらい渡された、何枚目かの服に身を包んだ自身の姿に、シグナムは苦いような甘いような、微妙な顔を鏡に映した。

着ているのは淡いピンクのワンピース。スカートのふちと胸元には可愛らしくフリルが付いており、ワンポイントのコサージュが腰の部分でひっそりと存在を主張している。

「流石に……」

似合わん。

自分の容姿が他人からどう見られているのかは知らないが、こんな乙女乙女しい格好が合わない事くらいは理解している。店員とシャマルはどういうつもりでこの服を寄こしてきたのか。どうも2枚目くらい前から服の様相が路線変更されたような気がする。

カーテン越しに聞こえる外の声は、

「次は…、これなんかどうですか？子猫ちゃん」

「あら、可愛い♪あ。でもこのうさぎ…、はヴィータと被るわねぇ」

「それでしたら、模様違いの花ライオン柄が……」

「わあ！これ、これがいいわ！シグナム、次の服が決まったわよ！」

完全に行き先を見失っていた。霧の中を突っ走る汽車でももっとマシな場所に行き着くだろう、というくらいに。誰かポイントを切り替えてくれ。

新たに渡された、これまた可愛らしい、花柄のたてがみをしたライオンのミニスカートを広げて、シグナムは心からそう思った。

「着てみる私も私だがな」

ワンピースを脱ぎ、スカートとブラウスに身を包んだ、新しい自分の姿を鏡は映す。

どう考えても似合っていない。こんな物が似合うのは、なのはやキャロ、フェイト――も似合いはしないか、ともかく、自分が着る服ではない事だけは確かだ。

「あれ、まだシグナムの服選んでるの？」

外の声に一つ追加。自分の分を買うと言って場を離れていたフェイトのものだ。

ようやくまともな思考の持ち主が帰ってきた、とシグナムは内心で安堵の吐息を吐き、

「この中なら……、これかな。うん、やっぱり良いね。フリル５割増しって感じが」

――テスタロッサ……！！

いい加減に自分の意思を叫んだほうが利口か？

カーテンの隙間から差し出されたフリルとレースの塊を手に取って、呆然とシグナムは考えた。

胸元では、剣のブローチがかたかたと震えている。

「主人を笑うとは、何事だ」

・
・
・

洋服店は街頭に似せたモニュメントが並ぶ通路の脇に存在している。通りの景観はレンガ敷きをイメージしており、街頭のモニュメントと合わせて、落ち着いた上品なショッピング通りの演出に成功している。

大型ショッピングモールの中に町の一区画を再現した造りの為、その通りにはゴミや汚れはほとんど無い。歩く足に伝わる細かな凹凸は転倒防止のための滑り止めだろうか。

店を出たシグナムは、たっぷりと服の詰まった大きな紙袋を胸に抱えて、店一件分ほど離れた通りの反対のベンチに腰を落ち着けた。

「はあ……。ようやく終わったか」

紙袋の中に吐いた息が落ちる。中身は、自分で選んだ服が半分。シャマルや店員の選んだ服が半分。自分が選んだ服は旅行でも着るつもりでいるが、シャマル達の選んだ分は、はたして手に取るかどうか。

「どうしたのシグナム？面白い顔をしているよ」

近くの自動販売機で飲み物を買ってきたフェイトが、右手の缶を渡してくれる。

ぱきん。プルタブを押し上げて飲み口を開く。

「どうもこうも無い。私は、自分の着る服が欲しかったんだ」

「全部似合うよ。自信を持って着てみればいいんだよ」

「冗談を言え」

可愛いのに、とフェイトは隣に腰を下ろした。

二人と、二つの荷物が並ぶ。ヴィータやはやての分も選んでいるシャマルは買い物にもう少し時間がかかる様だ。

「でも、何だか嬉しいな」

と、フェイト。隣で表情を、分かるか分からないか程度にほころばせているシグナムに話しかける。

「何がだ？」

「シグナムが女の子らしくお洒落したい、なんて、今までじゃ考えられなかったからね」

言われて、シグナムは思わず顔を背けてしまった。照れているのだろう。何だか可愛い、とフェイトは思った。シグナムのポケットの中でも、アギトがニヤニヤと彼女の顔を見上げている。

「アギト、お前まで何だその顔は」

「いや、だってさ、可愛いシグナムって珍しいじゃんか」

言葉に、

――――珍しい、か

自分でも、つくづくそう思う。

常であれば、休日にショッピングなどを楽しもうと誘われても、私には似合わないからと言って断っていただろう。

だが今日は違った。

「せっかくの長い休みなんだ。いつもと同じ服というのも、つまらんだろう」

と言ってシャマルの買い物につき合わせてもらったのは自分からだった。

はやてやヴィータなどはそれだけで目を丸くして驚いていたし、待ち合わせ場所にやって来たフェイトは、

「シグにゃむ!?」

と、言葉を噛んで驚いていた。

失礼な。とは思ったが、お洒落をしてみようと思ったその行動に

一番驚いているのは、誰でもない、当の自分自身であった。

夜天の書の守護プログラムとして生み出されて幾星霜。記憶のほとんどは戦いと血の匂いで埋め尽くされている。

それに疑問を感じた事は無い。

もとより、戦う為だけに生み出された存在ならば、戦いと命のせめぎ合う場に居なければ、そちらの方がよほどおかしい。

何か異常だと言うのなら、恐らく、今のこの時間なのだろう。家族があり、仲間が居て、休みの日に楽しげに買い物に出かけている。

楽しかったというのなら、何日か前の前夜祭も非常に愉快だった。騒ぎ、笑い、心を許して楽しんだのは、どれほど久しぶりの事だっただろうか。

――まあ、途中からは記憶が無いのだがな……

はやてに無理に渡されたグラスを空にした辺りで記憶は途切れ、気が付くと、はやての部屋で何故かヴィータとエリオを抱きしめて寝ていたのだ。半裸で。その事をなのはに聞いた時は、

「な・に・も・な・か・っ・た・よ？」

と言われて紛失していた下着を返された。

フェイトに同じ事を聞くと、

「ナニモナカッタヨ？」

と言って頬をいい感じの力でつねられた。何故だ？

狂った夜天の書と同様に、この戦闘狂も狂ってしまったということなのだろうか。

しかも、その事を悪くないと言い、このままでいたいと思い、女の子らしく着飾りたいなどとまで考える。

心境、というよりも心象の変化なのだろう。この荒んだ心に、何かを愛でる余裕が生まれたのはいつ頃だろうか。

休日に可愛らしいく、お洒落に着飾って出かけるフェイトやはやて、エリオ達を少し羨ましいと思ったのは、つい最近の事だった。

「また来ようぜ、シグナム。今度はあたしもアウトフレーム作ってもらって、一緒に選んでもらおうぜ」

それもいいだろう。

悪くない、ともう一度シグナムは心の中で繰り返した。

――お前はどうだ、レヴァンティン

胸元で震えるブローチに、今度は、はっきりとシグナムはその意思を感じたような気がした。

――そうか、お前もか

・
・
・

紙袋を持ったまま、一行はショッピングモールの出入り口を内側から通った。

昼を過ぎた、夕方に近い太陽の光が目に射し込む。

「私達はもう帰るけど、シグナムは？」

「私は、これから行く所があるから、帰るのはそれからだ」

「世界の刃物展？」

うむ、とフェイトの言葉にシグナムは頷いた。

「いいなあ。私が行きたかった世界のメイドゴスロリ展はもう終わっちゃってて」

残念そうに言うシャマルは、シグナムの分の荷物も受け取りながら、

「せっかくはやてちゃんが頑張って取り付けたお休みだもんね。楽しんできて、シグナム。荷物は私達が先に持って帰るから」

「すまんな。アギト、お前はどうする？」

「あたしも行くぜ！」

ならば行こうか、とシグナムは足を止めて展覧会の会場側へとつま先を向け、同時に、刹那の“異常”に対して怪訝そうに顔をしかめた。

「人が……」

居なくなった。

交差点のある大通り。商店の並ぶ歩道。振り返った先にあるモールの中。

一瞬前までは人で溢れかえっていた筈のその空間に、今は誰も居ない。

急速に喧騒の無くなった空間は、まるで時間が止まったかのような錯覚さえ引き起こす。薄気味悪い、不気味な空気が停滞しているようだ。

「どういう事かしら？閉鎖、空間かしら……」

「判らんが、悪い予感しかしないな」

言ったシグナムの目の前で、さらなる異変が起こる。

コンクリートの道路。ビルの壁。ガラス張りの窓。視界に映るありとあらゆる場所から、黒い“何か”が染み出すように湧き出てきたのだ。

「な、何だよ、これ…」

上着のポケットから飛び出したアギトはシグナムの頭に隠れるよ

うにしてその異変を見ている。震えている声は恐怖ゆえか。
無理も無い、とシグナムは思う。自分でさえ、この唐突な異変には不気味な気配しか感じないのだから。

やがてその“何か”は、明確な輪郭――人型の姿となって通りの道路に溢れた。

「影のような人型。昨日、ヴィータが言っていた魔力異常というのは、まさかこれか？」

「多分、としか言いようがないけどね」

「話しをして何とかって雰囲気じゃなさそうだね」

正体不明の大量の影達に囲まれながらも、彼女ら三人の表情には目に見えるほどの恐れは無かった。見えるのは、奇異に対する困惑のみ。

「話しができる相手とも思えんがな。レヴァンティン！」

胸元の剣のブローチが輝き、内側から弾け飛ぶように分解する。瞬間的に開放・展開した魔法陣の中で、ブローチの構成が組み変わる。
別空間に隔離していた余剰パーツを召喚、ブローチのデバイス・コアとベルカ式カートリッジユニットを中心に、パーツがオート重力制御で形を成す。

まずは柄。続き、カートリッジユニットに装甲板が取り付く。白銀の刃が伸び、最後にその身を鞘が覆った。
僅か1秒にも満たない瞬間の変貌の後、シグナムの手に収まった

のは、待機形態であったデバイスの、その本来の姿。片刃の長剣、レヴァンティンである。

『Ａｎｆａｎｇ　ｂｅｗｅｇｕｎｇ！（起動完了！）』

妙にハイテンションな機械音声が自身の起動を主人に告げた。

ォォォオォォーーン！！

生じた動きは唐突な襲撃の前兆。その叫びは、人とはまた違った、別物の声帯から発せられているかのように濁り、響いている。

シグナムに構える間すらも与えずに、影は一斉に動き始めた。

「来い…！」

心と判断は一瞬で決する。臆せず前へ。

後ろに左足を踏み、削るように右足を前へ。

柄にかけた手に軽く力を込め、抜刀――――、しようとした、その時であった。

――――！？

鳴り響いたのは怪異の叫びとも、こちらの動きに伴う音でもなく、全く新しい、機銃のような乾いた連射音だった。

２０を数えるくらいまでは耳で追えたが、それ以上は無理だ。

頭上から届く無数の音は雨のように降り注ぎ、異形の不可思議にその凶悪な威力を叩き込む。

――銃弾、か…！？

目の前で影達が弾け、地面に落ちた鉛弾が路床を砕く。浅い角度で射し込んだ数発の弾丸は地面で跳弾し、その一発がシグナムの方向に向いた。

咄嗟。剣を引き抜く動作で、シグナムは右腕を振り抜いた。一度の反射で威力を削がれた弾丸なら、掴み取れないことも無い。ゆるりと腕を戻し、指先に残るそれは、予想に違わず銃弾の一発であった。

オートで発動した耐熱加護と魔術防御を通して、ほのかな熱が指先を温める。

その事実は、シグナムはに新たな驚愕をもたらした。

――これは、魔力弾！？

オートで発動したのは、耐熱加護と、魔術防御の二つなのだ。銃弾に残っていたのは熱だけではない。

つまり、こちらの魔術防御を発動させるほどの、強力な魔力付加がその一発、そして、目前で影どもを蹴散らした、恐らくはその全てに施されているという事。

何故、とシグナムはその一発に疑問を落とした。

魔法技術の未成熟なこの世界の火器に、弾丸に魔力を付加する機能は無い筈。

もしもあるとするのなら、それは、個人レベルで技術を独自開発した、

――異端者（イレギュラー）か！？

オォォォォオォォーーーーン……！！

その影の叫びは、怨嗟かそれとも恐怖か。幾重にも折り重なるその響きが向けられる先は、自分達ではなかった。

銃弾を握り、シグナムは振り返る。見上げる彼女の視界の中で、血のように赤いコートが翻った。

「歓迎のコールは間に合ってるぜ、悪魔ども」

銀色の髪が、傾いたまま歪んだ太陽に輝いていた。

踊るｉｎ　ｔｈｅ　ｓｈａｄｏｗ

ショッピングモールの正面に据えられた、巨大な砂時計のモニュメント。その上に、男は立っていた。

赤いレザーコートが西色の太陽を背に揺れる。

銀色の髪が光に染まる。

影達に向けた構えは、腕を交差させた黒と銀の二丁拳銃（トゥーハンド）。

端整に、そしてワイルドに整った顔にニヒルな笑みを浮かべ、その男は告げる。

「さあ、派手にイこうぜ！」

影が一斉に動いた。

シグナム達のことなどまるで無視して、それらの怪異は現れた男に殺到する。

「Ｉｔ' ｓ　Ｓｈｏｗｔｉｍｅ！」

その動きに合わせて、男も跳ぶ。先頭の一体を踏み台にし、更に高く。

黒と銀。それぞれのハンドガンから、猛烈な勢いで銃弾が吐き出される。

空中に跳びあがった１０数体の影は全てその弾丸に撃ち落され、地に残っていたその他の影も降り注ぐ弾丸の雨を浴びて次々と沈黙させられた。

倒れた影の体をクッションにして、男は着地。

「なんだよ、シケてんな。相変わらず根性無し共ばっかりか？」

くるくると指先で銃を玩びながら残りの影を見渡す。

一瞬。

背中越しに右手の銃が火を噴いた。男の背後で動いた影が倒れる。

続く動きで男は左手を前に。銃弾の熱いキスが影をまた一体弾いた。

「ｙｅｅ－ｈａｗ！前菜は鉛のサラダだ。よく噛んで味わいな！」

腕を交差させ、左右から迫る影を撃ち払う。

続けて、前。

後へ。

右に、左。

あらゆる方向に銃が向き、影はその度に侵攻を阻まれる。

圧倒的な連射速度。的確な狙いと空間の支配力。

たった一人。たった二丁の銃。しかし、それによって織り成される弾幕は、敵の侵攻を一歩たりとも許さない。

「さあ、メインディッシュといこうか！」

男が、走る。

寄る影を銃弾で蹴散らして、その一体の足を払う。それをサッカーボールのように他の影へと蹴り込んだ。

乱れた集団の中心に男が飛び込むと、その中心で幾つもの銃撃が散った。

避けて、跳んで、駆けて、撃つ。

男の動作に銃弾が重なり、悲鳴と、断末魔と、そして乾いた銃声をＢＧＭにして、彼の赤いコートをマズルフラッシュが彩った。

からん、と。

硬い地面に空になった薬莢が落ちる。

それは、男の放った最後の一発。崩れ落ちる影には一瞥もくれず、男は銃を腰のホルスターに収めた。

「――見事だな」

僅か１０分たらずで何十体もの影を屠った赤いコートの男に対する、それはシグナムの偽り無き賞賛である。

「そうでもないさ」

本当に何でもない事のような軽い口調。男はゆっくりと向き直り、正面から三人と対峙する。

「Ｈｕｎ，美人が三人か。是非ともお近づきになりたいが、今日は少し物騒だぜ？早いとこ帰った方がいい」

「ふむ。銀髪に赤いコート……。昨晩は、ヴィータが世話になったようだな」

「ヴィータ？もしかして、あのうさぎのお嬢ちゃんの事かい？」

「ああ。随分と腹を立てていたぞ。パンツを覗いたそうだな」

「覗いた訳じゃないさ、そっちの趣味は無いんだ。見える位置でふわふわ浮かんでるんだから、仕方が無いだろ？」

「ふっ、違いないな」

口元だけで笑って、シグナムは鞘からゆるりとした動作でレヴァンティンを引き抜いた。

「おいおい、女性（レディ）の護身用にしては物騒すぎるぜ」

男の口調は相変わらず軽い。

対するシグナムは表情から笑みを消し、鋭く男を睨んでいる。

（シグナム、どうする気？）

頭に響く声はフェイトのもの。右肩の背後に視線を移せば、そこには困惑気味に眉を寄せるフェイトの顔がある。

（任せてくれ。この男の話はヴィータから聞いてある。まともに付き合っても、話など出来んだろう。それに――）

カツン、と。

それは、シグナムが一歩を踏み出した音。

（これほどの怪異を目の前にして、是非もなかろう？）

（……）

返ってくるのは沈黙。

未だ判断しかねる、といったフェイトの表情はあえて無視し、シグナムは自らの剣に命じた。

「レヴァンティン、私の甲冑を」

『Ｊａｗｏｈｌ（了解）』

光。燃えるような紫。その魔力光に包まれて、シグナムの服が組み変わる。私服から、彼女の騎士甲冑へと。

「ヒュ～♪イカしてるな。日本（ジャパン）には変身（メタモルフォーゼ）するヒーローが山ほど居るってのは聞いた事があるが、本物に出会えるとは思ってなかったぜ」

「ふん。ならば、そのヒーローの剣は絶対に敗れないという事も知っているだろうな？」

「どうだろうな。今度、レンタルして見てみるさ」

シグナムが踏み出す。男との距離はおおよそ５メートル。シグナムの間合いと、男の銃。共に射程内だ。

「我は、ヴォルケンリッターが将。“剣の騎士”シグナム！担うは我が魂、炎の魔剣レヴァンティンなり！」

その声は、高らかに。

その姿は、清らかに。

その意気は、勇ましく。

歪む太陽の降り注ぐ無人の街に響き渡った。

「名を聞こうか。まさか、こちらからの誘いを断るほど無粋ではあるまい？」

シグナムの向ける剣の切先。その延長に立つ男は、表情を崩さず、

「――――ダンテ」

きわめて短く、名乗りを上げた。

・
・
・

「はじめに、一度だけ問おう」

剣は鋭く、突きの構え。

一直線に狙うは、ダンテと名乗った男の正中線。

腰を低めに落とし、踏み切る予定の足に瞬発力を溜める。

自身に備わる全ての回路を戦闘用に起動。

そうしてシグナムは、戦いの前、相手に掛けるべき最後の言葉を告げた。

「――――何者だ？」

短い言葉。

それの意味するところは、額面通りの質問と、ダンテへの最終警告。

「自慢できるほど立派な人間じゃないさ」

期待はずれで、そして予想通りの答えに、シグナムは、二の句を告げる。

「そうか、ならいいさ。力ずくは――――得意な方だ」

「奇遇だな。俺もさ」

静止した対峙は、ほんの一瞬。

「疾ッ！」

シグナムとダンテ。

５メートル以上はあった彼我の距離が、一瞬でゼロになる。

神速の踏み込みは、シグナムのものだ。

相対距離を押し詰めるのに二歩。踏み止まるために出した三歩目で身体を動かす速度を打ち消す。腕に乗る速度はそのまま、最短距

離を抜けて加速する突きの一閃が、ダンテの鼻先1センチを掠めて彼の前髪をさわった。

剣を引き戻すシグナムの心には驚きがある。

機先を制した初弾の突き。それは、当てなかった訳ではない。当らなかったのだ。

スウェーバックして身を反らすダンテの視線と、自身の視線が重なる。ゆっくりと流れる動きの中、大したものだな、と心の動きは驚きから称賛へと変じる。

見切った剣をかわせるだけの技量と、目の前をレヴァンティンの剣風が撫でたのにも関わらず表情を変えない、その豪胆さは目を見張るものがある。

だが、だとして、剣に添える手を加減するつもりはない。

「――――はっ！」

引き戻す腕の動きは、途中で振り払う攻撃に切り替わる。

半円を描いた右腕の切先、

「Ａｌｍｏｓｔ！惜しいな」

ダンテはサイドステップでその軌道のさらに先まで間合いを取ると、腰のホルスターにある銃に手を伸ばした。

鋭く構え、撃つ。

響いた銃声はほぼ一つだったが、吐き出された弾丸は7つ。

尋常ではない連射速度で放たれた弾丸を、シグナムは避けようとはしなかった。

「この程度！」

真正面。頭上から振り下ろされたレヴァンティンの刃で、幾つかの火花が散る。

「うおっ！」

弾き返された弾丸に、ダンテの態勢が崩れる。たたらを踏むダンテだが、生じた隙は僅かだ。

「――そこだ！」

無理やりに、その隙へと足をかける。

刹那に踏み入る一歩は、神速の領域へ。剣尖はそれよりもさらに疾く。

「Ｓｈｉｔ…！」

受けるか、避けるか。一瞬の判断。

ダンテの選択は、防御の一択。右腕で背に担いでいたトランクケースを盾のように前へ。

無駄だ。

――そんな物で止まるほど、我が腕も、剣も、なまくらではないぞ！

レヴァンティンの刃がトランクに食い込み――――

「なっ！？」

止まった。

硬い感触が手に伝わる。ケースではない。そのケースの中にある何かに阻まれて、レヴァンティンの刃はダンテに届かなかったのだ。

「危ない女は嫌いじゃないが、あんたは少し、情熱的すぎるぜ！」

ダンテはトランクケースを大きく弾き、シグナムの体をレヴァンティンごと退かせる。

「貴様……！」

壊れたトランクケースの蓋が落ちる。その中からのぞくのは、レヴァンティンよりも二回り以上は大きい両刃の大剣であった。

剛性と破壊力を極めた一体成型のフォルム。

柄に彫り込まれたレリーフはまるで不気味な悪魔のようだ。

鍛え上げられた鋼の刃が太陽の光を映して、揺れるように輝く。

「剣士、だったか」

「剣士か。親父と兄貴はそうだったかもしれないが、俺は違うな」

剣を持つ右手。その反対、空いた左手に素早く構えられた銀の銃が、再びシグナムに牙を剥く。

乾いた炸裂音とシグナムの声が重なった。

「そのようだな！」

銃弾はステップで退いた足元で跳ねた。
反撃は即座。遠心力と剣の重さを破壊力にかえ、打ち込む。

激突音。

接触は一瞬だ。再び距離を置くダンテ。追いすがるシグナム。

剣と剣。鋼と鋼がぶつかり合い、激しい火花が散る。
二合。三合。剣戟が折り重なり、二人の体が踊るように動く。

廻り、跳ね、駆けて、薙ぎ払う。

斬り、突き、受けて、踏み込む。

シグナムが繰り出すのは、全て、必殺に近い一撃。しかし、そのどれもが相手には届かない。

「すごい……！シグナムと剣で互角に戦ってるなんて！」

「本当に、何者なの……！？」

「行け！シグナム！叩き切っちまえ！」

紙一重の攻防に、フェイトとシャマルは息を呑み、アギトが息を巻く。

「何故はじめから抜かなかった…！？」

鍔迫り合い。剣越しの邂逅に見るダンテの顔には、未だ余裕の笑みがある。

「女に刃物を向けるのは、趣味が悪いだろ！？」

跳ね上げたダンテの剣に押されて、シグナムがたたらを踏んだ。力比べはダンテの方に分がある。

「銃口は平然と向けたくせに、よく言う」

「それは勘弁しろよ。ロスじゃ日常茶飯事なんだぜ？」

冷たい銃口から吐き出される灼熱の弾丸が、駆けるシグナムの軌跡を追随する。

「まったく、ふざけた男だ。レヴァンティン！」

『Ｎａｃｈｌａｄｅｎ（装填完了）』

走りながら、シグナムは愛剣に命じる。それに応え、レヴァンティンは即座にカートリッジを装填。その刀身に、膨大な魔力が満ちる。

「薙ぎ――払え！」

立ち止まり、迫る銃撃を正面から迎える。

『Ｓｔｕｒｍｗｉｎｄｅ！』

シュトゥルムヴィンデ。地を這う衝撃波の一陣は、鉛の銃弾などものともせずにダンテを襲う。

「おい、マジかよ！？」

横跳びに転がったダンテの背後で爆発に近い破砕音が轟いた。ビルの壁面に穿たれた大穴を見て、さすがのダンテも顔を引きつらせる。

「Ｃｒａｚｙ……どんな手品（マジック）を使ったんだ？」

「なに、ただの、魔法（マジック）さ」

「なるほどな、面白いジョークだ」

ダンテは立ち上がり、シグナムは剣を構えなおす。仕切り直し。

弓の弦が引き絞られるかのように。緊張した空気がキリキリと、耳には届かぬ音を立てる。

空になったカートリッジがレヴァンティンから排出され、コンクリートの地面に落ちた。

どちらともなく、両者は、ほぼ同時に足を踏み込んだ。

・
・
・

ギィイィィアァアアアァァァーーー……！！

ダンテとシグナムの剣がぶつかる静かで激しい剣戟の音を遮って、金切音にも似た耳障りな鳴き声が空間を震わせた。

「何だ…！？」

ひと塊の影が、両者の目の前で身を起こす。

輪郭のぼやけた漆黒の身体は、先にダンテが一掃した人型のそれとよく似ていた。しかし、今度のそれは人型ではない。

柔らかく背を丸める四足歩行。しなやかに肢体を伸ばす、その姿はまるで猫だ。ただし、ライオンの倍はあろうかという巨体の。

「これは…！？」

「コイツは…」

驚くシグナムとは対照的に、ダンテは冷静に、現れた影の姿に視線を触れさせた。懐かしい記憶の中に、目の前のこれと酷似した悪魔の姿がある。

「お前の知り合いか？」

「まあ、そんなところだ。ロクな知り合いしか居なくてね」

猫のような姿をした、巨大な影。

それは、“シャドウ”と呼ばれる、かつてダンテが戦った悪魔の眷属である。

「気を付けな。あれは剣じゃ切れないぜ」

大剣を背の剣帯に収め、両手にハンドガンを構える。

乱射。

黒く澱んだシャドウの身体に数十発もの弾丸が殺到する。

ギィイィィイ――――!!

だが、シャドウはその銃撃を意に介さず、巨体に見合わない俊敏さでダンテに襲いかかった。

「Ｓｈｉｔ!前は銃(こいつ)が効いたんだがな。たく、悪魔のくせに物覚えのいい野郎だ!」

シャドウの前脚をぎりぎりでかわし、ダンテは距離を取る。その振り向きざま、シャドウの尻尾が伸びた。硬質化したその先端は、鋼鉄ですら貫く槍となる。

「うおっと!」

紙一重。スウェーバックしたダンテの眼前を、槍が通り過ぎた。
さらに続けて、４本の槍がシャドウの身体から伸びる。

「相変わらず面倒な奴だ」

その槍をたくみに避け、ダンテは愛用のハンドガンに魔力を込める。剣も銃も効かないなら、これしかないだろう。

ダンテが構えるのと、シャドウが動くのはほぼ同時であった。
黒い風が、ダンテに覆いかぶさるように跳ぶ。

「Ｃ'ｍｏｎ!俺の躾けは厳しいぜ、化け猫野郎!」

両手を胸の前で交差させ、二丁のハンドガンが空中のシャドウを狙う。

だが、そのシャドウの身体は空中で縫いとめられたかのように静止した。

「Ｈｕｈ?」

もがくシャドウの身体に、緑の光を発する円環が絡み付いている。
どうやらそれがシャドウの自由を奪っているようだ。

『Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ』

届く機械音声。
困惑するダンテをよそに、金色の魔弾がシャドウの身体を貫いた。
地に落ちたシャドウにさらに追撃の魔弾が降り注ぐ。

ギィイィイアァァーーー……！！

断末魔。しかしその鳴き声も、直後に響いた声にかき消された。

「飛竜一閃！！」

シグナムだ。蛇のようにうねる連結刃へと姿を変えたレヴァンティンの一撃が、あらわになったシャドウのコアを容易く砕いた。

コアを失い魔力暴走をおこしたシャドウは、ひとしきりのた打ち回り、やがて盛大に爆発した。

その爆煙を割って、シグナムが現れる。

「Ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ！イカしてるじゃねーか」

銃を仕舞い、ダンテは彼女に大きな拍手を送る。

「最後のは中々ハードな一撃だったぜ。俺の時は手加減してくれてたのか？」

「お互い様だろう。あの程度が、貴様の全力ではあるまい」

言って、シグナムはレヴァンティンを鞘に収めた。騎士甲冑を解き、デバイスを待機状態へ。

「なんだ、もうデートはお終いってか」

「お前を侮っていた。これ以上続けると、命の遣り取りになる」

「あんだけ激しくアプローチしておいて、よく言うぜ」

「望みとあらば、もう一戦交えても構わんが」

鋭くダンテを睨むシグナムを、

「もういいでしょ、シグナム」

フェイトが後ろから引き止めた。

「そうよ、シグナム。強い人を見るとすぐこれなんだから」

シャマルもその横に並び、シグナムをなだめる。

「いや、別に、私はそんなつもりでは……」

なにやらもごもごと言うシグナムを、はいはい、と軽くあしらって、フェイトが一歩前に出た。

「さっきの流れ星（シューティングスター）はあんたかい？クールだったぜ」

「それはどうも」

ところで、とフェイトは真剣な表情で話を切り出した。

「あの影達は、全てあなたを狙っていましたね。一体、あれとあなたはどういった関係なんですか？」

その質問に、ダンテはしばらく悩む。
いつも通り、適当に煙に巻くか。それとも本当のことをきっぱりと言ってやるか。
あまり悪魔だの何だのといった話を吹聴したくはないのだが。
――――借りもできちまったしな
シャドウを片付けたのはこの3人だ。助けてくれと言った覚えは無いが、それでも助けられたという事実には変わりはない。
借りは残さないのがダンテの主義。相手が女なら尚の事。その辺の事に色々とやかましい女を一人知っている。
そうやってしばらく考えた後、結局、ダンテは本当のことを言う事にした。
「――――悪魔ってやつだよ、あれは」
「悪魔？」
「ああ、そうさ。よく言うだろ？ベッドの下や飛行機の羽の上には悪魔がいるってな。って、おい、何だよその可哀想なものを見るような目は」
「いや、だって悪魔って……」
「こっちはマジに話してるんだぜ？後ろ！こっちを見ながらヒソヒソ話すのはやめろ！」
「……まあ、見てしまった以上は信じるしかないですね。では、続

きを」

「たく……」

話した事を後悔しつつ、ダンテは先を続ける。

「その悪魔を狩るのが、俺の仕事なんだよ。今までも散々あいつらの仲間を潰してきたからな。ごまんと恨みを買ってるって訳さ」

「なるほど。でも、何故その悪魔がここに？」

「さてね。それを調べるのも、俺の仕事だ」

言って、ダンテは大きな、芝居じみた動きでゆるりと後ずさった。道を挟んだ反対側へと。

「首は突っこまない方がいいぜ。どうせ、ロクな事にはならないんだからな」

ぴしり

耳に聞こえたのは、遠くでガラスが割れるかのような鋭い音。

「！？」

一瞬の暗転。三人の驚きが同時に重なり、まばたき一回分にも満たないその時間で、フェイトらの周りに在った異変は全て消え去っていた。

人の居ない街も。砕けた壁も。濃密にただよう魔力も。その全てが、まるではじめから存在していないかのように無くなっている。

道行く人々。街灯の光。交じり合う喧騒。それは、何一ついつもと変わらない、日常の風景である。

「あいつ…！」

通りを挟んだ向こう側に、シグナムはダンテの姿を見た。

背を向け、後ろ手を軽く振り、その赤いコートは人ごみの中へと消える。

追いかけるか。

視線を交わすフェイトとシグナムだが、すぐに、それは無駄だという結論に達した。追いかけて捕まるような奴ではないだろう。

「悪魔、か」

シャマルの呟きも、雑踏の喧騒に紛れ、やがて消えていった。

踊るｉｎ　ｔｈｅ　ｓｈａｄｏｗ（後書き）

【おまけＳＳ】がんばれシグナム・展覧会編

「……得体の知れない奴だったな」

「まったくね。これから休暇なのに、何も起こらなきゃいいけど」

「……あ！？」

「どうした、アギト？」

「忘れてた、シグナム！展覧会！」

「む？あ、し、しまった！時間が！」

「急いでシグナム！走れば日本の名刀ぐらいまでは見れるかも！」

「すまんテスタロッサ！行くぞアギト！あの首斬り包丁を見過ごせば一生の悔いとなる！」

「おう！」

「気を付けてね～、……行っちゃった。首斬り包丁って叫びながら。職質されないといいけど」

「薙ぎ倒して突破しかねないからね」

再会のｆｒａｇｍｅｎｔ

市内中心部を離れて、閑静な住宅街へと至る一本の並木道がある。
空の色を夕焼けに染めた太陽が右手に見え、そのせいで更に朱に染まるオレンジ色の長い髪が、左腕のやや下方に見えた。

ついでに前を向けば、ワインレッドとチェリーブロッサムの二色の頭が仲良く揺れており、夕日の茜色に染まる自分の銀髪も足せば揃って赤の色相だな、とネロは考えた矢先に、どうでもいい、とその雑な思考を投げ捨てた。

一息。吐いた溜息の分だけ肩が下がる。
あらためて前を向けば、先を歩くエリオとキャロが、もうすぐ着きますよ、と道の先を指差した。同時、こちらの左手を握っている小さな手に、動きが生じる。

「なのはママ、もう帰ってるかな！？」

左手は、ヴィヴィオの声と右手の動きに合わせて揺れ、ヴィヴィオの頭はその度に跳ねた。
その頭の動きとこちらの腕の動きを合わせてやると、腕に持ち上げられたヴィヴィオはぴょんぴょんと大はしゃぎで喜んだ。

「わーい、もっともっと！」

うさぎのように跳ね飛ぶヴィヴィオを、ダンベルよろしくネロは上下に動かす。
華奢で軽いヴィヴィオくらいなら、いくらでも持ち上げる事が出来る。純粋に喜んでくれるヴィヴィオは可愛い。だから、こうやっ

て道すがら遊んでやる事に対しては何の気兼ねも無いのだが、

「おい、本当に行くのか？」

ただ一つそれだけがネロの気兼ねだった。

「はい。知り合ったのも何かの縁ですし、もしかしたら、力になれるかもしれませんから」

と言うのはエリオ。その隣、キャロも、そうですよ、と言わんばかりに微笑んでいる。左手のヴィヴィオもヴィヴィオでこちらを放そうとしないし、

――何なんだ、この妙に強引なガキ共は？

“なのはママ”なる人物の所へ連れて行くと言われ、断ろうにも断れず、いま自分は、ほとんど強制的に道案内をされている。

未成年者略取の事件はたまに耳にするが、成年者未成年者に略取という事件は今だかつて聞いた事が無い。テレビのくだらないニュースの一つとして取り上げられる分には面白い話なのかもしれないが、それはそれで、面倒な事件なのだなと思う。

実際に体験すれば分かる。子供というのは、どいつもこいつも融通のきかない奴ばっかりだ。当たり前か？

「なのはママはね、何でも出来るんだよ！」

まだまだぴょんぴょん跳ねるこのグループの最年少は、今日何度目かももう分からない、その言葉を告げる。

「みたいだな……」

そも、自分は“なのはママ”を全く知らないのだが。

いや、この子の母親だという事くらいは分かる。ママというのだからそうでなくては意味が分からない。

だが、だとして、その“なのはママ”が一体どれほど万能の存在なのかといえば、そこには多大な疑問を落とすことになる。

ヴィヴィオの話を頭から鵜呑みにするとしたら、恐らく、“なのはママ”という言葉の定義は“神”と同列かそれ以上となるだろう。それはさすがにママの領域を突破しすぎていやしないか。

――まあ、子供にとっては、そうなんだろうけどな

幼い子供が自分の母親を絶対視する心境は、ネロにだって分かる。未だ狭い見識の中で、最も尊く、最も近しい人間は、やはり母親なのだろう。

母も父も居ない自分にとって、それは少しだけ羨ましくもあった。その気持ちの大きさだけ、尊敬し、頼り、そして何より愛されているからこその、絶対的存在なのだから。

自分にとってのキリエがそうであるのと同様に、この子にとっての“なのはママ”も、大切で揺るぎようの無いものなのだろう。

――それを見失ってるオレは、一体何なんだろうな……

不良息子か不信心の愚か者か。もしかしたら日ごろの行いが神さまにでも知れたのかもしれない。信じるどころか、つい何ヶ月か前

にそれっぽいのをぶっ飛ばしているネロにとっては耳に痛い話だ。

と、そんな事は別にどうでもよくて。

「いいのか？」

「何がですか？」

「よくオレを見てみろ。どう考えても不審者だぞ？」

自分で言うのもなんだが、と心の内で付け加える。

しかし、自分の容姿が他人からどう見られるかは何となく分かる。あまり好印象を与えるような姿形には生まれていないし、育ってもいない。自覚している。

「ん～～、まあ、お友達って感じには、確かに……」

言いよどみながらも、エリオは素直な意見を口にする。

ネロはそれが普通だとも思う。そも、見ず知らずの子供が、助けてあげようなどと言って一緒に歩いているこの状況の方が異常だ。

だからネロは、だろ、と短く答え、続ける。

「自分の子供がこんな外国人を連れてきたらどうする？オレの国じゃあり得ない話だし、ここでもそうじゃないのか？」

問われたエリオは、んーーーー、と今度は少し長めに思考の時間を取り、

「いえ、実は僕達もここに住んでるわけじゃないのではっきりとは

言えませんけど……、普通は、そうですね」

「ほらな。だから、オレはここで消えて、お前達は仲良く揃って家に帰る。それでいいだろ」

これはネロが散々と言い聞かせてきた事だが、別に放り出されたところで自分の事はどうとでもなるのだ。

数日を暮らすのに不自由ないくらいの金銭はまだジャケットの内ポケットの中に存在するし、治安のいいこの国なら安ホテルでも最低限以上の安全は確保してくれる。

それに、キリエとはこの町ではぐれたのだから、当然、出会うのもこの町の筈だ。色々と無用心で心配なキリエのことだが、まさか、一人で町外に足を向ける愚を犯すような事は無いだろう。それは単純に時間の問題なのだ。

だからこちらは放り出されようと見捨てられようと一向にそれで構わないし、そうするのがどう考えてもベストな選択の筈なのだが、だと言うのにこの子供連中は一向にその提案を呑もうとはしない。

「でも、多分、大丈夫だと思いますよ」

と言って。

「うん。なのはさんだしね。きっと、何とかしてくれるんじゃないかなあ」

エリオの言葉に賛同を付け加えたのはキャロだ。彼女も、ヴィヴィオやエリオの例に漏れず“なのはママ”崇拝者らしかった。

――――どういう奴だよ、“なのはママ”

ここまでくると多少の興味すら湧いてくる。

道なりで話された“なのはママ”情報をまとめると、“なのはママ”は、優しく、きれいで、強くて、どんな危険からも守ってくれて、空も飛べて、お菓子作りが上手らしい。本当にどんな奴だ。

「けどな、もし仮にだ、オレが本物の不審者で、危険な野郎だったらどうする？」

こいつらは警戒と常識が足りない。

想像を促すために言ったネロの質問に、うーん、と前の二人は一緒に頭を捻って、

「まず、ヴィヴィオが懐いてるから、その仮定は成り立ちませんね」

「うんうん。ヴィヴィオは、悪い人には絶対に着いて行ったりしないから」

話の根底を否定するな、とネロは心で溜息。左手のヴィヴィオはよく話が分かっていないのか、それでも、自分の名前が話の中に出てきた事が嬉しいのか、にぱーっと満面の笑みを向けてくる。

「でも、もしも、ネロさんが本物の悪者でも、相変わらず問題はありませんよ？」

「ん？」

と、やや俯き加減に下げていた頭を上げると、その細い肩越しに、エリオがこちらを見上げていた。

くすり、と笑いを歯の奥で噛みしめたように、

「なのはさんが退治しますからね」

「――ハッ、そいつは凄えや」

進退窮まったり。

いい加減あきらめたネロは、もうどうにでもなれという心境で、相変わらず跳ねているヴィヴィオの身体を、左手一本ではなく両手で持ち上げた。

「わーい！」

大いに喜ぶ小さな身体を肩車に乗せて。

引きずられていた体と、そして心を自分の足で動かしはじめる。

それを見たエリオは、一息、楽しそうな色の混じる息を吐いて、少しだけ足を早めた。

帰る家は、もうすぐそこにある。少しだけそのまま歩き、角を曲がったそこに見えた、落ちかけた日暮れの色を映す広い庭を持った一軒をエリオは指し、

「あ、なのはさん。今帰った所ですか？」

・
・
・

「すみません……」

しゅん、としぼんだ声で言ったのは、なのはであった。

言葉の向かう先は、自分の背中よりやや右後ろを歩く女性、キリエである。

「そんな、気になさらないで。力になってくれただけでも、とても嬉しかったですから」

彼女が微笑む気配がする。その事に少しだけ心救われたなのはは、振り向き、あらためてキリエの姿を見た。

「あむ。……それにしても、日本の食べ物は本当に美味しいですね」

両手の肘に荷物の袋をぶら下げて、タイヤキを片手に幸せそうに頬を緩ませるキリエの姿がそこにはある。背中に背負った身の丈もある巨大なぬいぐるみは、町のゲームセンターのくじで彼女が引いた“大当たり”の結果だ。

細く華奢に見えるキリエがそれを背負うと、とたん、綿と布とフェルトで作られたぬいぐるみが凄まじい重さの荷物に見えてくるのだから不思議である。

「その……、本当にぬいぐるみは持たなくていいですか？手、空いてますよ？」

さすがのスバルも何となく不安そうな顔で聞く。

「大丈夫ですよ。軽いですから」

それはそうだろうが、事は気持ちの問題だ。どうにもならない。そんな周囲の心配やはらはらなどどこ吹く風で、キリエはまた一口、タイヤキの背びれをかじった。

・
・
・

キリエ、と名乗る女性となのはらが出会ったのが、ちょうど昼前。はぐれた弟を捜していると語るキリエに協力しようと決めたのがその直後で、共だって腹ごしらえに町の中心に繰り出したのはそれからすぐの事だった。

足を向けたのは、なのはがまだこの町で暮らしていた頃に顔なじみとなっていた喫茶店。

よう久しぶり、と言葉をかけてくれる気のいい店長になのはは挨拶を返し、テーブルにつく。

「ここはパスタが美味しいんだよ。子供の頃はよくフェイトちゃんと一緒に来たなあ。フェイトちゃんったらね、ここに来たら必ず“ラブラブドリンク”を注文するんだ。ほら、ストローが2本で、ハートマークになってるやつ。何でだろうね？」

うふふ、と笑うなのは。

何でも何も無いだろうに、と思うスバルとティアナ。

けれども、その事は絶対に口には出さない。口に出したところで、あはは、と笑われるのがオチだからだ。

「フェイトさん、かわいそうだね」

「……応援するのも同性としてどうかと思うけどね」

ふとティアナは思い出した事が一つ。

前に一度、それについてなんとなく聞いてみた事があった。

返答は、

「スターライトブレイカーで初めて撃たれた時にね、目覚めたんだよ」と。

――――あれ、“目が覚めた”だっけ？

まあどちらでも構わないな、とティアナはその時の恍惚としたフェイトの顔を頭から消した。

変な事を思い出してしまった。かわりにとばかりに運ばれてきたパスタに考えと意識を集中させる。

いただきます。

「まあ、これは美味しいですね！」

一口食べたキリエの感想はこうだった。

二口目にもそう言った。

三口目では頭に“本当に”が付け加えられた。

四口目以降の感想は無かったが、かわりに、主の洗礼とお告げと奇跡を同時に目の当たりにしたかのような幸せそうな表情があった。

とにかく美味しいんだろうな、と他の三人は思った。

「キリエさんの故郷では、どんな料理が美味しいんですか？」

聞けば返る答えに耳を貸せば、キリエの生まれ育った街は宗教色の強い閉鎖的な街だったため、外界の情報に乏しいのだという。

「こんなに美味しいものは久しぶりに食べました。感謝祭とか、お祭りとか、お祝い事くらいでしか特別な料理なんて食べないですから」

別に特別な料理という訳ではないのだが、所変われば味も変わるもの。

質素な郷土料理や、国柄の出る大味な料理に慣れていた彼女は、繊細な味付けのなされた料理にいたく感動して、帰り際に店長にレシピを聞いていた。全１４種類あるパスタ全ての。

店を出てからも、キリエの上機嫌は続いた。

“幸せ”という概念そのものに身を包んだかのような、天使の笑みを見せる彼女に対して、なのはらが気を利かせて少しだけ町を案内してあげようと思ったのは、今考えれば避けようの無い事態だったのかもしれない。

・
・
・

まず、お昼を食べたその足で向かったのは洋服店だった。
女の子ならば、誰でも綺麗な洋服が好きなもの。
キリエが今着ている服も、清楚で彼女の雰囲気にぴったりと似合っているが、けしてお洒落とは言いがたい服である。
なんでも、その服は故郷で祀っている神に仕える者が着る修道服なのだそうだ。あまり、自分の服は持ってないとも。

「う～ん、やっぱり合わせるなら白かなあ」

洋服店の壁一面を埋めるハンガーと服の隊列を前になのはは頭を捻っていた。

女性の自分から見て、キリエは、はっきりと分かるくらいに美人だ。基本的にどんな服でも似合いそうだが、だから余計にその服の色というものの重要性が際立ってくる。

選択は慎重を期すが、基本は白の色がベストだろう。ワンピースとかいいかもしれない。あと小物と帽子も。

「スカートはミニとロングのどっちがいいですか？」

「意外とスリムジーンズとか似合ったりして」

スバルとティアナも手伝って、キリエは試着室の中で山ほどの新しい自分を垣間見ることになった。

気に入った数着を購入し、店を出る。

なのは達が親身になってくれたのと、キリエが人懐っこいのと、女同士ということが幸いしたのだろう。姦しいに女一つ分を追加した四人組は、今日初めて出会ったとは思えないくらいに意気投合した。

「あれは何ですか？とてもキラキラしてますけど」

繁華街の辺りに来て、キリエの指し示したのは大手のゲームセンターだった。

彼女の故郷にはこの手の娯楽施設にも乏しいと言う。

「ちょっと、入ってみますか？」

となのはが言ったのが最後。

軽く立ち寄ったつもりのゲームセンターでは、初っ端、キリエが大当たりのくじを幸先良く引き当てた。進呈されるのは座り姿の巨大なくまのぬいぐるみ。キリエは大いに喜んだ。

クレーンゲームではなのはが猫のクッションを引き上げ、ティアナがガンシューティングのゲームでトップ２のレコードを出し、トップ１のＤａｎｔｅとは誰だろうか、と言って、それと同時にパン

チングマシーンの最高記録を一発でスバルが塗り替え、さらに次の瞬間にその上を行く記録をなのはが文字通り叩き出した辺りで、なのはは自分らの行動と目的と行き先が色々と間違っている事にようやく気付いた。

「わ、私達、弟さんのことぜんぜん探してないよ！？」

慌ててゲームセンターを飛び出した時には、もう既に外は夕暮れ。楽しい時間が経つのは早いのだ。

騒いだせいでぐーぐー鳴り出したお腹のために美味しいと評判のタイヤキ屋へと足を向けて、そして、話は当初のなのはの謝罪へと巻き戻る。

「うぅ、弟さんを探す予定だったのに……」

「気にしなくてもいいですよ。ネロも、きっと大丈夫ですから」

こちらの事を気にしてくれるキリエの言葉に、少しだけ、沈んだ心が浮き上がる。

一日の出来事を振り返って言葉を交わしながら、四人は歩いた。

向かう先は高町邸。

今日のところはキリエを空き部屋に泊めるか。それともこっそり広域探査でネロを見つけるか。

どちらにしろこのまま彼女を放り出すわけにはいかないと、なのはがキリエに家に来るよう促したのである。

キリエはそこまでしてもらうのは、と遠慮したが、一日、普通に街の散策を楽しんで、というか楽しませてしまったなのはがそれを頑として譲らなかったのだ。

「でも、本当にいいんですか？」

「はい。遠慮なんてしないでください」

口で話し、なのははは心で今日を反省する。

協力すると言っておきながら色々と見失ってしまっていたし、間違えていた。

結果オーライでは済まされないこともある。正すべきときには、きちんと自分を省みらなければ駄目なのだ。

特に間違いを訂正しなければならないのは、無論、語るべくも無く、

「それにしても、なのはさんのパンチ凄かったですね」

パンチングマシーンの数値であろう。

「あれは絶対に違うよ！きっと、スバルが強く叩きすぎちゃったから機械が故障したんだよ！１７２０なんて、絶対におかしいでしょ！？スバルの３倍だよ！？」

「なのはさん！私、一生ついて行きます！」

「さ、さすが、なのはさんですね……」

「お強いんですね。驚きましたよ、私」

「違うよーーー！ちーがーうーのーーー！！」

とにかく必死に。こちらに羨望と畏怖と奇異のそれぞれの目を向けてくる三人を説得した。

歩く道途中、３０分くらいかけて。

人体の筋肉の動きとそれに伴う膂力の発生について語り、スバルと自分との体格と筋肉量を語り、基礎体力の差から果てはゲーム筐体の内部構造にまで話が及んだところでなのははふと我に返り、

「と、とにかく、私はか弱いの！ベンチプレスだって１００キロちょっとが限界だし、腕相撲だってヴィータちゃんに負けるし、お肉より野菜の方が好きだもん！」

――なのはさん、それは女の子の腕力じゃありません

――なのはさん、素手で鉄板ぶち抜けるようなベルカ式上級魔導師と腕相撲なんて誰もしません

――私もお野菜の方が好きかなあ

それぞれ思うが、最後のキリエ以外は特に口には出さず、ひたすら黙々と歩いた。

通りの横断歩道を渡って、まっすぐ歩けばもうすぐ目的地。

なのはは途中で買った飲料水のペットボトルの蓋を緩め、さんざんと自身の無力性について語って乾いた喉に潤いを取り戻すべく、一口。

見えてきた家に足をゆっくりと運びながら、さらにもう一口を含み、なのはは通りの角を曲がって来たエリオとキャロの姿を見つけ、喋れないかわりに軽く手を振った。

「あ、なのはさん。今帰った所ですか？」

エリオが気付き、キャロが手を振り返してくれて、さらにその後ろに続いて現れた銀髪の大柄な青年に愛娘が肩車されているのを見て盛大に吹き出しそうになった。

「ごふぐぅっ！？」

なんとか口外への噴出を抑えたなのはだが、口の中で逆流した飲料水はUターンして食道と気管に殺到、勢いよくむせ返ってしまう。

「あら、ネロ？……ネロ！」

後ろでキリエの声が聞こえたが、自分の咳がうるさくて何て言ってるのかは分からなかった。

・
・
・

角を曲がって早速、ネロには驚いたことが三つあった。

なのはさん、と呼ばれた自分と同じくらいの若い女性がこちらの姿を見るなりいきなりむせ返って咳き込み始めたことが一つ。

なのはさん、と呼ばれたその人物が、恐らくもなにも件の“なのはママ”であろうということが次の一つ。

なのはさん、と呼ばれた彼女の後ろの方にネロという自分の名前を呼ぶキリエがいる事が最後の一つ。

さて、何から手をつけてどう反応したらよいものか。どうしてか冷静に働く頭の中で幾つかの選択肢を取捨選択し、まあ、ここは無難に、とネロは口を開く。

「キリエ！」

ずいぶん長いこと離れていた気がする。

実際には半日程度だが、異邦の空気と子供に連れ回されるという特異な時間を過ごしたせいでそう感じるのだ。

「もう、ネロったらどこに行ってたの？心配したんだから」

両手一杯に荷物を持ち、口元に小豆のかけらをつけ、美味しそうな甘い匂いをたてるお菓子を片手に、背中には巨大なぬいぐるみまで担いで、キリエが自分の声に反応して駆け寄ってきた。何があった？本当に心配してたか？もしかしてつっこみ待ちか？

聞いてみたかったが、それはやめて、ネロはとりあえずの言葉を紡ぎだす。

「ああ、すまない」

キリエとネロが口論になることは少ない。たいていの場合はネロが悪いからだ。

たまにキリエのせいで色々と面倒な事に巻き込まれたりするネロだが、その時もキリエ自身に悪気は無く、それは不幸な事故が重なった結果なので、結局、彼女は悪くない。それを止められなかったネロが悪いのだ。

単純な思考の連鎖は、ネロが長年キリエと付き合ってきた結果である。

とりあえず、彼女だけには何かあったらあやまろう。

ネロが世界で唯一、頭の上がらない存在がキリエなのだった。

「なのはママ！」

と、頭の上の声が言う。

そうだ、こっちも忘れてはいけない。色々と話に聞いた“なのはママ”。

こんなに若いとは思わなかったというか、若すぎるというか、ヴィヴィオの歳から逆算したらどう考えても犯罪というか、もうとにかくだ。

冷静に驚いてこんがらがる頭を一瞬だけ空っぽにして、ネロは挨拶をするために足を進めた。これまでの様々な話を思い返し、

「始めまして。あんたが、あー、空を飛びながら、お菓子を作るのがうまいママか？」

「え!?い、いえ、ち、違います!?」

いや、聞かれても。

休日のｈｏｔ　ｓｐｏｔ

「はあ……」

湯気で曇る視界の中に、ネロは大きな息を吐いた。霞がふわりと踊る。

場所は高町邸の浴室。その湯船の中。

身を沈ませる湯船は手足が伸ばせて余りあるほど広く、乳白色に濁った湯には、温泉の素なる物が溶かされている。

――温泉には素があるのか？

そうネロは思ったが、聞かされた話によると、本当に温泉に素があるわけではなくこれは温泉の成分を再現した商品らしい。よく分からない商品だが、数多くの種類が売り出されているというので日本では人気なのだろう。

確かに、ただの湯に浸かるよりは奇抜で面白い。独特の匂いがあるが、それはけして不快ではなく、何となく気分を落ち着かせてくれる。

アロマセラピーと似たようなものだろうか、とネロは漠然と想像した。煙を吸っていい気分になるのは遠慮したいがこれならそう悪くもない、とも。

――土産に少し買って帰るか？

高い品物でもないし、それもいいかもしれない。

明日からの予定に一つだけ小さな項目を増やし、ネロは肩を湯に沈めた。

・
・
・

ネロがキリエと再会できたのは全くの偶然であった。
ヴィヴィオと名乗る女の子と知り合い、エリオとキャロという二人組みに連れられて、半ば無理やりに引きずられて来た行程の最後に“なのはママ”と共だってキリエが待っていたのだ。
何の奇跡か。まさかこれが散々に聞かされた“なのはママ”のご威光だとでも言うのか。

「なのはママはすごいんだよ！」

どんなもんよ、と言わんばかりに目と表情を輝かせるヴィヴィオに、ネロは肯定する以外の反応を持ち合わせてはいなかった。

「ありがとうございました」

ネロと自分、二人分の深い感謝を言葉にするキリエに対し、なのははとても恐縮したような様子で、

「い、いえ、そんな。私は何もしてないですし……」

と言った。

本当に何もしていないのだからその言葉に嘘偽りは無い。

けれどネロ達の問題は綺麗さっぱり何の遺恨も残さずに解決しているのだから、ヴィヴィオの言葉を借りるまでもなく、凄い。何もしてないのに。

「それじゃあ、私達はこれで……」

それから先の展開は定型文的な工程を踏むことになる筈だとネロは思っていた。

感謝し、返礼し、立ち去ろうとして、

「そうですか？もしよかったら、ご飯でも食べていきませんか？」

返礼を返されて、飯にありつく。

待て。ネロはそう言いたかったが、キリエの方がその提案を三言四言くらいの言葉の押収で呑み込んでしまったので結局何も言えずに高町邸の敷居を跨ぐ事になった。

先だって歩くなのはが扉を開ける音と重なり、ただいま、との声が聞こえた。返答は直後、すぐにやってくる。

「お帰りなのは。おや、そちらの外国の方は新しい友達かい？」

現れたのは体格のいい中年過ぎの男性であった。なのはもその男性と軽く言葉の応答を繰り返している。

父親だろうか、とネロはあたりを付ける。

「お帰り、なのは。あら、人が増えたかしら？」

次に出てきたのはエプロンをかけた年若く見える女性。自分やキリエ、なのはよりは確実に年上だろうが、そこまで離れているとも思えない。

姉だろうか、と思うネロの予測は、

「あ、お母さん」

という一言であっさりと打ち消された。

――――Ｊｅｓｕｓ……

“なのはママ”も大概驚きだったが、こちらもそれに匹敵するほど衝撃的だ。

もしかしたら、この親子の血統は代々そういう感じで、実は、同い歳程度に見えるなのはもかなり年上なのではないだろうか。

くだらない想像が駆ける。これが東洋の神秘というものか。

「はじめまして。キリエと言います」

「ネロだ。よろしく」

想像を顔に出す事無く挨拶を交わすと、すぐさま家の中に入るよう促される。もうすぐ晩ご飯だとも。日本人には気のいい奴が多いとは聞くが、まさかこれほどまでとは。

ネロのカルチャーショックは、結局、一日中続いた事になる。主に人間関係で。

もしかしたらこの集団だけが特殊なのかもしれなかったが、他に日本人の知り合いなど居よう筈もないネロにそれを確認するすべはない。

それでも、

――まあ、どうでもいいさ。そんな事は

そう楽観的に思考を単純化するのは容易かった。何故か。答えは単純にして明快。

――久しぶりだな、こんなにキリエが笑っているのを見たのは

なのはやその家族、そしてヴィヴィオ。新たに知り合ったスバルやティアナという少女に、エリオとキャロも。その連中と話をしているキリエは、楽しそうに笑っている。

そも、旅の目的とはなんだったか。

キリエを楽しませる事だ。

辛い過去を乗り越えて先に進む事だ。

ならば、それがどんな形で、方法であっても構わない。キリエが元気になってくれればそれでいい。笑っているなら、それ以上に上等な事はない。

そう思い、ネロはぼんやりと料理を口に運んでいた。

矢先、

「ネロおにいちゃん」

キリエとなのはの話し声から少し外れて、ヴィヴィオのオッドアイがこちらを見つめている事に気付く。その声に含まれているのは、疑問のニュアンス。

おかしな顔でもしていただろうか、とネロは頬を撫でる。そして誤魔化すようにふっと笑って、箸は使えないだろうから、と用意してくれたフォークにフルーツサラダのパインを刺した。

「どうしたの？」

今度ははっきりと、疑問をぶつけられた。
おかしな顔をしていた事が確定。
それと同時に、疑問に対する返答の義務が生じる。

「何でもない」

けれども、ネロはその義務を破棄。返すのは何の意味も持たない軽い言葉だ。
言葉に被せるべき本心は頭の中だけで呟いて、その気持ちだけを乗せたフォークをヴィヴィオの口元に運ぶ。
ぱくり、と。ヴィヴィオは一口でその先端に捕まっていたパインをほお張った。

「ありがとう！」

笑顔で。元気に。
フォークに乗せた筈の、自分の気持ちが返って来た。

・
・
・

「はぁ……」

白いもやの中に吐いた息が、天井で水滴になって落ちてくる。
体中を覆う温い感覚は、お湯。
リラックスした脳が満腹中枢を刺激するのをやめたのか、食事で膨れた腹が緩やかにしぼんでいくのをネロは感じた。無論、感じただけだ。若さを武器に胃がもの凄い速度で仕事をしているわけではない。

一息。
ふと、ネロは聞いた。
肺から空気が出ていく音と水面の揺れる波音とは別の、とある小さな音を。

「ん？」

とことこ、というその音は浴室の扉の向こうの、さらにその奥の廊下から聞こえてくる。
誰かが近づいてくる音だ。
気付けば、もう随分と長い時間をこの湯船ですごしている事にネ

ロは驚く。

――――バスタイムがこんなにゆっくりしたモンだったなんてな

最低限の洗浄を自身の体に施して終わっていた故郷のそれとは大違いだった。

もしかすると、疲れていたのかもしれない。

体力の問題ではなく、心の問題として。

今日の一日は終始、キリエ捜索というかヴィヴィオの遊び相手に終わったのだが、それでも、その一日はキリエを失っていた事に変わりがない。守ると誓った筈の彼女を。

もっとも、それは単なる迷子というだけの一般的な日常茶飯事。町の何処かでは毎日誰かが迷子になる。今日はたまたま自分達がそうであっただけで、そんなに大袈裟に考える事ではないし、それは重々理解できている。

なのに、だ。

心は無意識にストレスを溜め込み、緩やかな温かみの中でしばしの時間をネロから消し去った。つまりそれは、

「まだ、オレが甘ちゃん野郎だって事か？」

どうしようもない気持ちは、未だ、自分が彼女を必要としているからこそ。

守る、と決めたのに、まだ、自分の心は守られていたいと思っている。

そちらの方が楽だし、何より心地良い。

ネロにとってのキリエは、母親の代わりで、お節介な姉で、そし

てどんなものよりも大切な――――

「チッ」

それ以上の思考は中断し、ネロは湯船のお湯を顔にすくった。
飛沫の弾ける音が耳のすぐそばを濡らしていく。
一瞬だけ閉じた瞳が開き、目にしたのは左右でそれぞれ様相の違う自身の両腕。

左は、普通の腕だ。肌色で、筋肉質で、幾つかの怪我の跡がある。生まれてこの方、随分長い間を付き合ってきた腕だ。

右は、普通ではない腕だ。肩口から指先まで、しっかりと包帯で固めてある。その奥にある、本物の奇異を隠すために。
この右腕とは、あまり長い付き合いではない。せいぜい1年程度の付き合いだが、過ごした時間の密度で言うならば左にも負けてはいない。
力を、と願った自分に、クソッタレな神さまが投げて寄こした祝福の腕だ。故郷での“仕事”の際、適度に使い勝手が良くて便利なのがムカつく。

「――――また、何か起こるのか？」

もらした呟きは、記憶の中、偶然出会った真紅のコートへと向けられたもの。
この町に来てから、右腕が疼く感覚はまだ無いが、嫌な予感、というものならば多少なりある。ダンテに出会ってしまった事がその最たるものだ。

「たく……」

こっちは楽しい旅行の真っ最中だぜ？
文句を言うと、記憶の中のダンテが苦い顔をした。

・
・
・

バスタイムの時間が終わると、次に訪れるのは別れの時間だ。
さすがに、と言葉を継ぎ足す必要もなく、長居しすぎた。

こちらにも、当然向こうにも、それぞれの時間がある。
無関係な時間を重ね合わせすぎると、両方の時間に軋轢を生む原因となってしまう。何事もほどほどに、という先人の言葉は間違ってはいない。

「かえっちゃうの？」

寂しそうなヴィヴィオの声と顔が引き止めるが、今回ばかりはそれに応じてやる訳にもいかない、とネロはその小さな頭を左手で撫でてやった。

「ああ、お別れだな」

こちらを見上げるヴィヴィオと、エリオ、キャロ、三つの視線に別れの挨拶として、左手を掲げて見せる。

「今日は本当に、ありがとうございました」

キリエはなのはに。そして、その後ろに姿を見せているティアナとスバル達に、感謝と別れの言葉を告げる。

「本当に今日は楽しかったです。また、今度、どこかでお会いしましょうね」

折り返してくるなのは達の返答に幾つかの相槌をうって、二人は揃って玄関の扉を内側からくぐった。

「いい人達でしたね」

暗くなった夜の道。さほど遠くには見えない市街の明かりに向けて歩むネロの隣、キリエが思い返すように言った。

「……そうだな」

本当に、と言って、ネロは未だ暖かみの残る自分の右腕をなでた。

出会いと別れは常にワンセットで歩いているものだ。また会うことが、果たしてあるだろうか。

それは難しいだろう、とネロは思った。

しかし。けれども、とも思う。

すれ違う程度のふれあいでも、縁は縁だ。キリエにとって幸いな

縁ならばいくらでも歓迎しよう。
思いがけず出会ったこの縁は、きっと、キリエにとって大切なものになる。

「いい思い出だな。今日も、明日もな」

隣。キリエが微笑む気配がする。
角を曲がり、道を渡って、橋の向こうに目を向ければそこは市街地。街が動く基点、人の活動の中心地。
少し立ち止まって、ネロは予約を取ってあるホテルまでの地図とメモをポケットから取り出した。街頭に照らして見てみると、その場所はこの橋からそう遠くはなかった。

「行こうぜ」

先んじて、ネロは歩く。地図を右手に。今度は離れないよう、左手を繋いで。
握り返してくれるキリエの細い力に指を添えて、歩調を合わせた緩慢な一歩を繰り返す。

橋を渡りきった。信号機とネオンの光がまばゆさを増してゆく。

もう一度。右手を上げて、地図とメモを見る。
少しだけ先ほどよりも詳しくその紙切れに目を落とし、そこで、ネロはサービスのディナー券が無駄になった事を知り、少しだけ苦笑した。

全力のｓｋｉｒｍｉｓｈ

空から海鳴市の町並みを俯瞰してみると、海鳴市を南北に分断する一本の線がある事に気付くだろう。

市外から、山岳部の景観の中を緩やかな曲線を描いて通り抜け、街の中心部の外れに到達する高速自動車道のインターチェンジがその一本線の起点である。

下り線から降りる道はその線を西に伸ばし、上り線へと至る道は東側の線から延長している。

それは、高度経済成長期に国の高速道路事業の一環として整備された、街の横断道路であった。

街を横断するかのように引かれた道路だから、横断道路。単純かつ明快な名称は覚えやすくていい。

その道路の構造と地理的な立場の関係上、横断道路は街の様々な道路と直結している。

市街地へ向かう国道線。

市外へと続く高速道路のランプ橋。

住宅街に至る町道に、細い路地裏道にまで、様々だ。

その横断道路を、高速道路のインターチェンジを無視して通り過ぎ、真っ直ぐ西へと上りに上って行った所に、海鳴山は存在する。

標高は７５０メートル。山としては比較的小さな部類に入る。

名物は季節のぶどう狩りと海鳴市内の中高生諸氏が一度は体験すると言う登山遠足である。

背が低いわりに勾配のきつい海鳴山登山は、キツイ、ヤバイ、ヒドイ、と若い息吹に大絶賛されている。恐らく今年も、主に体育会

系大学出身の教師先導で行われることだろう。

そんな、心と身体と肺が温まるイベントの後に絶対欠かせないのが、海鳴温泉であった。

山の中腹。正確には四合目付近の地山を幾らか削って作られた温泉旅館は、泊り客だけではなく外部の一般客にも自前の天然温泉を開放している。

室内の大浴場と外の露天風呂。それが、男女用に二つ。計４つの湯船で成り立つ海鳴温泉は、特に大きくて立派な温泉だというわけではなかったが、山岳部ゆえ、露天風呂から市内の町並みを展望でき、その向こうの水平線までもを一望できる絶景を誇っている為、それなりに人気の温泉なのであった。

ネロがキリエとの旅先にこの町を選んだ決め手も、この温泉にあると言える。

自然に湧き出る天然の湯に浸かり、疲れを癒す。

日本ではポピュラーな風習らしいが、ネロ達の故郷には縁の無いものだった。生まれ育った孤児院にあったのはささやかなバスとシャワーのみ。

特に温泉に憧れていたわけでも、シャワーに文句があるわけでもないが、興味というのなら多少なりはあった。その土地の風習に身を浸すのは旅行の醍醐味。独特の文化が多い日本は好奇心が尽きない。

そういう訳で。

いきなり双方ともに迷子になってしまうという奇特な昨日を過ごした後、ネロとキリエはこの町を去る最後に海鳴温泉に来ていた。

行楽のシーズンをわざと外して訪れたこの時期に温泉に来る客は少ない。静かな時間を求めていたネロにとってそれは理想的な条件であった。

実際に来てみると１０人ばかりの一団で来ていた先客が居たが、それだけだ。

まあ、それだけなのだが……

「ねろおにちゃんだーーー！」

およそ１２時間ぶり。

別れた時とは真逆の色を映すオッドアイが、ネロ達を迎えた。

・

・

・

「あら、テーブルテニスよ、ネロ！」

部屋に案内された後、荷物を置いたキリエとネロは旅館の中を少し散策し、ふと目に止まったリラックスルームへと足を運んでいた。

そこにあったのは、二つ並べられた卓球台。真っ先にそれを見つけたキリエが目を輝かせている。
みたいだな、とネロは簡単に返事を返した。

「たっきゅう～～！」

機嫌のいい幼い声は、ネロの頭の上から聞こえた。

「おいおい、揺らすなよ…。Ｏｕｃｈ！髪を引っ張るな、痛ッ、おい、コラ！」

ネロの肩の上。
思いがけない再開に、ヴィヴィオのテンションは妙な領域を抜けつつあるのか、わはーっと笑いながら好き勝手に暴れている。

「キリエさん、卓球できるんですか？」

そんなヴィヴィオの子守は完全にネロに放り投げ、なのははキリエと共に卓球台へと近づく。

おい、とか。痛い、とか。後ろからそのような声が聞こえてくるような気もするが、もはや彼女らの耳には幻聴程度にしか聞こえてはいない。

近づいた卓球台では、すでにスバルとティアナが熱い戦いを繰り広げていた。

カコンカコンカコン……！

心地のいいリズムが刻まれている。

テーブルを二等分するネットの横で指を折りながら点数を数えているのは、エリオとキャロである。

「172－173。マッチポイント。……173－173…」

何時間やってるんだ、と流石のなのはとキリエも思った。

得点を数える二人の顔もかなりうんざりしている。

「私達も少しやってみますか？」

提案はなのはから。

「ええ。負けませんわよ」

キリエは嬉々としてラケットを受け取った。

台の隅に置いてあったかごからピンポン玉を一つ取り出し、かごを部屋のテーブルの上へと移動させる。

かつん、とキリエは球を台でワンバウンド。

跳ね返りの具合はそれで確かめると、キリエは跳び上がった球を空中でキャッチ。

右手でラケットを構え、左手には球を握る。公式マークの入った、白いピンポン玉だ。

左手を掲げ、右手はゆるく横へ。

スタンスを開ける。

腰を落とす。

タン、タン、タン。

聞こえるか聞こえないか、つま先で数えるリズムは音、というより骨を伝わる振動としてキリエの耳に届く。

キリエの目の色が変わった事に、まだ、なのはは気づいていない。

「いいですか？」

問うたのは、自身のサーブ権の有無。
先に球を握ったのがキリエだったからだ。
なのはは、いいですよ、と軽く返事。
正式にサーブ権を手にしたキリエは、

「いきますよ……」

なれた手つきで、球を高く放り投げた。
白いピンポン玉は、放物線を描く事無く一線を引いた軌道のまま、真っ直ぐに折り返してくる。

キリエはその動きに合わせ、足をしゃがみこませるように十分屈伸させる。

ゆるく構えた右手を、僅か、後ろへ引く。
ラケットは縦に。

球を――――切る！

ッカァン――――！

「ふぇ…？」

打ち放たれた球は、なのはの側の陣営で一回跳ね、残像をすら残して空気を切り裂いた。

なのはは、頬のすぐ傍を奔り去った打球を目で追うこともできずに呆然としている。

「――――サァ！！」

高らかに、キリエの叫びが響いた。

・
・
・

カコォン！

「ひゃああ！」

リラックスルームに二つの音が響いた。

鋭角に跳ねる鋭く速い打球音と、打球をこぼしたスバルの悲鳴である。

「５０－０」

得点を読み上げているのはティアナ。

「くう〜〜…。か、勝てない…！」

思わず漏れた噛み殺した叫びは、心底からの敗北の意だ。

両手を床についてスバルは悔しがっている。

思い知らされた。自身の全力が、相手の歯牙にかかるどころか吐息に吹っ飛ばされる程度のものだと。

その、スバルの対面。卓球台の向こう側に立っているのは、もはや狩人のように眼光を鋭く光らせるキリエであった。

「いい加減諦めたら？あたしも、なのはさんも無理だったんだから」

「う、うん」

ひどく悔しそうにラケットを置くスバル。キリエが、軽く流れた汗を手ぬぐいで拭いていた。

「キリエのおねえちゃん、つよいね」

「本当に。大会とかには出たことはないんですか？」

「大会は無かったけど、まあ、街の中じゃ負け無しだったな。ああ、そういえばキリエに負けて街を出た奴が居たが、そいつは今じゃ世界ランキング2位だか3位だかになってるらしい。で、ソイツはたまに帰ってきてキリエと闘り合うんだが、未だに手も足も出ないって話だ」

ふわ〜…、と。ネロの隣と頭の上で漏れた感嘆の息は高町親子両名のもの。

さすがにそっくりだな、とネロが感心するその後ろで、リラックスルームの扉が開いた。

「なんだか盛り上がってるね」

「ふむ、卓球か。温泉の前に軽く汗を流すのもいいだろう」

シグナムとフェイトだ。

「フェイトさ～ん！」

「ど、どうしたの？スバル」

「もう、もうキリエさんに勝てる希望があるのはフェイトさんとシグナムさんの二人だけです！」

「え？え？」

どういうことかわからずにフェイトは目をぱちくりとさせる。

「あのね…」

かくかくしかじか

「ほう、キリエはそんなに強いのか」

「なるほど。それは、挑戦したくなるね」

二人の目がきらりと輝く。

「あら、お次はフェイトさんとシグナムさんですか？」

軽く息を整えながら新たな挑戦者を迎えるキリエ。

微笑む彼女の表情は、常のような天使の笑顔。しかし、彼女のブロンドの瞳は、穏やかな言葉とは裏腹に、熱い闘志をみなぎらせている。

それを言葉で表すのならば、こうだろう。

〝C'mon，Baby〟

案外、似たもの姉弟なのかもしれない。

・・・

カァン――――！

「あっ…！」

卓球対決。

フェイトｖｓキリエ

善戦するフェイトであったが、未だ、キリエからポイントを奪うには至っていない。

事態が好転する要素も少なく、この先の結果は火を見るより明らかだ。

「フェイトさんでも駄目か～～」

スバルが無念そうに呟く。

「むぅ…」

シグナムが悔しそうに腕を組んでいる。彼女も先程キリエと戦い、敢えなくストレートで負けてしまっている。

「ぅう…」

そうこうしている内にフェイトもシグナムと同じくストレートで負けてしまった。

「キリエさん、本当に強いね。二人がかりでも倒せそうにないよ」

何気ないスバルの一言。

「ええ。何人が相手でも、私は負けませんわよ」

何気ないキリエの一言。

それが、フェイトとシグナムに火をつけた。

「ほう。ならば、2対1でやってみるか？」

「構いませんわよ」

卓球台の前で肩を落とすフェイトの隣にシグナムが並ぶ。目が本気だ。

「行くぞ、フェイト。奴に一矢を報いてやらねば気が済まん。」

「うん、シグナム」

共に負けず嫌いな二人の、最後の戦いが始まる。

サーブはシグナム。

「疾ッ！」

鋭い打ち込み。

しかし、キリエはそれを簡単に返す。

激しいスピンの掛かった球は、フェイトらのフィールドで跳ねた後、ほぼ直角に近い角度で軌跡を変えた。

「くっ…！」

その急激な動きにシグナムは反応できない。1対1ならばそれで終わっていただろう。

しかし――

「いやぁ！」

カァン！

素早くサイドに動いたフェイトがその球を打ち返した。

そう、今は二人なのだ。片方のもらした球も、片方がカバーする事ができる。

おぉ……！

ギャラリーから感嘆とどよめきの声が上がった。

カコンカコンカコンカコン……

リレーが続いている。

今まで圧倒的な強さでそのフィールドを支配していたキリエと、フェイト、シグナムの二人が互角に戦っている。

こぼれた球も互いにカバーし合い、右から、左から、トリッキーに打ち込む二人。

それは、完璧なコンビネーションであった。互いに背を預けて最前線で戦ってきた二人にしかできない、最高のコンビプレーである。

その二人に対し、キリエも本気をだす。

球の回転、力、打点。彼女はその全てを巧みに操る。圧倒的技量

だ。コンビネーションで対抗しているとはいえ、未だ彼女らの間には歴然たる実力の差が立ちはだかっている。

「はっ、はっ、はっ、……」

終わりの見えないリレーの最中。先に疲れを見せたのはフェイト達の方であった。

緩急自在。完全不規則。予想の範囲を容易く飛び越えるキリエの球に対抗するためには、二人は常に精神を集中させ、動き続けなければいけない。

阿吽のコンビネーションと、高い運動神経のみを武器とする彼女達は、精神的、肉体的に徐々に追い込まれてゆく。

「あっ…！」

鉄壁のコンビネーション。

その壁に開いた針の細さほどの隙。

その隙を、キリエのスマッシュが貫いた。

大きく変化する打球。シグナムは対応できない。フェイトもまた。

――駄目だ！

極限にまで高められた試合。それはいつしか、ただ一球のみを競う勝負となっていた。こぼせば、その時点で敗北は決定する。

「――――くっ！」

フェイトが、跳んだ。

ポジションも、続く敵の攻撃に対抗することも、その全てを捨てた、ただ一球を拾うための跳躍。

無謀。しかし、届かねば全てが終わる。

ルールを無視してまで挑んだダブルｖｓシングルの戦いだ、ここは勝たねばならない。意地とプライドにかけて。

――届け！

伸ばした手に、そのラケットに、球が触れた。

もはやフォームは無い。地を踏みしめる足も。敵を見据える目も。あるのは、ラケットを握る腕のみ。

攻撃を返す、最後の一振りのみ。

振り抜く――――！

カァンッ――――！！

「え！？」

無理な体勢から返されたその球が、初めて、キリエの予想を飛び越えて動いた。

打点も、回転も、スピードも。キリエの全てのタイミングが、少しずつずれる。

カァン！

打ち返す球に、先までの鋭さは無い。偶然が呼び寄せたラッキーボール。

その球の跳ねる先に、シグナムは居た。

――――これが、最初で最後のチャンス…！

全身を以って。

全速に至る。

全開を出し切り。

全力を――――

「はぁぁっ！！」

打ち込む！

カァァァン――――！

ただ、強く、速く、重く。

打球は、キリエの手元を掠め、床に落ちた。

「あ……！」

０－１

たった一球。しかし、それは勝敗を決するに足る、十分な一球であった。

「我らの、勝ちだ」

誇らしげに、勝ち名乗りを上げるシグナム。

その後ろで、

がっしゃぁぁぁぁん！

フェイトが休憩用のイスやテーブルに頭から突っ込んで倒れた。

大股開きの、何ともあられもない格好で。

「フェイトちゃん！」

なのはが慌てて駆け寄る。

「か、勝ったよなのは……」

「パンツ見えてるよ！隠して！」

「……締まらないな、どうも」

やれやれとシグナムが首を振った。

リラックスルームでの激戦が終わり。

ネロは露天風呂の脱衣所に居た。

木張りの部屋。壁一面に並んだ棚に、脱いだ着衣を乱暴に放り込む。

「凄かったですね、さっきの試合」

そのネロの隣では、エリオが脱いだ服を丁寧に畳んでいる。

「ああ。フェイトにシグナムだっけ?プロでもない奴がキリエから点を取っちまうなんて、信じられねーよ」

ネロの言葉にエリオはくすりと笑いを漏らす。

「僕達からすれば、あの二人をあれだけ本気にさせてしまうキリエさんの方が信じられないんですけどね」

「そうか?」

「ええ、そうですよ。ところで、右腕はどうされたんですか?」

ネロの右腕。革のグローブを外しコートを脱いであらわになったその腕には、幾重にも包帯が巻かれている。

「これか?ああ、まあ、怪我みたいなもんだ」

「温泉に入って大丈夫なんですか？」

「問題ねーよ」

腰に手ぬぐいを巻き、自分よりも頭二つ分小さいエリオと並んで、ネロは露天風呂の扉を開けた。

白色に曇った視界の中、岩で組まれた大きな湯船には先客が居る。

「Ｈｅｙ，ＮＥＲＯ！また会ったな！」

ダンテだった。

「……お知り合いですか？」

「最悪だ（ジーザス）……」

・
・
・

所変わって女湯。

「なのはちゃん」

「な、何はやてちゃん？」

据えた目でじーーーーーーーーーっと見つめてくる親友に、なのはは引きつった笑顔で応える。

「一回り大きくなったんとちゃう？」

何が、とはもう聞くまでもないだろう。

「そ、そんなことないよ……」

なのはは胸を両手で隠しながらスッと身を引く。

はやてはススッと離れた距離をさらに縮めてなのはに迫る。

「ブラのサイズが少し変わったと思たら、やっぱりこういう事やったんや」

何で知っているのだろうかこの人は。若干どころではない身の危険を感じてこの場から逃げようとしたなのはの身体を、後ろから４本の白い腕が押さえつけた。

「すみません、なのはさん」

「でも、こうしないと私達がヤられちゃうんです」

スバルとティアナだった。

「スバル！ティアナ！そんな…！？」

信頼していた教え子の裏切り。信じられない、との思いがまず初めにやってくる。次に訪れるのは驚愕と愕然の感情。

そして、もはや逃げ場が無いことに思いが至る。

なのはの表情を恍惚と目に映しながら、はやては身動きの取れない彼女に、ゆっくりと自身の両手を伸ばした。

もはや別の生き物のようにわきわきと蠢く１０本の指。

濁った瞳で、はやてが口元を弓なりに吊り上げた。

「い、いやあああああ……！！」

などという光景を遠目に。

「楽しそーだよなあ…」

ヴィータが寂しそうに呟いた。

目を落とせば、そこにあるのはストンと落ちる平らな胸板。ぺたぺたと触ってみたところで、望むモノは相変わらず無い。

「はあ…」

こぽこぽこぽ……

口元まで湯に浸かる。吐き出す溜息が泡となり水面で弾け、前髪を小さな飛沫が濡らしている。

「あたしにも、もっとあればなぁ～…」

――――はやてと思う存分パヤパヤ出来るのに…

ヴィータがそんな健全なのかそうではないのかよく分からない考えに浸っていると、彼女の後ろで不意に大きな飛沫があがった。

「おんせーん！」

ヴィヴィオだ。ばしゃばしゃと楽しそうにはしゃぐ彼女に続き、

「温泉ですぅ！」

リィンがばっしゃーんとダイナミックエントリー。湯船に一瞬で広がった波がヴィータを呑みこむ。

「ぷあっ、こら、リィン！」

「はうっ！？ヴィータちゃんが怒ってるですぅ」

そそくさと、一緒に入ってきたキャロの後ろに隠れるリィン。

「あ、こら！隠れるんじゃねー！」

「おんせんだよーー！」

水面に頭を出したそのヴィータに、ヴィヴィオが後ろから飛びかかるように抱きついた。

「ごぼごぼごぼごぼごぼごぼごぼ……！！？」

組みつほぐれつ、ばしゃばしゃとのたうつ子供達（あたしは子供じゃねーぞ！）を遠巻きに眺めながら、はやてがふと言う。

「なんや物足らん思たら、シグナムとフェイトちゃんがおらんのやな」

ぐったりと息を荒げるなのはを後ろから抱きかかえながら、はやてはきょろきょろと二人の姿を探す。

「あ、フェイトさん達ならサウナに入ってましたよ」

「サウナ？」

「はい、先ほど――――」

～～～～～～

「暑かったら先に出ても構わんぞ、フェイト」

「いやいや、シグナムの方こそ辛そうだけど？」

「はっはっは。何を言うかこの程度で。まだ熱さが足りないくらいだ」

「じゃあもっと温度上げようか」

ジュウウウウ…！

「足りんな。もっとだ」

バシャアッ

ジュウウウウウウウウウ…！！

「ふ、は、ははははは…！極楽だなあ、フェイト」

「ア、アアアドレナリンが、最高にキてるよ。やっぱりサウナはこうでなきゃね」

「ふふ、無理をしてるんじゃないか？そろそろ私の姿も見えなくなってきたろう。あれ、フェイト？どこに行った？なんだ、電気を消したのか？目の前が…暗く……」

「この勝負、どうやら私の勝ちみたいだね。ああ、ほら、なのはも私を祝福してくれてるよ。あれ、なのは、何でそんなにたくさん居るの？わあ、綺麗な光が…」

～～～～～

～～～～～

「――――という具合に」

「はあ。あの勝負好きおっぱいコンビにも困ったものやな。ま、ええわ。どうせのぼせてダブルノックアウトやろうから、後で思う存分堪能させてもらおう」

と、はやてはもう既に抵抗もしなくなったなのはをティアナに預けると、湯船の端でシャマルと談話しているキリエに目をつける。

「ふっふっふ。では、一足先にメインディッシュといこか」

ゆるりと、波音もたてずに、はやては湯船の中に消えた

・
・
・

男湯。

石畳の湯船に三人が並ぶ。

ダンテ。

ネロ。

エリオ。

「いいねえ、ジャパニーズオンセンってのは」

湯に浸かり、上機嫌にダンテは口笛を吹く。

「何でいるんだよ……」

そのダンテの向かい側。ネロの言葉は限りなく重い。

「いいじゃねーか。俺だって観光くらいするさ。あとはスシとテンプラが食えれば文句は無いね。生魚は嫌いだけどな」

「はあ…」

うんざりする。いい加減この男のノリについて行くのは疲れた。なので、ネロはそれ以上口を開かずに肩を湯に沈めた。

「ダンテさんってどんな人なんですか？」

そのネロの腕を、エリオがつつく。

「ただのろくでなしさ。関わらないのがベストだぜ」

言ってくれる。

そんなダンテの呟きが聞こえた。ネロはそんなもの聞こえないふり。

その時だった。

『は、はやてさん！？何を…きゃあ！』

隣。女湯から、そんな声が響いたのは。

「キリエ？」

思わず女湯の方に振り向くネロ。先ほどの声は彼女のものだったような気がする。

『や、やめてくだ…きゃ！だ、駄目ですってば！』

確かにキリエだ。何をやっているのだろうか。

「ん～♪隣じゃ随分楽しそうなことやってるじゃねーか」

ざばり、と飛沫をあげてダンテが立ち上がった。湯船を出ると、腰にタオルを巻いて、彼はゆっくりとした足取りで女湯との仕切りに近づく。

「何をする気だよ」

慌ててネロが湯から飛び出た。ダンテの肩を強く掴んで振り向かせる。

「壁一枚向こうは楽園なんだぜ？男だったらやることは一つだろ」

「やめときな。向こうにはキリエも居るんだ」

「なんだよ、ケチケチすんなよ。お前だっていつも見てんだろ？」

「見てねーよ！」

右ストレート。あっさりダンテの左手に受け止められる。

「邪魔するなよ、チェリーボーイ」

「黙りな、クソ野郎（サノバビッチ）」

直後。ダンテの右フックが飛ぶ。それをネロは難なく受け止めた。

力任せの押し合い。ミシミシと筋肉が軋む感覚に、ネロは顔をしかめた。相変わらずの馬鹿力だ。

「C'mon, wimp」

来な、のろま野郎

「Don't get so cocky!」

舐めんじゃねーよ!

顔を突き合わせて、互いに開幕の言葉を告げる。もう止められない。

先制はネロの足払い。ダンテは軽いジャンプでそれをかわす。

そして、流れるような動きで空中で身を捻ると、強引にネロを湯船に投げ入れた。

どぱんっ!

「Hey!What's up!成長してねーなネロ!」

「Shit…!」

水面から飛び上がったネロは腰を落とし、左足を蹴り上げた。盛大な飛沫がネロの姿を覆い隠す。

「小賢しいな、坊や」

その飛沫が落ちる前に、ダンテがその幕を割った。
飛沫の向こう側。腕を伸ばした湯船の中に、ネロは居ない。
左。ダンテの死角から、ネロの右腕が彼の首を掴んだ。
「Ｄｉｅ！」
力任せに振り回し、露天風呂の脇に積み上げられた桶の山に、掴んだ身体を投げ飛ばす。桶がボーリングのピンのように弾けた。
「やるじゃねーか！」
ダンテは素早く身を起こすと足元の桶をネロに向かって次々に蹴り飛ばした。
１０を超える桶がネロに殺到し、ネロはそれを最小限の動きでかわす。サイドステップ。スウェー。頭を狙ってきた一つを右手で弾く。
そして、その伸びた右腕を、桶で遮られた視界の中を移動してきたダンテに掴まれた。
「くそ…っ！」
振り払う。
それよりも早く、ネロの視界がブラックアウトした。桶を被せられたのだとネロが気付くよりも早く、ダンテの声が耳に反響した。
「Ｓｗｅｅｔ　ｄｒｅａｍ！」
おネンネの時間だぜ！

連打。空いている左腕で、ネロの身体に猛烈なパンチを叩き込む。右手を離し、ふらつくネロに、止めの回し蹴りが決まる。

１８０はある長身のネロが５メートルもの距離を蹴り飛ばされる光景とはいかほどのものだろうか。それはそれは迫力があるに違いない。

「Ｇｏｄｄａｍｎ…！」

床で一度跳ねて、激しく壁に叩きつけられるネロだが、彼の目の闘志は微塵も揺るがない。平然と立ち上がり、右手を握る。青い、炎のような幻影がその腕を包んだように見える。

「タフな坊やだ。もう１ラウンドいくかい？」

「本気だ。後悔させてやるよ！」

踏み出したのは、ほぼ同時。拳と拳が、二人の間でぶつかり合う。

端っこで、エリオがあわわわ、と震えていた。

・
・
・

『ＨｅｙＨｅｙ！Ｃｏｍｅ　ａｎｄ　ｇｅｔ　ｍｅ！』

『Ｙｏｕ　ｓｈａｌｌ　ｄｉｅ！』

隣の男湯から聞こえる激しい声と打撃音に、女湯は騒然となっていた。

「だ、誰の声？」

と、スバル。

「片方はネロさんみたいだけど」

その隣でなのはを抱きかかえたティアナが答える。

「どっかで聞いたような…？」

浴槽の端に腰掛けて身体を冷ますヴィータが、その声に聞き耳を立てる。

「はあ、やっぱり私の目に狂いは無かったわ。フェイトちゃん、いや、これはもしかするとシグナム以上かもしれへん」

はやてはそんな声などまるで気にせずに後ろからぐったりと力無いキリエを抱きとめていた。絶賛セクハラ中でそれどころではないのだろう。

『Ｓｈｏｗ　ｄｏｗｎ！』

ネロの叫び声。一際大きな打撃音が響いた。

ばがんっ！と仕切りの竹壁をもの凄い勢いで突き破って、何かが湯船に飛び込んだ。派手な飛沫があがる。

「Ｈｅｙ！右腕（ソレ）は反則だろ！？こっちは丸腰だってのに！」

濁った湯船から勢いよく顔を上げたのは、がたいのいい大柄な銀髪の外人だった。

その男は、自分が何処に居るのか、どういう状況なのか、それらを一瞬で把握すると、突然の出来事に唖然とする彼女達をゆっくり見回した。

そしてキザったらしく髪を整えると、ひどく甘い声で、こう言った。

「ｙｏｕ'ｌｌ　ｂｅ　ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅ，　ｗｏｎ'ｔ　ｙｏｕ？ｂａｂｙ」

優しくしてくれよ、お嬢さん

「「「「「――――――ッ！！！？？」」」」」

絶叫。

・
・
・

「テメーー！ここで会ったが百年目だ！行くぞグラーフアイゼン！ぶっ飛ばしてやる！！」

「Ｅａｓｙ　ｄｏｅｓ　ｉｔ！落ち着けよ。ヘイ、ネロお前も何か言って…って、あいつ逃げやがったな」

不慮の事故（？）によって女風呂に飛び込んでしまったダンテ。そのダンテを、デバイスを持ち出したヴィータが追いかける。

「びっくりしたぁ…。あの人知ってる？エリオくん」

そんな、散々な騒ぎとなっている女湯を抜け出して、キャロは廊下でエリオとイスに座っていた。

「確か、ダンテさんって言ったかな」

と、

「へえ、あの人がダンテさんか」

女湯ののれんをくぐって浴衣姿のはやてが現れた。辺りと男湯の脱衣所を軽く覗いて、彼女はもう一人の人物が足りないことに気づく。

「ネロくんはどこ行ったんや？」

「逃げちゃいました。女湯にダンテさんを放り込んだのはネロさんですから」

「ネロくんが？」

「はい。右手一本で。凄かったですよ」

「ふぅん……。ネロくんがねえ」

はやては、むう、と唸って腕を組んだ。なにかを考えているようだが、その思考はすぐさま響いたシャマルの悲鳴によって中断することとなる。

「なんや？」

脱衣所を覗き込む。隣接するサウナルームで全裸のシグナムとフェイトが折り重なるように倒れて気絶していた。

「何があったの!?シグナム!フェイトちゃん!」

がくがくと二人の身体をゆするシャマル。何があったのだろうか。想像しなくても分かる気がしないでもないが。

「あーあー、もう二人ともあかんやん。そういう事はもっと夜遅く

にするもんや」

どういうこと?と首を傾げるキャロを、さ、さあ?な、なんだろうね。きっと僕たちにはまだ早いことだよ、とエリオは曖昧に諭した。

あまり納得いかない、といった表情のキャロ。あはは、と乾いた笑いと引きつった笑顔のエリオ。

そんな二人の目の前を、

「待て!逃げるな!!」

「Ｃｏｍｅ　ａｎｄ　ｇｅｔ　ｍｅ.捕まえてみな、クレイジーリトルガール!」

「子供(リトル)じゃねーーー!!」

と、相変わらずの二人がそれぞれの脱衣所から飛び出して駆けていく。

ヴィータはタオルを身体に巻いたままの姿で。

ダンテは革のズボンと素肌に赤いコートを直接着ている。

「あ、ヴィータ!大人の女性はすっぽんぽんで走るもんやないでー!」

そのヴィータの後を追いかけて、はやても行ってしまった。

「行っちゃったね」

キャロがつぶやく。

「そうだね。僕達も少し散歩しようか？」

話を濁せてよかった、とエリオは内心ほっとした。

「ふう、騒がしいわねえ」

「でも楽しいじゃん、ティア」

エリオとキャロの二人が立ち上がってその場を後にしようとした時だった。

スバルとティアナが温泉から上がってくる。それぞれ、すっかりとのぼせてしまったなのはとキリエを背中に抱えている。

「あ、スバルさん」

「おっす、エリオ。いい湯だったねー」

「少し賑やかですけどね」

くすりとスバルが笑った。

じゃあ、と切り出してキャロはエリオの浴衣の袖を引く。

「私達、外に散歩に行ってきます」

「うん。気をつけてね。あんまり遅くなるんじゃないわよ」

答えたのはティアナ。

じゃ後で。スバルはそう言って、ティアナと共に部屋へと戻って行く。

その姿を見送って。エリオとキャロは、

「フェイトママが死んじゃったーーーー！」
「ヴィヴィオちゃん泣き止むですぅ！まだフェイトさんは死んでないですぅ！」
「よっしゃー！ようやく温泉に入れるぜ…って、シ、シグナムゥ！？」
「はう！？アギト、どっから入ったですか！」
「向こうからだよ。それよりも、オイ！バッテンチビ！シグナムに何しやがった！？」
「何もしてないですぅ！」
「フェイトマ〝マ〝ァァァーーー……！！」
「もう、いいから運ぶのを手伝いなさい！」

まだまだ騒がしい温泉を後にした。

騒ぐｂｒｅａｋ　ｔｉｍｅ　ｂｌｕｅ（後書き）

【おまけＳＳ】それいけザフィーラ・温泉編

「はあ…」

「どうしたアギト。温泉には行かんのか？」

「一般人が居るから、アタシはこっそり入らなきゃ駄目なんだってさ」

「ふむ。そういえば、お前にはアウトフレームが無かったな」

「あのバッテンチビ、後でなんかイタズラしてやろ」

「ほどほどにな」

「ところでよ、あんたは何でこんな庭先に居るんだ？」

「ペットは入浴禁止だそうだ」

「……」

変わるｄａｙ　ｔｏ　ｄａｙ

「お前のせいで酷い目にあったじゃねーか」

リラックスルーム。

マッサージチェアに身を沈めながら、ダンテはソファでテレビを見ているネロにそう愚痴った。

「自業自得って言葉知ってるか？日本のことわざらしいぜ」

後ろのダンテに振り向くことなく、ネロは言う。

「物知りだな。俺はハイスクールには行ってなくてね」

「ああ、通りで」

がつん、とネロの後頭部にビールの空き缶がぶつかる。振り向いたネロに、ダンテは、どうかしたか？とでも言いたげに手を振った。

「Ｇｏ　ｔｏ　ｈｅｌｌ」

地獄に落ちろ

親指を地面に落とすネロ。

「Ａｓｃｅｎｓｉｏｎ　ｔｏ　ｈｅａｖｅｎ」

昇天しちまえ

中指を立てるダンテ。

「お邪魔します」

そんな中、部屋の扉を静かに開けて入って来る女性が一人。

「あ、ネロくんも一緒やったんか。丁度ええわ」

はやてだ。

浴衣姿のはやては、二人の間にイスを持ってきてそこに座った。

その彼女にダンテが軽い口調で話を切り出す。

「俺に用かい？愛の囁きが欲しいなら、もう少し待ちな。月が眠ってからが本当の大人の時間だぜ」

「あはは、ほなら後でヴィータにそう伝えとくわ」

「Ｇｉｖｅ　ｍｅ　ａ　ｂｒｅａｋ．もうあの嬢ちゃんは勘弁してくれ。俺もまともな人付き合いはしてこなかったが、あんなにクレイジーな嬢ちゃんを見たのは初めてだ。あんたからも言っといてくれ、子供がハンマーなんか振り回すもんじゃないってな」

うんざりと首を振るダンテ。その彼の様子を可笑しそうに笑った後、はやては目に険を入れて、さて、と口を開いた。

「シグナムとフェイトちゃんに話は聞かせてもらってます。悪魔と戦うのが仕事だそうで」

「へえ、あんたはこの前のあいつらかのお友達かい？その割りに今日は姿が見えねえけど」

「サウナで倒れて今は部屋で寝てます」

「そりゃ気の毒にな」

そんなことより。言って、はやては言葉を先に進める。

「その悪魔について今日は聞きに来たんです」

「悪魔について？こんないい男と、そんなツマらない話をしようってのかい？」

「はあ。ほんまに話に聞いたとおりの人やな」

ため息を一つ。飄々として実態の掴めないダンテからはやては目を逸らし、ソファでぼんやりテレビを眺めるネロに視線を合わせた。

「ほなら、ネロくんにも幾つか質問ええか？」

「悪魔の事をか？なんでオレに」

「ネロくん、ダンテさんと仲良さそうやん」

誰が。ぼやくネロを無視して、はやてはさらに続ける。

「それに、ネロくんが只者や無いこともわかっとる。いくら男の子やいうても、２メートル近い大男を女湯まで投げ飛ばせるような人は普通はおらんで」

「あのチビか。たく、黙ってろって言ったのにな」

うんざりとネロも頭を振る。

テレビを消し、ソファにもたれるように振り向くと、彼は視線の先に座るはやてへ逆に質問を返した。

「あんたら何者だ？普通の奴はそんな真面目な顔で悪魔がどーこーなんて言わないぜ？」

「なるほど。確かにそれもそうや。こっちだけ正体を明かさへんのも、不公平やしな」

そう前置きすると、はやてはあらたまって話を始めた。時空管理局。機動六課。端的に、しかし的確に、彼女はそれらの事柄を二人に説明する。

「へえ、なるほど」

「信じてくれるんか？」

「信じちゃいないが疑ってもないさ」

「ヒネてんのか素直なのかどっちかにしろよ」

黙れ（シャラップ）。

ダンテに言って、ネロは言葉を続ける。

「まあ、初めから妙な集団だとは思ってたんだ。女子供のくせにやたらと筋肉の付きがいいし、何となく妙な気配もするしな」

言葉を区切る。

「あんたはどうなんだよ、ダンテ。この話を信じるのか？」

「俺は初めから知ってたさ」

え？と、はやてとネロの言葉が重なった。

「時空管理局だろ？世界の不思議と戦ってるとか平和を守ってるとか魔法がどうとか。便利屋なんてやってるとな、くだらない噂なんてものは山ほど聞くもんさ。馬鹿らしい話くらいにしか思ってなかったが、あのシグナムって奴の“魔法”でピンときたんだよ」

「何で言わねーんだよ」

「誰も聞かなかったろ？」

「この…」

イラっときて腰を浮かせたネロをはやてが手で制した。

「まあまあ。ほなら、話が早い。シグナム達の時も、ヴィータの時も、ダンテさんの居る場所には必ず悪魔が出てきた。これはどういう事やろ」

「それは順序が違うな。俺が居るから悪魔が出るんじゃない。悪魔が出るから、俺が居るんだ。些細だけど大きな違いだぜ。悪魔狩りが俺の仕事だからな」

「ははあ、なるほど。なら、今日、今この場所にも悪魔が出るいう事やろか？」

「かもな。けど、ヤバイのは街全体さ。出てくる悪魔もここ最近は

随分ゴキゲンだしな。デカイ当たりを引いちまったかもしれないぜ？」

「なのにあんたはのんびり温泉か？」

「ここなら街が見下ろせるだろ？だから来たんだ。まあ半分はジャパニーズオンセンが目当てだったけどな。まさか、悪魔よりもクレイジーなお嬢ちゃんが居るとは思わなかった」

その瞬間だった。

何処かで、世界が変わる。異変。違和感。背筋を撫でるようなその悪寒に、三人はほぼ同時に気づいた。

窓の外。駆け寄ったネロの目に映るのは、先と変わらない静かな夜の景色。

しかし、先とはまるで違っている。空も。月も。空気も。濁るように、淀むように、停滞し、静止している。

漂いはじめた魔界の風に、ネロの右腕が激しく疼いた。

そして――

「！？」

爆発。この場所から見下ろせる市街地の周辺で、天を衝くような炎柱が空を焦がした。

同時、膨大な魔界の魔力が溢れる。

「な、なんやあれ！？」

はやてが叫ぶ。彼女の感覚もその炎柱から迸る強烈な魔力を感じ取っていた。

「ハッ、観光に来た先でこれかよ。オレもとことんツイてるな。ストレートフラッシュでも引いたか？」

憎々しげにダンテを振り返ってネロが言う。

「ロイヤルストレートフラッシュよりデカイ当りさ。最高の大当たり（ジャックポット）ってやつだよ！」

そのネロに、ダンテは嬉々として叫んだ。

口元を吊り上げ、赤いコートを翻し、新調したトランクを手に、彼は窓の外へと躍り出る。既に魔界の空気は濃密に夜空の下に漂っていた。

「お嬢ちゃんは早く帰った方がいいぜ！ここから先はR指定だ。大人の時間だからな！」

振り返り、ダンテははやてにそれだけを言い残す。

「ダンテさん！」

大窓から外に躍り出たダンテを追って、はやても外に飛び出した。外気は蒸し暑く、濃密な魔界の空気が漂っている。歪んだ空からは屈折した月の光が降り注ぎ、夜の闇がまるで密度を変えるようにしてはやての身体にまとわりついた。

思わず、はやては足を止める。前に進むと、もう戻って来れなく

なりそうな気がしたのだ。楽しかったはずの温泉は、もう既に人間以外の何かが支配する異界へと変わっていた。

だというのに、ダンテの赤いコートははやての目のまで闇の中へと溶けて行ってしまった。彼には、何の躊躇も、微塵の恐怖も無いのだろう。

悪魔を狩る。それが仕事だと彼は言った。こんな日常の裏側で、彼は今まで戦い続けてきたのだろうか。

「行っちまいやがった」

はやての後ろから、ぼやくようなネロの声が聞こえた。肩をすくめながら、彼もダンテの後を追うように歩を進める。

「ネロくんも、悪魔と戦うんか？」

思わず、そんな問いかけがはやての口をついた。

ネロは立ち止まり、はやての顔を見て、何かを躊躇するように僅かに俯いた。

「あー、何て言うかな…」

やがて決心したかのようにネロは右手を胸の前で掲げた。コートの袖を肘先まで捲り上げると、白い包帯で覆われた腕があらわになる。

その瞬間。ゴウ、とその腕に青い炎が燃え上がった。

「それは…！？」

はやては目を見開いた。管理局に携わってきた長い彼女の時間の中でさえ、そのような物を見たことはなかったからだ。

赤い装甲。鋭い爪。幻影のように立ち昇る、青い炎。現れたのは、人ならざる、異形の腕だった。

「それは何だってのはナシにしといてくれよ。オレだって分からないんだからな」

語るネロの言葉は、どこまでも自嘲気味ていた。自らの腕を鼻先で笑うと、彼は少し悲しそうな、艶っぽい目で言葉を続けた。

「悪魔の腕（デビルブリンガー）。俺はそう呼んでいる。どこでジョーカーを引いちまったんだろうな。ま、こういう役回りなんだよ、俺たちは」

それ以上は何も言わずに、ネロも走り去る。ダンテを追って。

はやては、その背中にかける言葉を失っていた。

「ーーーーー！」

その後姿を見送って、はやては胸いっぱいに一気に空気を吸い込んだ。

「げっほげほけほけほ…！」

ひどく咳き込んだ。多分だが、魔界の空気は身体に悪い。

だが、その変わりに先ほどまでの弱気な気持ちはどこかに消えていた。

踵を返し、一目散に、はやても走る。仲間の元へと。戦う為に。

・
・
・

「なんだよ、これ…!?」

廊下の窓から見た外の景色に、ヴィータは愕然とした。
暗く、そして醜悪に歪んだ空。天を焦がす炎の柱。寒気のするような邪悪な魔力。

「これって、フェイトちゃんの言ってた閉鎖空間…?」

傍ら。なのはも険しい顔で外の様子を伺っている。

「わかんねえけど、良い予感はしねーな。戻るぞ!」

言って、ヴィータは駆け出す。トランプの罰ゲームで買いにこさせられたジュースの缶をその場に投げ捨てて。

「うん!」

その後になのはが続き、

「ふにゃあ!?」

ジュースの缶にすっ転んだ。

「なにやってんだよ……」

「だってヴィータちゃんが…」

鼻をさすりながらなのはが恨めしそうにヴィータを見つめる。

「なのはちゃん!ヴィータ!」

と、廊下の奥から叫ぶ声が聞こえた。はやてだ。浴衣の裾を捲り上げて全力疾走。

「はやてちゃん、危ない!」

「え?うわっ!?」

遅かった。

ヴィータの投げ捨てた缶をはやてが踏んだ。人間ロケット。否、はやてロケット。

不幸なことに、そのロケットを正面から受け止めたのは倒れて上半身を起こしていたなのはだった。もの凄い音がした。

「うぐ…。ご、ごめ〝ん。な〝のばぢゃん…」

「うぅ…。だ、大丈夫だよ、ばやでぢゃん」

顔を上げた二人は、ぼたぼたと垂れる鼻血を袖でぬぐいながらふらふらと立ち上がった。

ヴィータは、あはは…、と曖昧に笑って誤魔化すしかなかった。

「ど、どに〝かく。急〝いで戻るで、二人とも〝」

鼻を押さえながら、はやてはまた駆け出した。その後ろに、なのはとヴィータが続く。

・
・
・

「うわぁ、相変わらず大変なことになっとるな」

部屋に戻ったはやては、窓からあらためて外の様子を伺った。相変わらず、この世のものとは思えない光景が広がっている。趣味の悪い光景だ。遊園地のお化け屋敷の方がよほど清々しいだろう。

はやては窓から離れると、部屋をぐるりと見回し、足りない人員を数える。

「シャマルとエリオくん達は？」

「はいはーい、私はここよ」

ふすまを開けて、部屋の奥からシャマルが顔を覗かせる。その手には濡れた手ぬぐいとうちわが握られていた。

奥の部屋に寝かせてあるフェイトとシグナムの介抱をしていたのだ。アギトとリィンもその手伝いをしている。

そしてそのフェイトの隣では、卓球や温泉やらで疲れたヴィヴィオがくーくーと静かな寝息を立てていた。

「流石なのはちゃんの娘やな。こら将来大物になるで」

腕を組んで感心するはやて。隣のなのはは胸を張っていいものかどうかわからず曖昧に笑った。

「エリオとキャロは散歩に出かけたままです」

「あらら、タイミング悪いなぁ…」

「一応、デバイスは持って行ったみたいですけど…」

そうはやてに報告したのはスバルとティアナだった。彼女ら二人の声は震えていた。

不意の出来事。激変した世界。戸惑い、恐れるのは仕方が無いことだろう。

そうしていると、旅館の中を見回っていたヴィータが帰って来た。
ここはまだ無事みたいだ、とはやてらに報告をする。はやてもエリオ達の不在をヴィータに告げた。なぜか口元を手で覆いながら。

そんなはやてを怪訝に思うヴィータだが、スバルらの怯えた様子を見止めると、一転、表情を引き締めた。

「まあ、こんな異常事態だ。状況がこれからどう転ぶかはわかんねーけどな」

けど、と言葉を足してヴィータはさらに続ける。

「エリオ達にしたって、あたしらは無事を信じるしかないんだ。今、出来ることに全力を尽くす。いつも通りさ、あたしらのやることは」

気強く。気丈に。ヴィータはスバルとティアナの前に立つ。
恐れも、不安も、戸惑いも。それらがヴィータの心に無いかといえば、そうではなかった。ヴィータもこの突然の出来事に強い不安を感じている。

だが、それを彼女らの目の前で見せるわけにはいかない。屹然と。堂々と。何よりも、誰よりも強く。それが彼女に課せられた役目である。

「ヴィータさん…」

スバルの声。もう、震えてはいなかった。

「あの、その、浴衣が…」

ティアナの声。なんだか、歯切れが悪かった。

「浴衣？」

自分の身体を見下げるヴィータ。浴衣がはだけて、小さな胸とうさぎ柄のパンツが丸見えだった。多分、大急ぎでここまで走ったからだろう。

「「ッ～ッ、可愛い、～ッ、すぎ、～ッ」」

はやてとリィンが口元を手で覆い、必死になって笑いを堪えている。

少し、ヴィータは挫けそうになった。

・
・
・

「みんな気づいてるように、今、外が大変なことになってる。これは全部、悪魔の仕業や」

部屋の様子が落ち着いたところで、はやてが口を開いた。

「悪魔？それって、シグナムさん達が遭遇したっていう、あの？」

「恐らくな。んで、そいつらが私らの世界に攻め込んできたんや」

部屋にいる誰もが息を呑んだ。

悪魔が世界征服をしにやってきた。はやての話は、要するにそういう事だ。

突拍子も無い、しかし、外の光景を見れば信じるしかない話。困惑。混乱。彼女らの表情にはそういった感情が色濃く見える。

「突拍子も無いのは百も承知や。正直、私も訳分からん」

でもな、

「そんな訳分からん連中に、この町をいいようにさせるわけにはいかん。そうやろ？」

「うん、そうだね。そうだよ！」

強く、なのはが頷く。

「どの道、こんな異常事態をほっとける訳ねーからな。やるなら、徹底的にぶっ潰しちまおうぜ」

ヴィータが不敵に笑う。

「そうですよ！今、ここにはミッドチルダ最強の部隊が揃ってるんですから！」

「機動六課が揃って、出来ない事なんてないですよ」

スバルもティアナも、強く拳を握り締めた。

「悪魔ｖｓ機動六課、か。世紀の対決ねえ」

くすくすとシャマルが笑う。

その皆の様子を見て、はやては満足そうに頷いた。

「ほなら、機動六課出動や！ザフィーラ！」

「ここに」

呼ばれて、ひょっこりと窓からザフィーラが顔を覗かせた。

「ザフィーラとリィン、アギト達はここでヴィヴィオちゃん達の守護や。蟻んこ一匹通したらあかんで」

ザフィーラは身軽なうごきでひらりと窓を飛び越えた。部屋に着地し、短い言葉で主の命を承服する。

御意、と。

「ヴィータとシャマルはエリオ君達を探して合流。他は私と一緒や」

了解、と言葉を残してヴィータとシャマルが窓から飛び出る。変身は一瞬。騎士甲冑に身を包み、二人は二色の光線となって歪んだ空に飛び立った。

「さあ、私らも行くで！」

光の尾を引いて、幾つもの流星が空を駆ける。それはまるで、暗闇を断つ剣のように、長く長く伸びていった。

悪魔と悪魔のｄａｎｃｅ　ｍａｃａｂｒｅ

海鳴市の全様は一変していた。
しかし、構造物自体には何の変化も無い。
例えば、市内を二分する横断道路。市街地中心に大きく構えるショッピングモール。水平線を臨む展望公園。それらの構造物、建築物はなんら変哲無くそこに存在している。

だが、そこには、そこに当然あるべきモノの一つが欠けていた。
“街”という概念を形成する根源的な要素の一つだ。当然そこにあり、在るという事それそのものを当然とする、最重要ファクター。

即ち、“人”である。
海鳴山の中腹から望む街には、そこに存在するべき、人の息吹が無い。
街とは、人が住み、暮らし、活動する場所を指して言われる言葉だ。人の居ない街は街ではなく、廃墟と言われる。人が住み、在るからこその、街。観測者の居ない事象に意味が無いのと同じように、また、この街も存在する意味を失いかけていた。

もはやそれは、街を模った物質でしかないのだ。

そんな、異界と化した世界をダンテは全力で駆けた。目指すのは、天を燃やす紅蓮の柱。それは、魔界とこの現世とを貫く孔である。

その光景を、ダンテは期待に満ちた凶悪な顔で睨みつけた。
テメンニグル、マレット島、フォルトゥナ…、反芻されるそれらの経験にも劣らない程の巨大な魔界の孔だ。

「どんなクソ野郎が居るんだろうな。今から楽しみだぜ！」

道路の柵を飛び越える。急勾配の坂を下れば、そこはもう市街地だ。

・
・
・

ごそり、と。何の前触れも無く、ダンテの周囲で影が蠢いた。

輪郭の無い、四脚の猛獣が身を起こす。シャドウだ。ダンテを囲むように四体。俊敏に。鋭敏に。黒い風が吹き抜けた。

「なんだよ、主賓の歓迎にしちゃショボくねーか？」

シャドウの突進を軽く避け、続くもう一匹の頭を踏みつけて、ダンテは高く跳び上がった。同時に、コートに隠れた背中のホルダーからショットガンを抜き取り構える。

その跳躍から一拍遅れて、シャドウが空中で閃く赤いコートに殺到した。前後左右。全ての空間を支配した影の爪牙が一斉にダンテを襲う。

「Ｔｉｍｅ　ｔｏ　ｒｏｃｋ！」
派手にいくぜ！

しかし、ダンテには一切の恐れも焦りも無かった。構えたショットガンを手首で回し、脇から反対の手へと振り回す。まるでヌンチャクのように、さらに動きは加速する。怒涛の勢いで火薬と銃弾の花が咲いた。

ファイアワークス。

ギィィィィィァァアア――――！

散弾に弾かれて、シャドウが地面に落ちる。だが、まだ倒した訳ではない。ただ振り払っただけ。普通の銃弾が通用しないことは、前回の戦いで既に分かっている。

「前はオイシイ所を持っていかれちまったけどな、今日は違うぜ！」

ショットガンに魔力が注がれる。ダンテは落下の勢いのまま、地面にいる一体のシャドウへとその銃身を叩きつけた。引き鉄を引く。零距離射撃。膨大な魔力を持った散弾が、シャドウのコアごと地面を抉り削った。

一匹撃破。

ショットガンを背中にしまうと、残る三匹にダンテは犬を呼ぶような口笛を吹いてみせた。手拍子と手招きも忘れない。

「Ｈｅｙ，Ｃ'ｍｏｎ！」

挑発に誘われた訳ではないだろうが、シャドウの動きは俊敏であった。

一匹は闇に溶けるように影の中を。一匹は疾風のように空を。一匹は猛獣のように地を。それぞれのシャドウが、ダンテを目指して駆ける。

影から伸びる幾本もの槍を避けてダンテもまた駆けた。前方。地を走るシャドウの爪が、風を纏って振るわれた。木々をまとめて薙ぎ払うその一撃を、ダンテはスウェーバックで避ける。流れるような動きで身を伏せ、体を回転させ、シャドウの足元を払う。

「コイツはジントニックよりもキクぜ？悪酔いに気を付けな！」

倒れたシャドウの大口を右足で蹴り飛ばすと、ダンテはその喉奥に容赦なく弾丸を撃ち込んだ。魔力をチャージした黒と銀のハンドガンは、圧倒的な破壊力を以ってそのシャドウのコアを撃ち砕く。

「Ｔｏｏ　ｅａｓｙ……ＨＡ！」

その直後。背後の影から現れたシャドウを、ダンテのショットガンが背中越しに弾いた。神速に届く、刹那の抜き撃ち。ハンドガンは既に彼の手を離れて宙を舞っている。

「綺麗に平らげな！」

振り向きざま。叩きつけるように突き出されたショットガンのチャージショットがシャドウの身体を零距離で撃ち抜いた。風穴の空いたシャドウに、続けざま、３発ものチャージショットが撃ち込まれる。断末魔を残す事もなく、爆発の衝撃だけがダンテの前髪を揺

らす。

「行儀の悪いご馳走様だな。ジャパニーズはそこら辺うるさいぜ？」

ショットガンを背に。落ちてきたハンドガンを指で回し。消え去ったシャドウに一瞥をくれることもせず、ダンテはコートの埃を銃身で乱暴に払った。

その次の瞬間、不意に、ダンテが首を傾けた。背後から伸びた影の槍がその彼の頬を掠めて地面に突き刺さるが、彼は眉一つ動かさずにゆっくりとした挙動で銃の引き金に指をかけた。

「最後だな、子猫ちゃん！」

コートを翻し、身体ごと振り返る。両手を交差させた二丁拳銃（トゥーハンド）。魔力に輝く銃身が、空中のシャドウを狙う。

と、その時。

「Ｈｕｈ？」

青い、幻影のような巨大な腕がシャドウの体を掴み、地面に引き落とした。激しく地面に叩き付けられるシャドウ。のたうつその巨体をねじ伏せ、その腕はシャドウの体をコアもろとも握り潰してしまった。

「なんだよ、せっかく人がキめてんのに邪魔するなよ」

気を抜いたように表情を崩し、くるくるとダンテは指先でハンドガンを弄ぶ。

浅く茂った木々の合間から現れたのは、右腕をあらわにしたネロであった。

「手伝ってやるよ。感謝しろよ？」

「ハッ、頼もしいじゃねーか、坊や」

ああそうだ、とダンテはその辺りに転がしていた新品のトランクケースを足で蹴り上げるようにして拾った。

「前のと違うな。ジャパンの土産にそのチョイスはどうかと思うぜ」

「前のはどっかの乱暴なねーちゃんにぶっ壊されちまったんだよ。たく、安物じゃなかったんだぜ？」

肩をすくめるように見せて、ダンテは三つあるトランクの鍵を開けた。中からはダンテの大剣“リベリオン”が現れる。それをコートの剣帯に収めると、ダンテはケースをネロに放った。

「なんだよ？」

何のことだか分からずにネロは首を傾げた。

開けろよ、とのダンテの言葉に従い、ケースを開けてみる。

「これは…！」

驚きに、ネロの目が見開かれる。

そこには、ネロの愛用する長剣“レッドクイーン”とリボルバー拳銃の“ブルーローズ”が入っていたのだ。

「約束は守る男だぜ、俺は。感謝しろよ？この国にそれを運んでくるのはけっこう大変なんだ」

「ああ、そうだな、ピザくらいなら奢ってやるよ」

「オリーブとアンチョビは抜きでな。あと、ストロベリーサンデーがあれば文句ナシなんだけどな」

「考えとくさ」

レッドクイーンの内燃機構（イクシード）が正しく動作するかを確かめながら、ネロは上機嫌に言う。

内部の機構がエンジン音に近い唸りを上げた。整備は欠かしていないから、動作は当然、正常だ。

ネロはその剣を背に担う。ブルーローズには弾薬を込め、ホルダーにしまう。慣れたその重みを頼もしく思いながら、ネロはダンテの横に並んだ。

彼の見下ろす市街地には、燃え盛る炎の柱が立ち昇っている。その柱から、溢れるように大小様々な悪魔が這い出していた。

美しかった海鳴市は、もうそこには存在していない。湧き出た魔界に呑まれ、悪魔に支配された町並みが、醜悪に広がるのみ。

ネロの脳裏に、まるでフラッシュバックのように過去の記憶が反芻された。故郷の街が悪魔に呑まれる、未だ遠くない記憶だ。右腕に絡まる蒼い幻影が、ネロの感情を表すかのように激しく燃え上がった。

ゴウ、と風が吹く。魔界の風だ。その風は、悪魔共の意識を乗せて、二人の身体を撫でる。地を駆けて、闇を走り、空を巡って、悪

魔が来る。殺意。敵意。突き刺すような気配を孕み、邪悪な存在が自分達を殺しにやってくるのが分かる。

「いいね、ゴキゲンなパーティーになりそうだ！」

「美味い料理は無さそうだけどな」

互いに顔を見合わせる。どちらとも無く、小さな笑いがこぼれた。ああ、確かに、派手なパーティーになることは間違いない。

――Ｌｅｔ' ｓ ｓｔａｒｔ！ｔｈｅ ｍｏｓｔ ｃｒａｚｙ Ｐａｒｔｙ, ｙｅａｈ！！

翻ったのは、赤と黒の二つのコート。

孤独な町に響いた、幾つもの銃声が、パーティーの開幕を華々しく飾った。

・
・
・

魔界に沈みつつある町。紅蓮の炎柱を擁する海鳴市の市街地。そ

こに集まる悪魔達はざわめいていた。魔界の侵攻の邪魔をする“敵”の襲来に。

その敵の数は、二つ。

一つは、空を往く赤い稲妻。

浮遊する悪魔を蹴り、その翼を掴み、或いは自らの脚で空を蹴って、空を高く跳ぶ、翼無き影。

乾いた轟音と共に銃弾を吐き出し、速く、重く、鋭い刃が閃光のように瞬く。幾百もの同胞が、その切先に触れて、引き裂かれていく。散っていく。

止めることは出来ない。止まることもしない。亡骸の雲を突き抜けて、稲妻は、ただ、ひたすらに奔る。それを阻む全てを葬って。

一つは、地を疾走する黒い竜巻。

折り重なる人形の群れ。強靭なトカゲの鱗。魔界で錬鉄された鎧。その全てを断ち、撃ち、砕いて駆ける、猛獣の如き影。

魔力を帯びた弾丸は、只の一発で同胞を塵に還し、その剣は炎を伴い豪烈な勢いで他を薙ぎ払う。盾も、爪も、牙も。何もかも。その重圧には逆らえない。

止める術は無い。止まることも知らない。亡骸の山を蹴散らして、竜巻は、ただ、ひたすらに吹き荒れる。それに触れたもの、全てを塵にして。

ォォオォォォオオンンン――――！！

悪魔は叫ぶ。恐怖と怨嗟に彩られて、その叫びは地の底にまで響き渡る。

――――ここに集え、同胞達よ。

――――甦れ、怨念の渦巻くままに。

――――戦え、その身に宿る魔の囁きに従って。

さあ、我等の“敵”が来た。

・
・
・

「ハッハァ！随分ゴキゲンじゃねーか悪魔共！」

遍在する悪魔の叫びを耳にして、ダンテも負けじと叫んだ。

悪魔を踏み台に、空で踊るダンテに向かって数多の異形が群がっ

ている。

「ｙｅｅｅｅｅｅ－ｈａｗ！」

振り下ろされる死神の大鎌を蹴り飛ばし、その顔を踏みつけて、さらにダンテは跳ぶ。跳躍が最高点にまで達すると、下方にいる死神の無防備な脳天を、その足先までショットガンでぶち抜いた。

群を成す悪魔の攻撃をものともせず、ダンテの動きはさらに加速する。

急降下してくる血の鳥をハンドガンで蹴散らして、群がる蝙蝠形のプラズマをファイヤワークスで地面に撃ち落す。死神の鎌と大鋏をくぐると、剣を勢いに任せて振り回した。

奔る斬撃はまさに障壁。わずか１メートル強のその間合いより先に、悪魔の攻撃は届かない。

一方的に撃ち落され、もうかなりの数の悪魔が蹴散らされたが、それでも攻撃の手が緩む気配は無かった。それどころか、いつにも増して激しくこちらに襲い掛かってくる。

熱烈な歓迎だ。ダンテのテンションも絶好調で山場を迎えている。

「Ｌｅｔ' ｓ　ｇｅｔ　ｃｒｅａｚｙ，ｙｅａｈ！！」

髑髏の頭を叩き割り、そのまま重力に身を任せる。銀と黒のハンドガンが嵐のように銃弾を吐き出した。

・
・
・

そのダンテを地上から追いかけるネロもまた、様々な異形の悪魔に囲まれていた。

見えない糸で操られるマリオネット。蟲の詰まったズタ袋のスケアクロウ。爬虫類のような肌と顔を持つブレイドやフロスト達。黒い瘴気を纏う死神。

その軍団の中には、見た顔と初めての顔が入り混じっている。

それなりに長い期間を騎士団として故郷の街で悪魔と戦ってきたネロではあるが、それでもダンテほど豊富な経験はない。

未知というものは誰しもに等しく危険をもたらすものだが、そんな恐怖をネロは微塵も感じてはいなかった。

その程度の敵に抱く恐怖など彼の中にはもう残ってはいない。過去のあの日に、フォルトゥナ城で刃を交え、そして返り討ちにされたあの決闘以来の恐怖など、魔界の底にすらあるものか。

「Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｎｏｔ　ｗｏｒｔｈｙ　ａｓ　ｍｙ　ｏｐｐｏｎｅｎｔ！！」

テメーらじゃ相手にならねーよ！！

叫びは、気迫と殺意を乗せて悪魔を震わせた。
踏み込みは重く。ブーツの底をすり減らし、身の丈ほどもある大剣をネロは片手で薙ぎ払った。華奢なマリオネットは、その剣圧にすら耐え切れずに吹き飛ばされる。
返す刀で爬虫類型の悪魔、ブレイドを切り伏せると、そのまま刃を返し、ネロは柄のクラッチを引いた。限界まで蓄積されていた剣の内燃機構、イクシードが解放され、ネロの身体を爆発的に加速させる。

殺人的な圧力に、しかし、ネロは耐える。
右足を軸に、回転。推進力が遠心力に。その力は、そのまま、悪魔を薙ぎ払う破壊力へと姿を変える。

破砕機（シュレッダー）と化したネロは、手当たり次第に悪魔を巻き込み、引き裂き、吹き飛ばす。

回転がおさまるのを待たず、ネロは再び駆け出した。
スケアクロウの群れをブルーローズの魔力を込めた炸裂弾で蹴散らし、フロストをその氷の鎧ごと両断する。その勢いで柄を捻りさらにイクシードを燃焼させ、ネロは怒涛の勢いで走る。そのネロの剣に弾かれ、彼の二倍はあろうかという巨体の死神がよろめいた。

「Ｂｒｅａｋ　ｄｏｗｎ！」
砕けろ！

右腕。悪魔の腕（デビルブリンガー）。青い幻影の腕が、その死神を掴む。引き寄せ、地面に叩きつけ、その巨体をネロは軽々と振り回した。他の悪魔を巻き込み、前方の集団へ投げつける。

「ストライク！ゲームセットだ、出直してきな」

悪魔に向かって、悪魔の腕を見せ付ける。親指を地面に向けた、地獄へ帰れ（ゴー・トゥ・ヘル）のサインを。

・
・
・

蹴散らした悪魔の屍骸を踏み越えると、そこは大通りのぶつかる交差点だった。炎の柱が、随分近くに見える。もう一つか二つほどストリートを越えればたどり着けるだろう。

「Ｔｏｏｋ　ｙｏｕｒ　ｔｉｍｅ．遅刻だぜ」

塵と消える悪魔の死骸に囲まれた陸橋。その上にダンテが腰掛けていた。あらかたの悪魔を片付け終わった彼は暇そうにハンドガンを弄んでいる。

「言ってろよ。置いてくぜ」

「ツレねえな。女にモテねーぜ？」

イクシードの熱とダンテの声を背に感じながら、ネロは構わず道を歩く。
その横にダンテが並んだ。自分よりも一回りほど背の高い彼の横顔には微塵の疲れも無い。余裕と自信の入り混じった、いつもどおりの表情をしている。

「ん？なんだよ」

「なんでもねーよ」

「気持ち悪いな。俺にそのテの趣味はないぜ？」

「黙ってろよ」

肩を並べ歩く二人。

その背後で、膨大な魔力が爆発した。

！？、と。二人の反応が重なる。

闇を貫く光が両者の視界を奪った。
それは、遥か遠方に出現した新たな二つの魔界の孔である。

瀑布のごとく立ち昇る、水の柱。
雷鳴轟く、雷の柱。

炎の柱と合わせて、それらの孔は海鳴市に巨大な三角形を描くように存在している。

「ヒュ～♪豪勢だな。ラッキーセブンってか？」

「どこがラッキーだよ。面倒になっただけだぜ？」

「いいじゃねーか、景気良く行こうぜ。とりあえずは目の前のアレを片付けて、」

ダンテが示すのは、ここから程近い炎の柱。

「それから後ろの二つだ」

そして、背後に出現した新たな雷と水の柱だ。

「二手に分かれた方がよさそうだけど、坊ちゃんは一人で大丈夫かい？」

ふざけろ。

言おうとしたネロの言葉は、空から届いたもっと別の言葉によってかき消された。

「ちょい待ち！」と。

二人が見上げる。

歪んだ空に、三対の翼を持つ天使が浮かんでいた。

戦場のｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ（1）

時間は少し遡る。
場所はなのは達が泊まっていた旅館からさほど遠くない並木道。
はやての命を受けて飛び立ったシャマルとヴィータは、その場所でまるで蟻のように群がる異形の怪物と、その中心で光る黄色い魔力光を見とめた。
覚えのある光と魔力の感触だ。

「エリオ！」

覚えにある通りの名前をヴィータが呼ぶと、蟻の群れからずぼっと青い長槍が突き出された。その刃先に電流のような魔力が迸る。

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｒａｇｅ』

魔力が解放された。視界を焼き尽くすほどの雷（イカズチ）が異形を祓う。

「ヴィータさん！」

散り散りになった異形達の群れの中でエリオが手を掲げた。その傍らには、エリオに守られるように身を縮めるキャロも見える。二人に大きな怪我は無さそうだ。
その無事な姿を確認し、ヴィータとシャマルはとりあえず安息の吐息を漏らした。

「こいつら、何なんですか？」

「悪魔ってやつらしい。あたしも詳しくは分からねえ」

エリオの質問に、ヴィータはそう曖昧に答えるしかなかった。

「あの変態（ダンテ）を見つけてとっちめれば、何かわかるんだろうけどな」

でもそれはとりあえず後回しだ、とヴィータはエリオの隣に着地。

シャマルもそれに続く。

「今は、はやて達と合流するのが先決だ」

「ええ、そうね。キャロちゃん、私達が時間を稼ぐからフリードの召喚をお願い」

「は、はい！」

シャマルの言葉にキャロは力強く頷いた。祈るように手を合わせ、目を閉じる。精神を集中させ、一言一言に魔力を乗せて召喚の呪文を唱える。

「よっしゃ、久々に暴れてやるぜ！」

ヴィータ達はキャロを守るように周囲に展開。

再び湧き出し始めた悪魔達に向かって、彼女らは隙無く己のデバイスを構えた。

「さあ……、来やがれ！」

暗闇から、虚空から、地面から。とめどなく湧き出るその異形を目の前にして、ヴィータの眼は不敵に笑う。

空気を痺れさせる様な威圧、ざらつく様な気色の悪い魔力、心の

淀みから湧く様な根源的な恐怖。確かに、これらの異形は理解不能で未知の存在だ。恐れもある。気圧されもしよう。

だが、今のヴィータの脳裏にあるのは、もう１０年以上も前の冬の思い出だった。

忘れられない出会いと戦いの記憶だ。炎の中から歩み出でる、白い悪魔の立ち姿だ。永く夜天の書の守護騎士システムとして戦いの中に身を投じてきた彼女だが、本当に心の底から恐怖したのはあの時が初めてであった。

ォォオオォォォオオンンン――――！！

背骨を撫で付けるかのような悪魔の叫び声。

だが、足りない。

あの時の威圧と魔力と恐怖には、まるで足りない。未知なる恐怖も悪魔の威圧も、今の自分を怯ませるには至らない。

「悪魔だかなんだか知らねーけどな！こっちはとっくの昔に本物の悪魔にボコされてんだ。今更てめーらなんか、怖かねーよ！」

攻撃の初動と跳躍の動きはほぼ同時に行われた。

背後に引き絞られたグラーフアイゼンを、上段から大降りに振り下ろす。

狙うのは、地面から飛び出たトカゲの様な悪魔。

悪魔は身構える。防御の構え。無駄だ。ヴィータの一撃は悪魔の構えた盾もろともにその身を砕いた。

「次！」

下段に下がった得物に無理な制動はかけない。慣性力はそのまま

に、身の捻りと腕の返しを利用して、下がる動きを続く薙ぎ払いへと変化させる。
右から左へ。振り払ったグラーフアイゼンの威力は人形のような悪魔４、５体をまとめて蹴散らした。

「もう一発！」

動きはさらに連なる。
薙ぎ払った遠心力に膂力を加え、軸足を基点に、身体を一回転。先に振り向いた視線に一拍遅れ、強烈な一撃が堅牢な彫像を塵にした。

そこでヴィータは動きを止める。
足を踏みしめ身を僅か、後ろに傾かせ、アイゼンを手首で一回転。散った火花は、そのアイゼンが敵の飛び道具を弾いた時のものだ。
続き、身を傾かせた動きのまま背後にバックステップ。
横合いから空気を切り裂いた死神の大鎌を避ける。少し遅れ、退いた足が地に着いた。瞬間、ヴィータは後ろ足を踏み込んで傾けた体の角度を正面に鋭角に傾け直した。
地面を蹴る。後ろ足一本の跳躍で間合いを詰めたヴィータは、死神の手首をアイゼンでかち上げた。大鎌が死神の手を離れて宙を舞う。
そして、アイゼンを跳ね上げたヴィータの腕の動きは、そのまま、振り下ろす初動へと繋がった。一撃。無防備になった死神を叩き潰し、次へ。

後方でその奮迅ぶりを見守るエリオは、あらためてヴィータのその強さに羨望の吐息を漏らした。
打ち、跳ね、回し、振るう。一つ一つの挙動がまるで水のように淀み無く流れている。

力任せに振り回している様なグラーフアイゼンの攻撃が、その実かなり精密で流麗な動きの一部に組み込まれているということに気付いたのは最近の話だ。

圧倒的多数を相手に、しかし、それらをまるで寄せ付けない鉄槌の騎士の姿にエリオはストラーダを握る手に力を込めた。

しかし、郡を成す圧倒的な数的有利というものは、たった一つの個の力で簡単に覆るものではない。

「チッ、シャマル！エリオ！」

無限とも思える悪魔の攻撃を全て迎撃する事は彼女にも出来なかった。

もともと、得意なのは１ｏｎ１の決闘戦。集団を相手にした戦いは自身の技能特性からもデバイスの特徴からも外れる。そして、それを補える戦闘能力の前提は、自身が負けないという事。討ち漏らした悪魔が背後に流れ込むのを、ヴィータは止められなかった。

「大丈夫です、ヴィータさん！」

声は力強く、エリオのもの。

ヴィータの防線を踏み越えた悪魔の一隊を、エリオの長槍ストラーダが突き崩した。

引き戻す腕は素早く。一瞬の溜めで、今度は薙ぎ払いの攻撃が虚に光の半円を描いた。

「ストラーダ！」

呼ぶ。自身の武器を。長くは無いが、密度の高い時間を過ごした己のデバイスを。

返答は現象となり現れた。刃に発した電撃として。
構え、力を溜める。一拍の隙に身を晒せるのは、一線を張るヴィータが居るからこそ。
その小さな背中に大きな安心と頼りを得て、エリオは駆けた。魔力付加の成された刃は鋭さを一層増し、鋏を構えた死神を上下に両断し塵に返す。

「ッ！？」

その時だった。
唐突に地面から突き出た大鋏がエリオの目先に迫る。顔を引いて回避するエリオ。反応は即座であったが、完全には避けきれず鋏の切っ先がわずかにエリオの頬を裂いた。鋭い痛みに顔をしかめながらも、エリオはバックステップでその場から距離を取る。
地面からは次々と死神のような敵が湧き出してくる。
鋏を、鎌を構えて、その敵は風のような動きでエリオに襲い掛かった。

「クラールヴィント！」

声が響き渡る。シャマルの声だ。その声に導かれるように駆け巡った戒めの鎖が、エリオに迫る悪魔たちをその場に縫い付けた。その様はまるで蜘蛛の糸に掛かった獲物のようだ。

「エリオ君、今！」

「はい！」

黄色い閃光がその獲物を刈り取る。硝子が砕けるように、戒めの鎖ごと死神は塵へと帰っていった。

「――届け、我が呼び掛けよ。応えよ、我が竜よ」

その直後、キャロの詠唱が完成した。

一際大きく発声させられた詠唱呪文の最終節。

何かを求めるように空に大きく掲げた両腕から、その手の甲に輝くキャロのデバイス“ケリュケイオン”から、魔力が迸る。歪んだ空に描かれるのは、聖なる光を湛えた桜色の二重魔法陣。

「竜威召喚！」

言霊は光の奔流を魔法陣の内から呼び寄せ、夜空にもう一つの月を呼び出す。白銀に輝くその月は、光の飛沫を纏い、銀色の翼を広げ、主の言葉に雄々しい咆哮を持って応えた。

「フリードリヒ！」

それは飛竜の名である。

そして、主人から竜への呼掛けでもあった。

強い絆で結ばれた両者の間にそれ以上の言葉は必要無い。たったの一つの呼掛けで、フリードは主の命と己の役目を理解する。

即ち、“敵を討ち払え”と。

轟。突風を伴い、フリードの両翼が地に降りる。着地は、同時に攻撃でもあった。

強靭な両脚で人形を踏みつけ、迫る敵に長大な尾を叩きつける。

前面を炎で一斉に焼き払い、騎乗の安全を確保すると、フリードは頭を垂れて主人の足元に伏した。

「ありがとう、フリード」

背に乗るとキャロは優しげにフリードの首もとを撫でた。きゅるる、と機嫌良さそうにフリードも喉を鳴らす。

その背にエリオを加えて、フリードは強く地面を蹴った。白銀の羽ばたきは、空気を撫でて巨体を空へと押し上げる。

シャマルもそれに続き、地上に残るのはヴィータのみとなった。

地上。先に行け、とヴィータは手で合図を送った。

上空。シャマルは、気をつけて、と一言だけをその場に残してフリードと共に飛び去っていった。

その後姿が小さくなるのを横目で確認しつつ、ヴィータは己を包囲しつつある悪魔たちを正面に見回した。

「追いかけられても面倒だからな。お前らは、ここで徹底的に潰してやる！」

大きく、ヴィータは腕を振った。真っ赤な魔力光の帯がその動きに合わせて彼女の周囲を巡る。その光の中から現れるのは、幾つもの小さな魔力球。

シュワルベフリーゲン。

魔力球をアイゼンで打ち放つ、ヴィータの得意とする中距離誘導型の射撃魔法だ。しかし、今回は少しだけいつもとは様子が違う。

１０。２０。３０…。魔力球が際限なく増えていく。

通常、ヴィータがこの攻撃に用いる魔力球は１～８発ほどだ。そ

れ以上の数だと誘導精度が著しく低下してしまうから。

４０。５０。６０…。ついに、魔力球はヴィータの姿を覆い尽くすほどにまでその数を増殖させている。明らかにヴィータの誘導制御技術の限界を超えた数だ。

「シュワルベフリーゲン！」

魔力球に囲まれた中心でヴィータが叫ぶ。

カートリッジロード。グラーフアイゼンが姿を変える。ラケーテンフォーム。

続けざま、２発のカートリッジを再装填。ラケーテンフォームの魔力噴出口に火がともる。振りかぶり、もはや爆発に近いその力を、ヴィータはためらいなく解き放った。

「シュテュルム！ウントゥ！ドランクゥゥゥゥ――――！！」

大回転。

魔力噴射による推進力を全て遠心力に変え、魔力球を、打つ！打つ！打つ！打つ！打つ！打つ！打つ！打つ！打つ！打つ！打つ！打つ！打つ！打つ！打つ！打つ！打つ！打つ――――――――！

誘導制御も精密補足もしない。

当るも外れるも無い。

ただ打ち出す、膨大な数の破壊力を。

撒き散らす、まるで嵐のように。

飛び散らす、怒涛の勢いで。

豪速で放たれた膨大な魔力球は、互いに干渉しあいながら複雑な

軌道を描いて周囲に拡散していく。それはただ等しく万物を打ち砕き、破壊という結果のみをそこに刻み付ける。

爆砕の音と悪魔の断末魔が奏でる連鎖の響きを、魔力の嵐が掻き消していく。

明確な破壊の意思を以って打ち放たれた魔力球が空間を飛び、叩き、跳ね返って、魔力殻の強度限界を迎えた順に炸裂する。最後の輝きにまで破壊の力を宿した極小星の描く天の川に、悪魔は溺れ、沈んだ。

・
・
・

やがてカートリッジの魔力が尽きると、ラケーテンハンマーの回転は緩やかに終息していった。

排出口から飛び出た空の薬莢が、打ち砕かれて捲れ上がった地面に落ちる。

軽くふらつく頭を振って見回せば、その周囲の惨状が目に入る。痕跡として残っているは、一体残らず駆逐された悪魔の屍骸と、抉れ、爆ぜ、打ち砕かれた地面や樹、コンクリート、アスファルト等々である。

「……やっぱ問題あるな、この技」

アイゼンを肩に担いで、ヴィータは一息ついた。

先の攻撃は、範囲制圧攻撃に乏しい彼女が編み出したシュワルベフリーゲンのバージョン攻撃だ。

疾風怒濤（シュテュルム・ウント・ドランク）

ヴィータはこの技にそう名づけた。

物理的な破壊力のみに限れば、それはスターライトブレイカーをも上回る殲滅効果を発揮する。

ただ、誘導も制御も制限も出来ず、さらに敵も味方も何も関係なしにその場にあるありとあらゆるものをぶち壊してしまう為に封印されていた技だった。

前に一度これを訓練所で試した時は施設が崩壊してしまい、はやてに一ヶ月間のおやつ抜きを言い渡された。その時の絶望は思い出すだけでも恐ろしい。

「ま、今回は別に構わねーよな」

たん、と軽く地面を蹴ると、ヴィータの身体はふわりと宙に浮かんだ。先に行ったシャマル達と合流しなければならない。もうその姿は見えないが、そう遠くには行っていないだろう。

そうしてヴィータが加速しようとしたその時。

ヴィータの目前に、特大の稲妻が落ちた。音が消える。魔力が爆発する。その衝撃と荒れ狂う気流に吹き飛ばされ、ヴィータの小さ

な体は砕けた地面の上に転がった。

「く…、何だ…！？」

身を起こした彼女の眼前に、青白い雷を湛える、空気の柱がそびえていた。

戦場のｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ（2）

異形に沈む町で、二つの光が弾けた。
澄んだ青と鮮やかなオレンジ。
絶えず動き、激しく明滅するように輝くその光に祓われるかの如く、町に湧き出した悪魔の集団が次々に散っていく。

悪魔は困惑していた。この予期せぬ強い輝きに。初めて味わう未知への恐怖に。絶望にも恐怖にも彩られない聖なる輝きに。

――これは何だ？
――この力は何だ？
――我らに抗する力が、何故、あの男以外にある？

困惑はさざ波のごとく広がり、ウイルスのように蔓延する。
闘争と殺戮の本能しか持たない下級の悪魔は、それ故に本能に刻まれた絶対的な光への恐怖に打ち勝つ事は出来ない。

――貴様は何だ？
――貴様は誰だ？

抗う光は強く、叫ぶ謎に答えは返らない。
渦巻く恐怖は己が腹の底に蓄積され、されど、目の前のそれは敵には違いない。

――消えろ。キエロ。未知なる敵よ

悪魔は動く。光を覆うように。
光は祓う。穢れを浄化するように。

戦いは、始まったばかりであった。

・
・
・

「行け、リボルバーシュートッ！！」

振りぬいたスバルの拳が一陣の衝撃波を巻き起こす。
正面から迫ってきた怪物の集団が枯れ葉のように吹き飛んだ。
さらに続けざま、スバルは横合いから飛び出た人形をハイキックで迎撃する。一撃で人形を粉々に打ち砕くほどの強烈な威力。
しかし、その大きすぎる動作がスバルに一瞬の隙を与えた。
頭上、スバルは見た。急降下してくる死神の集団を。しまった、と口にした時には既に手遅れだ。動作が間に合わない、振り上げた足を戻すよりも早く、敵の攻撃がこちらに届く。

「クロスミラージュ！」

『Ｖａｒｉａｂｌｅ　Ｂａｒｒｅｔ』

そのスバルの危機を、彼女のパートナーが救う。
出力を抑えた連射モードの魔力弾がスバルの頭上に小さな弾幕を作り上げる。悪魔を完全に仕留めるには至らないが、スバルに体勢を立て直す暇を作るにはそれで十分だ。

スバルは足を引き戻し、リボルバーナックルのカートリッジをリロード。拳を腰だめに、体勢を低く構える。十分に屈させた両足で、跳躍。

「リボルバーシュート、きりもみアターーーック！！」

打ち上げるように拳を突き出しながら、衝撃波の鎧を纏って自らの身体ごと頭上の敵へとぶつかる。まるで竜巻のような風が吹き抜けた。拳に貫かれ、衝撃波に巻き込まれた死神達は霞のように消える。

「ありがとう、ティア」

「いいわよ、別に。突っ込むあんたをフォローするのが私の役目ですもの」

デバイスに新たなカートリッジを装填しながらスバルとティアナは一息ついた。無論、辺りへの警戒は怠らない。

「悪魔、か。気味の悪い連中だね」
「そうね。それに、この異常な魔力……。一体、何者なのかしら」

異形の怪物達が残していった刃の残骸を拾い上げる。歪に磨かれたその刃の欠片はティアナの手の中で崩れるように跡形もなく消えていった。まるで、初めからそこには何もなかったかのように。

ぞくり、と。撫でるような悪寒がティアナの背中に走った。
これは何なのだろうか。
私達は一体何を相手にしているのだろうか。
今、何が起きようとしているのだろうか。

肌触りの悪い疑問ばかりが頭に浮かぶ。嫌な予感が拭いきれない。
もしかすると、私達は踏み入ってはならない領域に足を掛けているのではないだろうか、と。

「ティア、早く先に行くよーー！」

ティアナは、はっとして顔を上げた。通りの向こう側ではスバルが手を振って自分を呼んでいる。

「……ええ、今行くわ！」

混沌とした思考の渦を払うように、ティアナは頭を振ってスバルの後を追った。
答えの出ない問題をいくら考えても仕方がない。すぐに考え込んでしまうのは自分の悪い癖だ、と少しだけ己を鑑みる。

――――今は、出来る事を精一杯するしかないのよね

と、そんな矢先。空気を振るわせる地獄の叫びが二人の耳に届いた。
道から。壁から。空から。際限無く悪魔が湧き出す。歪な姿で、凶悪な殺気を纏って。
あっという間に、二人の前には先ほど倒した悪魔の軽く3倍はあろうかというほどの悪魔の集団が出来上がっていた。もはや軍団と

呼んだ方が正しいその集団の、幾つもの双眸が、こちらに不気味で虚ろな光を向けていた。

「……」

「……」

二人は互いに顔を見合わせ、どちらともなく頷き合った。アイコンタクトは一瞬。共に長い付き合いだ、こんな時にどうすればいいのかはもはや言葉にして確認するまでもない。

拳を握り、腰は低めに。開いたスタンスを前後にずらし、地を一蹴。くるん、と１８０度の方向転換を経て、二人は阿吽の呼吸で一目散に逃げ出したのであった。

ずだだだだだだだだだだだだ……！！

後に残されたのは、無駄に膨大な数の魔物の一軍のみである。それらの異形は一瞬だけきょとんとしたように呆然と立ち尽くし、そして、一斉に彼女らの背中を追いかけ始めた。

「お、おおお追ってきたよ！ティア！」

「分かってる！もう、あんな数、反則じゃないのよ！」

逃げるスバルとティアナ。追いかける異種混合の大軍。立ち止まれば死。立ち向かっても死。極限の鬼ごっこが始まってしまった。

――――どうする、どうする！？

ティアナは後方に魔弾をばら撒きつつ、必死で反撃の方法を考え

ていた。
数の有利は向こうが圧倒的。正面からぶつかっては勝ち目は無い。かといって不意を付けるような時間も無い。唯一、高い知能を持つ個体が少ないという事だけがこちらに利するアドバンテージだろうか。

考え、駆ける。停止した車両の合間を走破して、砕ける鉄とコンクリートの音を背に、怨嗟の叫びを振り切る。ガードレールを飛び越え、突然目の前に現れた少数の悪魔を勢いで蹴散らし、二人の疾走は大通りの交差点に差し掛かった。

「……閃いた！」

そこで、ティアナの目に光明が見えた。それは、交差点の先１００メートルほど走った所にある狭い路地である。

「スバル！あそこ、角を曲がるわよ！」

「オッケー！」

二人は地面を滑るようにドリフト、今まで保持していた速度をほとんど落とす事なく直角に路地を曲がった。
若干の間を置き、悪魔の軍団もそれに続いた。路地を埋め尽くす勢いで二人の後を追う。
しかし、そこでそれらの異形が見た光景は逃げる二人の背中ではなかった。
路地の出口。そこで燦然と輝くのは、宙に描かれた二色の魔法陣である。

「ディバインバスター！」

青く猛る聖なる光。

「ファントムブレイザー！」

黄昏に輝く幽玄な閃光。

「「シューーーーーート！！」」

二色の光芒は光の津波となる。荒れ狂う津波は抵抗も逃走も許さずに、路地に溢れる異形の影を一つ残らず押し潰した。

破壊の光芒は路地を突破し、その反対側の建築物へと突き刺さる。建築物の内部、半ばまでを貫通した光は、そこで威力を減衰、爆発を以って威力の最後に花を咲かせた。

「やったーーー！さっすがティア！」

「大したことないわ。こんな単純な手に引っ掛かるあいつらの頭がスバル並だっただけよ」

「うん、そうだね！……ねぇ、ティア。私達は一度真剣に話し合ったほうがいいと思うん…」

「さあ、早く先に進むわよ！なのはさん達に追いつかなきゃ！」

「あ！ティア！」

すたたたたたた…！

あっという間に小さくなるティアナの背中。先ほどの悪魔よろし

く呆気に取られて取り残されるスバル。

「もう、機人より元気なんだから……」

ティアナを追ってスバルも駆け出した。滑るように加速しながら、マッハキャリバーでその後を追う。

大通りの向こう、炎の柱はまだ遠くに見えた。

・
・
・

流星が飛んでいる。闇を裂く光の尾は鮮やかな桃色。

その光に群がる黒い雲があった。空を覆い蠢くその雲は、群を成す悪魔の大軍である。

右へ、左へ。急上昇と急加速。鋭角に軌道を変えたかと思うと、次は緩やかな曲線を描き翻弄する。

その流星は鮮やかに空を駆けた。

広がり、覆い、うねりを上げて。雲は流星の行く手を阻む。圧倒的な数の集団は、ただその有利のみを以って流星を追った。

逃げる流星と追う悪魔。どちらが不利だろうか。持久戦、短期決戦、どちらにおいても数の力というものは如実に物を言う。一対数千の彼我差で追い込まれれば、普通は終わりだろう。

そう、普通ならば。

「レイジングハート、そろそろ反撃、行くよ！」

『Ｙｅｓ，ｍｙ ｍａｓｔｅｒ』

だがその流星は普通ではなかった。

流星の名は、高町なのは。高度な訓練を積んだ一線級の戦力が揃う管理局の中に在ってなお、“エースオブエース”と呼ばれる、稀代の天才魔導師。管理局の最高戦力の一つに数えられる若きエースは、桃色の羽ばたきを以ってさらに加速する。

直後、なのはの手に光が生まれた。レイジングハートだ。

演算し開放された幾つかの術式と魔方陣がレイジングハートのコアから放出され、なのはの周囲に高速展開される。大小様々、光の帯と円環が巡り、戦闘の用意を整えていく。

『Ｒｅａｄｙ?』

告げられたのは、デバイスから主人への最終確認。その力を行使する、意思の確認だ。

だからなのははは躊躇い無く、頷いた。それが必要な事だと分かっているから。対話ではなく、力を持って会話する為に。

返答の意思を受け取ったレイジングハートは、出力制限を一段階

開放。戦闘レベルを非殺傷（スタン）から実戦（プラクティス）へ。

『Ｅｎｇａｇｅ（交戦開始）』

加速。光がはじけた。

身を包む速度に羽を打ちつけ、なのはは身体の制御を取る。

一直線、足先から伸びる燐光の尾ひれからは、パラパラと光の粒が幾つも落ちていた。自身の魔力光と同じ色の小さな星。その小星は、後から追いすがる悪魔の雲にあっという間に呑み込まれてしまう。

その様子を、なのはは顔の横に展開表示させた小さなスクリーン越しに見ていた。

小星は、一つ二つと呑まれていき、ついに最後の一つまでもが完全に悪魔の群衆の中に消え去った。

その様子に、なのはは笑みを一つ。

そして、命じる。

「セイクリッドクラスター、発動」

『Ｓａｃｒｅｄ　Ｃｌｕｓｔｅｒ．――ｂｌａｓｔ』

声。共に、デバイスのコアにミッドチルダ書式の文字が流れる。

その瞬間、悪魔に呑まれた小星はその擬態を脱ぎ去った。爆発。

まるで散弾のように、無数の魔力弾殻が悪魔の群れの内側で飛び散った。

セイクリッドクラスターとは、魔力弾を時間差で炸裂させ、散弾を広範囲に拡散させる制圧射撃魔法である。

悪魔の群れは、そうと知らず、自身の群れの内側に強烈な猛毒を呑み込んでしまったのだ。

炸裂した無数の熱量と魔力に悪魔の大軍がごっそりと削り落とされる。その不意の出来事に、悪魔の群れが波打つように蠢いた。動揺している。その隙を見逃さず、なのははレイジングハートにさらに命じる。

「閉じて、レイジングハート！」

『Ｃｒｙｓｔａｌ　Ｃａｇｅ（クリスタルケージ）』

空に走る六つの直線。規則正しく伸びるその直線が描くのは、悪魔の群れを内包した巨大な大三角錐。

予め空中に展開しておいたレイジングハートのブラスタービットによって発動されたクリスタルケージが悪魔を捕らえた。

『ｂｌａｓｔ』

爆発。残りのセイクリッドクラスターがケージ内で炸裂した。ビットによって閉じられた空間の内側で、無数の熱量と破壊力が荒れ狂い、悪魔たちを塵も残さずに消し去る。

「やった！」

作戦通りの結果に思わずガッツポーズが出る。しかしその喜びも束の間。カートリッジを排出したレイジングハートの警告が、短く響いた。

『Ｃａｕｔｉｏｎ．Ｉｔ　ｓｔｉｌｌ　ｃｏｍｅｓ（警告。まだ来ます）』

空。長い尾を一筆に描いて、先よりもさらに大軍の悪魔がなのはの目に映る。

「もう、数ばっかり多いんだから」

無尽蔵に溢れるその大軍に、流石のなのはも辟易とした。

魔力にまだ余裕はあるがそれも無限ではない。未だ敵の全容が見えない状況で全力を出すのは賢い選択ではないだろう。

だが、数が数なので半端な攻撃では効果が薄い。

ならば、となのははレイジングハートに命じる。

「スターライトブレイカー、出力は５０％でいくよ」

命令に、デバイスは答える。

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．Ｂｕｓｔｅｒ　ｓｅｔ』

レイジングハートは出力制限をさらにもう一段階開放。

戦闘レベルが裏設定の殲滅戦（ディストラクション）に上がる。

同時、展開されていた術式の一部が収納、さらに別の術式と魔方陣を幾つか外部に放出し、砲撃の用意が完了する。

なのははレイジングハートの展開完了を待ち、宙で制動をかけた。

重力アンカーを空間に撃ちこんで、自身の身体を完全に固定する。

展開されていた術式が自動編成、最適化が行われ、工程の最終段階として、なのはの足元に魔力光の色を映す魔法陣が広がった。

視線を上げると、空を覆う悪魔の大群がさほど遠くない場所に見えた。

チャージ状態に入ったレイジングハートを射撃体勢で構える。その矛先に灯る輝きは、膨大な魔力の炎。

廻り輝く魔方陣に刻まれるのは“集束”と“増幅”の術式。集まる光は暗闇に散りばめられた魔力の灯火。それは、まるで夜空を落ちる星のように、なのはの元へと集う。

『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ，ｒｅａｄｙ』

チャージ完了。構える腕に身を入れる。足を踏み込み、最後の制動。そして、照準。

「スターライトブレイカー、シューーート！！」

トリガーを引いた。

開放された特大の魔力砲弾が、暗闇と悪魔に覆われた空を照らす。それは、さながら太陽のように。

管理局の艦船砲撃すら凌駕する膨大な熱量と魔力衝撃を伴って、スターライトブレイカーは夜空に大輪の華を咲かせた。

回避も防御も許さない、殲滅の名に恥じぬ圧倒的な破壊力。悪魔の集団は何も出来ずにその光に呑み込まれ、討ち払われた。

一瞬遅れて。大気を震わせる衝撃波と、感覚を震わせる魔力波の余波が来る。大気そのものを吹き飛ばす衝撃波だが、余剰魔力で構築された防波障壁がそれを軽減した。なのはに届いたのは頬を撫でる弱い風のみ。

「さすが、なのはちゃんやな。手助けはいらんかったか」

ふわり、と。白い騎士甲冑を桃色の陽光で染めて、はやてがなのはの傍らに舞い降りた。

「まだまだ、これくらい平気平気」

ぐっと親指を立てて、なのははその歓声に応える。
力強いその姿に、はやては嬉しそうに頷いた。

「シャマルからも連絡があったわ。無事にエリオくん達と合流できたようや」

「よかった。スバル達も無事に追いついて来たみたいだし」

そう言ってなのはが視線を下に降ろすと、そこには大通りの真ん中で手を大きく振るスバルが居た。

軽く手を振り返すなのは。
後ろから来たティアナに頭を引っ叩かれるスバル。
なにやら路地を指差しながら怒鳴っているティアナ。
そうして肩を並べて猛然とあらぬ方向へと駆け出す二人。
路地から溢れ出るように大量の悪魔がその二人の後を追いかけていった。

「……あんまり無事とは言い難いなぁ。なのはちゃん、二人を頼む。私は先にネロくんらと合流するから」

「…にゃ、にゃはは……。そ、そうした方がよさそうだね……」

じゃあ、とはやてに軽く合図して、なのははは逃げる二人を追って高度を下げていった。ビル郡の陰に隠れて見えなくなるその後ろ姿を見送って、はやてもまた前方にそびえる炎の柱へと向かって空を蹴った。

滑空するように徐々に高度を落としていくと、ちょうど大通りの交差点を歩く赤と黒の背中が見える。

「ようやく見えた。あの人らの足はウチらの羽より速いな」

やれやれとはやては一息。そのままゆるりと二人に追いつこうとした、その時であった。

轟雷。

耳をつんざく大音声と共に、後方の都市郊外に雷の柱が落ちる。続き、南西の方角に天まで届く水柱が立ち昇った。押寄せる衝撃波が大気を掻き乱し、はやては空中で突風に煽られた鳥のようによろめいて、近くのビルの屋上に半ば落ちるような形で着地した。

「くう…！もう、魔力異常のオンパレードや」

炎。水。雷。三種の柱と、そこから溢れる膨大な魔力が鳴海市の空で渦を巻く。もはや別次元と言ってもいいほどの魔力異常だ。

（はやてちゃん！）

頭に直接声が響いた。なのはからの思念通話だ。

（なのはちゃん、そっちは大丈夫か？）

（こっちは平気、スバルとティアナとも合流済み）

（オッケー。ほなら、いきなりで悪いけど後ろの雷と水柱、どっちか頼んでええか？）

（雷なら、あたしで何とかするよ）

なのはとはやての念話に割り込んで、ヴィータの声が届く。

（ヴィータ、今どこに居るんや？）

（雷のまん前だ。すっげえ嫌な感じがするぜ、これは）

（そうか…、ほなら今はそこで待機や。なのはちゃんを今すぐ応援で送るから）

（なのはを？それでそっちは大丈夫かよ。こんくらい、あたし一人でも何とかなるぜ）

（スバル達と、それにネロくんとも合流できるからこっちは問題無い。一人でそんなモンに立ち向かう方がよっぽど危険や）

（う…。わ、分かったよ、何かあるまでは待機しとくよ。なのはも、速く来いよな）

ぷつりとヴィータとの念話が途切れる。向こうで回線を閉じたらしい。飛び出したくてうずうずしているヴィータの姿がはやての脳裏に浮かぶ。

信頼はしているが何となく過保護になってしまうのは彼女が妹のような存在だからだ。こう言うと、あの鉄槌の騎士は頬を膨らませて怒るのだが。

（じゃあ、そういう事やからなのはちゃん頼む）

（うん、スバル達はそっちと合流させるから）

気をつけて。はやては最後にそう付け加えて念話を閉じた。

そのまま、はやては続けてシャマルに念話を飛ばした。

（シャマル、聞こえるか？）

（通信良好。聞こえるわ、はやてちゃん）

（今どこに居る？水の柱が見えとるか？）

（ええ、見えてるわ。というより、エリオくん達と今そこに向かってる最中よ）

（行動が早くて助かる。そっちの方は任せるけど、ええな）

（了解。何とかやってみせるわ）

（油断は厳禁やで。なんや、嫌な予感しかせえへんからな）

（はやてちゃんもね）

じゃあ、と短い返答の言葉と共に念話は途切れる。これで、機動六課の全てのメンバーが動き出した。

「……いや、そういえば風呂場でダウンしたのが二人居ったなぁ……」

微妙に頭を抱えながら、はやては旅館に残してきたザフィーラに念話を飛ばすが、どうやら向こうはかなり取り込み中らしく、こち

らの呼びかけに反応は返ってこなかった。
その代わりに、ザフィーラの声だけがはやてに伝わる。

（ええい、いい加減に起きんか！フェイト！何、なのはが？…裸？……何の夢を見ているんだ！？いいから、起きろ！この！うおお！？くそ、悪魔どもめが！アギト、とにかくヴィヴィオだけは護りきれ！シグナム？もうその二人は放っておけ！その内に目を覚ま…、ぐわああ！！？不意打ちとは、小賢しいわ！！ルゥオオォォォォォォオオォオオオ――――！！！）

「……が、頑張っとるなあザフィーラ」

この事件が終わったら、とにかくご馳走を食べさせてあげよう。
何となくそう心に決めるはやてであった。

「シグナムはシャマルの手料理フルコースやな」

これが、後にシグナムに“死の一週間”と呼ばせる地獄の事件の発端となった事を知る者は誰も居なかった。

ともあれ、はやても自分の行くべき道に真っ直ぐに向き直る。その正面には、空を焦がす炎の柱があった。
ビルから身を躍らせる。３対の羽で空気に帆を立てて、はやては素早く滑空した。

「とりあえずは目の前のアレを片付けて、それから後ろの二つだ。二手に分かれた方がよさそうだけど、坊ちゃんは一人で大丈夫かい？」

ダンテの声が聞こえる。あの二人も、つい先ほど現れた雷と水の

柱を何とかしようとしているのだろう。目的は同じだ。その事を再確認したはやては、ほんの少しだけ頬をほころばせて、会話の出来る距離にまで高度を降ろした。

「ちょい待ち！」

黒と赤のコートが同時に振り向く。同じ銀色の髪が鈍く輝いた。驚いた顔のネロ。感心したように口笛を吹くダンテ。異界と化した戦場にて、ついにはやては邂逅した。悪魔の狩人に。

戦場のｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ（２）（後書き）

【おまけＳＳ】たたかえシグナム・悪夢編

「なあ、バッテンチビ」

「リィンはバッテンでもチビでもないです！……で、どうかしたですか？」

「なんか、さっきからシグナムがすげーうなされてるんだけど。シャマルがどうとか、料理がどうとか言って……」

「……し、知らないほうがいい事もあるですよ……」

「？？？」

「ぅう……、シャマル…、それは目玉焼きではない…、ただの暗黒物質だ……、うぅ……」

地獄に続くｆｉｅｌｄ　ｔｒｉｐ

「ちょい待ち！」

ダンテが背後から掛けられた声に振り向くと、そこには3対の翼を大きく空に広げた一つの人影があった。

歪んだ月の光に僅かに逆光して、黒と白の輪郭がおぼろげに滲んでいる。

はばたく翼から振り落とされた黒い羽は、淡雪のような光の幻影を見せて、地面にたどり着く前に消える。

白銀の魔力に包まれた黒翼の天使は、目深に被っていた帽子を少しだけずらして、いたずらっぽく笑ってみせた。

「なんだ、嬢ちゃんか。帰れって言ったのに、悪い子だな」

短い視線の交差の後、先に警戒を解いたのはダンテの方だった。

腰のハンドガンに伸ばしかけた腕を戻し、ダンテは首を振りながらやれやれとでも言いたげな仕草でオーバーに肩をすくめて見せる。

「もう子供扱いされる歳やありません。それに、これが私らの仕事や」

その人影――――八神　はやても、少しだけ脱力したように表情を緩ませると、静かにその羽を地に降ろした。

地面の感触を確かめるように地に足を着けると、背中の羽はふわりと燐光を散らせて消えていった。

「“時空管理局”のかい？」

ダンテの言葉は、常と変わらない茶化すような口調。
ナチュラルにおどけて見せるダンテに向かって、はやては言葉ではなく首を振ることでそれを否定した。

僅か、怪訝に眉をひそめるダンテの表情をはやては見ていた。

恐れと、焦りと、不安な気持ちは腹の底に押し込めて。
言霊に乗せるのは、目の前の男に倣った自信と不敵さ。
それでも、隠しきれない気持ちは表情に浮き出る。
だから精一杯の微笑みで、はやては短く言いきるように、

「正義の味方のや」

・
・
・

大通りには5つの影が落ちていた。
ダンテ、ネロ、はやて。そして、彼らと合流したスバルとティアナの影である。

「これで全員か？」

揃ったはやて達にそう言ったのはネロ。ダンテは通りのガードレールに腰を下ろして両手でハンドガンを弄んでいる。

「まだ仲間が居るけど、それは向こうや」

聞かれたはやては背後の雷と水の柱を示してそう言った。

好奇の色を含んだダンテの視線が、そのはやての指先を追って動く。

「あの小うさぎの嬢ちゃんと、シグナムって奴もそっちかい？」

「ん、まあ…、そうや」

歯切れが悪くなる。

ヴィータはともかく、シグナム達はどうなっただろうか。異常な魔力に包まれているせいか、念話があまり通じなくなってしまった。そう簡単にやられてしまう烈火の騎士と雷速の魔導師（ノワール・ライトニング）ではないと知っているが、今は共にノックダウン中だ。

心配、というよりも情けないやら恥ずかしいやら、そんな気持ちの方が先に立つ。

「と、ともかく、後ろは仲間が何とかします。だから、私らは前のあれを片付ければ万事解決や」

話の矛先を変えるように言ったはやての提案に、ダンテはあまり機嫌の良さそうな顔はしなかった。

「協力して、か？」

「それがベストやけど、無理にとは言いません。その時はこっちで勝手にやらしてもらうだけや」

予想外の返答に少しだけダンテは驚いた。てっきり、協力して戦おうなどと言い出すのかと思っていたからだ。

「なるほど、いい案だな」

目の前、まだ年端もいかないような女の子が、こんな場所で、状況で、脅えも見せずに立っていて、しかも自分の助けはいらないと言い放つ。

――――自信満々って感じだな

そういう奴は嫌いじゃない。

問題は、その自信に見合うだけの力があるかどうか。

思い出すのは、数日前、軽く剣を合わせたシグナムという女性の事。

共に本気ではなかったが、それでも彼女がかなりの実力だという事は十分に分かっている。あれだけの腕が目の前のこいつら全員にあるのならば、いちいち自分が気に掛ける必要はないのだが……。

「いいのかよ？」

そう考えるダンテの横で、呟くようにネロが言った。

「いいさ、どうせもう手遅れだ」

それは軽く、普段と同じ口調で返ってきた言葉だったが、そこに

含まれる意味に気付き、ネロは少しだけ言葉を言いよどんだ。
手遅れ。それは、ここから出る為の道が閉ざされてしまったという事。恐らく、先程の魔力爆発が原因だ。

「なんでさっさと言わないんだよ」

「言っても言わなくても同じ事さ。…オイオイ、男の子がそんなに深刻な顔をするなよ」

状況を面白がるように、小さく笑いを噛み潰してダンテは乱暴にネロの肩を叩く。

「どうせここに居る悪魔どもは綺麗に片付けちまうんだ。そしたら帰り道くらい何とかなるさ。後はせいぜい、ガキ共にいい所を見せてやろうぜ」

鬱陶しげにネロはその腕を振り払う。
何か言ってやろうと口を開こうとしたその矢先、言葉が喉を通るより早く、彼の右腕が鈍く疼いた。
この右腕は、己に備わる五感よりも遥かに正確に悪魔の存在を伝える。
身体に刻み付けた高速の動きで、ネロはその腕の力を解放させた。

蒼い、幻影の炎が模る拳が、振り向いた壁ごと起き上がったマリオネットの華奢な身体を打ち砕いた。

腕を戻す。さらに立て続けて残りの悪魔を払おうと拳を握るネロだったが、彼がその力を再び振るうよりも速く、ダンテのハンドガンが残りを一掃した。

「こう散らかってると、ゴミと悪魔の違いが分からなくて困るな」

腰に銃を収め、ダンテは肩をすくめてみせた。

「す、凄い……」

そんな二人の様子を、ティアナは呆然と見惚れていた。

ただの一撃。ほんの一瞬。その挙動一つで悪魔を片付ける手際と強さに。

今の状況、もし自分ならばどう動けただろうか。

攻撃、防御、回避、どのような想定であろうと自分には彼らより一拍分以上の呼吸が必要だ。

死線の間際で繰り広げられる戦いにおいて、その一拍は確実に生死を分ける。僅かな差。しかし、絶対的な、それはティアナにとっての壁でもあった。

「す、凄い凄い！見たティア！？ネロさんの腕が、なんか、こう、ガバーーって！」

そのティアナの隣。飛び跳ねるように身を躍らせて目を輝かせているのは、他の誰でもない、彼女の相棒スバルである。

「あんたねえ……」

長い付き合い、こういう奴だというのは百も承知である。

……であるが、さすがにこう呑気にはしゃがれると一発ぶん殴ってやりたくなるのも彼女の素直な本心だ。

ただでさえ異常な状況だというのに緊張感の欠片もこの相棒からは感じられない。

さっきだって、

「あ！なのはさんだ！」

と言って無用心に大通りにスバルが飛び出したおかげで大量の悪魔に見つかって全力疾走するはめになった。

――――結局なのはさんに助けられるし

極限の状況でこそ日ごろの訓練の成果を見せなければいけないというのに。

そんな訳で静かに握りこんだティアナの拳は、しかし、結局どこにも振るわれることはなかった。

「なんだ、あまり驚かないんだな。これを見せると、だいたい気味悪がられるんだけどな」

と、不思議な顔でネロがティアナ達に話しかけてきたからだ。

「い、いえ、そんな、とても驚いてますよ」

振りかぶった拳を慌てて隠す。驚いているのは急に話しかけられたからだ。

様々な怪異を相手にする時空管理局の実戦職員にとっては、ネロの悪魔（デビルブリンガー）の腕もさほど驚愕には値しない。

全く驚いていない、という訳でもないが、ティアナにとってそれ以上に興味深いのはその力を生身で使いこなすネロ本人の能力の方だ。

その点についてはスバルも同意見らしく、うんうんと顔を上下に頷かせて、

「私達は不思議なものは山ほど見てきたし、それに、ほら！私だって」

と言って元気よく腕を差し出した。

右腕。その手刀が、まるでドリルのように高速回転する。さらにガキョンガキョンと飛び出す手刀。

「！！？」

それを見て驚いたのはネロの方だった。

彼も、まさか自分の腕以上に不思議な腕があるとは思ってはいない。

言葉を失うほど驚いたのは久しぶりだった。もしかしたら、自分の腕がこんな姿に変貌してしまった時よりも驚いたかもしれない。

「ヒュ～♪　おい、ネロ、お前のと交換してもらえよ。こっちの方がクールだぜ！」

彼らのやりとりをぼんやりと見守っていたダンテも、さも愉快そうに目を輝かせている。

それはまるで新しいおもちゃを前にした子供のようだ。

「バカ言うな」

少しカッコいいと思ってしまった、なんて事は口が裂けてもこの男の前では言わない。

「ノリが悪いな。こういうのは男のロマンってやつだろ？」

肩を組むようにスバルの身を引き寄せ、なあ、と語るダンテ。

「え、ええ…。いや、私、女ですけど…」

スバルは急に近くに現れたダンテの顔にどぎまぎしながら、しどろもどろに答える。

「ん？……ああ、そうだな。いや、知ってたさ。ジョークだよ、ジョーク」

ダンテは飛び退くようにスバルから離れ、今までで一番真剣な顔でそう語る。

そして会話を一方的に切り止めると、先頭に立ってさっさと先へと歩いて行ってしまった。

その背中を、唖然とした顔でスバルは見送るしかない。

「まあ、なんや、気にせんとこ、な」

そう言ってはやてもダンテの後に続く。ネロとティアナも、無言でスバルの肩を叩いてはやてに続いて行った。

・
・
・

「ダンテさん」

歩くダンテの隣。頭二つ分も下からはやては声をかけた。
どうした、とでも言いたげにダンテは首を傾げて見せる。

「話の続き、してもらおうと思うてな」

「悪魔についてか？」

「それと、今のこの状況についてや」

「注文が多いな」

やれやれ。言って、ダンテはすこしだけまじめな顔で語りだした。

「そうだな…、じゃあ、このダンテ先生が子供にも分かりやすく説明してやるよ」

はやては無言で、歩くダンテのブーツを蹴飛ばした。
まるで気にせずダンテは続ける。

「事の発端はムンドゥスって馬鹿野郎さ。そいつは悪魔の軍団を引き連れて、人間の世界を支配しようとした」

だが、その魔帝ムンドゥスの野望はついに成就することは無かった。

魔界を裏切り、人間と共に戦った一人の偉大なる悪魔の為に。

「その悪魔は長い戦いの果てに魔界を封印し、人間界に平和と勝利をもたらした。ま、おとぎ話と同じくらい古い話だけどな」

興味深そうに耳を傾けるはやてを見下ろしつつ、ダンテはさらに話を続ける。

「今、俺達が居るここは人間の世界と魔界との境界線だ。魔界を封じ込めた時にできた、狭間の世界さ」

人の身では入る事も出る事もかなわない、人と魔を分ける、隔絶された異空間。それがこの空間だと、ダンテは言う。

「言ってみれば、ここは魔界の玄関先さ。悪魔はここから先には行けないが、些細なきっかけさえあればここにはいくらでも湧いて出てくる。ハエと似たようなもんだ」

「ふーむ。興味深い話やけど、疑問が一つある」

「いいぜ、何でも聞きな。今はサービスタイムだ、キツくない女の子と話すのは久しぶりでね」

溜息。

「俺の知ってる女ときたらな、俺の物を勝手に持っていくわ、儲けをかっさらっていくわ、挙句の果てには渡った海の先でトランクを

ぶった切られてハンマーでドつき回される始末だ。女運が無いのは昔からだったが、最近は特に酷いな。どうしたらいいと思う？」

「う、う～ん…。その相談はまた今度でええか？」

「オーライ、質問だったな。いいぜ」

「この空間から悪魔が出られへんのなら、何で人間の世界に悪魔が居るんやろ。ダンテさん達はそういう悪魔達と戦っとるんやろ？」

パチン。よく出来ました、とでも言いたげにダンテは指を鳴らした。

「いい所に気付いたな。そうさ、それが問題なんだ」

隔絶された異空間。

人と魔の境界線。

しかし、どれほど堅牢な壁にも亀裂は入るもの。

もとより、異界同士のせめぎ合いの末に生み出された不安定な空間である、外と繋がる抜け穴が自然的に発生してしまうのは仕方の無いことであった。

「なるほど。そこからこっちの世界に入ってきた悪魔と戦うのが、デビルハンターの仕事というわけや」

「ま、そんな所だ。依頼のほとんどは小物相手のチンケな仕事ばかりだけどな」

小さな亀裂からは、わずかな水滴しか漏れることはない。

それと同じで、この異空間に発生した小さな抜け穴から現れる悪

魔はどれもこれもが最下級の雑魚ばかりだ。

それらの悪魔は、単なる力の強弱で比べれば人とそう大きくは変わらない。

悪魔の持つ、人の本能に働きかける根源的な恐怖に打ち勝てる人間であるならば、これと戦って勝利することも不可能ではないだろう。

片腕一本。ダンテにとって、それらの雑魚を相手にするのにそれ以上の武器は必要なく、それは一級の狩人としては欠伸が出るほど退屈な仕事である。

「ほほう。でも今回は違う、と」

「ああ、こんなにゴキゲンな事件は少し久しぶりだな」

上機嫌そうな笑みを見せるダンテの顔を見上げながら、はやて少しだけ躊躇するように口を一、二回開けかけて、三度目でようやく一番聞きたかった事を口にする。

「ダンテさんの、戦う理由を聞いてみてもええやろうか？」

質問に、少しだけダンテは目を細めた。

まるで、懐かしい昔を思い返すかのように。

まるで、悲しい夢を思い返すように。

少しだけかげった様に見えたダンテの表情は、短い、ほんの1秒にも満たないくらいの沈黙を挟んで、再びいつも通りのニヒルな笑顔に戻る。

「……プライベートな質問は、嬢ちゃんがあともう少し成長してからだな」

話は終わりだ。

そんな言葉をダンテが口にせずとも、はやてはこれで会話が終了した事を悟った。

少しだけ悲しそうに見えたダンテの横顔が、それ以上の会話を拒絶しているようにはやてには思えたから。

そしてなにより――

「さあ、到着だ。ここが今夜のディナー会場だぜ」

通りを一つだけ挟んだそこに、天を焦がし、昇る、炎の柱が見えていたから。

灼熱のｓｐｉｄｅｒ　ｐａｎｉｃ（1）

町の中心。大型ショッピングモールのある大通り。
そこはちょうど、数日前にダンテがシグナムらと初めて出会った場所である。
しかし、重力を逆撫でして湧き上がる炎と渦を巻く魔界の風がその場所を見るも無残な異界へと変貌させていた。

不吉と死の気配を濃密に漂わせる魔界への落とし穴。
その淵に臨むのは、ダンテやはやてら5人。
想像を絶する光景に、誰もが息を呑む。
ティアナも、スバルも。ネロでさえその表情に緊張の色を僅かに滲ませている。

ダンテはどうか。
ふと見上げたはやての目に映る、無表情な彼の横顔からはどのような感情もうかがい知る事は出来ない。
何か、何か声を上げようと、はやてが唇を動かした、その時。

異変が起きた。

この異常な空間の内側に在ってなお、“異変”として認識されるほどの、それは、さながら魔力の暴風。

身を焼き尽くされるほどの熱が地を駆け巡り、巻き上がる灼熱の

風が辺りを撫で回す。

砕けたガラスの音が歪な讃美歌の調べを奏でる中、陽炎のように揺らめいて、それは炎の中に影のように浮かび上がった。

その吐息は灼熱を孕み。
その身は鋼鉄よりもさらに頑強な装甲に覆われて。
その内に流れる血は獄炎の温度で滾る。
その姿は石像のような大蜘蛛の似姿。
その名は――――、

「……ファントム」

呟いたダンテの声は吹き上がった突風にかき消されて誰に届くこともなかった。

無数の岩がぶつかり、砕けて、すり潰されるような、耳障りな咆哮を上げて。
地面を踏み砕きながら大悪魔は一歩を踏み出す。

「感じるぞ、この、強い魔力！闘志！まだ生きておったか、裏切り者の血族めが！」

圧倒的な巨体を、気迫と魔力と熱で覆い、ファントムは幾つもある複眼で前を見据える。
濁った瞳に映るのは幾つかの人の姿。
しかし、見えているのは赤いコートと風になびく銀色の髪のみ。

ファントムは、湧き上がる感情にまかせるまま、灼熱に滾る憤怒の記憶に刻まれた、その名を叫ぶ。

ダンテェェェェェェェェェェェ――――――――！！！

ぴりぴりと空気が鳴った。
更なる咆哮は、もはや“声”としてではなく“衝撃”として大気を震わせる。

「また、きょーれつなのが出たなあ……。もしかしなくても、ダンテさんの知り合いやろ？」

身を押し潰されるかのような魔力とプレッシャー。
恐れる気持ちを噛み砕いて、努めて軽い口調ではやては喋った。

「昔の友達さ。なんつーか、本当にロクな知り合いが居ねーな。近所のパーティにもっと顔出した方がいいと思うか？」

ダンテの口調はまるで変わらない。きっと、どんな状況でもこれだけは変わる事は無いのだろう。
それが今のはやてにはとても心強く思えた。

「うーん。何パーティかによるんやないか？」

ゴゴオォォ…ン！！

会話を割って、ファントムの脚が地面を踏み砕く。
強烈な、その視線だけで人を焼き尽くせそうな、灼熱の殺気を纏う視線がダンテを射抜いた。

「Ｓｈｕｔ　ｕｐ!話中だぜ、静かにしてな！」

殺気も熱も、ダンテはまるで感じていないかのように、涼しげな顔でそう言ってのける。

「相変わらず舐めた小僧だ。その口、今度こそ黙らせてやろう」

「ハッ、もう何年ぶりだ?俺も、もう小僧って歳じゃない。まったく、生きてたんなら手紙の一つでも寄こしたらどうなんだ?」

「地獄への招待状をか?片道の案内役ならば務めてやろう」

「オーケー、帰りはお前の分のキップを使わせてもらうさ」

「クッハッハ、あの時と同じと思うなよ、小僧――――!!」

「小僧小僧って、少しは相手を敬う心ってやつを教えてやるよ、虫野郎!」

背に回した腕で、銀と黒のハンドガンを構える。

見据える視線も。構える身体も。位置するのは悪魔の真正面。

逃げる足は無い。弱音を吐く口も無い。

あるのはただ敵を砕く腕のみ。

それは、初めてこの悪魔と出会った時から何も変わらない。

そして、あの頃よりもさらに大胆に、不敵に笑ってみせる。

「Ｉｔ　Ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅ!」

・
・
・

ギィィイアアアァァァァァ――――――！！

灼熱の咆哮は戦闘開始の合図。
背に畳んでいた尾を広げて、ファントムは目にも止まらぬ速さでその矛先を突き出した。

「おっと！」

ダンテは軽いサイドステップでその攻撃を避ける。反撃は即座。二丁拳銃（トゥーハンド）から繰り出された銃弾の嵐が、ファントムの顔面に殺到した。

「無駄だ！！」

だが、その攻撃をまるでものともせずに、ファントムはダンテに向き直る。

堅牢な悪魔の鎧や盾を打ち砕くダンテの弾丸だが、魔界随一の装

甲を持つこの悪魔に対してはまるで無力だった。
それでも、前に戦った時はいくらかの牽制にはなったのだが。

「相変わらず鬱陶しい奴だな」

二歩。三歩。バックステップで距離を取る。
跳ねるような踏み込み。続く動きで薙ぎ払われた前脚が、開けた間合いを削るかのようにダンテの目先を通過する。

「うお！？危ねえなこの野郎！」

弾丸をばら撒きつつ、ダンテはさらに後ろへ距離を取る。
記憶よりもリーチが長い。元々が巨体なのでよく分からなかったが、あらためて見れば、前に戦った時よりも二周り以上は身体が肥大化している。

前とは違う。どうやらそれは、はったりでも何でもないようだ。

少しだけ表情に険を入れ、ダンテは背中に手を回した。駆ける。
抜刀と斬撃は同時に。すれ違いざま、ファントムの脚に斬りつける。

硬い感触。
重く鋭く研ぎ澄まされた大剣リベリオンの刃だが、ファントムの装甲には歯が立たなかった。あえなく弾かれ、ダンテは次の瞬間に来たファントムの反撃を喰らって大きく吹き飛ばされた。

受身を取り、着地。剣を盾にしたためダメージは無い。
リベリオンに刃こぼれが無いかどうかを確かめて視線をファントムに戻す。

「あー、そういや、前は“倒した”ってわけじゃなかったな」

今更ながらに思い出す。以前の決着はファントムの自滅だった事に。

その場で生き残ったのはダンテではあるが、よくよく思い返せば、あの強固な外皮を攻略した覚えは無い。

「まあ、いいさ」

ぼやくダンテの目前に迫るファントムの巨体。前脚の攻撃をリベリオンで切り払い、返す刀で反撃の刃を繰り出す。刃はファントムの装甲にわずかな傷をつけるのみ。その攻撃の結果にもダンテは余裕の表情を崩さない。

ファントムの額に肘をつき、複眼の前で親指を落として見せる。

「今度は真っ二つにしてやるよ。あの時と同じじゃないぜ？」

・
・
・

圧倒。驚愕。騒然。あらゆる言葉を尽くしても、今のはやて達の心の内を正確に表現することは難しいだろう。

異様な巨体に蜘蛛のような姿。

ダンテの銃弾や剣を弾き返す強固な装甲。

加えて、強烈な魔力と熱。

初めて目にした上級悪魔の迫力は彼女らの想像を遥かに超えていた。

――本当に、とんでもない相手や……

氷のような汗が流れている。足を伝う地面の感覚に、ふと気付けば、はやては僅かに後退りしていた。足元に引かれたその跡を踏みにじり、心を一歩だけ前へ。

心を決める。怖震う心が身を縛る前に。戦う心を奮わせる。

――よし、行くで。化物相手は六課の十八番や！

まず、取るべきは距離。普段の敵との間合いよりも、さらに倍は後ろへ。

そして、見る。挙動を見逃さぬように。理解不能の敵との戦いは、情報が唯一の命綱だ。“知らない”ということは、何よりも恐ろしいこちらの弱点となる。

「ティアナ。スバル。二人は地上で、私は空で、まずは様子見や」

悪魔とは言え完全無敵というわけではない。その事はここまでの道すがら倒してきた悪魔で証明済みだ。

叩けば壊れる。焼けば消える。殺せば死ぬ。

程度の違いこそあれ、この世界の物理法則に従っている以上、それは絶対の筈だ。

「気い付けてな。絶対にあれの攻撃を受けるんやないで」

頷く二人を地上に残し、はやては3対の翼を空にはばたかせた。

響く地鳴りと破壊音は、ダンテとファントムとの戦闘の残像。ファントムはこちらの動きなどまるで無視してダンテのみを追いかけている。攻撃が来る気配も無く、空から見れば背中はがら空きだった。

「隙だらけに見えるけど、どうやろな」

ペンダント型に待機させていたデバイスを開放。空間展開。余剰パーツ合一。起動確認。

現れたのは、金色に輝く剣十字（シュベルトクロイツ）。

精神集中。魔力はよどみなく流れ、白銀の光が杖に収束する。

平常心は常の訓練の成果。湧き出す力は仲間がいるからこそ。気迫の息を吐き、狙い、はやては撃ち放つ。標的はファントムの足元。

凍結の効果を持つ魔力波は一瞬で空気を凍てつかせ、ファントムの節足に氷の足かせを形成するに至る。

「どうや！？」

どうにもならなかった。

本来なら鋼の硬度にすら匹敵するはやての氷はあっさりとファントムに振り払われて、ほんの一瞬の足止めにもならない。

「あ～、アカンか……」

しゅん、と僅かに羽がしぼむ。

――まあ、だいたい想像通りや

自分の魔法が、あの悪魔に通用しないであろうことは予想していた。

何もせずとも肌で感じるファントムの膨大な魔力と熱量は、こちらの氷属性を持つ魔法の威力を大幅に減衰させる。魔力と魔力、ぶつかりあえば弱いほうが圧し負けるのは当然の道理。

「魔法攻撃は威力が半減、防御力も要塞並やし、しかも熱と氷の反属性ときたか……」

相性は最悪。もっと違う相手ならば戦い方も様々あるが。

「ダメージを通すには魔力障壁を破って、あの熱ごと相手を凍らせるしかないなあ……」

難しい。素直に、はやてはそう思った。

管理局にも少数しか居ないSランクオーバーの魔導師であるはやてではあるが、そのはやての魔力を持ってしてもファントムとの魔力差は歴然である。人と悪魔の差。絶望的なまでの壁がそこにはある。

――魔力じゃ敵わん。氷も効かん。私の魔法じゃダメージは通せん……

だがはやては悲観する事無く冷静に事実だけを頭の中に積み重ねる。そして、考える。この化け物を倒す策を。

ぱっと思いつく対抗手段は二つ。

まず一つに、物理攻撃による破壊。

打って、壊す。ただそれだけの単純な力押し。一番確実な方法でもある。

そして二つに、一点集中の収束砲撃による障壁の貫通。

敵の魔力障壁は非常に強大だが、こちらの攻撃を一点に絞ることで敵の魔力を一時的にも凌駕できれば、防御を抜けてダメージは通せる。

だが。

「……どっちも無理やな」

物理攻撃はいわずもがな。

魔力砲撃にしても、はやての持つスキルは“範囲攻撃”だ。収束と貫通は専門外。それを差し引いてもはやての氷属性はファントムの持つ熱に弱いというのに。

「ああいうのにはヴィータかなのはちゃんをぶつけるのが一番なんやけどなあ……」

どちらにしても無いものねだり、今は現実的な方法を考えよう。

何か弱点は無いものか。無欠の要塞、だとは思いたくない。

「う～、いきなり役立たずなんて、かっこ悪すぎや……」

ぼやきながら杖を振る。白銀の魔弾を、無駄と知りつつ解き放つ。
ファントムの外皮で、雪の結晶のように砕ける魔弾。灼熱の悪魔に、未だ、はやては攻略の策は思い至らない。

・
・
・

スバルとティアナはファントムを中心にして円を描くように移動していた。常に位置は敵の後ろへ。スバルを先導するようにティアナは動く。

その彼女らの視界の中、ファントムは、背中の尻尾を振り上げてダンテに突き出した。

避けるダンテ。
ファントムは攻撃の反動で後脚に力を溜め、次の瞬間には跳ねるように突進する。
ダンテは突進を剣の腹で軽くいなし、横方向に回避。
しかしファントムは追撃の手を緩めない。身を振るように、大振りに前脚を薙ぎ払う。

ダンテはその攻撃を足を踏み込んで剣を構えて防御する。力の均衡は一瞬。互いに弾かれたように距離を取ると、またも、機先を制するのはファントムの俊敏な脚力。迎え撃つダンテも一歩も引かない。

――凄い…！

ティアナは思った。

今まで見てきたダンテの力など、彼の実力のほんの欠片なのだと。

ずずんっ……！

地面が鳴った。瞬間。ファントムの呼び出した火炎が、地面から噴き出し、ダンテの駆け抜けた足跡を焼いて、その身を追いかける。

――あんな攻撃……！

避けようがない。

恐らくダンテは火炎の発する熱や地面の震えなどを機敏に感じ取って攻撃を予測しているのだろう。あとは勘。もしかしたら多分に後者に頼っているのかもしれないが、ともあれ、運よく外れているなんて事はない筈だ。とても真似できる芸当ではない。

真紅のコートが翻り、踊り、舞い上がり、そうして奏でるのは剣撃と銃弾の狂騒曲。刻むのは死と戦慄のリズム。

ダンテの戦いは、理を積み重ね戦術を組み立て、万全を期すティアナの戦い方とは真逆の戦いだ。相手の間合いに堂々と踏み入り、その上で敵を凌駕する。自身の力に絶対の信頼を持つからこその戦い方。狂気に一歩も二歩も踏み込んだ、それはまさにダンテの戦闘（オンステージ）

領域。

じり、と。僅かに、気圧されるようにティアナは後ずさりした。この距離はまだ危ないかもしれない。この領域は、自分達が不用意に立ち入っても良い場所ではない。

――遠い、わね……

それは、歯噛みするほどの距離だった。戦闘のレベルも何もかもが、己の立つ位置と離れすぎていて、自分の凡庸さを見せつけられているようで、ひどい無力感に苛まれてしまう。なにせ、自分は気を張るだけで精一杯なのだから。

……だというのに。

「ダ、ダンテさん凄い！うわ、避けた！あの反撃ってどこから手が出たの！？ねえねえティア、あれ見た！？ほら！ほら！」

隣のこいつは何でこんなに無邪気に目を輝かせてるのだろうか。

「あんたねえ、少しは警戒しなさいよ……」

自分達が位置取っているのはファントムの背後だが、けしてここが安全圏だという訳ではない。

ダンテのスピードは目を見張るものがあるが、それ以上に、ファントムの機敏さがティアナにとっては脅威だった。堅牢な巨体に備わる速度は、ただそれだけで強大な武器となる。

ファントムと自分達との距離は、一足飛びにファントムが飛び込んで来れないぎりぎりの位置だ。あの悪魔の意識がこちらに向いたとして、自分達が反応できる限界の距離なのだ。

「今までの、数だけの奴らとは違うのよ？」

ティアナの言葉に、スバルは力強い瞳で応える。

「同じだよ。私達に出来ることは、いつだって、私達に出来ることだけだもん」

拳を握りこんで、頷いてみせる。

「じゃあ、あんたはどうするつもり？」

「近づいて殴る！それが私の戦い方だもん！」

勢いよく突き出した空拳の向けられる先には、身がすくむような轟咆を上げるファントムが居た。

踏み出す節足がコンクリートの塊を潰す。

薙ぎ払うかぎ爪がビルの壁面をごっそりと抉り壊す。

吐き出す火炎弾が鉄を水あめの様に溶かす。

ざあっと、冷たい汗がスバルの全身を伝った。

「ティア。私、自分の戦い方を少し見直そうと思うんだけど」

「当たり前よこのスバカ！」

とりあえず殴る。話はそれからだ。

「あんなのと正面きって戦うなんて私達には無理よ」

けれども、スバルの言うことも一理はある。
出来ることをやる。手は出せず、見る事しかできないと言うのなら、それに全力を費やすまでだ。

「逃げ回るのも戦いよ」

スバルの手を引いて、ティアナはまた駆け出した。戦いの熱気を肌で感じながら。

・
・
・

背中の剣に手をかけて、体勢低く駆ける。ファントムが踏み砕いて悪くなった道をものともせず、足は戦闘の速度を維持する。

前。こちらに背を向けながら横薙ぎに振り払われるファントムの尾を避ける。

バックステップ。返す刀で戻ってきた尾を髪の毛一本分の見切りでかわし、銃で牽制する。

だが効果は無い。銃弾はファントムの外皮で弾かれて小さな火花を散らすのみ。

歯噛みしながらも足は止まらない。そこへ、タイミングを合わせたかのようにファントムの尾が振ってくる。
身を横に跳ばす。尾が砕いた地面の欠片が黒いジャケットを土埃で汚した。

「くそっ、あの野郎！」

ネロはひどくムカついていた。

まず、キリエとの旅行を台無しにさせられた。
そして、新品のジャケットを汚された。
けれど何より、

「俺を無視しやがって！」

それが何をおいても一番頭にくる。

ファントムは、現れてから今の今まで、けしてダンテ以外に直接的な攻撃をしようとしない。
悪魔の目がどういう構造になっているのかは知らないが、ファントムには自分の繰り出す攻撃が見えている筈だ。ある程度の反撃もしてくる。だが、腰を入れた攻撃は絶対にしてこない。ダンテ以外は脅威ではなく、気に留めるほどの敵などこの場には居ない、と。そう言っているのだ。

「舐めやがって…！」

土埃をはらって立ち上がる。剣を地面に突き刺し、柄を捻る。内燃機関（クシード）がバイクのエンジンにも似た起動音を立てて唸った。力強い

振動が返ってくる。

剣を肩に。握り締めた右腕からは、怒気のように蒼い炎が立ち昇る。迷いも躊躇も無く、一息にネロは駆け出した。振ってきたのは、先と同じ尾の一撃。軽くかわし、さらに前へ。

そのネロの背後からは、振り回すような大振りの軌道で、尾が戻ってくる。ネロは背後を見ない。

ついに、その一撃が、ネロを捕らえた。

灼熱のｓｐｉｄｅｒ　ｐａｎｉｃ（2）

激しい激突音。
背を伝って届いた重い手ごたえに、戦いが始まって以来初めてファントムは注意をダンテから外した。

――――なんだ……？

ファントムに備わる幾つかの複眼は、目、というよりもセンサーと表したほうが正しい。前も、後ろも、常に周囲の動きと気配を探るその眼に死角は無い。

上空に漂うはやての事も、距離を置いて戦いを静観しているスバルとティアナの事もその複眼で捉えていたし、背後から走ってきたネロの姿もはっきりと見えていた。

だが、それは文字通りにただ見ていただけの行為でしか無い。
戦場の動きを把握するのは一級の戦士として当然の事で、それ以上の意味をそこに含ませるには人間は脆弱に過ぎる。

ファントムにとっては、ダンテ以外の存在、それも人間など“敵”とも呼べぬような瑣末なものであった。当然だ。所詮は吹けば飛ぶようなちっぽけな命、心血を注いだ攻撃を繰り出す必要がどこにあろうか。

人の身の領域で届くほど、己が名は容易くは無い。人の磨いた牙如きが脅威となることなど、万に一つもありはしない。

そう思っていた。今の、この瞬間までは。

――なんだ……！？

ファントムが繰り出したのは、背後から駆けてきたネロに対する、ほとんど牽制に近い攻撃。それは気も魂も入らない、ただ単に尾を振り払っただけの行為で、しかし、それでも鉄柱をへし折り人の胴体をぶち撒ける程度の威力は持っている筈の一撃だ。

だが、尾を伝わったのは肉を潰し骨を砕く感触ではなく、硬い、まるで鋼鉄の塊を打ち付けたかのような、そんな感触だった。

幾つもの眼は一斉に後方へと向けられる。そして、そこでファントムは見た。

蒼く燃え上がる腕を。

人ならざる幻影のような剛腕を。

――それは、なんだ！？

急激に、急速に、濃密な魔の気配が吹き出してくる。

寒気すら覚えるような、鋭い、覚えのある気配。その気配は、ファントムの記憶の底に鮮烈なまでの鋭い輝きをもって焼き付いていた。

強く、凶暴で、魔帝にすら抗った、蒼銀の悪魔の気配が。

――まさか、……！？

ファントムが、記憶に刻まれた名を深く思い返す時間は無かった。

蒼い炎の尾を引きずり、黒い風が、鈍色の鋼刃を運んできた。

・
・
・

「シカトしてんじゃねーよ、糞野郎！！」

今まで溜めていたものを吐き出すように、ネロはファントムの熱気に突っ込んで行く。こちらの攻撃を察知しているファントムの反応は早い。すでに、一旦の距離を置くための前動作として前脚が僅かに屈伸している。

「逃がすかよ！！」

まだ間合いは遠いが、構わず、剣のクラッチを引いた。剣の内燃機関には、焼けつくぎりぎりの爆発力が蓄積されている。普段は威力に上乗せするその爆発力を、今は速度に計上、足りない数歩分の加速を得て、ネロの身体が躍進した。

腕の関節と筋肉が軋みを上げている。速度の対価は相応の衝撃。常人ならば関節がイカれるか剣が手からすっぽ抜けるほどの威力だ。だが、

――右腕（こっち）なら、問題ねえ…！！

燃え上がる炎の右腕はしっかりと剣の柄をグリップして離さない。踏み込む敵の間合いの内側で、ネロは爆発力に身体を任せた。下段から上段へと。かち上げた剣の切先がファントムの顎を打った。

響く激突音は先程よりもさらに大きく。

ファントムの身が僅かに浮かび上がる。

しかし、腕に届いた感触に、ネロは顔をしかめた。重い、が、浅い。腰の入りと踏み込みがまだ足りない。ファントムの攻撃を右腕で弾いた分の無駄が、その一歩分ほどの挙動をネロから奪ったのだ。

けれど、それでいい、とネロは思った。

もとより、横薙ぎに折り返してきたファントムの一撃を悪魔の腕（デビルブリンガー）で払いのけたのはワザとした事だ。あれは避けようと思えば避けられた攻撃で、それをしなかった理由は、ムカツクから、という単純で純粋な感情以外の何ものでも無い。

度し難いとは自分でも思うが、それはプライドの問題だ。

不意の一撃で運良く拾った勝利になど、一体どれほどの価値があろうか。無理でも無茶でも、正面からぶちのめす。己という存在を深く刻みつけて。

それが、

――“悪魔も泣き出す男”の戦い方だろうが！！

「Ｃｒｙ　ｏｕｔ　ｎｏｗ！！」

泣き叫べ！！

剣を引き戻し、手首を返す勢いで柄を捻る。瞬間、イクシードを開放、無防備なファントムに剣を叩きつける。

火花を散らし、剣はファントムの外皮を削る。

振り切った刃の勢いのまま、身を回転、手首のスナップでイクシードを再燃、瞬間に開放、斬撃。

さらに繰り返す。回し、捻り、叩きつける。嵐となったネロの猛攻は衰える事無く、一歩、また一歩とファントムの身体を押し込んでいく。

そして、

「Ｓｃｕｍ　ｂａｇｓ！」

クズが！

限界のイクシードを開放、叩っ切り上げた上向きの斬撃と同時に、剣はネロの手を離れ、宙を舞った。

自由になった右腕。渾身の力を込めて。

「Ｓｈｏｗ　ｄｏｗｎ！」

終りだ！

ぶん殴る！！

燃え上がる蒼炎の闘気が描くネロのもう一つの腕は、ひるむファントムをただの一撃で殴り飛ばした。

ファントムの巨体は地面に激突し、勢いを保ったまま地面を抉り削りながら、道の対岸に建っていたショッピングモールの建物の壁を突き破った。

ひゅん、と風を切り、剣が手元に戻ってくる。

そうすると、急速に辺りは静けさに満ちていった。瓦礫の崩れる音以外は何も聞こえない。

「ヒュー♪とんでもない野郎だ」

その静寂を破ったのはダンテの口笛とその言葉。地面に突き立てた大剣に身体を預けながら、彼はにやにやと笑っている。

「何だ、今頃気付いたのか？」

右腕の悪魔を鎮めながら、軽く、ネロも言葉を返す。

あとの三人はというと、はやては空で、スバルとティアナは地上で、皆一様に言葉を失って唖然としていた。全員の注目が集まっている。悪くない気分だ、とネロは思った。

グゥオオォォォォォォォォォ――――！！！

休止は僅かな時間のみ。音と熱が蘇る。

モールの瓦礫は内部に発生した灼熱の温度に融解、巻き上がる炎の風に彩られ、熱く血を滾らせたファントムが現れた。

「やってくれたな、貴様！！」

吐息は憤怒の色に染まり、昂ぶる感情は紅煉の殺気となる。今のファントムの眼には、ただ一人、ネロだけが映っている。

「なんだ、生きてたのか。悪魔ってのは、どいつもこいつもしぶとくて嫌になるぜ」

余裕の態度は欠片も崩さず。その視線をネロは真っ向から受け止めて見せた。

あの分厚い面の皮に表情というものがあるのかどうかは不明だが、かなり頭にきていることは確かだろうと思う。

もしかしたら、同じ悪魔なら分かるのかもしれないが、残念ながらこちら側の悪魔は腕一本のみ。ダンテに目配せしてみるが、分かるかよ、といった具合で彼も首を振るだけ。半分でも足りないらしい。

「何者だ!?その力…、人間のものではなかろう！」

一歩ずつ歩むファントムの足元で、地面が赤く灼(や)けて溶けだしている。１０メートル単位の距離があるというのに、熱気が肌を焼くようだった。

「よく聞く質問だな。けど生憎、この腕のことは自分でも良く分からなくてね」

後悔しても遅い。その領域に、自分は足を踏み入れたのだ。

そして、後悔などしない。そんなものに悩まされるのはフォルトゥナで最後だ。

「舐めた口を…！まあよい、ダンテもろとも、縊り殺してくれる！」

身を灼く殺気に負けず、ネロは右腕の中指を見せ付けるかのように立てる。

――少しはイラついた顔でも見せやがれ

剣を地面に突き立て、柄を捻り、イクシードを溜める。内燃機関の作動する音と震動が、ネロの闘士をさらにかき立てる。

「やってみな。成功したら褒めてやるぜ！」

吼えるようにネロは言った。

黒いコートが翻り、火を噴く刃が走りぬけ、灼熱の戦場に風が吹いた。

・
・
・

戦局は第二ラウンドへ。

新たにフィールドに上がったのはネロ。はやてはまたも蚊帳の外だ。

別段、その事に大して特別な感情は抱かない。ファントムと自分との相性、そして能力差は分かりきっている。ネロとダンテの実力が自分の予想を遥かに上回っていただけの事だ。冷静に、その事実だけを受け止める度量くらいは備わっている。

「それにしても、ネロくんは凄いなあ……」

あの右腕の力もさることながら、特にはやての目を引くのはその動きだ。

攻撃の予測、効率的な回避、間隙を衝く反撃。高い身体能力と反応速度を生かした、本物の実践戦術。

圧倒的な強さそのものを敵に叩きつけるようなダンテの戦い方とは違い、強さを武器のように利用する戦い方だ。もう少し敵と自身との線をずらして回避を優先した立ち回りをするべきだとは思うが、恐らく、その辺はネロのこだわりなのだろう。実に男の子っぽい。

そして出来る事ならば、このレベルの戦い方をスバルやティアナにも学んでほしいところ。実戦は最高の経験となる。こんな突飛で自分のフォローの入る余地も無い戦いでなければ、彼女ら二人にもう少しだけ無茶を許せるのだが。

――まあ、それは私の力不足やな

学ぶのは自分も同じ。せっかくの戦いだ、目とデバイスの記録に焼き付けておこう。そうだ、次回の六課の訓練はファントムとダンテとネロを仮想敵性体にして行おう。一部の血の気の多いメンバーには受けることだろう。ヴィータとかシグナムとか。

と、そんな折、眼下で繰り広げられる戦いを眺めている内、ふと、はやてに気がついた事が一つ。

――あんまり、尻尾を使っとらん…？

戦いが二対一の様相を呈してから、ファントムの尾を使った攻撃が僅かに減ったような気がする。ダンテかネロ、どちらかが背後を取っている時はあまり尻尾を使っていないように思う。攻撃の手は少しでも多いに越したことはないだろうに。

「ほほう……」

にんまり、などという擬音がぴったりと当てはまりそうな表情ではやては頬を両サイドに釣り上げた。

――あれは、弱点を庇っとると見てええかな？

それは、味方と敵との動きを俯瞰していなければ気付かなかった些細な変化だ。もしかしたらファントム自身も無意識にそう動いているのかもしれない。それほどの些細な変化。けれど、

「試してみる価値は大やな」

思い、言葉に出してみる。

ただそれには問題が一つ。

敵の隙をつくには地上で戦っているダンテとネロの協力が不可欠だ。試しにやってみるにしては少し危険が大きすぎるが、果たして彼らがこの話に乗ってくれるかどうか。

ともあれダメもと。念話で問いかける。
返答は、ダンテのウインクとネロのサムズアップ。
二人とも良い人で助かったと思いながら、はやては高度をぐんと上昇させた。
漆黒の六翼が羽ばたくたびに杖に纏う水分が重くなる。最高度。雲の浮かぶ高さではやては杖を掲げ、魔力を伝え、術式を発動させた。効果は凍結。完成したのは絶対零度の氷柱。

見下ろす眼下に狙いを定めると、すでに地上での準備は完了するところだった。
さすが。呟いて、はやては杖を振り下ろした。氷柱が落ちる。その直線軌道に現れた白銀の円環は“加速”の魔法陣。氷柱の表面を彩る光文は“制御”の術式。

轟、とうねる空気を押し出して、氷柱は、遥か足下へと落ちて行った。

・
・
・

――あの化物の弱点を見つけたかもしれん。何とか、あの尻尾を

開かせることは出来んやろか？

不意に響いた声ははやてのものだった。鼓膜ではなく、思考が直接震えるような独特の感覚がある。テレパシー、というものだろうとダンテは思った。

――平然とそんなもん使いやがって。さすが、魔法使いはやることが違うね

ダンテは一瞬だけネロに目配せをする。向こうからも視線が返ってくる。どうやらネロも同じメッセージを受け取ったらしい。

――弱点、ねえ…

この化物要塞にまともな弱点があったとは驚きだ。思って、ダンテは一、二、三歩分の距離を取る。ファントムの前脚が砕いたのは二歩目の足跡。その前脚を蹴り、ダンテはさらに後ろへ。

飛びかかろうとしたファントムの眼を狙いショットガンの引き金を絞る。相変わらずダメージは無いが、構わない。これは目くらましの代わりだ。

ガードレールを踏み越えて、十分な距離を取ったところで、ダンテは一瞬だけあらためてどうするかを考えた。

良くも悪くもダンテの戦い方は力押し一辺倒。武器を変えこそすれ、その戦い方を変えたことは一度も無い。何故かと問われれば、それで十分だろ、とダンテは答えるだろう。

力に物を言わせた絶対強者のみに許される、まさに、力を振るうだけの戦い方。

が、それ故に苦戦することも無いとは言えない。今回はその稀有な一例。ファントムの飛び抜けた“強靭さ”には力押しはあまり有効な戦術ではなかったのだ。

前回の勝利は敵が勝手にこぼしてくれたものを拾っただけ。今回も都合よく敵が転んでくれる、などという幸運は起こらないだろうし、そんなつまらない決着も望みはしない。

――――オーケー、勝利の女神様の啓示がどんなものか、見てみようか

歪な夜空を見上げれば、そこには羽を広げるはやての姿がある。返答はイエス。言葉の代わりにウィンクを返して見せる。そのダンテの対角線上では、ネロも右腕の親指を立てて見せていた。向こうの返答もイエス。ならば、やることは一つだ。

「Ｈｅｙ、行くぜミスター・ファントム！」

駆ける。残像が赤いコートを翻し、尾を引く剣尖は銀色の閃光となった。

灼熱のｓｐｉｄｅｒ　ｐａｎｉｃ（3）

「Ｈｅｙ、行くぜミスター・ファントム！」

ファントムを挟んだ道の対岸でダンテは既に動き出していた。激烈な踏み込みから繰り出される一直線の突きが空気を切り裂く。

ファントムは強靭な前脚でその突きをいなし、巨体に物を言わせた重量と怪力をダンテに打ち付け、ダンテは剣を盾にそれを防御して地面を転がった。攻撃の勢いを殺すためだ。地面を蹴り、起き上がるダンテに向けて業火の火炎弾が飛ぶ。

弾け飛ぶ火炎の残滓と土煙は一瞬でダンテを呑みこむが、ネロに特にそれを気にしたような様子は無い。特に焦りもせずに、ネロは敵の様子を見るように足を運んでいる。

――――そんな攻撃で倒れるような奴かよ

その予想に違わず、瞬間、土煙が真っ二つに割れた。ファントムの不意をつくタイミングで繰り出された大剣の一太刀がその硬い表皮をなぞる。鋼鉄が擦り切れるような嫌な音がした。ダンテは空中でファントムの体を蹴り、次のファントムの攻撃を受け流す。完全に伸びきった前脚での一撃は軽くいなされ、今度はダンテの体を弾くにも至らない。

その隙を衝こうとネロが足に力を入れた矢先、地面の底からマグマが噴き出した。回避は間一髪。あともう一秒ステップが遅れていたら足を丸ごと焼かれていただろう。続けざまに噴き出す猛火の合間を駆け抜け、安全圏まで距離を取る。

――くそ、よく見てやがる

こちらの行動に対して繊細に反応してくる。つい先ほどまでとは攻撃の質もまるで違う。それだけ、自身の事をファントムが明確に意識しているのだろう。この右腕がよっぽど怖いらしい。

――それは、別にいいんだけどな……

警戒上等。どのみちぶちのめすことには代わりは無い。

しかし、こうも攻撃されていては近づくこともままならない。あの尻尾を引き剥がせる間合いに入るのは難しいといえる。

どうしたものか、と考えネロはステップを踏んだ。火炎弾を避け、開けた間合いに歯噛みしつつ、さらに足を動かす。

近距離で殴り合ってるのはダンテだ。こちらは遠距離の間合いから先に近づけないでいる。先にダンテを片付ける腹だろう。

舐めんなよ、とは思うが近づけないのは事実だ。多少無茶でも突っ込んでいく事でしか活路は開けないだろう。

ダンテとの目配せは一瞬。この悪魔の眼前で作戦の打ち合わせなど出来よう筈も無い。ただ、これからの行動にタイミングを合わせる事がせいぜいだ。

――さあ、行くぜ。うまくやってくれよ、ダンテ！

右腕を握り締めて、ネロは足に力を注いだ。前進するために。踏み切る靴底で地面を蹴って、最後の風が戦場を駆け抜けた。

・
・
・

ファントムの瞳はダンテを映している。
迷いも恐れも無い、猛烈な踏み込みから続く剣撃を強靭な外骨格で受け流し、反撃の打撃を打ち込む。

敵の攻撃はこちらの装甲を破れないでいるが、同時にこちらも敵に決定的な一撃を叩き込めてはいない。
過去に戦った時とは、まるで別人のような強さだった。
動きは素早く、ステップは激しく、その姿は記憶を易々と凌駕し、一撃の剣閃が瞬くごとにその速度は重さを伴ってくる。

薙ぎ払われた鋼刃がまた火花を散らした。剣の切っ先が視界を限界まで横切ったところで、ファントムはようやく前脚に力をこめる事が出来る。

こちらの行動は常に相手の一拍後にしか繰り出せない。
攻撃と反応の速度の違いだ。強靭で巨大な身体を持つこちらの方が、速さの面では敵に遅れを取っている。一撃の破壊力ならばこちらが圧倒的に勝るが、その分のアドバンテージを敵に喰らわせることは未だできては居ない。

――――今も昔も、逃げ回るのが得意な奴よ…！

ファントムは考え、そしてある一つの決断を自分に下した。
隙を突くのが難しいのならば、あとは強引に押し切る方法しか残

されてはいない。幸いな事に、自分にはその無茶を押し通せるだけの力がある。

血が沸騰するような戦いは久しかったが、それも仕舞いにする時間だ。

ファントムは自身の熱気を吐き出すように吼え、豪腕を唸らせた。理で詰めて取るような戦いは、もうしない。己が全力に任せるまま、後は、全てを焼き尽くすのみ。

灼熱に彩るファントムの視界に、一陣の風が吹いた。鋭く、ざわめく様な気配に幾つかの眼を向けると、こちらに走るネロの姿がそこにはあった。

軌道は一直線。足を運ぶ速さと前傾の姿勢は、半ば回避を捨てた突進の挙動である。

愚かな、とは思わない。自身もちょうど、似たような発想に辿り着いたところだ。

だが、多少強引ではあるな、とファントムは頭の隅で考える。

あの右腕の力は脅威に値するが、さりとて、その身は人間の範疇を大きく逸脱するものではない。ダンテのような、悪魔の領域に足を踏み入れた戦い方が出来るほど強靭な五体は持っていまい。

――過信か、それとも若さゆえか

いずれにしろ、こちらが手を抜く事はもうあり得ない。かの人間は、もう既に己が“敵”なのだから。

――往くぞ、小僧共！

ギィィアァァァァ――――――――！！！

紅蓮の咆哮。

ファントムは迎撃の力を全身に漲らせ、同時に、注意の半分をダンテに振り分けた。

眼前に迫る剣がある。切先の軌道が伸びきる前に、その刃を討ち払う。

弾いた剣の勢いに身を任せ、ダンテはこちらの脚を一蹴り、間合いを開け、追った視線でショットガンの火花が幾つも弾けた。散弾の一発一発が飛び散り、こちらの装甲を薄皮程度に削る。めくらましにしかならない攻撃だ。

一拍。

互いに一呼吸分の息を吸い、ファントムは、もう半分の感覚で、背後の間合いにネロの足がかかった事を確認した。

地面に脚の一本を突き立て、ファントムの前脚が地面を抉った。突き立てた脚を軸に身体を強引に捻り回す。背後のネロを討つ為だ。

前方の視界が一回転し、そうして、ファントムは見た。

ネロが払い上げた右腕の幻影が、地面を深く抉り削るのを。一瞬の間に、ファントムの思考は連続して敵の動きを判断した。

右腕は疾走の勢いを殺すブレーキの役割だ。それと同時、深く落とされた腰と足は抉り上げる腕の力を底上げするためのもの。駆ける速度は足から腰へ、右腕へと順次に伝わり、路盤を掴む腕に力を

与える。

べぎり、と。そんな鈍い音がして、右腕の掴んだ地面が路盤ごと一枚のプレートとして持ち上がり、こちらの視界をふさいだ。同時に、一つの鋭い悪魔の気配が小さくなっていく。

しまった、とファントムは思った。あの右腕から発せられる気配を絶たれると、後に残るのはか細い人間の気配だけとなる。昂り、灼熱に染まる今の感覚ではその気配を細かに探る事は出来ない。

おのれ、と思う間に、センサーの網をすり抜けるかのように悪魔の気配は消えてしまった。

――人間め…！

連続した動きに一切の無駄は無かった。こちらの反応を見てからでは、到底間に合わない高速、かつ大胆な行動。つまり、右腕を晒しての突進は、初めからこの一瞬の為の布石だったのだ。

侮るまい、とは思っていたが。

――小賢しいのは人の常か、忌々しい！

よもや敵が人間であることのハンデを逆手に取ってくるとは思わなかった。

遠心力に任せた身体と攻撃は、もはや止まらない。速度に腕力を上乗せした一撃は捲れ上がった路床を容易く打ち砕くが、当然、その先にネロの姿があろうはずも無い。

――何処だ！

点に集めていた感覚を、面のように広げる。全方位に張り巡らされたその糸に触れたのは、上空、翻る真紅のコートであった。

「ダンテ！？」

鈍色の輝きが刃に乗って、こちらの頭上に落ちてくる。

機先は完全にあちらの手の内。

攻撃を振り切った状態では反応できず、まともにその剣撃を浴びる事になる。

だが、ただの一撃で打ち砕かれる己が装甲ではない。

しかし、とファントムは思った。いや、思ってしまったのだ。

それは、戦士としての、熱く滾るその精神が、無防備なままに攻撃を浴びる事を是とはしなかった。

だから、その咄嗟の行動は、頭で考えた判断ではなく身に染み付いた闘争本能によるもの。

ファントムは尾を開き、その切先を以ってダンテの剣を迎撃した。

尾には、硬く、そして引っ張られるような感触がある。ダンテが身を捻って尾の力を受け流しているためだ。剣の軌道は回転円の軌跡をたどり、無駄なく力の方向を変える。

剣と尾は互いに軌道を逸らし、離れ、引き戻そうとした尾は、しかし、動かなかった。

「貴様…！」

ネロが、そこに居た。

・・・

地面をひっくり返したネロは、右腕の力を抑え、急いでその場を離れた。飛び退いた間際に、路盤を砕いた轟音と土埃が舞い上がる。

再びの疾走とダンテが飛び上がったのはほとんど同時であった。ファントムの反応の矛先が向いたのは、ダンテ。閉じていた尾を展開させ、上空のダンテへと突き上げる。

ダンテは空中で身体を回転させ、その円運動に沿ってファントムの攻撃を受け流した。攻撃の勢いを利用して弾かれたファントムの尾は、ぶつかって弾けるよりもさらに大きく幅を振って、ネロの眼前に下りてくる。

右腕を燃やす。

ネロは悪魔の腕（デビルブリンガー）で、再びその尾を掴み取った。

「貴様…！」

判断と動きは一瞬。そして、状況は理想通りの展開を見せた。

唯一の賭けは、ダンテがうまくこちらの思惑を汲み取ってくれるかどうかだったが、彼に対してのそれは杞憂に過ぎなかった。

こちらの行動をうまく利用して尾の攻撃を誘い出してくれた。そ

こから先は右腕の力で何とか強引に持っていくつもりだったが、そこまでをも彼がサポートしてくれたのには多少驚いた。やはり、こと戦闘において彼以上に頼りになる者は居ない。

「何のつもりだ、貴様ら！！」

ファントムは叫んだ。辺り構わずまき散らされた殺意に、灼熱の熱気が乗る。肌と目が焼けるようだ。それでもネロはその場から動かない。着地したダンテもまた然り。

そんな戦場の停滞はほんの僅かな時間。

急速に、駆け抜けるように、時間は動き出す。

初めに気付いたのはファントム。複眼の一つが上空に現れた巨大な影を捉えた。

次に気付いたのはダンテ。暗闇の空から降る風切り音が彼の鼓膜を静かに震わす。

最後はネロ。視界に落ちる氷の柱、地と尾を伝う激しい衝撃、耳をつんざくファントムの叫び、予想以上の空からの攻撃に息を巻きながら、ネロはその場を離れた。

「どうや！？」

氷柱と共に降りてきたのははやて。

「Ｓｗｅｅｔ，ｂａｄｙ！イイ攻撃だぜ、嬢ちゃん！」

ダンテはそのはやてに惜しみない賞賛の拍手を送った。
はやても満足そうに息を吐いて親指を立てて見せる。
そのはやての横に並ぶネロも賞賛の溜息と共に、

「スゲエな。なんでもっと早くぶちかまさなかったんだよ」

「あの外皮の上からやったら、多分、ほとんど効果は無かったやろ。普段は守られとる、柔らかい内側を直接狙えたからこそのこの威力や」

そんなもんか。簡単に言葉を返し、ネロとはやては地面を蹴った。元居た足場をファントムの火炎弾が爆砕する。

「おのれ、おのれ！！人間がぁぁぁぁぁぁぁ！！」

戦いはまだ終わってはいない。その身の強靭さが最大の武器であるファントムが、ただ一度のクリティカルヒットで倒れるわけがないのだ。

――ネロも譲ちゃんも、ガッツのある戦い方をしてくれるぜ

魔に染まる力を惜しげもなく振り撒くファントムの攻撃の最中、高速で動く視界の中で、ダンテはそう考えていた。ならば、

「じゃあ次は、俺が根性見せねえとカッコつかねえよなあ！」

ここが反撃の契機。今のファントムは驚きと戸惑いの中に居る。身体の内側に撃ち込まれた極寒の冷気はファントムに多大な苦痛を与えているだろう。軋みを上げるその身体に、もはや強大な防御力は存在しない。畳み掛けるのならこれ以上のチャンスは無い。

そう判断したダンテの行動は早い。
怒りに任せるまま放たれるファントムの攻撃を横っ飛びに避け、そのまま、地面を滑って起き上がる。
大剣の重さをまるで感じさせない仕種でそれを指先で回すと、剣はダンテの掌に逆手に収まった。剣はそのまま。構えは低く。

唸る魔力が風を呼び、噴き上がる闘志が剣を包む。鈍く、激しく、剣の刃が漆黒に輝いた。

「――――Ｄｒｉｖｅ！」

下段から上段へと。軌跡をなぞる黒い一閃は、刃から迸る一陣の衝撃波。

「Ｏｎｅ！」

もう一撃。

「Ｔｗｏ！」

さらに一撃。

三連発の衝撃波はファントムの外皮で次々にはじけ飛び、ついに、その無敵だった外皮についに亀裂が入った。

「ガァァ…！？ダンテ、ダンテェェェェェェェェ――――！！」

その断末の叫び声に向かって、ダンテは全速力で走る。疾走は風。さらなる踏み込みでその風を追い越し、

「ｙｅｅｅ

深紅のコート。
蒼く燃える右腕。
暗闇の翼。

深く鮮烈に。怒りと憎しみと共に。熱く、激しく、どこまでもファントムの感情は昂ってゆく。

「人間如きの力が、我が名に届くとはな」

認めよう。その力を。刻もう。その姿を。これから先、幾つもの月が空を横切ろうとも――――

「――――この屈辱、忘れぬぞ。忘れぬぞ!!」

叫びは衝撃となり地を震わせて、灼熱の熱気が大気を焼き、紅蓮の光がファントムを包んだ。
それは一瞬だけ激しく明滅すると、まるで花火が弾けるかのように散って、そうして、辺りに夜の静寂が戻った。

天を貫いていた炎の柱も、空気を支配していたファントムの膨大な熱も魔力も、まるで初めから何も無かったかのように消えている。後に残ったのは激しい戦いの傷跡のみ。

「帰っちまいやがった。暴れるだけ暴れやがって、たく」

肩に担いだ剣を地面に下ろして。ネロは気の抜けた声で誰にともなく言った。
辺りを支配する静寂は魔の脅威が去ったことの証だ。
戦闘領域に保っていた緊張の糸も今は適度に弛緩させている。一

息。肺にゆったりとした空気を吸い込むと、剣の排熱弁から漂う焼けた鉄とオイルの臭いが鼻をついて、思わず顔をしかめてしまった。

随分と無茶な使い方をしたが、内部機関に異常は無いだろうか。故郷の技師にあまりに酷い状態で修理を頼むと決まって苦い顔をされる。改造しすぎで調整が面倒なのだと。

「ふぅ～～～、終わったかあ……」

難しい顔で剣と睨めっこをしているネロの隣に降り立ったはやても盛大に溜息を吐いた。背負っていた3対の羽も消え、デバイスも待機状態へと戻す。

「しんどかった～～。あんまり何もしとらんけど」

それでも、あの脅威の中では精神はすり減る。

はやての感覚をぴりぴりと刺激していた異常な魔力は消え、ようやく生きた心地というものが戻きた。

何とも刺激的でデンジャラスな体験だったな、としみじみはやては思った。同時に、良い経験にもなったと。強さの高みというものを垣間見た気がする。それはティアナとスバルも同じ事だろう。そして、もう二度とは御免だというのも三者一様の見解であるに違いない。生きてるって素晴らしい。

「1アウトってとこか。お嬢ちゃんの仲間はどうだい？ピンチヒッターが必要かい？」

質問に、はやては余裕で笑顔とVサインを返す事ができた。

「残念、3アウトでゲームセットや」

念話で報告が来たのはつい先程。空間の魔力が正常値ぎりぎり程度にまでは回復しているのだ。

つまり、その他二つの魔界の孔の処理もどうにかこうにか何とかなったという事である。素晴らしい仲間達に感謝しつつ、今はここに集合をかけている。

ただ、シャマルだけは動けないらしいのでエリオとキャロと共にその場で待機だが。頑張りすぎて魔力の酸欠状態らしい。向こうも向こうで激闘だったという訳だ。

「ヒュ～♪やるねえ、時空管理局」

どんなもんや？

胸を張るはやて。両者の間を笑顔が往復する。

そうして仰いだ空に、幾つかの流星。大きな虹を描くようにその星々はこちらへと落ちてくる。

「さあて、祝賀会の後は、是非ともダンテさんとネロくんを管理局（ウチ）にスカウトしたいと思うやけどな」

「やめときな。俺もネロも、一匹狼の厄介者だぜ」

違いない。笑って、はやては空に手を振った。集う仲間達にどんなねぎらいの言葉をかけようか。

そうして、歪んだ空に囲まれたはやて達の夜は、この日、最大の異変に見舞われた。

しびれるｏｎ　ｔｈｅ　ｒａｚｚｌｅ（１）

海鳴山の中腹、海鳴温泉の脇道から、その上の展望台へと伸びる並木道がある。否、あったと言うべきか。今、その並木道で目に入るのは抉れた地面と飛び散ったコンクリート、アスファルト等の無機物のみとなっている。

道を登り、展望台へとさしかかると正面では粉砕した水飲み場の蛇口が噴水となって白い飛沫が霧となって曇った夜空の下に広がっていた。

それは、破壊が行われた後の惨状だ。

道だった物。木だった物。構造物だった物。意味あるものを砕けば、そこに出来上がるのは無意味な物質のみとなる。目に見える全ての物質には、語尾に“の残骸”とつくことだろう。

「……遅え」

その破壊の中心に一人、この破壊を行った者が居た。ヴィータだ。砕け、転がったコンクリートの塊に腰掛ける、赤い小さな後ろ姿は退屈を噛み殺した声で呟くと、足をぷらぷらさせて空を見上げた。

傾けた頭から兎の飾りが付いた帽子が落ちそうになり、慌てて頭に片手を持って行く。今度はしっかり押さえて、見る。雲のかかった空と、空を貫く青白い稲妻の柱と、そしてその向こう側を。

「どんだけ待たせてんだよ」

連なる呟きはこの場に現れる筈のもう一人に向けて放たれたもの

だった。
この稲妻の柱が現れてから１０分強、はやての待機命令からはおよそ数分。
長い時間ではないが、即日行動が基本のヴィータに首を長くさせるには十分な時間であった。何かを待つ時間というものは往々にして体感が延長されるものだ。

「……」

と無言で掲げた待機状態のグラーフアイゼンが、宙に小さなスクリーンを表示した。
厚みの無い画面に見える時刻は、この異常な空間が外界と同じ時間の流れを持っている、という前提付きで午後９時３６分。

それはちょうど、市街地でダンテら一行の前にファントムが現れ、ダンテとファントムが互いを罵り合いながら旧交を温めていた時と同じ時間帯だ。
もっとも、念話も長距離受像も出来ない今の状況でその事をヴィータが確認する手段は無いが。
せいぜい、とんでもない魔力が現れたな、とぼんやりした感覚の中で思うのみだった。

――――なんなんだ、この化物は？

もやのかかったような感覚でしか感じられないが、それでも市街地に現れたそれが今まで相手にしてきた雑魚とは天と地ほどの差があるという事くらいは分かる。

市街地に居るのは、はやてとスバル、ティアナ、そしてダンテとネロ達の筈。

「はやて、大丈夫かな?」

気にならない訳ではない。今すぐにでも飛んで行ってその無事を確認したい。

それが正直な気持ちだが、かといってこの目前の怪異を手放しにこの場を離れる事もできない。それがはやての命令だ。

ヴィータにとっては、何をおいてもはやての命令は絶対だ。

夜天の王とそれに従う守護騎士としては当然、信頼し命をすら預ける大切な家族と仲間としても。

ヴィータの抱く感情は至極単純で純粋なものだった。つまり、好意と敬意による服従である。

望みのままに、そして、望まれるままに。血と剣ではなく信頼と絆で結ばれた主従の関係は、故に、裏切る事を許さない。何よりも自分自身が。

下された命の中に、助けに来い、という条文は一切含まれなかった。それはつまり、助けは必要無いという事だ。自身に任せられた役割を果たすまでは、そこに向かうことは出来ない。信頼を置くからこそ、心配はしてはいけない。

当然果たすだろうとの前提を持って下された命に、応と答えたのは自分自身なのだ。

だからヴィータはこうして待っていた。もうすぐここに現れる筈の応援、高町なのはの事を。

「それにしても遅えな。たく、これが終わったらアイス奢りだからな」

勝手にそう決め付けて、ヴィータは心の中でなのはに呼びかけた。
次に考えるのは、何がいいかな、というその先の思考。もう既にヴィータの心は一方的に奢られる予定となったアイスの方へと動いている。

――やっぱダッツか？ストロベリーは最高だよな。あ、でもＳＡＷの鉄血味も刺激があってなかなか……

頭の中を彩る極彩色のアイスクリームに思いを馳せつつ、どれがいいか、とヴィータは選択肢を増やしていく。

一つの前提条件は地球産であること。
製作工程の一部に魔法技術が取り入れられているからだろうか。ミッドチルダのアイスは一味足りないとヴィータは常々思っている。特にバニラ味にはその差が如実に出る。ミルクのコクとバニラの香り、そして口どけの良さ。何を置いても地球産のアイスの方が勝っている。
アイスの味や趣向の事で度々衝突するリィンとも、この一点においては共通の見識を持つに至っているのでそれは間違いない。

「あ、いけね……」

と、ヴィータは思わず垂れてしまった涎を慌てた動きで拭い去った。
こんな姿をうっかりなのはに見られてやしないだろうかと辺りを探る。誰も居ない。ほっと一息。

もともと世話焼きのなのはは、何かにつけて自分を子供扱いする癖があり、それは何度注意しても直る事は無い。

――書類の束くらい一人で持てるってのに
なのはが自分を対等な目線で見てくれるのは唯一、現場に出ている時くらいなものだ、とヴィータは常々シグナムに愚痴をこぼしていた。

「やっぱこの身体だよなあ、問題は……」

夜天の書の守護騎士システムとして数百年の単位で存在し続ける自分に、成長、という概念は存在しない。
この姿で生まれ、この姿で消える。それが、システムとして生み出された自身の運命。

その事を悲観した事は一度も無いが、何もこんな幼い姿に生まなくてもよかったのに、と思った事ならば一度や二度ならずともある。
一体誰がこんな身体にプログラミングしたのだろうか、と。

――シャマル、シグナム、あたしの3トップレスで良かったじゃねーかよ

はぁ～～、と長い一息。吐き出された吐息は彼女の肩と共にその場に沈み込んだ。

少しだけ俯いたヴィータの視界に映りこんだのは地面と自身の両足だった。ぷらぷらと揺れる足。手を膝の所に持ってくると、手袋に覆われた手の平が現れる。自分でも小さいと思う手だ。

――あたしは、これ以上先には進まねーんだよな……

ふと思い、そして想えば、それは思考の連なりとなって頭の中に

広がっていく。
自分の身体の事。人とは違う、その身体を想う。

目を落とせば、そこにはこの先何も成長の無い身体がある。
武器を握れば、そこには人よりも数倍以上の力を振るう身体がある。
怪我を負えば、そこには平然と回復して見せる身体がある。

永年を付き合ってきた、自分自身の身体。
夜天の書と共に、永久に在り続けるよう創られた身体。
人の目で見える程の滅びも老いも無い身体。

――けど、今はもう違うんだよな

契機はつい最近の話。ジェイル・スカリエッティの引き起こした一連の事件の際に負った怪我の治癒に通常の倍以上の時間と魔力を消費したのがきっかけだった。それは、夜天の書の守護騎士システムに顕れたバグである。
以前から異変は感じていたが、怪我の回復や身体の耐久性などの身体機能に大幅な変調が見られ始めたのはその時からだ。

ヴィータは思った。
これは、往く先の無かった身体が、有限の命と限界のある耐久性を得たという事なのだろう、と。

――そうだよな。得たんだよな、あたし達は

失った物など何一つ無い。

夜天の書がそう望んだのか、はたまた経年劣化による限界が来た

のか。それは定かではないが、恐らくと前置きしなくとも夜天の書の主は今代が最後となるだろう。

はやてと夜天の書との契約が切れた時、同時に夜天の書も活動を停止させるであろう予測はヴォルケンリッター全員が共通して持っている。無論はやてもだ。

自身が共に歩むべきは、もはや、夜天の書という古代の遺産ではない。はやてと共に生き、死せる時は共に逝く。もうリセットされた上で次の主を迎える必要も無い。

――もしかして、これがあたしらの寿命ってやつか？

不死身とか全然違うじゃん、とヴィータは苦笑。

死を望む訳ではないが、定められた滅びというものに対して抱く嫌悪感は無かった。

永遠に続く道の上で倒れるよりも、いつか、どこかで、誰かと、そこで定められている終わりを迎えられるほうがいくらかマシに思える、というだけの事。

難しい話ではない。

とどのつまりが、

「はやてと居られりゃ、それでいいんだよな」

簡単な話だ。

思い、想えば、そこには常に大切な人の姿がある。

それは、とても幸せな事で、一世代前の自分にしてみればまるで信じられない事であった。

視界に映る手を握りこむ。小さな手だと、自分でも思った。

「――――え？」

そして、自分はどれほど思考に没頭していたのか。
長い時間ではない。
同時に、短い時間でもなかった筈だ。
気付けば、空の雲は晴れ、歪んだ空には歪な月が輝き、星々が小さく明滅している。

背後からの月明かりに落ちる幾つかの影が目に映っている。
足元に広がる一塊の影は今座っているコンクリートの塊だ。
そこから伸びる形で自分自身の影が少しだけ長く伸びている。
そして、その自分の影の横に、さらに長く伸びる影が一つ。

何か、と考える思考は一瞬。
疾風怒濤（シュテュルム・ウント・ドランク）の魔弾でぶち撒けた周囲に、自分の背丈よりも高い構造物は残ってはいない。
展望台の手すりの外、傾斜のきつい山岳部に立つ木々がこの位置に影を落とす事もありえない。

この位置に、この長さで影を落とす事が出来るのは唯一、人間だけだ。
もしくは、人間の形をした、何か。

――――なのは…、じゃねえよな！

瞬間、ヴィータは動いた。
その動きは二つの挙動の連なりであった。
腰掛けていたコンクリートの塊から前方に飛び出す挙動が一つ。
そして飛び出した動きのままグラーフアイゼンを戦闘状態で起動

する挙動が一つ。

二つの動きはほぼ同時に重なり、一度目の跳躍が着地へと収束する時には既に完全起動したグラーフアイゼンの柄はヴィータの右手に納まっていた。

たん、と。着地と地面を蹴る音とが土を舞い上げて、さらにヴィータの身を前に跳ばす。着地の間際に回転の捻りを加え、視界を身体ごと背後へ。

着地の衝撃は膝で、前方跳躍の勢いは後ろを踏む右足で、それぞれ殺し、腰を低くした体勢でヴィータは向き合った。相対距離7メートル。そこに立つ、痩身の女性と。

「――――誰だ」

無論、それがなのはであろう筈が無い。

警戒の色を濃く映すヴィータの視界の中、白磁の肌を月下に晒すその女性は、ゆっくりと、血のように赤いルージュを歪めて笑った。

・
・
・

鮮血のように鮮やかな長い赤髪。
吐き出す吐息にはほの白い電光が纏う。
青白い肌を覆うのは、影よりも黒い、闇色の衣ただ一枚。

身構えるヴィータの前で、その女性は、ただ、真っ赤なルージュを釣り上げるようにして冷たく笑っていた。

二度、同じ質問をヴィータは繰り返さなかった。
瞬間に弾け跳んだ地面の土と草とがヴィータの視界をかすめる。
それは、ヴィータの先制攻撃が穿った地面の欠片だ。早撃ちのシュワルベフリーゲンは正確に目の前の女性へと放たれた。

だが、

「なんだよ、それ……！？」

驚愕、という一言で果たして今のヴィータの心情を正確に計れるだろうか。

「ンッフフフ。本当、威勢のいいおチビちゃんね」

女性は、無傷。指先を離れたシュワルベフリーゲンの魔弾は確実にその女性を貫いたというのに。

「……どういう手品だよ」

背筋を伝う冷たい気配は脳幹の髄にまで届いている。肌に感じる魔力は桁外れに強大で、纏う魔の雰囲気は息が詰まるほどに濃密だ。
雑魚ではない、と一目で分かる。

邪悪で、凶悪な、これが――――

「悪魔」

正面から放られた言葉に、ヴィータは言い様の無い、全身が総毛立つかのような嫌悪感を感じた。まるで頭の中を見透かされているようで気持ちが悪い。吐き気にも似た、胃の奥から上がってくるその感情をぎりぎりのきわどいところでヴィータは表情に出さない。

「そう、悪魔よ。ンッフフ……。人の頭で理解出来るモノを、悪魔とは呼ばないのよ、おチビちゃん？」

「ああそうかい。たく、ワケの分かんねー奴だな。あと、あんまりチビチビ言うんじゃねーよ。あたしはヴィータだ。“鉄槌の騎士”ヴィータ！よく覚えやがれ！」

「あらあら、悪魔に名前を売ろうだなんて、魔の契約は私は専門外よ？どうしてもって言うのなら知り合いを紹介してあげてもいいけど。命と引き換えなら、人の世界を謳歌できるくらいの望みは叶うんじゃないかしら」

「ちっげーよ、このバカヤロウ！！」

ああそうだ、とヴィータは思う。

この胃の奥から上がってくる嫌悪感の正体がようやく分かった、と。

――――あの変態（ダンテ）と同じ感覚だな

言葉を交わした時に湧き上がる感情はよく似たものだった。もっとも、濁り具合と舌に絡みつく粘性の度合いはこちらの方が圧倒的に上だが。

「ネヴァン、よ」

「はあ？」

「名前よ。知りたかったんでしょう？スペルも教えましょうか？イニシャルがＮだってことくらいはその頭でも分かるわよね」

プチン。そんな音が聞こえるようだった。

もともと頑丈に出来てないヴィータの堪忍袋の緒は、そんな悪魔の挑発であっさりと千切れた。

「もういい、そこ動くなこの野郎！」

地面を一蹴り、さらに空気の壁をもう一蹴り。たった二度の加速で速度は風の領域に入る。そのスピードに腰の捻りと腕力を加算。鋼鉄の塊すら打ち崩すグラーフアイゼンの一撃を、ためらいもなく振りきる。

ネヴァンは迫る攻撃を、上体を反らすように回り込んで回避。

ヴィータは地面にアイゼンを叩き付け、その反動で攻撃を折り返す。正面。ネヴァンの姿。輪郭が歪むようにぶれたかと思った瞬間、その身体が無数のコウモリとなって羽ばたいた。

「な…っ！？」

何が起きたのか。ヴィータの思考が現実の不可思議に追いつくよ

り速く、背後に現れたネヴァンが両腕を前に回してその小柄な身体を抱きしめた。背中に柔らかいものが当たっている。背筋には冷たい気配が伝っている。
一瞬で顔色を青くしたヴィータの耳元、ネヴァンは愛を囁くような艶かしい口調で囁いた。
「乱暴なおチビちゃんね。淑女は常にしとやかにあるものよ？」
「～～～っ！？う、うるっせえ！上半身裸で何が淑女だよ！」
ヴィータは、背筋を撫でる寒気と共に背後のネヴァンをアイゼンで振り払った。あっさりとヴィータの身体は解放される。
クスクスといやらしい笑みを浮かべ、滑るように後ずさったネヴァンは豊満なバストを惜し気もなく星夜に晒してポーズを決めている。
「あら、貴女は自分の美しさに自信が無いの？ああ、そうね、そんな小さな身体じゃあ誇るべき美しさも無いのかしら。ンッフフフ」
「よーし分かった。完っっっ全にあたしを怒らせやがったな、この悪魔野郎。アイゼンでぶっ叩いてあたしと同じ背の高さにしてやるから見てやがれ！！」
ムカつく。どうしようもなく、腹の底から、心底ムカつく。怒りが物理的な力を持つのならきっとこの辺り一辺を根こそぎ焼き払っていることだろう。
それほどまでの怒りを視線に乗せて叩きつけているのだが、相変わらずネヴァンは涼しい顔で腰をくねくねさせている。忌ま忌ましい。忌ま忌ましい。羨ましい。

喉を唸らせるヴィータ。
長い髪を片手でかき上げて、そんな彼女に向かってネヴァンが告げた。
「ンッフフフ。それじゃあ、そろそろ教えてあげようかしら。悪魔流のマナーをね」

しびれるｏｎ　ｔｈｅ　ｒａｚｚｌｅ（２）

砕けた展望台と並木を駆け抜けて、戦闘は続いていた。
白い月明かりを引き裂いた赤い閃光はヴィータの放ったシュワルベフリーゲンの魔弾。

複雑に軌道を変えて飛ぶ深紅の破壊力を前に、ネヴァンは捻りを加えたステップを一つ。くるり、と一回転。腰の間際と顔の鼻先、胸元のすぐそこを通り過ぎる魔弾を悪魔の双眸はゆるりと後ろに見送る。

ほう、と紫電の混じる吐息が漏れた。赤いルージュが形作る笑みは、まるで引き裂かれた三日月のよう。
切れ長の瞳に映る赤い勇姿に、ネヴァンは悪戯心にも似た悪意の混じらない殺意を贈る。
身じろぎ、忌々しげに表情を歪めるその小柄には愛おしささえ感じる。いびつに歪み、醜く捻れ、けれどもそれは、穢れない感情の一つ。不純物の混じらない、狂気にも似た、それが悪魔の愛だ。

「ンフフフ…、これはどうかしら？」

悪魔の愛を、悪魔は正しく形に表す。
今のそれは空気にはじける紫電となって。腰にまとわり付く黒衣が闇夜に羽ばたいた。

「来るぞ…、アイゼン！」

迫り来る攻撃に、ヴィータは意識を研ぎ澄ます。

バチバチと火花の散る無数の擦過音が、光を瞬いて空気を渡る。
コウモリの姿を持つ雷だ。怖気の走るような魔力は、どれほどの威力を持つのか。
冷たい汗を背に感じ、しかし、構わずヴィータは魔弾をアイゼンで打ち出した。数は４つ。続き、もう３つを追加。速度の違う二段の射撃が閃いた。

攻撃は二人の中間で交差する。

紫電のコウモリは魔弾を迂回。羽を広げた電光が視界に迫る。総毛の立つ気配が攻撃の威力を手元に伝えていた。
地を踏み、全身にプロテクトを張り巡らせ、ヴィータは迎撃の体勢。柄の半ばを握ったコンパクトな素振りで、コウモリの悉くはアイゼンで叩き落とされた。弾けた紫電が前髪を逆立てるが、その事をまるで気に留めず、ヴィータは意識を魔弾の操作に集中させる。

深紅の破壊力は一直線に最短距離を貫いて、悪魔の眼前にその輝きを突きつける。
艶かしく唇を舐め、上体を反らせたかのような姿でネヴァンはステップを踏んだ。踊るように腰を回す。翻った黒衣の中に青白い肌を咲かせて。軌道の隙間を縫う動きが深紅の魔弾を悉く背後へ受け流した。

それは、ゆるりと流れる舞踏の動きだ。乱れた衣装を整えるかのように、片手で黒衣を撫ぜる。バヂリ、と。静電気で済ますには無理のある規模の火花が散った。

チッ。聞こえるように、魔導師は舌を打つ。
その様子をさも楽しげに、唇を弓なりに歪めて悪魔は視線を戻す。
頭を正面に構える緩慢な仕種。

言葉は無く、ただその合間に、激烈な速度で踏み込む足がある。
真正面。僅かに身構えた間合いの外側、鉄槌が大きく振りかぶられる。半歩、地面を削るようにすり足を間合いに差し込み、前傾に屈めた小柄は、しかし腕を振るわない。力を踏みしめた前足で、跳ぶ。上空。否、頭上へと。

「っ！？」

ネヴァンの視線が姿を追った。
頭上で身を捻るヴィータ。腕の軌道は振り落とすかのように上から下へ。アイゼンのハンマーが、リーチ分の遅れを伴い、その軌道を追随する。
咄嗟の判断は防御の構えだった。
両腕を頭上で構えたその姿を見て、ヴィータは、にやり、と。悪魔にも負けないほどの不敵な笑みを口元に浮かべた。

何？そんな疑問がネヴァンの思考に差し挟まる余裕も無く、上げた視線の死角に、それは来た。
魔弾。先ほどのヴィータの攻撃。テンポを変えて撃ち出された後続の３発。左胸。右足。喉下。急所と機動力、それぞれを狙った攻撃は標的を違える事無く正確にそこへと突き刺さった。

「…、カ、ァ…！？」

ッゴォ！！

炸裂した魔弾が炎を吹き出す。爆風がヴィータの騎士甲冑をはたき、熱が頬を包む。逆向きに舞い上がるおさげ髪の感触を襟首に、あらゆる雑念を渾身へと変え、彼女は膂力を振り絞る。

「りいいいいいいいやあああ――――！！」

気迫は叫びとなってネヴァンの鼓膜を揺さぶる。喉を潰された悪魔はまともな悲鳴すら上げられないまま、豪速の深紅を止める事はもはや叶わない。振り下ろす鉄槌が視界の中心を正確に貫き、悪魔の痩身は真っ二つに両断された。

「…、！？……、くそ！」

しかし。その場に浮かんだ当惑と驚愕は、赤い魔導師の一声であった。

全力の鉄槌は地面を抉り砕き、壮絶な破壊力をそこに打ち付けている。

舞い上がる粉塵。破砕されて捲れ上がった舗装。吹き散る破片。

破壊の結果は、全ての威力が正確にそこへ打ち込まれたということを物語っており、そして、その結果のみが全てだった。

攻撃と破壊の合間に、それらに混ざって粉々になっていなければならない筈の悪魔の姿は無かった。地面を砕く硬い感触以外、ヴィータの手元には伝わってきていない。空振りだ。

――――またかよチクショウ！

見上げた夜空に無数の電光。全身を真っ二つに裂けさせて、そうする事で攻撃をすり抜けた悪魔の身体は無数のコウモリへと変じて夜空に一群を成している。

戦闘が始まって以来、幾度目かのコウモリ化だった。直撃になる筈の攻撃はほとんどそれで受け流され、無効化されてしまう。

化物相手には一日の長があると自負するヴィータだが、このよう

な不気味な現象を駆使する敵とまみえたのはこれが初めてだった。どんな奴でも頭をぶち抜けば倒せる、というのが彼女の持論だったが、その考えは既に正面から否定されている。

無数の稲光は視界の中で一つに集まり、その光の中から妖艶な姿の悪魔は現れる。

「あらあら、そんな緊張した顔をしちゃって。こういうのは初めてなの？力を抜いて、身体を私に預ければすぐに良くしてアゲルわよ？」

と、寄せて上げるポーズでネヴァンはこちらを挑発してくる。さらに投げキッス。ヴィータはウザそうにそれを片手で払う。言わずとも分かるだろうが、ヴィータのムカツキ度数は目下リアルタイムに上昇中だ。

「ほうら、私の胸に飛び込んで来なさい。癒してアゲルわよ？あなたに無いモノでね」

「～～、～～～、～！！！！」

ゴゴゴゴゴ……！！と、そんな効果音が良く似合いそうな程の凄まじい形相でヴィータはネヴァンを睨みつけた。今までに無い感情が複雑に彼女の胸を締め上げていた。腹の底からボルテージが上がるのを感じる。

――――あの野郎……！少し、いやけっこう…、か、かなり……、ちっくしょうバカでかいモノくっつけやがって！！

誰かはやてを呼んで来い！きっと１０秒でケリが付く！などと。

あまりの悔しさ切なさやるせなさに思考が変な場所でぐるぐると絡まる。まったく忌々しいが、口を開くとこの世に存在してはいけない何かを生み出しそうだったので、魔導師は終始無言を貫き通した。

引き換えに酷使するのは足と頭だ。

一息分の一歩を踏み出し、間合いを計る動きと移動の動きを重ね、重心の偏りを察知されるより早くヴィータは地面を蹴って駆け出した。

相手の反応は薄い。視線を向けて身体の方向を合わせる程度。構えはハグをするような両手開きの無防備なもの。舐めてるのかそういうスタンスの戦い方なのか、どちらにしろ頭にくるので攻撃力は1．2倍にアップする。

「っらあ！！」

跳び込んだ彼我の距離は１５メートル。ヴィータの足では目と鼻の先だ。一歩目で削り取った距離の先、二歩目を踏む足は、既にグラーフアイゼンの射程に敵を捉えている。半身を前に。横に構えたアイゼンが加速する。一息を吐く刹那に、その間合いをぶち抜――――、

「――――ッ！？」

瞬間。

全ての挙動をキャンセルし、加速にブレーキをかけ、正反対のベクトルでヴィータはその場から飛び退いた。気配、視覚、様子、その行動に出たのには様々な要因があるが、最も機敏に反応したのは鋭敏極まる彼女の勘であろう。息を付く暇も無く、ヴィータはその

勘の呼びかけが正しかった事を知る。

光だ。眩い光のカーテンが、ヴィータの視界、その全てを遮ったのだ。音は衝撃を伴って小柄な身体を叩く。煽られ、乱された着地の姿勢を二歩分のバックステップで取り戻し、小柄な体躯に距離を退かせる。

前方に視界を広く取れば、その光の正体はすぐに分かった。

それは、幾つもの雷光を張り巡らせた雷撃の結界だった。ネヴァンを包み込むように、ぐるりと３６０度。あらゆる攻撃を阻む攻守一体のカウンターが、それより先への立ち入りを禁じている。

――――溜め無しでこれかよ！？

雷撃の直撃は未だ無いが、肌で感じる熱と魔力はそれだけで総毛が立つほどだ。正面から受け止めてもいい類の攻撃ではないだろう。その威力は推して知るべきだ。

さりとて、それが敵の攻略を諦める口実になりはしないが。

デバイスのグリップを強く握って、ヴィータは消えたカーテンの向こうに魔弾を放った。そこにネヴァンの姿はもう無い。無数の羽音と静電気の擦り切れる音に上を見れば、紫電に羽ばたく何百匹ものコウモリが一群を成していた。

「面倒な奴だな！」

コウモリの群全体を視覚に収めつつ、ヴィータは腕を振り指先から魔力の弾丸を浮かべる。グラーフアイゼンで打ち出された深紅の魔弾は計８発。誘導操作された８通りの軌跡を引いて飛ぶ魔弾を、コウモリは群れをちぎるように動いてかわした。

素早い羽ばたきはちぎれた集団をまた一つの群れに戻す。集まり、絡み合うようにうごめくそのコウモリが人型を作り、人型はやがて赤と白の色を得てネヴァンへと立ち戻る。

「気色悪ぃんだよ！」

ステップにベクトルの操作を加え、加速された一歩で削った距離に、ヴィータはアイゼンを振り抜いた。

グラーフアイゼンはハンマーを推進口と衝角に換装したラケーテンフォーム。魔力波の噴出によって速度と威力の跳ね上がった一撃も、しかし、ネヴァンには当たらない。当たるが、当たらない。霞か雲かを殴るかのような、無意味な手ごたえが電光を散らすのみ。

苛立ちと、若干の焦燥。手首を捻り、推進の方向を逆向きへ。返す刀で衝角が折り返す。

咄嗟の反撃にも、ネヴァンは慌てる素振りを見せなかった。とぷん、と。そんな、水面が波打つ音と共に、自身の足元の影へと深く身を沈めた悪魔の頭上を、空振りの風が通り過ぎていく。

この野郎…！口の中だけで呟いた不満を呑み込んで、ヴィータの動きはまだ止まらなかった。

剛風を薙いだアイゼンの威力に振り回される事無く、円運動の軌道に身を預け、ヴィータはその場から独楽のような動きで離脱した。

たん。地を踏む足が一つ。ひゅん。空を蹴り出す足がもう一つ。

飛び上がるヴィータの反応の直後、泡立つように膨れ上がったネヴァンの影から、幾つもの三日月が飛び出した。半分を影に沈ませ、もう半分を空に逆立てた、死神の大鎌にも似た幾つもの影だ。音も無く、空気を切り裂く感触すら無く、厚みと色の無い影は、しかし、

鋭利に研ぎ澄まされた刃の光を歴戦の魔導師に連想させた。

「次から次にわっけ分かんねえ攻撃ばっかりしやがって！」

ハッ、と。軽く吐き出したつもりの息に、肺の中の空気をほとんど持っていかれた。驚きを顔に出さぬまま、浅く身を抱けば、自身の体は予想以上の熱を持っている。消耗している、と今更気付いた。予想より早く、そして常より多く。単なる運動量と魔力消費の問題ではない。際どい攻防の繰り返しと、常識の範疇を容易く超える敵の存在に、ヴィータという存在そのものが削り取られているのである。

いったん実感してしまった疲労は、急速にヴィータの手足を蝕んでいった。かろうじて呼吸はそのままに、彼女は視界の下に悪魔の姿を見る。今までのどのような敵とも違い、予測の出来ない攻撃で、計り知れない思考で攻めてくる。悪魔と呼ばれる存在。

難敵、という一言ではまだ言葉が足りない。

強い、という表現ではこの脅威を説明できない。

「悪魔、め……」

呟きに、影から這い出したネヴァンは嫌味な微笑を浮かべた。ようやく理解したのか、と。クスクスと漏れ聞こえる嘲笑の響きは、けして静かではない夜を彩るかのように長く続く。

「何がそんなに可笑しいんだよ」

「微笑ましいのよ」

？、と。怪訝に息を呑むヴィータ。表情を汲み取るようなことはなく、ネヴァンは一方的に会話を続ける。

「私は人間のこと、それほど嫌いじゃないわよ。牙の代わりに文明を研ぎ澄ますなんて、悪魔には無い考えですもの。人間界には、魔界に無い全てがあるわ。人間界と関わりの無かった頃の魔界を知っていて？快楽も愉悦も何も無い、本当に最低な場所だったのよ。それを求めたのが、人と魔との戦いの始まりだったかしら。脆弱で、時に賢くて、時に愚かで、けれど抗う事をやめない。人間は見ていてとても愛しいわ」

「無いものねだりで押し入り強盗かよ。やっぱ最悪だな、悪魔ってーのは。賢いだの愚かだの見下して、いきなり現れて、何もかもをぶち壊して、そんな権利が悪魔にあるってのか！？」

「闘争と破壊に理由を付けたがるのも人間の面白い所ね。気に入らなければ殺すし、そうでないなら腕を開く。求め、奪い、与える。悪魔は単純で純粋よ？今の人間なんかよりも、ずっとね」

「ハッ、純粋なクズって事だろ？人様の平和に土足で踏み込んだ代償は高くつくぜ。あやまっても許さねえし、死んでもぶっ殺す！覚悟しやがれ！！」

「はあ……。女の子なのに口が悪いのね。今、自分が悪魔みたいな目つきをしているって気付いてるかしら。将来が心配になるわね……」

「ッ、な…っ！？」

心底呆れ果てた、みたいな哀れみの視線を投げかけられて、……

!?、とヴィータは無言。今しがた吐き出した気概も霧散してどこかへと消えてしまった。

今まで散々と挑発されてきたヴィータだったが、率直に言ってこれが一番こたえた。

口が悪い、目つきが険しい、というのは己でも自覚している欠点だ。はやて、なのは、シャマル、知り合いからも同じ事を言われる。何とかしよう、とも思っている。

しかし。そんな自身の欠点を、改善点を、よりにもよって悪魔に指摘されるというのはどういう事だ。それほど自分は落ちぶれているのか？そんなに口汚かったか？悪魔並に目つきが悪いのか？

なまじ自分でも自覚している欠点であるため、ヴィータの受けた衝撃と屈辱はひとしおであった。悪魔に注意されるって……、そんな悪魔に……、悪魔に……。などと、もの凄くいたたまれない気持ちになって、ヴィータの心は底無しの暗黒に沈んでいった。何という精神攻撃。

目に見えて色を失う魔導師の顔を眺めながら、悪魔は少しだけ気の毒そうな感情を瞳に映して、

「……気にしてたの？」

ごめんなさい、とまでは言われなかったが。しかし明らかにそんな感じのニュアンスを含んだ言葉に、ついにヴィータの精神は一定のボーダーラインを越えた。

「っっっっっるせーーーーーよ！！！」

どぱん、と。背後に空気の塊を炸裂させて、赤い小柄は今までに

無い劇的な速度で地面を目指した。いわゆる逆ギレである。精神の平常を保つ為、道理を不条理でぶち抜くのだ。悪魔に道理を問われている時点でどうなの？という疑問は精神の水面をひたすら掻き混ぜる事によって浮かび上がらせないようにしている。精神汚染対策は万全だ。何もかもが終わった後に自己嫌悪に襲われる可能性も否定できないが、ともあれ今は目前の脅威を薙ぎ払うべきだろう。

「あああああああああ――――――――！！！」

剛風に髪をなびかせて、グリップを握る拳を硬く強く押し固める。ラケーテンフォームのグラーフアイゼンに火を灯し、一直線の破壊力となって、ヴィータの叫びが地面を砕いた。

「ンッフフフフ……！面白いわね。私は貴女のことも嫌いじゃないわよ？」

さすが、というか何というか。速度と威力にかまけた突っ込むだけの攻撃は、当然のように回避されている。

「あたしは大っっっっ嫌いだ！！」

返す刀を言葉と共に。更なる一撃を打ち込もうと、ヴィータはアイゼンのハンマーを腕だけで振りかぶる。

過ぎ去った攻撃の後に折り返す一撃はヴィータの戦法の常だ。もっとも、本命はあくまでも初撃だが。後の一撃は、追撃というよりもこちらの体勢を整える為の牽制という意味合いが強い。無論、直撃すればただでは済まない、というのは前後どちらの打撃に言える事だが。

ただ。

この一瞬に限り、ヴィータの動きは、攻撃は、常の挙動をなぞる事はなかった。出来なかった。最大威力を振り絞った突撃の後、消耗した身体で折り返す一撃に、僅かな隙が生まれている事にヴィータは気が付いていない。

もし仮に、いつものヴィータだったなら。ミッドチルダの空下で鉄槌を担う彼女であったなら。自身の体に表れた、繊細な挙動の機微に気付いていた事だろう。この場面では追撃ではなく退避を選び、そもそも無謀な突撃を繰り出す事も無かった筈だ。

だが、今は違った。冷静な判断は僅かに鈍り、戦場の些細な動向を察知する感覚は目に見えぬ程度に綻んでいる。“普通の戦場”で、対峙する相手が“ただの強敵”のレベルであったなら、そんな状態でも十二分に戦えただろう。多少の不調くらい、押し通してしまえるほどの力がヴィータにはある。

不幸は、ここが異常な空間であり、相手が人知を超えた存在であるという事。

もしかしたら、繰り返された挑発は悪魔の狡猾な罠だったのかもしれない。薄く張り巡らせた糸に相手が引っかかり、羽を絡め取られて地に落ちるのを待つような。あるいは、積み重なった偶然が運悪く彼女の方に倒れこんできたか。

どちらにしろ、

「あら、これで終わり？」

刹那の隙を見逃す悪魔ではなかった。

――しまった！

ヴィータがそう思った時は既に手遅れ。ネヴァンの身体が膨張し、一気にコウモリの大群へと変わる。紫電を纏うコウモリの群れは、ヴィータを中心にドームを作るように羽ばたき、恐るべき魔力を電撃へと変えて放出している。

「ッ畜生……！」

脱出しようとし、踏みとどまる。シールドを最大出力で身に纏ったとして、この電撃の包囲網を無事に抜けられるだろうか。単なる憶測と恐怖だけではない。肌から感じる現実的な魔力の圧力が、その懸念を最悪の想像へと成長させている。

生まれたためらいは僅かで、仕方がない、と言えばそうなのかもしれない。どれほどの経験を積み、歴戦を潜り抜けたとて、悪魔を相手にした死闘は彼女にとって初めてだったのだから。

だが、一切のいい訳を許容しないのが戦場というものだ。

そうやってヴィータがたたらを踏む逡巡の合間、コウモリの一部は檻から離れネヴァンの姿を形作っている。雷撃の切れ間から覗くネヴァンの瞳は、冷酷さとはまた違った種類の、醒めた冷たさを持っている。それはまるで遊び飽きた玩具を見るような、そんな目だ。

残念ね。そんなふうに口元が動いた気がしたが、ヴィータには分からなかった。次に聞こえたのは、冷たく勝ち誇った、感情の乗らない悪魔の声。

「Ｓｗｅｅｔ　ｄｒｅａｍｓ」

手を唇に。処刑の合図は死の投げキッス。

バチリ。一瞬だけ瞬いたネヴァンの魔力が弾け飛び、目も眩む紫電の絶望がヴィータの身を包んだ。

閃光。地上の暗闇に大輪が咲く。

「！？」

爆風に煽られ黒衣が翻る。長い髪がバラバラの方向に吹き荒んで、舞い上がった塵が全身を細かに叩いていたが、ネヴァンはの瞳はその暴力的な破砕の結果をまともに映していてはいなかった。見開かれた瞳孔に落ちる感情は“驚愕”ただ一つ。

何故を問う必要は無いだろう。

夜空を渡った鮮やかな桃色の流星。雷の檻を消し飛ばした閃光と爆発。

眼前にあるその結果が全てで、ただある疑問は僅かに一つ。

――誰、が……！？

驚愕と疑問に思考がざわめき、跳ね上げた視線が夜空の暗闇に注がれる。

見えたのは、歪な星空に舞う一筋の燐光。塵のように、あるいは羽のように、桃色の燐光が夜空に一線を引いて長く伸びている。魔界の風に歪む夜空に在り、しかし、何ものにも冒される事無い一線は、悪魔の目に強い輝きを見せ付けるかのように、強く輝く。

――あの子のお仲間かしら？

思い、疑問に一先ずの終止符。

それ以上の考察に思考が至る間は無く、再び夜空を渡った桃色の流星が、今度はこちらの足下へと落ちてくる。

ゴウッ！！

鮮やかな光が飛沫のように飛び散り、膨大な圧力が旋風を巻き起こす。刻まれた痕跡は、破砕ではなく消滅に近い爆発。地面を抉り消し、深い溝を長く伸ばし、高熱で溶け出した地面は灼熱を孕んで蒸気を立ち昇らせている。

「あらあら、また、面白そうな子が来たわね」

ほう、と紫電に染まるため息を吐いて。コウモリから魔女の姿へと戻るネヴァンの視界に咲くのは、桃色の燐光を散らす白い明星。

「ヴィータちゃん、助けに来たよ！」

光の翼で空を蹴って、その明星――高町　なのはが速度にブレーキをかけた。

声に対する返答は呼吸一つ分程度に遅れ、

「遅えし危ねえ！！」

衝撃で薙ぎ倒された木々の茂みの中から飛び出した。

全身が泥まみれで、手足に擦り傷、スカートは焼け焦げ、それでも五体満足で、帽子を飾りのウサギごと大事そうに抱き締めたヴィータはネヴァンに相対する時と同じような壮絶な剣幕を遅れてやっ

て来た白の魔導師に向けた。

「このバカ！！！」

「ご、ごめんなさ～い！！」

ふえええ、と。ヴィータの危機一髪を救い上げたなのはは目尻に涙を浮かべた。理不尽な、とは言わない。助けるために吹き飛ばしたのは咄嗟の判断で、ぶっちゃけ自分でも無茶だと思っていたからだ。

それを実行する事が出来たのはひとえに、鉄槌のヴォルケンリッターの頑丈さを良く知っているからであり、相手を信頼しきっていたからこそ、である。まあ悪く言えば、この程度じゃ死なないだろう、という憶測での行動なのだが。

「でも、助かったってのは、事実だな……。……ありがとな」

しかし事態は結果オーライ。

帽子を被り直し、ボロボロになったバリアジャケットをリフレッシュして、ヴィータは茂みの中から姿を現した。

そうして、あらためてグラーフアイゼンを肩に担ぎ、鉄槌の騎士は夜空を見上げる。空に浮かぶ相棒へと視線一つ。意思疎通の返答は頷き一つで事足りる。

「んじゃ、反撃といくか！」

しびれるｏｎ　ｔｈｅ　ｒａｚｚｌｅ（３）

二対一。

彼我の戦力差を端的に表せばそういう事になる。だが、それだけで単純に敵の戦力が二倍になったかといえば、そうではなかった。

「突っ込むぞ、バックアップ！」

閃く赤色。激しく、苛烈に踏み込む一撃が炎のように燃え盛る。

一直線の赤い閃光は幾つもの小さな桃色の星を引き連れて、風を巻く速度で胸元まで飛んで来た。

視界の下から振り上げられる鋼鉄を避ける動きは、背後へのワンステップ。空振りの勢いを跳ね上げる敵の身へと、迎撃の意思は視線に乗る殺意の冷たさと共に舞い上がった。紫電を纏うコウモリの一群。

離れた距離と迫る攻撃に対し、その赤は何の躊躇も無く一線を引いた軌道でコウモリの群に正面から突っ込んで来た。馬鹿な。悪魔は思った。敵の動きの、その想定が崩れる。それは、予想した幾つかの行動パターンの、そのどれにも当てはまらない無謀な突貫だ。嘲笑よりも疑問が先立つ。

疑問は疑問のまま。速度を増す足取りは時間を強引に早める。一瞬の距離を割った速攻が、こちらの電撃に触れる刹那、動きを急激な速度で変化させた桃色の星々が彼女を守るかのように前方に展開された。

激突。電光が散る。音が一拍分遅れて空気に届く。衝撃が砂塵を巻き上げ、光が砕け散る。ピリピリと肌に伝わる激震。威力のぶつ

かり合いは緊迫した空気を圧力を持って唸らせた。

あの小柄はどうなったか。悪魔の目前は砂塵で暗転した視界。訪れるのは一瞬の停滞だった。次の行動へと移る、ほんの僅かな間だ。

寸前。その間を割って、何の前触れも無く、それはやって来た。停滞も足踏みも許さぬ豪速のまま、無理矢理に空気は引き裂かれた。眼前。炎纏う鉄槌。意思の燃え上がる瞳。

「――――ッ！？」

雷の群れを突き抜けたその姿に、まずは驚く。続き、判断の思考が高速で積みあがる。回避を奪う速さ。恐れを抱かぬ一歩。無謀を勇敢へと昇華させるその心胆は脅威に値する。そして、彼女の身を守ったのであろう、桃色の星、上空の白。共に脅威だ。

その悪魔の顔に浮かぶのは薄く笑う無表情。意識を外に見せないその奥で、つめたく冷えた思考は防御の動きを選択する。

全身に魔力を漲らせ、構えは両手を下げた無防備なもの。赤く輝く攻撃力はいとも容易く悪魔の左腕をもぎ取った。走る痛みを舐めるように味わって、一拍を置かず吹き飛んだ右腕をコウモリへと変じさせる。

「ンッフフ、素敵なパートナーが居たのね。嫉妬しちゃうわ」

「ほざいてろこの変態！」

声と動きが身に届く。相変わらずどちらの反応も速い。

当初の勢いを殺すことなく、胸元より下から次の打撃が折り返した。初段の空振りは織り込み済か。

次の選択は回避。正面から見据える攻撃に対し、悪魔は地を踏むリズムで動きを刻む。軸足をくるりと回転。背中に手を回す様なダンスに相手を絡め取り、膂力と遠心力の鉄槌に円運動の勢いを追加。つんのめるような形で赤い後ろ姿が背の向こうにすり抜ける。小さなその姿に右手を向けて、バヂリ、とほの白い火花が散った。

「ヴィータちゃん、跳んで！」

一瞬。星のように眩く桃色。

届いた声に赤い背中が遠ざかり、何か、と思う間も無く空気を包む圧力が気配を一変させる。首を背後の上空へ。光があった。右手をかざし、電撃の束を生み出す。遅い。紫電の輝きを攻撃として生み出す間も無く、桃色の流星が視界を埋めた。

それは、光と光のぶつかり合いである。

紫電と流星の桃色が、悪魔の手の中で燐光を散らしてせめぎ合う。膨大に撒かれた魔力が飽和し、あまりの衝撃に音が消えたような錯覚すら受ける。骨肉を伝う振動のみが不快に鼓膜を揺らして、身の軋むような感覚が悪魔の手足を舐め上げる。

――なんて…、激し…くッ！？

ドゴォォォッ――――！！

破砕。

一気に爆発した破壊力は、地面と山と、風を砕いた。バラバラに吹き荒れる突風に乗り土煙が嵐のように舞い上がる。その後に現れた破壊の痕跡は、地面を丸ごと灼熱に呑み込んだ円形のクレーターだった。膨大な熱と魔力はクレーターの断面を鏡面状に磨き上げ、

ガラスのような光沢が夜を映している。

その夜空を渡る羽ばたきの内側で、炎で身を削り取られるような鮮烈な痛みを抱いたまま、コウモリへと変じた散漫な視界で悪魔は二つの輝きを視(み)る。

空に瞬く桃色。地に輝く赤色。

光に彩られる二つの存在を、艶かしい視線が追う。

――――強い、わね……

目前の敵を、悪魔は素直にそう評する。

天空にたたずむ白は、その位置からの攻撃に終始している。星のように瞬く魔弾はこちらの電撃波と拮抗し、放たれる光の怒涛は雷撃を凌駕した。恐ろしく精密な射撃はこの身を外す事無く降り注ぎ、その後援を得た赤は攻撃の苛烈さを増して、こちらの息と息の合間に踏み込んでくる。

何が起きているのか、とは考えるまでもない。その二人が行っている事は単純な協力だ。攻撃役と応援役がいて、互いがその役目を過不足無く果たしているだけ。何の不思議も無いたった一つの連携に、しかし、自身は確実に追い詰められている。

そう、敵の戦力は二倍ではない。二倍程度で済むものか。

――――本当、人間ってどうしてこうまで強くなれるのかしら？

協力、という概念は悪魔にも存在する。

しかし、往々にしてそれはただ単に互いを敵と見なさないというだけの協定に過ぎず、裏切られる事も珍しく無いものだ。気の合う

悪魔や義理堅い悪魔などはその限りではないが、どちらにせよ少数である事に違いは無い。

もとより、そのような思考に至る知能を持つのは上級悪魔のみである。地を這いずる他を遥かに凌駕する力を持つが故に、その思考は孤独と空虚に満ちている。

ただ一つの存在。

それ以上も以下も無く、そこで完結するのが上級と呼ばれる悪魔だった。

それ以外の誰かや何かに力を預けるなど、屈服させられる以外の方法ではありえない事だ。心と心の繋がりなど考えることも出来ない。そこから得られるという不可思議な“力”も理解し難いものがある。

されど、それは確かにそこに存在する。人間、という脆弱な生き物の中に、目前の赤と白の間に、それは確かにあった。絆、と。あるいは愛と。人はそう呼ぶのだろうか。

――綺麗で、激しくて……、

それは、悪魔の目には見えない物の一つだった。人が太陽を見る事が出来ないのと同じように、悪魔にもそれを見る事は出来ない。歪で醜く磨り減った悪魔の心に、それは眩し過ぎるのだ。

喩えるなら、禁断の果実。

触れれば燃え尽きてしまう、忌避すべき一つ。

散漫な思考と視界を一つに纏め上げ、風を巻いた羽ばたきが塊となる。そうして、空と地の二つ色の前に悪魔は両腕を開いた姿を晒

した。

は、ぁ……、と。吐く息に苦痛に近いものが含まれる。白磁の肌に傷は無くとも、ダメージはきっちりその身の奥にまで通っているのだ。そう見えないだけで、底が知れないだけで、悪魔にも限界はある。許容を超えたダメージは確実な疲労を身に刻み、その先で運ばれてくる死は人間と平等に存在する。

そんな、身を包む痛みに対して、悪魔の表に出るのは相反するような妖艶な喜悦。

快楽と苦痛と、その何もかもを凌駕する、壮絶な狂気を孕んだ気配が内側で膨れ上がっている。力が満ちていくのを悪魔は全身で感じていた。魔界と人間界とを繋ぐ塔、遠くない記憶、かつてのテメンニグルで舞い踊った時に似た、熱い感情が胸の内に込み上げて来る。

「ンッフフ。イイわ、イイわよ。とても、とてもね！こんなに熱い夜はもう無いと思っていたのに、運命ってやっぱり素敵ねェ。そう思わないかしら？」

苦い表情が見える。人の身にとって、自分という存在がどれほどの脅威なのか悪魔は正しく理解していた。恐怖と混乱と、絶望と不可思議と。それほどの負の脅威を前に、目の前の二つは苦々しく眉をひそめた、ただ、それだけの表情で得物を握っている。立ち向かう、とその意思を明確にしたまま。それが、人間にとってどれほど異常な事か、この二人は分かっているのだろうか。

――――貴女達は本当に人間なのかしら？それとも、悪魔を狩る者？まさか、天使だなんて言わないでしょうね？

思考の渦に呑まれているのは、久しく感じる事のなかった不可思議の感情。謎も、痛みも、戦いも、今の悪魔の目には等しく輝いて見えた。

そうして肌に感じるのは目前の敵の強大さだ。この二つの力の前で自身はけして無敵の存在ではない。侮る事は無く、悪魔はただ、敵を敵として判断する。人間の持つ、理解し難い禁忌の“力”を知り、その“力”に魅せられた馬鹿な同胞を知るが故に。

大昔にも居たのだ、魔の大軍を相手に、人の為に剣を振るって無謀な戦いを挑み、あまつさえその戦いに勝利してしまうような、酔狂な悪魔が。

遠くない記憶にも居るのだ、笑いながら悪魔を踏み躙るくせに、魔に身を委ねた家族を失って泣く様な、中途半端な悪魔が。

思考は落ちる。過去に見えた、よく似る二つの魔の姿へと。

最大級の魔の力を持ち、しかし、それを単なる魔性と認めなかった二つの背中へと。

そして浮かび上がる想いに、悪魔は唇を舐める。心躍る戦いはまだこれからだ。白い火花が髪の先でバヂリと音を立てた。顔の鼻先で、手足の爪先で、吐き出す息にもその色は混じる。頬が引き攣るかのように歪み、唇が裂けるように微笑んで、

「ああ、もっとよ。もっと踊りましょう。月の輝く夜は悪魔と女の時間よ。……貴女達は、一体どちらなのかしら？」

・
・
・

戦闘再開の口火は既に切られていた。
機先を制するのはネヴァンの雷撃。全身から放たれた紫電が一本に集まり、強力な雷の槍となって空を迸った。
狙われたのはなのはだ。防御の動きに回避を混ぜて、空を蹴る足で翼が羽ばたく。右。灼熱と共に通り過ぎた白光に、なのはの表情が凍りついた。

――――掠っただけで、シールドごとバリアジャケットを!?

視界の片隅で舞い散る桃色の燐光は、魔力結合を強制的に解かれたバリアジャケットの残骸だ。
ネヴァンの雷撃は、オートで起動した防御シールドを易々と貫いてバリアジャケットの一部をプロテクトごと削り取っていったのだ。

(気をつけろなのは!野郎、ついに本気を出しやがった!)

(そう、みたいだね。あの雷、正面から受けたらただじゃ済まない…っと!?)

念話もそこそこ、なのはの身体が空を駆け抜けた。雷撃の威力が空を渡り、音は一呼吸の半分の時間を遅らせて鼓膜を振るわせる。
視界を瞬いて光が弾けた。脳が理解するより速くなのはが反応でき

たのは、手足に染みついた反射神経と自動回避のプログラムが体を動かしたからであろう。

地上。上目でなのはの白い姿の無事を確認しつつ、ヴィータも戦闘の動きを再開させる。靴底はアスファルトを砕き、前へ進む速度が風を生む。振り上げたグラーフアイゼンの射程は自身の踏み込みの領域と同義。カートリッジを装填した威力を両手に、鉄槌の騎士は全力の悪魔と対峙する。

「いい加減、くたばりやがれ！」

「まだ、よ。もっと楽しくなるわ、この夜は！」

ネヴァンは雷撃の攻撃力を片手に。凄絶な笑みのまま、ヴィータとの距離を詰めた。

グラーフアイゼンとネヴァンの腕が交差する。明確な意思を持った雷の速度は、ヴィータの足を僅かに凌駕した。紫電の白光が夜を照らす。ヴィータの姿はその光に圧され、ネヴァンの右側へと弾け飛ぶ。

「――――ッ、ら、あああああああ！！」

否。右へ飛んだのはヴィータの意思だ。

ギリギリまで攻撃を引き付けたヴィータは、突進の勢いを全力で右へと逃がし、空振りしたネヴァンの雷撃は地を砕くに留まる。その後に生まれる空白に渾身の膂力を唸らせて、鉄槌の騎士は本気の威力を叩き付ける。

しかしネヴァンの動きもまた速かった。

視界の端から迫る脅威に、悪魔は黒衣を掴んだ左手を大振りに薙

ぎ払う。腕に寄り添う黒衣が翻り、舞い上がった漆黒が風を切る。
それは、死神の大鎌にも似た影の刃だ。風を切る音も無く、夜の闇よりさらに暗い刃が赤い小柄の首を刈り取るかのように落ちた。

「くっ、そ…！」

驚きの呻きはヴィータの声。
常のようなカウンターではなく、相打ちを辞さない捨て身の攻撃だ。悪魔が、その身を糧に勝利を取りに来ている。その事実に、あらためてヴィータは身体の芯が冷えるかのような錯覚を感じた。

「舐めんなよ！」

その寒気を、意志の力で跳ね返す。
攻撃に向けていたアイゼンの軌道を、振り上げるかのように変更。落ちる刃とアイゼンのハンマーがぶつかり、紫電と炎が鎬（しのぎ）を削る。ガリガリガリガリ……！と、鋼鉄の抉れる音が紫電散る刃を受け流すかのように振り払った。外向きに勢いを逃がされた刃が地面を薙ぎ払い、纏う雷撃の余波がコンクリートの階段を粉々にする。

「ンッフフ……、まだまだ、よ。お嬢ちゃん！」

ネヴァンは腕を振り払ったままの姿。身をよじる動きをさらに加速させ、その回転の挙動が、アイゼンで振り払った刃に再度の息吹を与える。高速で折り返す漆黒の前で、カキン、と。ヴィータの耳に届く短い金属音。アイゼンの駆動炉で燃えていたカートリッジが排出された音だ。

――ヤッベ……！！

一瞬の虚脱感。カートリッジで底上げしていた魔力が消失し、ほんの僅かだけ、手に掛かるアイゼンの重量が増す。無論、それは単なる錯覚だ。分かっているが、だが、その僅かはこの戦いにおいて明暗を分けるには十分な僅かではあった。

一瞬で生まれた危機。しかし、諦めの思考は初めから存在しない。あるのは、この窮地をいかに切り抜けるか。戦いの記憶に刻まれた己自身を振り絞り、ヴィータは動く。

防御は論外。なのはの装甲をあっさり削り取るような攻撃に正面から拮抗できるなどとは考えない。

回避は間に合わない。敵の間合いを抉る戦い方は、こちらの回避の余地を代償として奪い去っている。

積み上がる判断の一瞬。こちらの刹那に迫る敵の攻撃に、ヴィータは最終判断として自身の攻撃をぶつけた。その動きは敵と同じ方向の回転運動。軸足を中心に体重を振り回し、受け流す要領は先程と同じく、今度は切先のみをかすめるかのように円運動を円運動で弾いていく。高速回転同士の接触はほんの数瞬で幾つもの火花を散らし、ヴィータの細やかな指に痺れる様な衝撃を伝える。

「おらあ!!」

バギン!という派手な破砕音を響かせ、ヴィータは最後の一撃を振り切る。反動はそのまま後ろ向きの推進力に変わり、一歩分の動きで間合いが大きく引き離れた。その勢いに、細かな銀色の破片が散る。グラーフアイゼンの破片だ。細かく削り取られたデバイスを握ったまま、ヴィータは荒い一呼吸。

「……」

黒衣を元の姿に戻し、攻撃の合間に静寂を挟むネヴァンが、こちらの姿を正面から見据えている。そう、正面から。考えれば、それはこの戦いが始まって以来、初めての事だったかもしれない。そう思うのは何故だろう、とヴィータは考えた。視線の向きではない。身体の向く方向でもない。

「……気持ち、か」

敵は逃げない。確実に、身を削ってまでこちらの命を取りに来ている。正面からぶつかり、せめぎ合い、その結果の果てに己の勝利があると疑わない。その頑なな気持ちが、こちらの存在を正面に捉えて、その悪魔の姿を自身の瞳は映しているのだ。

「本気って、事だな」

先程思った事をあらためて確認する。それは己自身に対する問いかけでもあった。目前の悪魔を、単なる敵ではなくそれ以上の存在として認識するための。

「ンッフフ……、その通りよ。でも、私をこんなに熱くさせたのは貴女達よ？」

「ああ、そうかい」

返事は努めて軽く。こんこん、と肩でアイゼンの重さと重心、装甲の軋み具合や内部機関の音を確かめる。使い慣れたデバイスだ、その程度の事でも大雑把な状態を把握する事はできる。その状態は、やはりというか、芳しくは無かった。あれだけ無茶に振り回せば当然といえば当然の事。

――無理させちまってるな

手に伝わった軽い振動はアイゼンからの返答だろう。問題無い、と。そう言ってくれている。頼もしい相棒だ。大丈夫、これが終わったら新品に戻してやるよ。

「えっと……、あ、悪魔、さん」

ヴィータの頭上、彼女のもう一人の相棒が高度を落として言葉を紡いだ。

悪魔さん？もっとマシな呼び方があるだろうが、とヴィータはその姿を下から睨み付ける。

にゃはは、となのははそのねめつける表情に苦笑を一つ。

ククク、と噛み殺したかのような笑いは件の悪魔さんからだった。

「ネヴァン、よ。私を呼ぶのならね」

「あ、はい。えっと、ネヴァン……、さん」

はあああああ……、となのはの足下から盛大な溜息。

「お前なあ、悪魔に“さん”って何だよ。気が抜けるからやめろよ、そういうの」

「そ、そんな事言ったって初対面なんだし……」

「悪魔と初対面もクソもあるかよ！こんな奴にまで礼儀とか気にしてんじゃねーよ！！」

「もう、ヴィータちゃんそういう言葉遣いは駄目だって……」

「うるせえよ！さっきも注意されたよ！もうほっとけよ！」

何故か涙目になるヴィータに、怪訝な表情を向けるなのは。何があったのかとても気になるが、そのあまりの形相に何も聞くことは出来ない。

「ンッフフフ……、やっぱり面白いのね、人間って」

そんな二人を前に、ネヴァンは目を細めて薄い笑いをもらしていた。いつの間にか、その格好からは無意味な力が抜けている。空中に腰かけ、組んだ足に肘を落として顎を支える姿からは、殺気や闘気といったものがまるで感じられない。

チッ。ヴィータはその様子にあからさまな嫌悪の感情をぶつけた。ネヴァンの事を最上クラスの敵として認めてはいるが、そういった余裕はやはり腹が立つ。

「テメーも、随分とその人間サマにご執心なんだな。そもそも、何の目的があってこっち側に来やがったんだ？観光とか言ったらぶッ飛ばすぞ」

「目的と言われてもね。私は、迷い込んだだけだから何とも……、まあ、あえて説明するなら、楽しみたいから、かしらね。あら、この答えじゃあ私は貴女にぶッ飛ばされちゃうのかしら？」

「大正解だ。賢いじゃねーか、悪魔野郎！」

「待って！ヴィータちゃん！」

アイゼンを両手に、再開の口火を切ろうとしたヴィータを上からの声が制した。ンだよ、と苛立たしげに視線を上げるヴィータ。

「どうせお前の事だから、言葉が通じるから話し合う事が出来る、なんて事を考えてんだろ？」

「そ、そうだよ。悪魔だって言って、だから敵だって言って、ただそれだけで戦うのは、間違ってると思うの。もちろん、問答無用で襲ってくる悪魔も沢山いたけど、でも、言葉があれば、お互いの意思と気持ちを通じ合わせることだって出来る筈だよ」

ハッ、と。ヴィータは機嫌悪く息を吐いた。上空のなのはに、鋭い視線を流す。そんな――――

「そんな甘い考えじゃあ、悪魔の事なんてこれから何一つ理解する事は出来ないわよ？」

意図に反して、言葉は悪魔の側から発せられた。ヴィータは驚き、目をその青白い肌へと向ける。

「悪魔の意思疎通は、互いの命の削り合い。砕き、弄り、陵辱し、屈服させ、奪い取る。生きる為に破壊を選ぶのが悪魔の常よ。己に寄り添うのは自分の力のみで、それ以上も以下も無い存在。きっと、それが人間と悪魔との決定的な違いで、人間には理解し難い部分なのでしょうね」

ほう、と。ネヴァンの溜息に紫電が混じる。

「人間は違うでしょう？生きる為に、守り、補い、理解し、個と個

を密接に繋ぎ合わせている。弱くても、強くても、その本質はなんら変わることがない。私達には、まるで理解できない考え方ね。根底から違うのよ、人間と悪魔はね。理解しよう、だなんて、その発想がまず間違いなの。人の言葉なんて物が悪魔に届くと本当に思っているのなら、それは愚かな事よ？」

パチリ、と火花が散る。空中に腰かけていた身体をふわりと舞わせて、細い足首が地面に降りる。話はこれまで、と。言われずとも、なのははその気配を察した。しかし、

「でも、でも――、」

「なのは！」

言葉を遮ったのはヴィータだった。鋭く睨む視線のまま、彼女はデバイスにカートリッジを差し込む。ガシャン、と外装がスライドして魔力の弾丸を飲み込んだ。柄を手のひらでくるりと回し、デバイスを敵に向ける。

「無駄だ。そういう相手じゃ、ねえんだよ」

「……」

納得いかない、とは言えなかった。悪魔自身の口から発せられた拒絶の言葉に、嘘も偽りも無いことは分かっているから。関わる事も、立ち入る事も、言葉を交わす事も、全ては無意味だ、と。目前に立つ、この悪魔は本心からそのように思っているのだ。

だがそれでも、なのはは自身の心に落ちる疑問と違和感を払拭する事が出来なかった。そういうものだと、相容れないと、ただそれ

だけの言葉で納得できれば、それはその方が良かったのかもしれない。

だけど。だけど……、と。そういうふうに心が思考の先の疑問を手元に寄せてしまう。何があって、どんな事を考えて、何をしようとしているのか。相手を理解しよう、と何よりも先にそう考えてしまう癖は、事ここに至ってなお健在である。そんな事を気にして、勝てる相手ではないと知りながらも。

せめぎ合う感情は、抱く疑問を口に出来ないまま。なのはの決心など待たず、眼下の戦闘は一切の言葉を挟まぬまま再開された。青白い雷光の轟きに感じるのは、人と魔との絶望的なまでの隔たりである。しかしだからこそ、その悪魔の姿に、大きな疑問を抱かずにはいられない。

相反し、根底から違い、言葉は無意味だと言い、そう言った、その貴女は、どうして――、

――どうして、そんなに人間のことを理解しているの？

しびれるｏｎ　ｔｈｅ　ｒａｚｚｌｅ（４）

暗闇の山岳部には幾つもの光が瞬いていた。
まるで夜空の星が地面に落ちてきたかのような眩さを放射して、光は幾つもの音と衝撃を伴う。
色は三つある。閃く赤色。奔る桃色。爆ぜるバイオレット。
それぞれの色は時に長く伸び、時に強く膨張し、時に幾つにも千切れて、光の多寡を競うようにせめぎ合う。

それはまるで、光の踊る舞踏のようだ。
より繊細に、より激しく、相手の手を取り、またはその身を引き寄せて、そして離れ、またも光は廻り、巡り、踊り、躍る。許す時間の１秒すらも止まる事無く苛烈に燃え上がる色と光の舞踏。星空のように輝く、地に落ちた星達の時間はまだ終わらない。

・
・
・

「レイジングハート、行くよ！」

響いた声は空から。その主は高町なのは。届く先は己のデバイス、レイジングハートへと。

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』

なのはの手の中でレイジングハートの補助機能が組み変わる。より高度に、より洗練されて、最高レベルの戦闘補助を己の主に与える為に。最高峰の戦闘デバイスとも言われる自身の機能を、最高領域で稼動させる。

同時になのはも戦いの思考を切り替えた。一切の容赦を捨て、目前の敵と向かい合う。それ以外の何もかもを忘れ、敵を倒す事にのみ全力を注ぐ、その為の思考へと。それが、少なからずとも自身の心を切り刻む事になろうとも。半端な覚悟で挑める相手ではない、と。なのはは理解していた。

その瞬間、一言の命令が繋ぐ双方の関係は、単なる道具とそれを担う者ではなくなった。

なのはの要求は、常に自身の裁量と技術の粋を振り絞る、最大領域の戦闘補助。魔導師の杖はその要求に確実に応え、当然、という言葉を持って杖の担い手はその補助を享受する。そこにあるのは、互いの間に一切の遠慮と躊躇を挟まぬ、文字通りの一心同体である。

主従の域を超えた関係。そこに見えるのは魔導師としての一つの完成形だと謳われる。

その姿を表し、人は曰く、稀代（エースオブエース）の最高峰と。

『Ｇｅｔ　ｒｅａｄｙ』

「機動開放（アクセル）！」

ゴッ！と。背後にかき乱れる気流を置き去りにして、なのはの身体が加速した。すでに切り替わっているデバイスの高速思考が、その合間に最適な術式を選択して展開していく。カートリッジが駆動炉に打ち込まれ、最高速度に達する前に準備は滞りなく完了する。

その一連を待っていてくれた訳ではないだろうが、敵の攻撃が視界を割ったのは丁度そのタイミングであった。チッ、チッ、チッ、と。木々の合間から瞬く光の三連。

地上から立ち昇る攻撃に対して身をひねると、翻った髪先を魔力砲撃にも似た雷の槍が通り過ぎた。その行く先を確認している暇は無い。一瞬、という時間のさらに半分で次の二発は届く。

「――ッ、――ッ！」

断続的に息を吐き出し、意図的に生み出したリズムでなのはは闇を蹴る。そのたびに足元で弾ける桃色の羽が風のような加速を身に与え、さらなる速度の高みへと魔導師の身体は達する。

チッ。チッ。速度を追いかけ、光芒の二射はほぼ同時に進行軌道に割り込んできた。急減速。胃がひっくり返りそうな強烈なGの中、宙返りをするように身を翻す。そこに届く時間差の三発目。無理に身を捻った太ももに、鋭い痛覚。熱い、ではなく痛い、と感じるほどの灼熱に目をやると、足首までを覆うスカート部のバリアジャケットが加護術式ごと半ばから削り取られていた。形式崩壊した術式が桃色の燐光を散らせ、その奥に見える白い素肌が赤く焼け爛れている。

――かすっても、マズイみたいだね……！

必要なのは、まずは距離。飛行のベクトルを上へ押し上げる。加速に引っ張られた足がピリピリと痛み、なのはは歯を食いしばった。容赦無く、その背を追う雷。急激な速度のなのはに対し、雷の槍もまた拮抗する。

幸い、と言うべきか。速度の対価として空中放電の無くなった雷の攻撃範囲はそれほど広くは無かった。紙一重でも、きっちりかわせれば被害は少ない。もっとも、太ももに受けた先のニアミスを鑑みれば、直撃を受けた時の状況など考えるまでも無いが。

――――反撃、しなくちゃ……！

肺の中の空気を丸ごと吐き出すかのような回避の動きの中、なのはは考えていた。

一呼吸の合間に連続する雷の槍に、今はまだ回避が追いついている。が、それはレイジングハートの演算予測と魔術補助をフルに用いたなのはの限界速度に達するほどのレベルでの話である。この均衡状態は、けして楽観する事は出来ない。

肉体と魔力。技量と経験。その粋を振り絞る高速戦闘は、一瞬の油断、そして偶然であっさりと形勢を覆されてしまう。限界領域での戦闘とはそういうものだ。なのははその事を、知識ではなく経験で熟知していた。

恐らく、と前置きするまでも無くこの状態はそう長くは続かない。近い内に限界が訪れるのは火を見るより明らかで、そのアドバンテージを握っているのは明らかに敵側だった。

ならばどうする、という思考の先は反撃以外には無い。

防御は考えるまでも無く不可能で、回避は最高速度でなんとか追いつける程度。こちらからの攻撃で敵の体勢を崩す他にこの状況を脱する手段は無い。

現状打破の意思はデバイスにも伝わっている。今の状況の危うさも共に。思考を持つインテリジェントデバイスならではの自動演算機能が、主人が明確な対抗術式を組み上げるより早く行動を開始した。

まず生み出されたのは幾つもの光弾、アクセルシューター。同時、杖の先端に幾重もの魔法陣が回る。そして、空を蹴るなのはの足先で羽ばたく光の翼が、ベクトルを主人の意思とは僅かに違う方向へと変える。

急に傾いた身体の動きに、しかしなのはは驚かない。その方向、軌道、速度。己のデバイスが導いたその行動の意味を、思考ではなく身体に染み付いた反射運動が明確な形にした。

やや傾いだ軌道で、下方への急加速。緩やかな曲線を描く飛行。予めの予測に支えられた回避運動は地上からの雷を的確に避ける。三発目の雷の槍とすれ違い、反撃の契機が訪れた。連続三発。これまでの攻撃を分析すると、恐らくそれが敵の連射限界だ。その後に生まれるほんの僅かな空白に、なのはは何十発ものアクセルシューターを撃ち込んだ。自動制御の魔弾は次々と地上に降り注ぐ。

眼下で魔弾の光の炸裂が砂塵を巻き上げ、敵の攻撃の手が僅かに緩んだ。見極める時間はその一瞬。回避の動きを予備動作に用意し、緩めた速度に姿勢制御を重ねる。照準補正を下方に。魔方陣展開。術式発動。収束と結束。ベクトルを一点に。

『Ｅｘｃｅｌｌｉｏｎ　Ｂｕｓｔｅｒ』

「シュー――――ト！！」

闇を打ち消す光の瀑布が、眼下の光景を明るく照らす。そこに見えたのは、夜闇に紛れる血の様な髪と青白い肌。夜空を一線に引き裂く輝きは、その手のひらから解き放たれた雷の槍の一線。

二つの輝きは、空中の一点でぶつかり合った。

大気を消し飛ばす光の炸裂は、ほんの一瞬。

恐らく、撃ち合った角度が相対していなかったのだろう。二つの砲撃のぶつかり合いはそれ以上の魔力爆発を伴わず、互いに干渉し合って軌道をまったく別の方向にずらした。膨大な破壊力を抱えたまま彼方へと逃げる二条の光線。

遥か、山岳部を縫う高速道路の橋脚を撃ち砕く魔力砲撃。衝撃で崩れ落ちる鉄筋コンクリートの塊。爆発と崩落の轟音は地響きのように遠く届く。

反対側、町の低空を渡った雷の槍は住宅街の空を越え、市街地の高層ビルを４つまとめて撃ち抜いた。無駄な破壊は無く、熱で融解したビルの撃面には綺麗な真円の風穴。

「貫通力特化の収束砲撃！やっぱり、防御とかは考えない方がいいかな……、っと！？」

その破壊の差を一瞥。しかし、考察と吟味を加える間は無く、続く雷の槍を避け、またもなのはの身が空を舞った。

――――連射間隔はだいたい０．７秒、やっぱり速い…！

目を見張る攻撃の連射速度に驚嘆一つ。冷たい緊張と重い威圧が背筋に圧し掛かる。

砲撃戦。圧倒的な制空能力を持つなのはにとって、自身の戦闘領域をここまで侵されたのは初めての経験だった。主力砲撃と同等の攻撃を連射されるのもまた同じく。なるほど、凌駕されるというのはこういう事か、となのはは心の中で自嘲気味に呟いた。

――でもこっちも、速度で勝てれば！

体の動きと共に跳ねた視線が、新たな意志の力を乗せて敵を射抜く。眼下。敵の瞳もまたこちらを向いていた。

――敗北も死線も、何も知らずにここまで来た訳じゃない！

凌駕されるのならば、その上をこちらがさらに凌駕してやればいいだけだ。簡単で単純。何もかも――、

「ぶっとばしてやるって、ヴィータちゃんならきっとそう言うんだろうね。レイジングハート！速射砲撃（クイックドロー）、行くよ！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ』

空を切る風に乗って。休み無い速度のまま、なのはは片手で地上に狙いをつけた。

カートリッジ装填。矛先に灯る魔方陣を組み替え、魔力の収束と制御を一瞬に、砲撃の威力を解き放つ。ドドドド！と手首に跳ねる反動。通常の発射シーケンスを短縮したなのはの最速砲撃、ショートバスターが機関銃のような勢いで吐き出された。

砲撃魔法の基礎に、デバイスの構えは必ず両手持ちとすべし、というものがある。

両手でなければ砲撃の反動を受け流す事が出来ないから、というのがその理由だ。ひどく単純な理由だが、単純ゆえにそれは、狙いが外れるとか体勢が崩れるとか、そういった問題の話ではない。

基礎を蔑ろにした砲撃魔法は、魔導師本人の命さえ危ぶませる。

そも、砲撃魔法の基本は二人組みだ。

強大な威力を行使する魔法ゆえ、実際にデバイスを構えて魔術砲撃を行う砲手と、その砲手を支えながら各種補助術式を展開させる台員の二人一組でなければまともに使えなかったのだ。

現在ではデバイスの高性能化、魔法の簡易化が進んでいるのでそういった二人一組の形式を取る魔導師は少なくなったが、とはいえ魔術砲撃というものが術者に多大なる負担を強いる魔法であるという事に代わりは無い。

特に、最大威力なら艦船砲撃すら凌駕するなのはの魔法は、その反動も威力に比例して大きくなる。反動の軽減を怠れば手首を壊すどころか跳ね返った衝撃で身体機能に異常をきたし、最悪の場合は実戦に出られない身体になってしまう事もあり得る。

だが、今のなのはは完全な片手持ちで砲撃の雨を地上の森にばら撒いていた。その攻撃は通常の砲撃プロセスを極端に削った最小規模のショートバスターで、通常のエクセリオンバスターの半分以下の威力しかないが、それでも砲撃級の魔法に違いは無い。砲撃戦の知識がある者ならば目を疑うような光景だろう。

ともすれば反動で弾きとびそうになるデバイスを片手で巧みに押

さえ込み、砲火を目標に集中させるのは並大抵の技量ではないのだ。

もっとも、そんな事をせずに普通に両手で構えればもっと正確に狙いが付けられるし、無用な反動に身体を踊らせる事もないのだが。

――――でも、そんな楽には……、っと!?、いかない、っね!

僅かに下がった高度で、デバイスを握らない片手を振った反動で身を反らす。鼻先を通り過ぎる熱線。息継ぎをせぬまま、もう一度短く息を吐き出し、足を振り上げ空を蹴る。沈み込んだ体、翻ったバリアジャケットを貫く雷の槍。さらにもう一度腕を振り、高度を上げつつ加速する。

なのはが片手を空けているのには理由があった。

空中での姿勢制御は飛行ベクトルの操作と手足で重心を操る質量移動（ウェイトシフト）の二つを合わせて行われる。

おおよその場合、両手はデバイスで塞がっているので重心移動には両足が使われるが、もし仮に腕の振りも合わせて使えればそれだけ空中での動きに幅が出る。つまり、回避の選択肢を増やす事ができるのだ。

両足に片手一本での重心移動。そうやって生み出した数多の回避に砲撃の反動を加え、さらに複雑になった機動でなのはは地上からの攻撃を避け、そして反撃する。地面を舐めるように穿つ砲撃の嵐は、まるで雨のように地上の目標に降り注いでいた。当然、集弾性は悪い。だが、こんな無茶な空戦術を成り立たせている時点で既に神業だ。

ガシャッ、とレイジングハートの装甲版がスライドし、空になったカートリッジを自動排出した。熱をもった蒸気が余剰魔力と共に

噴き出す。十分な冷却もせぬまま、レイジングハートは即座に次のカートリッジをリロード。機関部に叩き込まれた魔力を受け、矛先の魔方陣がまた回る。

射撃の連続。絶え間無い速射砲撃に、デバイスのフレームが軋みを上げている。焼け付くような匂い、発散しきれなかった駆動機関の熱がグリップ越しになのはに伝わる。

無理を承知の速射はレイジングハートの本体に多大な負担をかけるが、その攻撃の手を休める訳にはいかなかった。

――ごめん、耐えてレイジングハート……！

『Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ』

最高のパートナーの声を耳に、なのははさらなる砲撃を放つ。

それでも、地上に降り注ぐ光の切れ間から届く紫電の閃光は緩まない。攻撃を緩め、回避の為の急上昇。足を振り、傾いた重心にベクトル方向を合わせ、さらに加速。動きの先、軌道上に割り込む雷。一拍早く、デバイスの独自判断がなのはの身体を翻した。眼前の先に伸びる光を見送り、乱れた視界を補う為のスクリーンを睨む。光が再び。腕を振り上げる反動で飛行の方向を曲げる。急速な加速に身を任せ、視界に散る紫電。怯まず。迷わず。手の内で熱を帯びる相棒を構える。

砲火の光が、地上に降り注ぐ。

「ハ…ァッ！」

天空から届く光の雨を睨み付けて、悪魔は息を吐きながら雷光を解き放った。轟いた雷鳴がそれ以外の一切を掻き消す。物理法則を無視して地上から空へと落ちる巨大な落雷が、光の雨の一部を呑み込んだ。

轟音の後、しん、と訪れる刹那の静寂。空気の震えが止まり、ネヴァンは熱気渦巻く風に息を荒く吐き出した。魔力放出後の虚脱が全身を弛緩させ、自身が予想以上に消耗しているのだと気付く。

――本当に、全力で戦っているわ、ねッ！

思考の中に覇気を生み出し、雷撃を掴む右手を空に投じる。雷の威力を一点に、高密に圧縮されたプラズマの収束砲“アルテミスの槍”。魔界に存在する同名の魔具とは比べ物にならない規模の威力を振りまき、光は歪な空を一線に引き裂く。

あらゆる物体を貫く必殺の閃光は音より早く、紫電を跳ね上げる。夜空を切る光。音は呼吸一つ分遅れて、ただ一瞬で通り過ぎる一条が、さらに二連。三連の砲火が天地を貫き、そこで、いったん手が止まる。身を襲う虚脱感は、魔力の一時的な欠乏を意味する。ここが、連射の限度という訳だ。

悔しげに、ネヴァンの表情が歪む。この身が万全であれば。この程度で終わる事などありえないのに。

だが、目に見える限界がそれより先の攻撃を拒絶していた。

戦場の空気が変わり、終結と決着の気配が漂う中、それは当然と

いえば当然の話だろう。
向こうも、こちらも、共に全力なのだから。膂力の限り無い、激しいぶつかり合いは互いを等しく消耗させ、過負荷は否応無しに身を削っていく。世界の超常を眼下に見下ろすほどの強大な力の対決とは即ち、命に届く消耗戦に他ならない。もっとも、

「こっちは悪魔で、向こうは人間なんだけど……、くッ！？」

身に隙を許した一瞬に、光の至近弾がかすめる。
空からの攻撃が足元の地面を派手に叩き割った。身体の構成を雷電に変えて受け流す反応は遅れ、舞い上がった地面の破片が容赦無く全身に襲い掛かる。

体勢を崩したところに、さらに降り注ぐ光。身の危険を予測するが、対策は間に合わない。熱と衝撃が同時に降りかかり、その光の乱射に身を晒したまま、ネヴァンは無理やり右腕を振り上げた。投擲の挙動で舞い上がる閃光、アルテミスの槍。空に届けた攻撃を避けて、僅かに相手の攻撃が緩まった。

その切れ間にネヴァンは地面を駆け抜ける。次の槍はもう既に手の内にあった。放ち、もう一発。身の虚脱に荒い息をつく。しかし、その動きを止める訳にはいかない。こちらのアドバンテージは攻撃速度なのだ。アルテミスの槍や雷撃波と同等規模の攻撃を相手は連射できず、こちらは何とか三連射で撃ち放つ事が出来る。その有利を守りきることが、あの空の敵と拮抗する唯一の方法だ。

――――そう。唯一の、ね

溜め込んだ力を吐き出しながら、ネヴァンはその思考に冷たい感触を覚える。

戦いの中、気付けば余裕は無く、いつの間にかそのような考えを抱かせるまでに自分は追い詰められている。その事実に、胸がざわめく。

それほどまでに、敵は強いのか？この悪魔の身が全力を尽くし、渾身を振り絞り、それでも勝機を見出せないほどに、あの敵は強大なのか？

――そんな馬鹿な話、ハッ、この私が、人間なんかに！

胸の底に溜まる嫌な淀みを打ち払うように、ネヴァンはアルテミスの槍を空に放り投げる。機敏に動く敵の機動に舌打ちしながらさらにもう二つをセットで。避ける敵の動きに星のような輝きが見え、流星が地上に降り注ぐ。

電光の速度でネヴァンは地面を駆けた。背後には落ちる流星の連続。身にかする光に灼熱の痛みを覚え、しかしその程度には構わず、無我夢中で反撃の槍を撃ち放つ。

空をかすめた電光が敵に届く。命中したか。否、かすっただけだ。その証拠に、身に降りかかる光の雨は未だ止んでいない。至近弾が二つ。足を止められ、そこへ届く光。

「――、！？、ッ！！？」

灼熱の連続に叫び声も無く、打ち砕かれた右肩をそのまま、左腕を解き放つ。雷光一閃。特大の雷撃が雨を打ち晴らす。ほんのひと時の切れ間に千切れた腕を戻し、地面を蹴る。吐き出す息は荒く、熱を持った空気が内側から肺を焼いている。

いつ以来か。全力を尽くし、なお追い詰められるのは。

支配されるのが気に入らなくて、魔帝に逆らった事もある。人間にばかり興味を示す魔剣士が気に食わなくて、随分と突っかかって行ったものだ。その魔剣士の血の匂いがする狩人の坊やと舞い踊ったのは、あまり遠くない記憶。

それら数多の戦場で、魂ごと引き裂かれるかのような闘争は一度や二度では無い。だが少なくとも、その戦いの相手は人間などではなかった。魔の軍勢を、魔の力を、その身に宿した強大な悪魔達だ。脆弱な能力しか持たない筈の人間が、何故この身をここまで追い詰める事が出来るのか。

――私は、悪魔なのよ……

人が曰く、悪魔とは魔界に住まう化け物と。
それは正しい、とネヴァンは思う。欲望や闘争本能に従い、地を這う虫けらになど目もくれず、ただ一つの力として完成する、人知及ばぬ畏怖の象徴。

それが悪魔で、しかし、だと言うのなら、あの人間は何なのか。人の身で悪魔の領域に届く、その力は何だというのか。

「不相応よ、人間の分際で！」

落ちる光の瀑布に、手の中の輝きを投擲する。一線に伸びたアルテミスの槍と敵の光芒がぶつかり、夜空に光の大輪が咲いた。その光を、忌々しげに歪めた表情でネヴァンは見上げている。

「ハァ、ハァ、簡単に、打ち消すんじゃないわよ……、」

化け物め。

言葉を噛み砕き、次の雷撃を全身から生み出す。人が、人のまま、悪魔を凌駕するなど、あってはならない。ありえる訳が、

「無いでしょう！！？」

怒声混じる叫びと共に、空に放ったアルテミスの槍。すれ違いに降る桃色の流星。

直撃を避け、ネヴァンは電光を散らして大きくその場から距離をあけた。幾つもの破壊力が木々を薙ぎ倒したのはそれとほぼ同時だった。地盤が捲り上がり、膨大な砂塵が空を覆う。

淀む空の視界に構わず、ネヴァンは手の中にアルテミスの槍を生み出した。攻撃の速度を緩める事は出来ない。おおよその狙いで槍を放ち、瞬間、舞い上がった砂塵の中でネヴァンの心胆は一瞬で冷え切った。

砂塵の煙幕を突破して、正面にこちらを貫く視線がある。しまった、と自身の迂闊を呪うが、もはや遅い。

地上を駆ける紅蓮の赤が、手にした破壊力と共に、眼前に迫る。

――――たく、なのはの奴無茶しやがって！

ヴィータの見上げる空で、紫電の光線を避けながらなのはが戦っている。回避優先の空躍機動（ショートステップ）に、まともな構えも無いまま砲撃を乱

射する、傍目から見ても無謀だと思える方法で。

制動も反動の減滅もできない戦い方は、どれほどの負担をデバイスと術者本人に強いるのだろうか。分からないが、そんな無謀がそう長く続く訳が無い。そんな事ぐらい、なのは本人は承知の上だろう。そうでもしなければ対抗できない、と思っているのか。命を掛け値にして、ようやく手の届く、それが悪魔の力だと。

――ああ、確かに、その通りかもしれねえな！

吹き荒れる破壊の怒涛を空から、駆け抜ける紫電の姿を見極めて、ヴィータは攻防の刹那に割り込んだ。真っ直ぐ。迷い無く解き放たれた攻撃は、それ以外の一切を排した一直線の破壊力となる。

「――、チッ、勘のいい奴だ」

鉄槌の破壊力が敵の間合いを割る一瞬、上空に注意の向いていた悪魔の意識がこちらに向く。ぞわり、と総毛立つような殺気。全身に死の気配を色濃く匂わせる悪魔は、もはやこの姿を懐に招き入れるつもりはないらしい。広げた胸元から迸る火花の大蛇、地を駆ける雷撃の帯が足元に迫る。

マズイ、と。瞬間の思考が次の行動に退避を選ぶ。なのはのバリアジャケットを易々と削り取る威力の雷撃に正面から突っ込む愚を犯す事などありえない。

直線に進む足を僅かに傾け、身体を沈み込ませるように屈伸し、しかし。

「ここまで来て、後ろになんざ退けねーんだよ！！」

後も先も考えぬ無茶な攻撃で、あのなのはが敵に対抗している。その先にある確実な己の破滅を知りながら、なお攻撃を止めぬなのはを前に、退く、という思考はヴィータの頭から完全に消え去っていた。

常ならば、それはきっと愚かで忌避すべき行動だったろう。スバルやティアナがこんな事をしたらゲンコツ程度じゃきっと済まない。

しかし今は、それまでの常識が一切通用しない悪魔の領域だった。ここで退けば、もはや、これより先に勝利を見る事など出来はしない。無茶も無謀も承知の上。

――――そんなモン、全部ひっくるめて、

「ぶっとばしてやる!!」

踏みしめた足を思い切り蹴り出し、屈伸した身体をバネに、雷撃の蛇を飛び越える。空中に放電される余波が身を焼くが、鉄槌の騎士は欠片も怯まない。

悪魔が驚いたかのように目を見開いた。瞳に映り込む感情の色に、負の気配が見える。悪魔という存在に、恐怖などという殊勝な感情があるのかどうかは定かではないが、この一瞬が勝負の分かれ目だという事はヴィータにも分かった。

懐に突っ込む身体に、悪魔は忌々しそうな表情。そして、右手に握った電光の塊、空に向けて放たれていた雷の矛先が、こちらを向く。閃光。何が、と思った瞬間に攻撃は届いていた。左肩に衝撃。次いで灼熱の激痛。左腕から力が抜け、肩を撃ち貫かれたのだと気

付く間も無く、次の光が悪魔の手の中で閃いた。

雷の槍。

速度と、貫通力。無用な破壊を生み出さない純粋な力の凝縮が、今度は、一直線、こちらの額を狙って撃ち出された。

「りいいいいいいやあああああああああ――――――――――――！！！」

それでも、鉄槌の騎士は揺るがなかった。この程度の痛みなど。在るのはただ、勝利へと伸びる、この腕のみ。ただの一歩も退かず。渾身の意思を握る腕に、全力の力が集う。

直線の軌道、狙いを違わぬ光の一線に、グラーフアイゼンを叩きつける。紅蓮燃え盛るアイゼン、紫電纏う雷。短く、されど永い、ほんの一秒のせめぎ合い。

その一秒に決着をつけたのは、きっと単なる魔力の差などではなかったろう。あらゆる不可能を覆す、それは、強靭な意志の力。限界よりもさらに深い場所から生み出される力が、悪魔の雷を真っ直ぐに打ち返した。

驚愕。悪魔の表情に、目に見えるほどの感情の色が表れた。

往復する雷の槍は時間を消し飛ばすかのような速さで悪魔のもとへ戻る。咄嗟の行動に、悪魔は左手を振った。特大の火花を散らして指先で８つに砕けた槍がその背後に強大な破壊力をぶつける。

そして、動きが止まる。避けるのではなく、受けてしまった、その誤った判断が導く結果は続く悪魔の挙動を僅かに半秒だけ奪い去った。

十分だった。

刹那とも言える時間の合間に重なり合ったのは、幾つもの判断と行動と偶然だ。

なのはの攻撃によって作られた煙幕で機先を制し、敵の攻撃を浴び、それでも前へ、敵の攻撃を無理やり跳ね返した。

実際は、本当に出来ると思ってやった事ではない。それ以外の選択肢が浮かばなかったから、そうしたまでの事で、しかし、その行動は今、確実に実を結んでいる。

前へ進む勢いのみを作り出す両足は、もはや止まらない。これより先はもう無いと分かっているから。だから、ともすれば意識を手放しそうになる身体を奮い立たせ、足を、前へ。

目指す一点は目前。動きを止めた、悪魔の元へ――――、

「ラケェェェェェテンハンマアアアアーーーーー！！！」

他を全て廃した渾身。一点を貫く破壊力。純粋に、ただ届け、と。

攻撃はその願いを受け、最大級の加速は容易く音を置き去りにした。

激突はもはや衝撃すらも打ち消すかのよう。両手を交差した敵のブロックを、もろとも、壮絶な破壊力が吹き飛ばした。

しびれるｏｎ　ｔｈｅ　ｒａｚｚｌｅ（５）

ネヴァンの知覚の中を一瞬で吹き抜ける風がある。
風は炎を纏い、紅蓮に輝く一陣の破壊力を眼前に運ぶ。
一切の逡巡の無い直線軌道は雷の速度を越え、やがて音の領域をも踏み切った。
削られた間合いの内側、風鳴りの音が気高く吼える。

「ラケェェェェェテンハンマアアアアアーーーーーー！！！」

その身の限りを尽くした一瞬が、こちらに届く。
硬直した身体に避ける間は無い。身構える時も僅かに、覚悟の瞬間のみが閃きの如く目前へと――――

衝撃。
ネヴァンを取り巻く全ての世界が回った。
衝撃に揺れる木々。
歪んだ光の星々。
切れ長の月が飾る黒い空。
闇に溶ける深緑を背景に、飛沫を上げる土と石。
静止したかのように圧縮された時間の感覚の中でさえ、地面に身体が落ちたのだと理解する間は無かった。再び動き出した時間の加速は一息に。最高速まで、ほんの１／６０秒。

「――――――――――――――――！！」

百か千か、数えるのも馬鹿らしくなるほどの苛烈な速度と衝撃の

連続がネヴァンを襲った。
勢いに引きずられる体は瞬く間に緩やかな斜面に破壊の軌跡を残す。

ズズ…、ン！！

天地も定かではないまま、ひときわ大きな衝撃に体が浮き上がる。
張り出した岩にぶち当たったのだと、痛みに酔った感覚が教えてくる。その後に続くのは、重力に後ろ髪を引かれるような遊離の感覚。

落ちる。
ごっ、という音を頭蓋に響く振動が直に伝えた。
僅かな実感に留まる痛みは、骨格ごと全身が軋むような激痛と肌を叩く石くれの雨。
かろうじて繋ぎとめた意識は仰向けで、鉄の匂いのする吐息と共に、歪んだ視界に映る黒と赤。夜と血の色だった。

「……は、……ク、…、」

それでも、いつまでも寝ているわけにはいかない。これ以上の無防備をあれの前に晒すような愚など無い。
しかし、無理に立ち上がった視界はすぐさまブレる。平常ではなくなった地面を踏む足が揺れ、ぐらぐらと歪む景色に酷い吐き気を覚える。
身体を僅かに動かすたびに骨が軋む音がして、あらゆる感覚の中でそれだけが鮮明であり正常であった。悪魔の頑強さを思わず呪ってしまうくらいに。

――――侮った…、わね……

自嘲気味な思考に吐き出す心は後悔の一念。
虚を突かれた敵の攻撃を受け流す事は間に合わず、何とか止めようと放った攻撃は意味を成さず、単純な防衛本能からの防御はもろとも打ち砕かれ、正真正銘の直撃がこの身を叩いた。
前へ、前へと踏み出し続けた紅蓮の鉄槌が、ついにこの悪魔の核心を穿った瞬間だ。

何を間違えたか。
省みるならば、それはただ一つの認識であろう。

――人間…、と。そう思ったのがね……

攻撃を容赦した覚えは無い。油断があった訳でも。敵は強く、こちらと同等の力を持ち、同格の相手だと、そう認めていた。
しかし、それでもあの敵を人間と見た事だけが、ただ一つの過ちだった。

悪魔にも、戦い方や流儀というものがある。力任せに荒ぶるだけが悪魔の全てではない。
例えば、魔獣と戦う場合、その戦いは互いの五体を微塵にするまで勝どきを上げる事の無い殲滅戦となるだろう。そう簡単に死ぬような獣は魔界には居ない。
悪魔と戦うのならば、それは力と思考の競い合いだ。悪魔の身に最も致命的な傷を与えるのは、祝福を受けた十字架などではなく同じ魔性を持つ悪魔の牙なのだから。
人間の愚かは、太古の勘違いを今もなお継続している所だろう。
魔が神を恐れるなどと、悪魔の口から聞いた訳でもあるまいに。

認識のもたらす戦い方の違いに、ならば、人間と戦う時は一体どうするのだろうか、と。

改めて思う頭の声に、明確な返答は出来なかった。当然だ。人間など、そもそもが争い合う対象ではないのだから。

武器も牙も持たず、唯一の知識すら曖昧で。餌かオモチャか、その程度にしか人間を見ない下劣な悪魔とは違うが、さりとてそれが自身と対等と思うはずも無い。

――人間、にんげん、ニンゲン……

だというのに。その序列が変わる事など無い筈なのに。アレは、あの人間は何なんだ。何故、この体がここまで傷つくのだろうか。血が流れるのだろうか。

揺れる視界、ぼやけた思考、自身の吐息の音が耳元で聞こえた。煮え滾るような感情が悪魔の腹の底で熱を帯びている。

しかし不思議と、ネヴァンの口からは僅かな笑いが漏れていた。自嘲でも、嘲笑でもなく、懐かしい過去の記憶を辿る懐古の感情による微笑が。

思い出していたのだ。はるか昔の魔界の記憶を、うすぼやけた思考の中に。人の強さを謳った、愚かしくも強力だった悪魔の記憶と共に。

もしも。

そう、もしも。

あの、律儀な悪魔が同じ立場だったならば。こんな時には、見事、とでも相手を称するのだろうか。

ああ、きっとそうだろう。そういう悪魔だった。勝とうとも、負けようとも、他と己を同列で語るような、おかしな悪魔だ。

闘争と支配しか存在しなかった魔界で唯一、それ以外の何かを持っていたような気がする。それを羨ましいとも、理解できないとも思った。

「――フ、フフ、そうね、そんな悪魔（オトコ）も、居たわよね……、！？」

ザガッ！と地面を削る足音。右から来る気配。風の動きが敵の攻撃を伝え、ネヴァンの腕が反射に近い動きで跳ね上がった。振り向きざま、ネヴァンはその腕をまっすぐにその気配へと伸ばす。

爆炎。高熱。衝撃。

それらが、ネヴァンの腕が新たに掴み取った全てである。

火炎の暴風が肌を赤く染め上げていた。

肉の焼ける匂いと骨の砕ける感触。

それでもネヴァンは掴み取ったそれを放さない。もはや神経のみで繋がった指を感触に喰い込ませ、その苦痛を諸共に握り締めた。

ゆらり、陽炎で揺らめく視界越し、奥に見えるのはもはや見慣れた紅の姿。

「な……っ！？」

幼い表情にかげる、青ざめた驚愕の色。

亀裂のような微笑が、悪魔の顔に浮かんだ。

「フ…、フフ……」

正確な話をすれば、この時最も驚いたのはネヴァン自身の方であった。

強靭な悪魔の身を持ってしても、度重なるダメージの蓄積は確実に命を削る。もはや限界に近いこの身体で、あの紅の一撃を正面に捉える事は出来ないだろう、と。そうネヴァンは考えていた。

実際、打ち付けられたこの鉄槌が先と同等に近い威力ならば、今の一瞬で勝負は決していた事だろう。

だがそうはならなかった。
何故か、と考えるまでも無くその理由は明白だ。焼かれた手の内にある苦痛、それそのものが今は証明となっている。

――――奪えなかったわね

この命を、この腕もろともに。
機会を決する攻撃力はもはや敵には無い。苛烈さのにぶった鉄槌は、敵もまたこちらと同様に限界を迎えているのだという証拠だ。
そして、向かい合う互いが共に極限ならば、決着は機先の奪い合いに帰着するだろう。当てれば倒せる、まるで子供の喧嘩だ。

そういうのも悪くはない。単純な思考路でネヴァンはそう思った。
死力を尽くすのもたまには良いと。

「――――終わりよ、お嬢ちゃん」

たまには、そういう勝ち方も、在っていい。

・
・
・

悲愴な感触がヴィータの心胆を撫で上げた。掴まれたアイゼンの穂先にある、妖艶な悪魔の微笑みがその感触の大元だ。

「――――終わりよ、お嬢ちゃん」

囁くような悪魔の声がすぐ近くに聞こえる。

マズイ、と思うよりも早く身体は動く。

掴み取られたアイゼンを待機状態へ戻し、敵の束縛を脱する。一息も挟まず、地面を蹴ってバックステップ。それとほぼ同時、眼前の視界が光で覆われた。身体が押し流されるような感覚、バリアジャケットの加護術式が防御壁を自動展開しているのだ。防御壁の過負荷は物理的な力となって術者にかかる。まばゆい光に押し込まれるように、急速に削り取られる防御壁。長くは保てない。稼げる時間は僅かに半秒。判断と行動を同時実行し、ヴィータはアイゼンを再起動、更なるシールドを全力で。

防御壁を破った電光に髪が逆立つ。総毛が走るようにざわめき、光が、強く……。

「ぐ、……、っ……」

にわかな意識の覚醒は、まず痛みから始まった。

喉を通った苦悶の声は無意識の産物であったが、頭の芯からつま

先までが焼け爛れた様なひどい激痛は確実な意識化にある心身の防衛反応である。
これ以上の無理は命に関わるぞ、と。
それと同時に、ヴィータはもう一つの事実に気付いた。
自分がまだ息をしているという事だ。

――まだ、生き、てんのか……

意識がまばら過ぎて実感が無いが、呼吸をしている以上はそういう事なのだろう。
結果と結論を直結させるような思考運動が次に求めたのは、今の事態の把握である。
外界の情報。
まずは視界、霞む視界には夜の闇に落ちる土の地面が映っている。
次に感触、頬にあるのは冷たいざらつくような感覚だ。
最後に自分、動かした指が土を握り締めた。
結論は、前のめりに倒れているという無様な自身の姿だった。

――くそ、何が、どうなった……？

一番重要な情報が欠けていた。何故を生み出す思考に答えが返らない。まるで、記憶のブレーカーが落ちているかのようだ。一瞬分の記憶が飛んで、そこから前へと記憶の伝達が至らない。
そんな自身の状態をもどかしいとは思わなかった。ただ、ヤバイ、とそれだけの気持ちが反芻する。
まずは身を起こさねば。倒れた伏したまま、事態が好転するような事はありえないのだから。

「く……、」

騎士として産まれ持った頑丈さの賜物なのだろう。痛んだ身体ではあったが起き上がるに十分な体力はまだ体の底に残っていた。

四肢を伝う痛みが鮮烈に神経を突き上げてくる。その他の五感ははかなり鈍っているようで、鼻につくのは土と血の匂いだけだ。

薄い視界には暗闇だけが映り、やけにしんとした静けさの中、ざりっ、と土を踏む足音。

――――……！？

一斉に、落ちていたブレーカーが上がった。

今までの千鳥足のような思考がまるで嘘であるかのように、急速にヴィータの頭は事態を理解する。

悪魔と戦っている。不意をつき、反撃を返す事が出来た。しかし、そこからの追撃は防がれてしまった。そして今は、敵の攻撃順序（ターン）である。

思考は一瞬。行動は一拍遅れてそれに追随する。

鉛のように重たい身体を跳ね上げて、ヴィータは視線を周囲に飛ばした。

見つける。

迫る雷光。

腕を振り上げた悪魔の姿がそこにある。

咄嗟に出たのは、日々の訓練で身についた防御反応だった。下から上へ、最短で最も単純な軌道をアイゼンが走る。

攻撃と防御はちょうどヴィータの頭上でぶつかった。電撃を纏う腕が弾かれ、突き上げたアイゼンが反動を返す。ミシ、と身体の各所が悲鳴を上げた。歯を食いしばる。

そこまでは堪えられたが、払った敵の腕先で放電した雷撃の余波までには対処が追いつかない。

突風のような衝撃波が身体を叩いた。

「ぐ、あっ……！」

成す術は無かった。

体は弾かれ、受身を取れるほど良好な状態でもなく、術技書の悪例に挙げられるような派手な接地でヴィータの体は地面に転がった。一転。二転。息がつまり、鈍い痛みが全身に広がる。

「く、そ……、」

思った以上にダメージは蓄積されていた。

手足は鈍重で、思考は混濁で、手にしたアイゼンがやけに重く感じる。かろうじて立ち上がろうとする膝にも、見据える瞳にも、うまく力が入らない。

「ようやく限界、かしら？」

敵が近づいてくる。じりじりと間を詰める歩調はこちらの反撃を警戒しているからだろうか。

油断無く、確実にこの首を切って落とす為に、短い一歩をゆっくりと積み重ねて、敵はじわりと間合いをゼロに戻していく。

慎重なやり方だ。逆に言えば、そこまで慎重にならざるを得ないほど相手も追い詰められているという事だろう。絶望的なまでの力の差があると思えた、あの悪魔が。

「っ、……く……、」

ようやく同じ舞台に立った。互いの全力が拮抗する、その領域にまで悪魔を引き摺り下ろすことができた。

しかし、だというのに、この肝心なときに身体が動かない。

――ここまでなのか……？

どうにもならない絶望の中に、不意に、光が咲いた。

地上で炸裂した、花のような桃色の光が。

戦場の風が吹いた。僅かな衝撃と地面の鳴動は爆風のような戦いの音だった。

戦いは続いている。空より舞い降りる白い姿が、ヴィータにその事を思い出させる。力強い羽ばたきを持った、エースオブエースの姿が。

「なの…、は……」

諦めるには早いと、そう、語っている。

・
・
・

暗闇に舞う電撃を目指し、なのはは空を駆け抜けた。

白い杖の穂先に生まれた光が瞬き、三連の咆哮が桃色の線を短く

引く。ショートバスターだ。通常の連射速度を保ったバースト射撃は、狙いを確かに空を彩った。

足を振り、その踵で翼が羽ばたく。急停止、後に加速。回避の軌道。

空の彩色は桃色の一種類ではない。鮮やかな紫電の光が弾け、はっ、となのははは息を吐き出す。肺の空気を半分にし、加速のリズムを右へ。下方から昇った雷撃を回り込み、蹴り出した足の反動で姿勢を整える。反撃の軌道。

照準は片手で。速度に揺れる視界の中、経験と勘が狙いを絞り込む。光が飛んだ。立て続けに二発。さらに跳躍のような空戦軌道で、三発。ベクトルを下方修正し、落下の速度で一発。

組み合わせた戦術が魔力光を散らし、爆裂の応酬が突風を空に運ぶ。風に揺れる髪に視線を取られぬように首を振り乱し、目を焼くような光に目を逸らさず、白いバリアジャケットは真っ直ぐ落ちる。

「はぁ、はぁ…、ヴィータ、ちゃん…！」

漏らした声で、息が上がっている事になのははは気付いた。次いで、腕の痛みに気付く。指先から肘にかけて、痺れる様な痛みがある。無茶なショートバスターの連射が原因だろうとなのははは思った。過去の怪我と照らして、恐らく、本来ならば堪える事が困難なほどの激痛を伴うであろう損傷だ、とも。

今空を飛べているのは、戦闘用に切り替わった脳がそれらの事実を無視して無理矢理に身体を動かしているからに過ぎない。危険な起動状態だ。

生物としての正常なリミッターを狂わせてまで、しかし、動き、戦う事をやめる訳にはいかない。

近く訪れるであろう破綻を正面に見据えながらも、既に立ち止ま

る選択肢は捨てた後だった。

なのはの寄る辺は、砲撃の撃ち合いを制したという事実ただ一つに尽きる。

敵よりの反撃は先程よりも目に見えて少なく、一発に込められた力も弱くなっている。正面に捉える事が出来たならば、おそらくエクセリオンバスターであの雷撃を迎え撃つ事も可能だろう。

今しかない、と気持ちと鼓動が早鐘の様に鳴る。

速度と威力のアドバンテージが共にこの手の内にあるのだ。残された時間がもう僅かである以上、ここが畳み掛ける最後の機会である事は間違いない。

――――それは分かってるんだけど……！

一気呵成。数年前ならば、なのはもその選択を選んだろう。気合に任せて魔力で押し切るのは得意な戦法だ。

だが、早計な選択と未熟な突撃の末にあるのは、時として生死の淵を垣間見るような悲惨なものであると、なのはは知っている。自身の命を削った経験は、今もなおリアルな想像をまぶたの裏で再生させる。その恐怖は、忘れ難いものだ。

しかし――――

「ヴィータちゃん！」

「なの…、は……」

風切りに混じり、弱々しく途切れるヴィータの声。

恐怖と共に、臆さず前へ。

一斉を持って全力と成す為の、その理由がここにはある。
心胆は熱く、しかし努めて冷静に。
敵と自身との、“力”の間合いを感覚で推し量る。
――回避を優先して、攻撃は最小限に、そして最大の一撃で決める……！

砲撃の理はこちらに。
だが、それはこちらの勢いが敵を凌駕した、というよりも相手側の気勢が弱体化したと言った方が正確だろう。
空よりの砲撃と、先程のヴィータの攻撃、その両方に晒されて、しかし、悪魔の威圧は未だこちらの背筋を凍らせる。軽んじてもいい攻撃など在ろう筈が無い。

一手先には常に死がある状況で、なのはの瞳は更に力強く敵を射抜いていた。

「行くよ、レイジングハート」

ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ。言葉の代わりに、身震いのような手応えを返すレイジングハート。頷きと微笑みがなのはの表情に同時に表れ、それはすぐに険の表情へと戻る。

「…っ、」

息を吐く。下向きの速度を打ち消し左方への回避。雷撃の槍を避け、旋回。螺旋を描くように、もう一度下へ。振り戻した視界には既に敵からの攻撃の光があった。
雷光と白亜の交差は超高速の一瞬だ。ヂリィ、とバリアジャケットが削り取られる音は金属の擦過音によく似ている。耳障りな異音

は、戦場ではけして聞こえてはいけない種類の音だ。
削られたジャケットの残骸は燐光のような淡い輝きを散らして、空に羽ばたく光の翼は止まらない。

杖を直下に。
構えた矛先に光の帯が渦を巻く。術式展開。魔力収束。魔術形成のプロセスを全てカット、余剰魔力と大気中の浮遊魔力を限界まで集める。照準は無く、構えのみで付けた狙いへ向かい、

「エクセリオンバスター――――――――！！！」

光の柱が、天地を貫いた。
爆裂。大気の鳴動と地面の破砕は同時だ。まるで噴火のような勢いで岩塊と土煙が巻き上がった。膨大な量の粉塵はなのはの高度をさらに超える。

「っぷぁ、けほっ、けほっ、」

ぼすん、と地上から巻き上がる石くれと砂の暴風から逃れて、なのはがふらふらと地上へ降り立った。

「ちょっと、やりすぎちゃったかな？」

黒い夜をさらに覆う粉塵を見上げながら、我ながらと思いつつもなのははそう呟いた。問題ありません、とレイジングハートが声に応える。

魔力爆発と通常の物理爆発の最大の違いはその指向性である。
火薬等の炸裂による物理爆発では、爆発源である火薬の量と炸裂方向の調整でしかその指向性を決定できない。しかし、魔力爆発は

事前に組み込まれた制御術式によって、熱量や衝撃、それらの拡散率を自在に制御できる。核爆発に匹敵する熱量を花火程度の爆発力にまで圧縮できる、とそれは極端な例ではあるが、けして間違いではない。魔力爆発とはそういうものだ。

特に、なのはの扱う砲撃魔法にはその魔力爆発の性質が高度に取り入れられている。

着弾後の爆発に集中した指向性を持たせる事によって貫通力の底上げを行ったり、逆に拡散率を広角に設定する事で広域を薙ぎ払ったり、同じ魔法を使う場合においてもその性質は択一ではない。

なのはの砲撃が防御不可と呼ばれる所以は爆発的な魔力量でも収束技術でも無く、完璧に計算された術式処理にあるのだ。

「ヴィータちゃん大丈夫かな……？」

とはいえ、今回は面倒な計算処理は大雑把にしか行っていない。そんな暇は無かったのだ。爆発が無駄に拡散しないよう調整はしたが、地盤ごと捲り上がった斜面を見るに、そううまくはいかなかった様子だ。

多少、いや結構、……割と本気で地上に倒れていたヴィータの事が心配になってくる。

あの鉄槌の騎士に万が一などは無いと思うが、いや、でもだいぶ弱ってたし……、あーーー、もうちょっと弱めに撃っとけば……、でもそれだと相手に防がれちゃうし……。

などと若干涙目になりつつもなのはが辺りを探していると、

「オイ」

聞き慣れた声が頭上から降ってきた。

「ヴィータちゃん！」

見上げるなのは。見つけたのはひどく疲れた顔をしたヴィータのじと目であった。

上下のひっくり返った大木の根っこに、これまた上下逆さまに引っ掛かっているヴィータは器用に腕を組みながらじーーーーーーーーっとなのはの事を見つめていた。

「言っとくけどな、騎士（あたし）じゃなかったら死んでたぞ」

「ご、ごめんなさい」

まともな接地のできる地面であったなら即座に正座、場合によっては土下座をかましていただろうほどの剣幕に思わずマジ謝罪のなのはである。

「ええ、本当に――――」

その時だ。頭を垂れるなのはと木に引っ掛かっているスカートの裾を破くヴィータ、二人のすぐ傍に風が吹くような気配が生まれた。

小さなつむじ風だ。

淡い紫電を含んだ冷たい風が、

「悪魔（わたし）じゃなきゃ、死んでるわ」

声は殺意と共に現れる。

「テ、メェ……！」

「そんな……」

驚愕を当然と受け取り、ネヴァンは両手を前に。手のひらを開き合わせた、まるで花弁が開いているかのような構えを二人に向ける。高密に凝縮された魔力がその手の中で凶悪な光を湛えていた。アルテミスの槍。魔界の雷槍が、解き放たれる。

咄嗟、なのはの行動は退避の選択だ。

傍らのヴィータへと腕を伸ばす。目算で二秒、それがなのはの見立てた猶予の時間だった。フライヤーフィンの魔法式を頭で高速展開、伸ばした指先がヴィータのジャケットに触れた。乱暴に握り締める。飛び上がろうと屈伸した足が、

「え？」

膝が落ちた。ヴィータのジャケットにかけていた指が離れ、倒れ込むように身体が傾く。何故。分からない、と思う思考に遅れて、痺れに似た鈍痛がじわりと広がる。

――――嘘、こんな時に！？

限界が来てしまった。

いや、違う。とうの昔に、身体は限界だったのだ。そんな事は分かっていた筈だった。その身体を騙し、無理に動かしていた物は何だったか。

意思。負けられない、と思う意思の力がなのはの身体を動かしていた。

その意思を繋いでいた集中力が、今は途切れている。勝ったと、一瞬でも思ってしまった事によって。

気付き、しまったと、己が油断を呪う暇もなのはには無かった。

「眠りなさい、人間」

逃げる空を失った魔導師達を雷撃の奔流が包む。

瞬間、なのはの前面に展開された三重層の防護障壁はデバイス側の自動判断だ。

一層目の障壁は接触の瞬間に消し飛び、二層目もほぼ同時に掻き消える。辛うじて三層目の障壁が多少の時間を稼ぐが、そう長くは持たないだろう。

「もう一度、お願いレイジングハート！」

ありったけのカートリッジを装填。術式の展開と魔方陣の構築を高速処理、瀑布のように押し寄せる雷撃に、全開の魔力を振り絞る。

「全力全開…！エクセリオンバスター――――――！！」

障壁の崩壊と、力の解放はほとんど同時であった。眼前でぶつかり合う威力に、強く体が押される。

そこにある全てを光が覆い、音がかき消え、感覚が吹き飛ぶ。

舞い飛ぶ風は衝撃となり、圧となり、溢れ出した威力が、何もかもを消し飛ばした。

しびれるｏｎ　ｔｈｅ　ｒａｚｚｌｅ（６）

世界は煮え滾っていた。
地上より望む空が、ゆらゆらと歪んでいる。
元よりいびつな空の色をさらに揺らすのは、大気を包む炎のような高熱の陽炎である。
熱で屈折した視界の中、見える一面の地面はクレーター状に抉れており、そのすり鉢状の底へ向かい、土と岩が赤く流れ出していた。
立ち上る蒸気の温度は水の沸点を軽く超えている。空気に混じる黒ずみの粉は、空へ立ち昇る気流に乗る、炭となり崩れ落ちた木々の灰であった。

壮絶な破壊の惨状は、雷と砲の威力がぶつかり合って撒き散らされた火力の名残である。
その爆心地の中央、溶鉱炉のような地獄の中に立つ影がある。
悪魔（ネヴァン）だ。

灼熱。
今、ネヴァンにある感覚を一言で表すならばその言葉が一番ふさわしい。
自身と、そして敵の攻撃による威力が、魔力を尽くした身体を焼いていた。髪の一本、爪の一つでさえもを炙るような苦痛に、吐き出す息すらも苦しい。

「ハ…ァ……」

見回す地獄に吐息一つ。赤い雫が地面に落ち、すぐさま蒸発する。
それが自身の血であると気づき、ネヴァンは目を細めた。
右腕は折れている。左腕は焼けただれ、その他、数え切れないほ

どの傷が全身にあった。抉れた肉からは骨が覗き、潰れた臓腑が血を喉元に押し上げ、歪んだ骨格に支えられる身体は立っている事すら難しい。

久しく、気にも留めなかったものが、今この身体を蝕んでいる。

傷と痛みが、そこにあった。

雷を司る身にとって、実体のある肉体などはただの飾りにしか過ぎない。どれほど研がれた剣であろうと、どれほど鋭い牙であろうと、肉体の上からその切先をこの命に突き立てる事は出来ない。

かつての魔剣士と、その息子と、例外は片手で数える程で。そしてそれらの例外は漏れなく強力な魔の力を身に宿す、魔界の眷属であった。

悪魔を滅ぼせるのは、同じ、悪魔の力のみ。

魔性の存在を正確に知る者にとって、そして、悪魔自身にとって、それは、当然、という言葉を用いるまでもない事柄だった――筈だ。

「、っ」

不意に視界が揺れた。

ふらつく足元に踏み止まる事が出来ず、思わず膝を突く。焼けただれた地面に肉が焼ける音がして、熱の感触が、またも、痛みとして背筋を震わせる。

命に迫った傷の深さを、何より正確に、悪魔は知る事が出来る。感覚器官の構造と概念が人間のそれとはまるで違うのだ。

悪魔が戦えると思うならば、それは戦える状態に間違いなく、戦えないと思うならば、それはどうやっても無理な状態にある時に相違無い。

ネヴァンにとっての最大の屈辱は、そんな悪魔の体質がもたらす

感触によって悟ってしまう事だった。
自身の身体が立つ事すらままならぬ程に傷ついていると。
悪魔の一群を薙ぎ払うこの手の雷も、既にその威力を失していると。
もはや、限界なのだと。

「ハ、ハハ……」

喉の奥から漏れた笑いに勝利の喜悦は含まれない。
声は、肺から漏れた空気が勝手に喉を震わせただけの、ただの音に近い響きを持って、自分自身の無様を嘲笑している。
深刻に痛んだ身体で吸った空気は、火のように熱く、内側から肺を焼く様で、苦しかった。
意識は鮮明だ。痛みもまた鮮明で。機能不全を起こしてうずくまる、その身体の感覚もまた、鮮明に感じ取る事が出来る。
鮮やかな苦痛だけがあった。
そこにあり、じくじくと身体を弄び、一向に消えようとしない、苦悶の感触が。
その感触にて感じ取るものは、ただ一つの確かな死そのもの。

ネヴァンは軋む体を無理に立ち上がらせた。止まったままでいると不愉快な感触が全身を撫で回して、ひどく、気分が悪い。

「、く、っ…、」

立ち上がっても、気分は悪いままだった。肉体の損傷からくる不快感。死の底に引きずり込まれそうになる精神的な不愉快と比べれば、多少、こちらのほうがマシかもしれない。

揺れたままの視線を、ネヴァンは僅かに上向きに上げた。見える

世界を赤く染める両の瞳が映し込むのは、すり鉢状の縁の、さらに外側。
焼き払われた木々。捲り上がった地面。溶けだした岩塊。
その向こう、爆裂の衝撃で軽々と吹き飛んだ、倒れ伏す、脅威と呼ぶに相応しい人間の姿。
この身と命の瀬戸際にまで迫った、苛烈な死を纏う己の運命そのものである。

――――もう、立たない、わよね……

もはや戦う力など無い筈だ。戦いたいとも、思わない筈だ。
ただ、そこに倒れたままでいてほしい。そのまま起き上がらず、願わくば、沈黙のまま死んでいてほしい。
疲弊した思考は、いつになく素直な感想を自己にもたらす。

――――ああ、なんて馬鹿

願わくば。
今、確かに自分はそう思った。
後悔と自嘲が生まれる。悪魔が神頼みなど、タチの悪い冗談だ。
縁起でもないし、実際、これほど愚かな行為は他に無い。

だから、とでも言うつもりなのだろうか。

一つ。
爆発の余韻に浸る周囲に混ざり、ただ一つ、立ち上がった、影がある。
縁起でもないことは、するものじゃないわね。
呆然とした感覚の中に、乾いた笑いのような思考が生まれる。

「――、負けないよ」

魂を失ったかのような喪失の外側から、擦り切れたような、それでも強く響いた声が届き、その言葉と声は急速にネヴァンの中身を満たしていった。

負けないと。

こちらの勝ちは認めないと。

まだ、戦いは終わっていないと。

そう言う声が、心で、頭で、耳元で、反響する。

その声に撫で上げられた背筋に感じたモノは、それまで、胸の水底で、深く暗いその奥底で、ずっと淀んでいた冷たい感情だった。

一旦それが湧き出でれば、それ以外の、どのような感情をも塗り潰して、押し潰して、やがて自身そのものを蝕み尽くす、凍てついた冷たい感情。

今まで、ずっと、無視し続けていた感情。

人が恐怖と呼ぶ、そんな、感情。

――まだ、立ち上がるの……

疑問が悲鳴のように湧き上がる。

認めたくないと、心が叫んでいる。

これは悪夢かと、思考が逃げ場を探している。

だって、そうだろう。悪魔の身を焼いて、あらゆる手段を尽くすこの身を持って、最大威力を振り絞って、命すらをも削り取り、尚、

――倒れないの？

理解できない。

何故、何故？

何なのだろうか。
あれは人間なのか。
それとも悪魔なのか。
分からない。分かるわけがない。あんなものに出会った事など、無い。
ああ、これだから、人間は面倒だ。
理解できない。相容れない。
戦うだけ、奪うだけ、強さだけ、ただそれだけの存在ならば、もっと単純に意思を酌み交わすことが出来るのに。

「何故、人間達は……」

脆弱で、愚かで、儚い。
すぐに壊れてしまう身体と僅かばかりの命しか待たず、それで、何が成せると言うのか。
一体何が、かの魔剣士を魅了したと言うのだろうか。魔に抗う力などないくせに、この身体の髄を焼き尽くそうとしている、その力は何なんだ。
その華奢な身体を引き裂けば、それが分かるというのか。
その貧弱な脳髄を喰らえば、その答えが見えるというのか。
その小さな瞳のどこに、それだけの、力があるというのか。
理解できない。
全く、理解できない。

悪魔は気付かない。
自身の身体が、知らず、小刻みに震えている事に。凍てついた感情が熱く爛れた身体を内側から冷やしている事に。
ネヴァンは僅かに震える手をゆっくりと前にかざし、そしてすぐに自身の胸へ引き寄せ、身体を抱いた。
隔絶された魔と人との壁に、その手が触れたような気がして、怖

い、と思う自身の感情に、嘲笑を交えるほどの余裕さえ、今は無かった。

・・・

なのはの耳に届く音は少なかった。
呼吸の音。心臓の音。渦巻く風の音。
特に大きく聞こえたのは心臓の音だった。とくん、とくん、と弱々しげに、それでも鼓動を打つ胸の振動を近くに感じている。
けれど、それを聞く意識は音より遠く離れ、暗い闇の中に存在した。まるで水底であるかのように身体は重く、現実味の喪失した感触に全身が沈んでいる。

ここは何処だろうか。刻限は何時で、何が、どうなったのか。
考えようとするが、それより先に思考は展開しない。
代わりに得るのは、酷い気だるさと強い眠気だった。
その他の何もかもを捨て置いて、この眠気に全身を浸してしまいたいと、そう考えてしまうほどの眠りの誘惑が全身を抱いている。
足元から沈んでいくように、遠く、深淵の中へと意識が引きずり込まれそうになる。

ああ、でも、駄目だ。
何が？
このままでは、いけない。
何故？
分からない。けど、それは、やっぱり、駄目だ。
愚鈍な思考の連鎖が続く。疑問に答えるのは疑問ばかりで、無為な言葉の羅列ばかりが連なっていく。
どれほどだろうか。
時間の感覚の欠如した暗闇の中で、連なった言葉の山から、不意に、ある一つの意志とも呼べる言葉がこぼれ落ちた。

戦わなきゃ、と。

――――た…、たかう……？

ああそうだ、とも思った。
最低限以下のの頭の働きで理解できる事由はひどく単純な事ばかりで、なのははは、ぎこちない思考に伸びる腕で、一度掴んだその言葉を必死で手繰り寄せた。

戦う。戦い。戦わなきゃ、いけない。守らなくちゃ。仲間がいる。町がある。
約束が、ある。

目的を得た心がにわかに動き出すのをなのははは感じていた。
耳に届く外の音と身体に感じる熱、それらの感覚が徐々に浮上し、うすぼやけた意識がようやく身体の機能と一致する。
剥離しかけていた意識の中、倒れているのだと気付くには少々時間が掛かった。

身じろぐように手足を動かそうとするとひどい鈍痛が体の芯に響き、立ち上がる力はもう残ってはいないようで、それ以上の行動には体の機能は働かなかった。

ひどくやられたと痛感する。

ヴィータと自身の攻撃に晒され、グラーフアイゼンの直撃を受けて、それでもあれほどの反撃を繰り出す敵など、長い経験の中でも初めての事だ。二人がかりで圧倒される事もまた同じく。

ただ一つ経験済みの事柄があるとすれば、それは指先に触れる冷たい死を覚悟する、この瞬間だろう。それだけは二度目の事だった。

――ヴィー…、タ、ちゃ…ん……

一度目の時。

その初めての時に傍に居てくれた彼女は、そういえば、今は何処にいるだろうか。

覚えている記憶の最後には確かに一緒に居た筈だ。自分の背後に。

この体と同じく満身創痍で、もはや、まともに動く力すら残っていなかったであろう、あの騎士は、何処に――

「……、……」

名前を呼んだ、つもりだった。

実際には、声は、言葉を形作る事は出来ず、ただ唇が動き吐息が漏れた。

目を開けて見ても、重い瞼で狭まった視界に、彼女の姿は見つからない。見つからない。かすむ視界に目を凝らしてみても、人らしきものは、何も映らない。

代わりに見つけるのは、焼けただれた地面に立つ、青白い悪魔の姿が一つ。最悪の思考が脳裏をよぎった。

刻一刻と自分自身にも迫りつつある、最悪の状況を予測し、なのはが思うのは動かなきゃ、という一念のみ。
しかし、意に反する体は動かない。
立ち上がらなきゃ、と力を入れる。
しかしやはり、体は動いてはくれない。

――ここ、までなの……？

戦おうとして、その意志はあり、そしてただ、それだけだった。
その他の全てが足りない。
立ち上がるための力も、四肢に伝える意識も、戦う意味も、何もかもが、身体の内側にくすぶっていた熱と共に、外に流れ出ていく。
とくん、とくん、と。聞こえる鼓動が小さくなっていく。
もう一度目を閉じたなのはの耳に、届く音はもはや無かった。
立ち上がれ。戦え。思考の中でのみ、自身の声が反芻する。しかし、どうやっても、無理なものは無理だ。
だって、身体が動かない。
構造的に破綻した物を動かす方法を、自分は知らない。
もしかしたら。
そんな思考が、ゆるく首をもたげた。
もう、駄目なのかもしれない。今度は、もう、どうにもならないのかもしれない。
諦めの思考が生じた瞬間、それまで頑なだった意志が、小さく、掻き消えてしまいそうになる。

――このまま、意識を閉じれば……

今のなのはには、それはひどく魅惑的な誘惑に思えた。ゆっくりとした深い眠りは、今の動かぬ身体が最も待ち望んでいる事であろう。

悪魔のような囁きが、自身の声で、頭に響く。
もう眠りたい。疲れた。後の事は全て捨て置いて、少しだけ、休んでいたい。

――それも、いいかも、しれない……

にわかな意志が静かに閉じていくのを、なのはは、ただ、黙って感じていた。ゆったりとした暗闇に抱かれながら、最後の灯が、消えていく。

――だって、もう、これ以上は……

どくん。

音。短い振動。強く聞こえる、心臓の鼓動。
気付き、なのははかすかに意識を持ち上げた。
その鼓動の音に向かって、停止したままの腕を動かす。動かない。動け、と。無理やりに、動かす。
ほんの僅かな身動きには泣き叫びたいような激痛が伴って、感覚すらおぼろな指先が、しかし、触れた。
その感触を追い求めるかのように、更に指を這わせると、それは、確かにそこにあった。柔らかな感触。もう一つの鼓動。何よりも激しく、閉じかけた心に響いた、その胸の動きが、腕の中、胸の中で、どくん、どくんと脈打っている。

見回してみても、発見できない筈だ。
初めから、倒れるこちらの腕の中に、ずっとそこに居たのだから。
薄汚れ、傷だらけになった、紅の小柄なバリアジャケットは。

その姿を感触で捉えたなのはには、疑問が一つあった。

後ろにいた筈の彼女がどうしてこの腕の中に居たのか、という疑問が。

しかし、生じた疑問は悩むほど難しいものでは無く、すぐさま、次の思考でなのはもその理由に気付く。

――お前のことは……、私が守ってやる――

答えは彼女自身の口から、とうの昔に宣言されていたのだから。

――守…って……、くれ、たんだ……

傷ついて、倒れて、もう自分も限界なのに、それでも、

――私を……助けて……くれたんだ……

とうに限界を迎えた身体。

痛みを伝える感覚しか残っていなくて、手足に向かう神経すら曖昧で、なのに、何故だろうか。

動かないと思い、実際に動かなかった身体が、けれど、何故だろうか。

立つ事が出来る。

杖を握る事が出来る。

もう一度、戦うことが出来る。

――私は…、馬鹿だ……

諦めようとしていた。もう限界だと、自分自身の手で、勝手に決着を付けてしまおうとしていた。こんなに頑張って、助けてくれて、戦ってくれる仲間がいるのに。

ヴィータだけじゃない。フェイトや、はやてや、スバルに、ヴィヴィオに、皆が、自分の帰りを信じて待っているのに、その自分が諦めてどうするのだ。

本当に馬鹿だった。皆に謝らなきゃいけない。特にヴィータには、心から。

ああそうだ、この戦いに勝って、まずは、ヴィータに謝ろう。アイスも奢ろう。そして、ありがとうを言うんだ。

だから、

「――――、負けないよ」

左手はレイジングハートを持ち、右手はヴィータの傷ついた身体を抱え、戦う意志は確かに、なのはの瞳の中に映り込んだ。

「何故、人間達は……」

泣きそうに震えた声で、悪魔の声が届いた。

それは、一体どんな意味を持った言葉なのだろうか。自分への呼びかけなのか、そうでないのか。明確な意味があったのか、それすらも分からないが、けれど、なのははその言葉に応えた。

焼け付くような肺の中から、ひとかけらの空気を押し出して、喉を通る声に言葉を乗せる。自分の言葉を。そうしなければ伝わらない言葉を。

「だって、負けられないから……。私は、もう、絶対に負けられないから……、もう、誰にも心配されないように、強くならなくちゃいけないから……。もう、誰にも、不安な顔はしてほしくないから」

だから、

「私は、あなたを倒します」

立つ足は、実際には、震えが来るほど頼りない。

踏み出すだけで倒れてしまいそうな、そんな足で支える視線は、けれど、思いのほか真っ直ぐに相手を射止めた。

正面を映す相手の瞳にはこちらの姿があり、陽炎のように、ゆらゆらと揺れている。

「……大言を吐くわね、人間のクセに」

「人間だから。一人じゃ弱くて、心細いから、強い事を言うんだよ」

「そう……」

返った言葉は、呟きのような声だった。弱々しくて、けれどどこか優しい、こちらの全てを受け入れるかのような声。

その声を聞いたから、だろうか。ずっと感じていた、心の片隅で、ずっとくすぶっていたある想いがなのはの中で急速に膨らんだ。

――うん、そうだ。きっと、きっと……

確信と言うには不確かで、希望と言うほどに儚くは無い、それは淡くて暖かな想い。

「――高町、なのは」

「……？」

「私の名前。あなたの名前は聞いたから、だから、今度は私の名前を聞いて」

「どうして？」

「名前を、呼んでほしいから。そうしたら、きっと私達はそれ以上戦わなくても済むと思うから、だから……」

「無駄よ。悪魔と人が、分かり合えるとでも思っているの？」

「できるよ。無駄な事なんて、きっと無い。あなたにも、私にも、同じだけの想いがある。強い意志がある。悪魔とか、人間だとか、そんな事で区別できるほど、私達は単純な生き物じゃないから。だから、全部終わったら、きっと、きっと何とかなる」

だから、と。

なのはは強い言葉で後を続ける。弱さに寄り添うような、そんな強い言葉を。

「ネヴァンさん。――――あなたを倒して、この戦いを終わらせます」

言い切ったなのはを、ネヴァンは見つめた。

“そんな事”と。人と魔の隔絶をたった一言で切り捨てた彼女の瞳を。強く輝く瞳の中には、何の迷いも、一切の嘘も無い。

彼女は本当にそう思っているのだ。

分かり合えると。

その名を呼べば、心が通じると。

「ハッ、悪魔、相手に…、甘っちょろい事、ばっかり言いやがって

……」

そのネヴァンの視界の中、なのはの腕の中、身じろぎするようにもう一つの影が動き出した。とうの昔に限界を迎えたはずの、小柄な紅い影。

「ヴィータちゃん……」

なのはに名前を呼ばれたヴィータは、ふん、と鼻息を荒げて、下ろせ、と乱暴な口調で地面に足を付けた。倒れる事無く、揺らぐ事無く、直線に伸ばした背筋には視線があり、真っ直ぐ、悪魔の姿を射抜く。

「ま、でもそれがお前だからな。そうじゃなくっちゃ、お前じゃねーもんな」

どこか嬉しげに頬を歪めて、ヴィータはなのはの身体を後ろから抱きしめた。腰に手を回し、自身の身体を寄せ、足を開く。まるで、なのはを後ろから支えるかのように、強く、力を込める。

「悪ぃーな、もうこっちだって限界だ。一緒に戦うことは出来ねえ。けど、お前の一撃をお前と一緒に受け止めてやる事ぐらいは出来る」

そう言ったヴィータを、なのはは驚いたような表情で見つめた。顔を上げて、真っ直ぐ、ヴィータの瞳もなのはを見つめている。

「終わらせるぜ、なのは。全力なら、お前は誰にも負けねえ！」

「――――うん！」

砲を担う一人。それを支える一人。寄り添い互いを補う、期せずして、それはまさしく砲撃の起源を再現していた。
背中に寄り添う温もりに身体を任せ、なのはは、ふと気付く。

――そうか、砲撃って、

一人じゃ、撃てないんだ。
支えられなければ、まともに放つ事は出来ない。
その魔法の起源は、確かに、二人の手で支えられるべきものだった筈だ。それがいつしか、片方の支えがデバイスという存在に取って代わり、一人でも扱う事が出来るよう、術式が考案され、今の形へと進化していった。
その事実は、今まではなのはの中にはただの知識として有った。
今は、確かな実感として在る。
進化の過程で失った支えの一人を、再び得た事によって。

――違う、そうじゃない、そうじゃないよね……

そして、更なる気付きに、なのはの心は震えた。
つい今しがた得た実感に、心の中で訂正を加える。砲の支えは、起源と今と、何ら変わってなどいない、と。
デバイス。術者と共に在る事を願われて、そうして生み出されるデバイスもまた、砲を担う一端として力を支えているのだ。単純で、気付いてしまえば、当然と思えるような事。デバイスが人に取って代わったなどと、暴言もいいところだ。
デバイスは道具ではなく、自身の大切な相棒なのだと、教え子に説いたのは一度や二度ではなかった筈なのに。

――ほんと、成長しないなあ、私って……

強いつもりでいた自分は、本当は、とても弱くて、いつも何かに支えられていたのに、すぐにそれを忘れてしまって。
何かに支えられて、いつも支えられて、それを、自分一人の力だと勘違いしている。
強く、力を望んだ自分の胸の中に、最後に残ったのは、この背中にある温もりだけだったというのに。
常に、戦場でこの身体と共に在り続けたのは、この手の中にある唯一無二のデバイスだけだったというのに。

――――行けるかな？

だから、なのはは問う。
あらためて、この戦場で戦う為に。常に在り続けた、最高の相棒へと。

そのなのはの心の声を、演算領域の最深部、思考回路を司る部分でインテリジェントデバイスは聞いていた。
主の命。戦う意思を持った命を。
しかし、と演算領域の思考回路はその主の命に苦言を呈していた。
感情に寄り添わない冷静な判断は、今は戦闘ではなく撤退を提案するのが正常な論理決定だと言っている。実際、スキャンした主の身体には、もはや、無事と呼べる部分は残ってはおらず、全ての余力は撤退のために費やすべきだと、思考決定の領域は動き始めている。
それが、最善であるから。それ以外の選択を取る理由は万に一つも無い。

もし、己がこの決定を下し、勝手に主と騎士の身をこの場から離脱させたら、主はどのような顔をするだろうか。
過去に蓄積されたメモリーデータを検証すれば、自ずとその結果

は見えてくる。
まず、在るのは、ごめんね、という謝罪の言葉であろう。
主は、他に特別を置くが故に、自を排する事をいとわない。排しすぎると強調しても不足はない。それほどまでに、この主は他の何かを大切にしている。自分以外の、何かを。
そんな主の事だ、主の命に逆らった、機械としてのあってはならない非を責める事はせず、そのような決定を下させてしまった、自分自身の事を一番に責め立てるであろう。
悲しそうに陰った顔が、泣き出しそうに歪んだ表情が、メモリーの中には数え切れないほどある。その表情を回路に記録するのは、本意ではない。
自身の行為を否定するという、機械としての矛盾を、幾層にも分かれた演算領域の何処かに内包しながらも、それでも、この身に宿る回路の全ては、主の御身の為に捧げられている。
それが時には、主の決定に意を反するものであったとしても、その主の身を守るのが、インテリジェントデバイスとして創られた自身の存在意義であると、思考はそう働く。

どうすべきか。
最善の選択は、どれも、主の意志を蔑にしたものばかりだ。
しかしどのような選択であろうと、決定しなければいけない。
行けるか、との問いに、是非を下さなければならない。
それが本当は、一緒に行こう、との意味を持った問いであろうと。
この機械の身体が導く答えは、常に、最善であらねばならない。
演算領域、推奨される幾つかの項目を破棄する。
選択肢を削り、優先度を変更。

そして、“不屈の心（レイジングハート）”と、その銘に刻んだデバイスは、数ある中で最も、優先度の低い決断を己に下した。

『Ｇｅｔ　ｓｅｔ――』

共に在れ。

それこそが、主に願われたこの身の幸いであり、そして最良であった。

機械の身が導く最善ではなく、主に願われた己が選び取る最良の選択は、この主ならば勝ってくれると、そう信じるが故に。

不可能など無いと、論理以上の何かが、機械の決定を自身の回路で否定することが出来る。

信じている。そんな、不明瞭な言葉に主の命を晒す己は、もしかすると、あらゆるデバイスの中で最も愚かなのかもしれない。

それでもいいと、思考の最終地点には、機械にはあるまじき、非論理的な想いがあった。

主共々、一度精密なメンテナンスが必要かもしれません。余分な領域にメモを残す。

ともあれ全ては、

『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ』

この戦いに勝ってから。

・
・
・

レイジングハートの穂先に灯る力強い光を見つめながら、ネヴァンは虚脱に似た感覚を覚えた。張り詰めていた風船が急速にしぼんでいくように、身体から力が抜けていく、闘気が薄れていく。認めない、と思いながらも。じわりと蝕むような思考に身体が絡め取られていく。

勝てない、と。僅かにでも、思ってしまった。

「――――あり得ないわ」

ばぢり。紫電を生み両手に溢れる雷撃の塊。力を使い切ったこの身に余る、それが最後の渾身。もはや届かぬかもしれない力を使い果たして、それでも、意地があるのだ、悪魔には悪魔なりの。

場に存在する力の膨張が、最高潮に達する。

震える大気が、轟、とうめき声のような大音を上げて、そして、空気が風と共に渦巻いた。

「――――え？」

しかしまだ、決着の砲は放たれていなかった。落ちてきた重圧の気配は、人と魔の対峙する場の頭上に生まれた、全く別の、新しい感覚だ。

何、と。空を見上げる動作が三つ。

“ソレ”が何だったのか、正しく認識できた者が果たしてその中に居ただろうか。

――――――

風の圧し潰れる轟音だけが大気に響き、地面を塗りつぶす天空の影。

全天を覆い尽くして、黒い空が落ちた。

モンスターパニックｆｉｓｈｉｎｇ（１）

くじら。

そう、鯨だ。

何の比喩も暗喩も無く、それは海で泳ぐあの鯨の事である。

大きい個体では全長３０メートル以上、体重はおよそ１５０トンにもなる最大の水生哺乳類。

地球においては巨大生物の代名詞と言っても過言は無いだろう。

ミッドチルダは言うに及ばず、数多ある次元世界の中でも、その特殊な生態と巨大さは有名である。

「な……！？」

「ふわ……」

「う、嘘……！」

そんな鯨の姿を目の前に、愕然と顎を落として目を丸くしている三人が居た。

エリオ、キャロ、シャマル、それぞれ水の柱へと向かった三人である。

その三人が、揃いも揃って唖然と驚愕に彩られた表情を顔に貼り付けている。ついでに言うと、キャロの召喚した白竜フリードも目を丸くして、

「くわー……」

と、口をぽかんと開けていた。竜族の心の機微を察知できるのは竜の巫女だけだと言われるが、今のフリードの表情からならばきっとどんな人物だろうとその驚きの感情を読み取れることだろう。

驚愕。

人の持つ感情の中で最も表情に出やすいものではあるが、ここまで分かりやすく驚く事は早々無い。

無論、これは当然の話だが、三人＋一匹が雁首そろえて鯨をはじめて見たので驚いている、なんていう訳では、断じて無い。これは絶対だ。三人＋一匹の名誉の為にもここは強調しておこう。

さて。前述の補足になるが、鯨という哺乳類は地球のみの固有種でも、次元世界の希少な絶滅危惧種という訳でもない。ミッドチルダの広水域ならばその姿を確認することができるし、他の次元世界でも同種の生物を見ることができる。それこそ、砂漠を泳ぐ砂鯨など、珍しい種類もピンからキリまで。

では何故この三人＋一匹がこれほどまでに驚いているのか。

その答えはひどく簡単で、誰もが納得するくらいに常識的な事由だった。

まず一つに、いくら最大級の哺乳類とはいえ、全長が２００メートルを超えるような巨大な鯨は現在まで一匹たりとも確認されてなどいないという事。

そしてもう一つに、常識で考えて、鯨は空なんか飛ばないだろうという事。

オオオオオオォォォォォォォォォォォ――――――――――！！！！！

鼓膜が破れるような大音声。鯨とはこんな凶暴な叫び声を上げるものだったろうか。というか、これは鯨などではないのでは？

三人が三人とも同じ事を考えていた。思考当てゲームをしたなら三人とも綺麗に正解する事だろう。

そして、これは今現在の三人が置かれる状況的に見て最も重要な事柄なのだが、実は、その三人の考えはまったくもって大正解なのであった。

「あ、悪魔！？」

グオーーー、と正解音の代わりにだと言わんばかりの凄まじい唸り声。悪魔、というより怪獣と表現したほうがしっくりくるであろう巨体を、力強く躍動させて翻す巨大な鯨。

それは、魔界を回遊する大海の魔獣であった。逆巻く渦の中心にあぎとを開く、深淵の怪物。神話に残る名を拾い上げて曰く、リバイアサン、と。

いびつにねじれた夜空にヒレを広げる様は、まるでそこが大海原の只中であるかのようだ。暴風のような息を吐き、腹の底に響く地鳴りのような叫びが共に、身をよじった巨体が、ゆらり、こちらへ――――――

「フ、フリード逃げてーーー！！」

ほとんど悲鳴に近いキャロの声。同時、弾かれたようにシャマルとフリードが動いた。直下と直上へ、それぞれの速度が跳ねる。

「――――――――！！」

直下へ翼を向けたのは白銀の飛竜フリードリヒである。

甲高く一声を長く引き伸ばした銀色の翼は少ない羽ばたきで最大の風を掴み取り、矢のように伸ばした首先を下に、落下よりも更に速く、滑空を敢行する。

「クラールヴィント！」

直上方向。フリードとは正反対にシャマルは飛び上がっている。即座に起動させるのは自身のデバイス“クラールヴィント”。他のアームドデバイスのような返答の声は無く、しかし確実な息吹と淡い魔力光が指先に宿る。

魔法術式展開はその起動と同時だ。

デバイスの演算領域の一層目、表層領域には予め構築した魔法術式をショートカットとして記憶させる事ができる。

量産型のデバイスでは、術式の重さにもよるが最大で１０個ほど。演算領域の広いレイジングハートではその数は７０にもなるが、シャマルのクラールヴィントは現存するデバイス中で最大の２５６個だ。その中にはあらゆる状況に対応できる補助術式の数々が記憶されている。

空減術式。耐風障壁。ベクトルブースターｅｔｃ……。

取捨選択と起動の動作はまるで息をするかのような自然な動作で、既に身に纏っていたシャマルの騎士甲冑の上、緑に輝く光の集合が添付された。装備は風を泳ぐ為の術式。

――3、2、1、

目算の距離を時間に置き換え、シャマルは頭の中で減算する。接触は目前。足を振り出し、加速のベクトルをずらす。上。跳ね上がるように、上昇の加速がシャマルの身体を打ち上げた。敵から視線を切ったのは一瞬、再び、目は見据える前方へと向く。意識を注ぐ。覚悟を決める。やがて、時間と距離が、尽き果てる。

「0、行くわよ！」

接敵。黒く禍々しい巨大な塊が眼下を通る。
風が来る。涼風から一気に暴風へと変じる気流を受けて、防護の魔法陣が輝いた。

「っ、……！」

豪風の圧力は鋼鉄の壁にも等しい。
鋼鉄製の航空機すら簡単に分解させてしまうであろう高密度の気流の中、展開した魔方陣の護りを受けて、シャマルは飛ぶ。輝く魔法術式の緩衝材を全身に、次にシャマルを襲うのは強引に身をさらう乱流の渦だった。まるでハリケーンのように、呑み込んだものを悉く翻弄し、掻き乱し、圧し潰す、暴風の顎門が容赦なくシャマルの小柄な体躯に牙を剥く。

バラバラに引き裂かれそうな風に晒されて、しかし同時に、この風の只中はシャマルにとっての領域でもあった。

湖の騎士。
シャマルを指して謳われる二つ名がそれだ。
騎士の二つ名、それは騎士として、その存在と在り様を示す唯一にして無二の称号である。
“剣”“鉄槌”“祝福”それぞれ、二つ名に含まれる言葉は各人の存在を確立させる上で重要な意味を持っている。騎士としての象徴とその証があってこそ、騎士という揺るがぬ存在が証明される。

では、シャマルの場合はどうだろうか。
湖の騎士。
これは、管理局内、ひいては機動六課内でさえ大いに勘違いされている事だが、シャマルの持つ騎士の象徴とは、魔力による“癒し”ではなく、自然の“息吹”である。バックアップを専門としてい

るからか、はたまた医務室のお姉さん的立場が確立してしまっているからなのか、もしかしたら八神家のお母さん役を演じていた時の後遺症なのかもしれないが、シャマルの二つ名を取り違えて理解している者は非常に多い。

湖とは、そこに揺蕩う澄んだ水の静寂と、そこに吹く風の流れ、湖畔を囲う木々の芽吹き、それらを抱擁する、自然。その息吹そのものが、シャマルの騎士としての象徴である。

「っと、」

僅かに揺れ、構えの崩れた体を右に振って、反動でシャマルは体勢を整える。

気流の速度が巻き起こす荒風の只中は、しかし自然の息吹を司るシャマルにとっては恐れを抱く場所ではない。

風の流れる方向、すれ違う場所、そこに生まれる真空、それら、そこに存在する要素を大きな一つの動きと捉えた時に見える、流れの道筋。その大道に身を寄せつつ、時折、小道に入り身が流されるのを防ぎ、さらに方向を整える。

造作もない、というほど楽はしていないが、息をつくほど緊迫もしていない。

ただ、在るがままの風を泳げばいい。

空にあって風を受けるのならば、魔法とベルカの両翼を持ち、自身の全身は鳥になれる。風を射抜く、矢じりのような隼に。

そして、隼の矢じりに、生まれる光がある。

光は鉤爪のように指先にある。輝く緑光。

その発生源はクラールヴィントの宝玉で、その光を握り込み、シャマルは平行に保った身体を下面へ向ける。魔獣の巨体を眼下に見る。腕と足の振りを合わせ、身体を回す。光を握る腕がなぞるのは、

アンダースローの投擲態勢。振りかぶり、手は開いて、その指先、クラールヴィントが放つ緑光が鋭さを増し、魔力が実体の無い刃を創る。

振り抜き、光が飛ぶ。四条の刃。風の属性は真空を生み風を切り裂き、しかし、届かない。

光の刃は魔獣の本体の直前で風の層に掻き消され、ただの光の塵と消えてしまう。

その結果を見詰めるシャマルに落胆の表情は無い。ただ眉をひそめ、

――――やっぱりね

という、感情のみを実感に得る。

視線を前へ。腕を眼前に構え、風を抜けた。

鼓膜を震わす轟風から一転、静かな夜の空に放り出され、一瞬、音が消えてしまったかのような錯覚がある。

キン、と耳鳴りのする頭を振って、ベクトルを反転。加速と体勢制御の効果を減衰させ、通常の飛行状態へ術式をシフト。足を蹴り出す。捻りを加えたムーンサルトで方向を定め、滞空。今まで前方だった方向に背後を向け、見送る巨体に溜息一つ。

「ふう」

この魔獣の、本当の恐ろしさは何か。

途方も無い巨体から想像できる甚大な攻撃力は、確かに脅威。大艦巨砲主義的な考えに基づけば、純粋な破壊力というものは相応のデカさに釣り合うものだと言う。

それは同時に、等価となり得る物理防御力と耐久力の存在をも示している。風の隙間から垣間見た鉄壁の塊のような鱗にはどれほど

の強度があるだろうか。常識的な推測が及ぶかどうかも怪しい。流石は大鑑巨砲主義。デカい事はイイ事だ。

目下、眼前をを泳ぐ懸案事項に投げかける、空の疑問はシャマルの思考に多々山積する。

最も目を引くのは巨体の威圧だ。

だがしかし、シャマルの眼が捉えた魔獣の姿は、その異様な巨体以上の何かを持っているかのように見えており、そしてその予測は風の乱流という形を持って的中した。

自身が自然を司る騎士だからこそ分かる。魔獣の周囲を巡る風は膨大な質量の周囲に自然発生したただの気流では無いと。

物理現象ではなく、また、ミッドチルダの魔法とも別の原理によって発生している、そんな異常性の風だ。

結界、と表しても不足は無いだろう。呑み込んだ物を引き裂く牙であり、身に掛かる刃を掻き消す盾でもある、攻守を揃えた風の結界。本体の持つであろう純粋な攻撃力よりも、その風はよほど厄介ではないだろうか。

風の中で思った事に、シャマルは改めて頷く。

「さて、どうしましょうかね」

思考の先を求める言葉に、答えは返らない。

・
・
・

「――――――!!?」

風の中。

声が聞こえた。自身の声だ。短く細い声は風の合間に簡単に掻き消えてしまう。

僅かの間も無く、暴風の腕が強引に後ろ髪を引っ張った。小さな身体は満足な抵抗も出来ずにフリードの背中からこぼれ落ちた。同じ背中に在った、大切な人が離れていく。助けて、と口にした声すら消えてしまう。

「キャロ!!」

腕を掴まれたのは間一髪のタイミングだった。細い指がこちらの手首に食い込んで、痛みと嬉しさとが同時に腕を伝った。

「ぜ、――、に―、は――――!!」

エリオの口が動き、真剣な眼差しがキャロを射抜いた。風にかき消されながらエリオが何かを叫んでいる。

誰の耳にも届かない、風が攫った言葉が、何故かキャロにはその言葉が聞こえた気がした。風に呑まれようとする身体を繋ぎとめる、たった一つの、力強い腕を通して。痛いほど握り締めるその手の平から、言葉と意思が伝わったような、そんな気がしたのだ。

絶対に、離さない!!

そう言ってくれている。そんな気がするのだ。
だからこちらも握り返す。頼りない指にささやかな力を添えて、
腕が引き抜かれるように

「あ…、きゃあっ」

気流の嵐が通り過ぎるのは、それこそ風の速さである。飛ばされ
そうだった状態は本当はごく僅かな時間だったのであろうが、当人
二人にとってそれはひどく長い時間に思えた。

リバイアサンがその巨体で全ての気流を押し流してしまった後は
打って変わったまったくの無風地帯。繋いでいた手が互いを引き合
い、キャロの身体はまるでエリオに強引に抱き寄せられるかのよう
にその胸の中に飛び込んだ。

「キャロ、大丈夫!?」

上から覗き込む瞳の輝きに、思わず頬を染める。言葉に詰まり、
うん、と簡単な返事しか出来ない。よかった、と微笑みが降る。はぅ
ぅ。キャロはますます赤くなった。

「エリオくん……」

「何、キャロ?」

あ、と口が動く。続く言葉はもう頭にある。感謝と信頼を込めた、
ありがとう。さらにその後には、行動の賞賛と確認を含めた、守っ
てくれて、と続ける。
更なる微笑みが降り注ぐことだろう。

その光景を想像し、しばし、キャロは幸せな妄想に浸った。

――もうそこまで言えば、残りは愛とロマンスが溢れる筈ですよね！

心の中、問い掛けは自分の保護責任者であるフェイト・Ｔ・ハラオウンだ。

独りぼっちだった自分を受け入れてくれた恩人。優しく包み込んでくれる母。そして、いつも頼りない力と心を支えてくれる、かけがえのない人。

特に、恋愛相談には身を乗り出して助言をしてくれる彼女を指して、人知れず呼ぶ名が、一つ。愛の師と。

――キス？奪ったもの勝ちだよ！――

親指を立ててウィンクをする愛の師のファーストキスは、中学校の水泳の授業中、緊急時の為の着衣水泳で人工呼吸の練習中に際し間違いを装ってターゲットから奪取したそうだ。息と一緒に舌を入れ込んだら、驚いた彼女に舌を噛み切られて病院に送られたと、笑いながら語ってくれた。師の舌には今も深い傷の跡がうっすら残っている。

その傷を見せながら語る愛の師が曰く、

――ラブハプニングですよね！

本当に嬉しそうに語っていた愛の師の顔を思い浮かべ、心の中でぐっと拳を握り締める。言っている言葉の意味が時々分からない事があるが、敬愛する愛の師の言う事に間違いがある筈が無いのだ。

だから、という考えのもと、言葉が生み出されようとしていた。

「あ、ありが――――」

――――とう。と続く言葉の最後の一遍は、頭上から来た声の為に、ついに完成はしなかった。

声は、乾いた手を打つ音と共に現れ、

「はいはーい、戦闘中のラブコメは禁止ですよー」

フリードの隣に降りた緑の甲冑に、少しだけ、むすりとキャロは頬を膨らませた。

・
・
・

「はいはーい、戦闘中のラブコメは禁止ですよー」

パンパン、と手を叩きながら、シャマルがフリードの隣に並んだ。ちょっとだけむすっとした様なキャロの表情。エリオはその様子を、自分がしている事も含めた客観的な視点であらためて見詰めなおし、

「え?……あ、いや、これは、その、えっと……!」

ようやく、自分が何をしているかに気付くも、時すでに遅し。キャロの小さな身体はしっかりと自身の胸の中に納まっているし、そう広くも無いフリードの背中の上でその小さな身体を放り出すわけにもいかないし、そしてこれはどういう事なのか、キャロの両手が首に回ってきてたりもしていた。

上目遣いに見詰めるキャロの瞳。そこから首を捻ってキャロは前方を向く。もう一度こちらの表情をキャロは見上げて、少し身じろぎする様に居住まいを正し、

「うん」

小さく頷いた。

「何を納得したのキャロ！？」

「あ、また来るよ！エリオくん！」

無視された！？内心で思いながらも目を戻すとキャロの言葉通り、通過した巨体が身を捻るように翻すところであった。

空気の鳴動が大気の震えとなって風が吹く。羽ばたきのリズムを変えてフリードはその乱流に対応する。

僅かに揺れた背の上で、エリオの瞳はその緩慢な仕草を見ていた。そう見えるのは、相手の巨大さゆえの錯覚にすぎない、とも分かっている。身を翻すリバイアサンの速度は末端部で時速２００キロにも達する高速だ。

「近づきすぎないでね二人とも。あの風に完全に呑まれたら、もう戻って来られないわよ」

「了解。キャロ！」

「うん、フリード行くよ！」

散開。

左右へ散った二つの光はそれぞれ別の加速力を受ける。

魔法陣の輝きを背にするのはシャマルだ。白銀色の羽ばたきで風を掴むのはフリード。弧を描く二つの軌跡は先頭を相手へと向けながらも十分な距離を保ち、そのビル程もありそうな背びれを追う。

光と炎。魔導師と銀竜はそれぞれの魔力を攻撃へと変じた。

着弾の衝撃も爆発も無く、生まれた攻撃は敵へ至る遥か前方で風に消えてしまう。

（攻撃が！？シャマルさん！）

全周囲に向けた短距離思念通話。驚きの声色はエリオのものだ。

（慌てちゃ駄目よ、エリオくん。急いでも、焦っても駄目。とにかく今は落ち着いて）

ノイズの混じる声で返答が来る。常と変わらない平静な声がこちらを諭してくる。

声に従い息を一吐き、エリオは精神を落ち着ける。

「無事ね、二人とも」

次に来たシャマルの声は口頭でのものだ。隣、風に乗るシャマルの緑光がフリードの銀鱗を照らす。

「やっぱり、フリードの炎でも駄目だったわね」

「あの風、あれが原因ですか？」

「多分ね。気流の流れが異常だわ。特に、フリードの翼は影響を受けやすいから接近は厳禁よ」

分かってるとは思うけどね。言葉尻にそう追加し、シャマルは前を向く。

エリオも視線をその方向へ。腕の中、頭を動かす気配はキャロのものだ。

視界の中に見る魔獣は気流の波間を泳ぎ、尾ひれをくねらせて身体をねじり、頭をこちらに向ける。家一軒を踊り食いできそうなほどの大口は、既に開け放たれていた。

何を、との疑問が浮かぶ。

しまった、と聞いた声は隣から。

何が、と思う間もなく、その言葉の真意が大気を伝って来る。

風――――、突風が吹き荒れた。

衝撃を押し固めたかのような魔獣の吐息は、しかしフリードの眼前で防がれた。光の盾を手に立ち塞がるのは、跳躍一つ分の前進でフリードの前方に躍り出たシャマルである。

半球状の防護結界が見えていた。歪曲結界。物理力を球体平面上に沿って歪曲させて威力を削ぎ落とす防護壁は、しかし空減の術式が組み込まれておらず、物理威力のほぼ全てを何の減衰もしないまま受けている事になる。

マズイ、と思考が働く。動きを止めたこちらの隙に向かい、尾をくねらせて魔獣が突っ込んでくる。

「フリード、下！」

鋭い一声はキャロのもの。

風の吹き荒れる攻撃の中、声に従い、フリードは翼を畳んで直下へ下降した。

よし、との頷きがエリオにはある。今の状況、まず第一はこの場から離れる事だ。ここに自分らが居る限り、シャマルは動けない。多少無理にでも、防護壁が風を緩和している内に移動しなければ、これ以上の決定的な攻撃を受ける事になる。

その判断はキャロも同じだ。だから、フリードを下に逃がすよう指示をした。風を受ける直上への飛翔ではなく、風を切る直下への落下として。

命令を違わず、風に煽られながらも、銀竜の体躯は高度を急速に下げる。その背は大きく揺れるが、気流にさらわれる事は無い。

折り畳んだ竜の翼は風の影響を最小限に、落下の速度を得る浮遊感を持って見上げる視界には防護壁をそのままに離脱しようと動くシャマルの姿がある。

――――早く……！

心の叫びはシャマルに向く。

魔獣の大口は既に前方の視界の八割を覆っている。巨大さゆえに距離感の掴み難かった魔獣の姿が、これまで以上にいっそう近くにある。

嵐のような風が告げる接敵の警報が強く吹き、荒れ狂う風の中にシャマルが腕を広げた。足を蹴り出す飛翔の動作が生まれ、

「……！」

がずんっ、と。建築物が倒壊するかのような大音は魔獣が口を閉じた音だ。暴風が視界を奪い、一瞬、目を逸らした間際にシャマルの姿が消える。

全天。暗雲のように空を覆う巨体が、代わりにあった。

「――――、」

名前を叫ぶ前動作は、呼吸器系を拡幅する、息を吸い込む動きだ。

そして口が開き、っ、という溜めの息が僅かに漏れ、

――――、！？

名を叫ぶよりも僅かに早く、視界に入った次の驚きがエリオの口を閉じさせた。

それは魔獣の周囲を公転する光の粒として見え、認識としては緑の騎士甲冑であり、あらためて開いた口が発する声は、

「シャマルさん！」

先ほど叫ぼうとして取りやめた名と全く同じものだった。

声には無事を安堵する色が乗り、しかし、その安否を気に掛ける色相が強い。

緑の光は魔獣の背びれの方向に螺旋軌道の公転周期を描きながら、明滅を繰り返している。明滅。付いたり消えたり、とは、即ち光が魔獣の陰に隠れ、そしてまたエリオの視界に映る範囲に移動しているという事だ。

魔獣の周囲、全周一回転でおよそ１５０メートル強。明滅の速度はその距離をどれほどの時間で回転しているか、であり、見上げる目下、光の明滅の周期はおよそ1秒。秒速にして１５０メートル以上の速度で移動している事になる。それも、直線を突っ走るのでは

なく、遠心力に振り回される形で、だ。

――マズイ、いくらシャマルさんでも……！

夜天に集うヴォルケンリッターが一、湖の騎士。

その名の意味と高みを、機動六課に所属する身が理解していない筈はない。

前線に出る事の少ない彼女だが、その力量は隊長格にも等しく、そして聞いた話によればフライパンと鍋で暗黒物質を生成できるらしい。

数年前のバレンタインで本局の魔導師１００余名を数日に渡り戦闘不能に陥れた大規模テロ行為の犯人は彼女の超・物質生成技能（マテリアライズスキル）を模倣したとのもっぱらの噂だ。犯人は未だ特定されてはおらず、有力な情報も無いまま。

ちなみにそのバレンタインの前日は、夜神はやてが管理局への正式編入が決まった日であり、その日のシャマルは、

「明日は正式な初出勤だし私達もはやてちゃんの為にも、私達の印象を良くしとかなくちゃ！」

と、元気いっぱいにカカオを大量購入する姿が最寄りのスーパーで目撃されていたりするが、それは翌日のテロ事件とは何ら関わりの無い事である。

――いや、そうじゃなくて！

先日の休暇前夜祭にてシグナムから語り聞かされた管理局内の都市伝説を思考の本流から弾き出し、エリオは見上げる巨体に目を凝らす。

緑の光が消え、そしてまた現れる。
公転運動は、回転軌道だ。その軌道の途上では、巨体の側面でその向こう側の一方を隠してしまう。
もし、その向こうに不意の一撃を用意されていたら、どうだろうか。回避できる危機に、自ら飛び込んで行くような、そんなコースの取り方を、あの騎士が果たして行うだろうか。
無い、とエリオは思う。
大きさを持つ相手との接敵は、第一に距離、第二に向きに重点が置かれる。敵の方向とこちらの方向を合わせ、常に平行線を引いて距離と間合いを保てと、自身は機動六課ではそう叩き込まれた。
なのに、との疑問があった。頭で組み立てる状況に、騎士が何を成そうとしているのか。セオリーに反する行動の真意は多くの場合、相手の予測を乱す布石か、若しくは、
――その行動を強制されているか……！
「フリード、頼む！」
叫びに、銀色の翼が応えた。

モンスターパニックｆｉｓｈｉｎｇ（２）

風の乱流を、ただ、シャマルは流されていた。
飛行の術、風を軽減する術、空を泳ぐ為の術、咄嗟の最中だったが、それらは確実に組み上げて今もこの身に纏っている。
なのに、

――――飛べない……！？

右へ流れる風は直前で突き上げの突風となり、交差する筈の気流が真際でぶつかり合う。
組み上げた術式と見極めた予測に対して、ほんの少しずつ回答をずらされているかのような違和感が、風に流される身体の奥にはある。その感覚を言葉にするなら、噛み合わない、だ。

歯車の狂った乱流の意味をシャマルは考える。
飛べた筈の空を飛べない。避けた筈の流動に流される。乗ったはずの風に落とされる。それらを総合すると、導かれる答えは、やはり一つしかなかった。

――――こっちを、喰いに来てるわね

自然の風とはまるで違うと自ら評した理由が、文字通りに牙を剥く。乱流の渦が導く先は巨体の懐。１と１００どころか、０と１００にも等しい質量差に叩きつけられればどうなるか、結果は火を見るより明らかだ。

逆らう風に手足を広げて、ともすれば引き込まれてしまう気流の

中を、術式の補助のみでシャマルは渡った。描く運動は回転。逃れようとするベクトルが加わり、軌道は魔獣の尾びれ方向へと廻る螺旋軌道を往く。視界を奪う速度は徐々に高まっており、心眼で視る情報に今は自身の全てを預ける。

吹き抜ける風の速度と通り過ぎる巨体の全長は正比例の関係にあった。

最高速に達しつつある風の遠心力に胃袋をひっくり返されるような感覚を得ながらも、思うのは一つの事実だ。

――もうすぐ、最後尾ね

風の終わりを感じる。目も開けられぬ速度の中でも、自身の感覚は正確にその事を掴み取っている。

そして、とシャマルは身を引き締める感覚を思考の中に落とした。遠回りの連続にてたどり着いた風の最後尾には、その書いた文字通りの物が待っているからだ。尾びれ。三又に分かれた、ビルほどの大きさを持つそれが、風間を泳ぐ巨躯の舵として自在に蠢いている。

――ここを、抜ければ……！

覚悟を決めた身が最高速を得る。

ハ、と吐き出す息の温度が風に掻き消されるよりも速く、それは来た。風のうねり。物体の表面に帯びる気流の乱れに、今までの回転軸とは全く違うベクトルの風を感じ、シャマルは今までデバイス内に溜めていた術式を一斉に解放した。

足を振り出す。なのはの使うアクセルフィンに似た光が足裏で瞬き、瞬間の加速を生み出す。巻き込む風の力は既に通り過ぎた後だ。

ベクトル方向を頭上に、減速と空減の光を纏い、シャマルは身を躍らせた。
仰け反るように曲げた背のぎりぎりを魔獣の尾が通り過ぎる。よし、と思う思考、続き、次、と至る行動が身体を動かす。二本目、尾びれが眼下を過ぎ去った。三本目の尾は二本目との対角線上にあるので、これで、最後の脅威は全て通り過ぎた事になる。

――あとは……

距離を取って、とさらに先の行動をインプットする思考に、不意に、

――え!?

という驚きの感情のみが訪れた。
その原因は通り過ぎつつある巨体にある。
それはくねる様に身体を捻る動きだった。航空機動で言えば、バレルロールに当たる横回転のマニューバで、その結果がもたらすものは、

――尾が!?

目前、横倒しになる形で並びを回転させる尾の三本目が、頭上からこちらに降る。
マズイ、と。今日何度目かの思考をシャマルは生み出した。
こちらの軌道は飛び上がるかのような跳躍だ。身を回して叩き下ろす魔獣の尾びれに対しては自ら突っ込むような形になる。相対速度により、接触の速度は今までに無い超高速だ。
避けねば、という行動がシャマルの身体を背後に飛ばした。急激な加速に、身体がくの字に折り畳まれるかのようだ。内臓を全て潰

されるかのような重圧な中で、シャマルは目を上げ、両手はさらにそれよりも高く掲げられた。
防護障壁。
尾が迫る。来る、と思う瞬間、それは既に叩きつけられていた。
正確には、叩きつけられたかのような衝撃を受けた、であるが。

「……っ！！」

息を吐き出すのは驚きと、衝撃に収縮した身体が肺がから空気を追い出したからの二つの理由がある。
打ち付けられたのは、魔獣の尾のほんの先端部分だった。かする様に触れた尾は、しかし激突という認識をシャマルにもたらした。
衝撃に弾かれる身体は下向きの加速を得て、回避行動の横ベクトルと合わさって、やや傾いだ方向に風を突っ切った。

――――何て攻撃力…、まともにぶつかればやっぱりただじゃすまないわね

身に当てられた衝撃に評価一つ、やられたと思う反面、凌いだという気持ちがある。
風から抜け出した体は、今は下向きの加速を得て落下している。
まずは体勢の立て直しをせねば。指に光るリング、クラールヴィントからその為の術式を呼び出す。
しかし、その前に。

「え……？」

暖かな風に抱かれているような感触、ふわりとした浮遊感が身体を包み、風に受け止められる柔らかさを覚え、これは？という疑問視が生まれる。何だろうかと思う答えは、魔法であろうとの予測が

あるが、一体どんな魔法の効果が働いているのか、一瞬では判断がつかない。
　可視魔力光が見えないところを見ると、バインド系の魔法で受け止められた訳ではなさそうだ。
　空気圧縮のエアクッションかとも思ったが、魔獣の吹かす乱流が上空にある中で、この高度の大気を押し固めるのは難しいだろう。

　ならば、との不可思議の気持ちが自力で答えに行き着く前に、それは向こうからやって来た。
　まず聞こえたのは音。一線に気流の尾を引く風の音と、翼のはためく音とが聞こえ、次いで、感触が身に来た。腕に受け止められる感触。見上げる視界には笑顔を輝かせるエリオ。こちらを受け止める腕に優しい力を込めて、

「良かった、シャマルさん……！」

　ぎゅっ、と。
　あ、と思考が声を上げた。
　はわ、と実際の口からはそんな声が漏れる。
　胸の高鳴りは急激な気圧差による動悸の乱れだろう。
　顔が熱いのは冷えた肌が平熱を高熱と勘違いしているからに違いない。
　ならば、この心のときめきは何の勘違いだろうか？
　そこでシャマルは自身の思考を無理やり停止させた。局所的な幸せお花畑空間が具現結晶してしまいそうだったからだ。エリオの後ろで頬を膨らませているキャロが、わたしの、わたしの、という声にならないオーラを発しているのも気になって落ち着かない。
　それらを含めたとにかく色々な危険を察知して、シャマルはとりあえずの言葉を紡ぎ出す。

「大丈夫よ、ありがとう」

声の平静だけは何とか保つ。

少し名残惜しみつつ、エリオの腕の抱擁を離れ、自力の魔法でシャマルはフリードの横に滞空した。

はふ、と彼らに背を向け一息。

――――危なかった……。もう少しで落ちるところだったわ

未だ感触の残る身体を浅く抱きしめて少し荒くなった息を整える。

背後、キャロとエリオの言い合う声が僅かに聞こえた。

「…へ？いや、もう別に抱っことか…、ちょ、キャロ…、だめ…あー……」

完全に平静を取り戻して振り向くと、先まで自分が居た場所にはキャロが腰をゆったりと据えている。

少し睨むような視線と、こちらに突き出しているケリュケイオンはキャロなりのファイティングポーズだろうか。大丈夫よ、取ったりしないから。手を振る動作で落ち着けと意志を示し、シャマルは改めて二人を見た。

先程、落下する自分を受け止めた魔法の正体、それはキャロのブーストだろう。彼女の得意とする増幅の魔法だ。

対象が発動させた魔法や術式、その他身体能力や限定的な現象に対して、魔力付加という形で追加の効果を与える魔法で、キャロの得意は効果増進だ。威力や効果をそのまま強化する、もっとも単純なブースト魔法。

単純ゆえに効果は絶大だが、逆に言えば増減の調整が難しいという事にもなる。

六課の訓練当初、ブースト過多のストラーダに振り回されてエリオが吹っ飛んで行くのは毎日の恒例行事みたいなものだったし、ブレーキが利かなくなったフラッシュムーブでフェイトが訓練所の壁に大穴を開けたのも記憶には新しい。あまりの速度でぶつかったため、きりもみに吹っ飛ぶ卍型のシルエットが綺麗に残り、勿体ないからという理由で修理は未だされていない。フラッシュムーブでその穴をうまく通り抜けられると魔導師ランクの試験に受かると訓練生の間では評判だ。

だが極めつけは、何よりスターライトブレイカーをブーストさせてしまった事だろう。エクシード駆動でもない平常運転の一撃で、非殺傷設定なのにも関わらず、屋内訓練施設が内部崩壊してしまったのは今でも地上本部で語り草になる逸話だ。

訓練の責任者であるはやては大目玉で、なのは当人も始末書と反省文だった。“私は手加減という言葉を知っています”というテーマでフリー用紙５０枚以上の論文に仕上げろと。

そんな頃に比べて、今は随分とブーストの魔法をキャロは使いこなしている。

がむしゃらに背中を押し出すようだったブーストは、今は、隣に寄り添って手を引いて力を貸すような形に落ち着いていて、訓練でエリオが吹っ飛ぶ回数も目に見えて少なくなっていた。

ただ、女性人との近接訓練で肌の触れ合いがあった直後などは、

――――けっこう飛んで行くわよね、エリオくん……

まあ、深くは詮索しないでおこう。

ともあれ、着実に若い力は成長している。

――――特に、今のは難しい逆ベクトルのブーストだったわよね

ブースト魔法の基本はプラス方向の効果増強であるが、その一段上の応用技術の中にはマイナス方向の効果減衰というものがある。制御や捕縛などに用いられるブースト魔法で、単純な強化よりも術式の計算が難しい。

強化ブーストが対象となる魔法や現象のベクトル方向を自動的に読み取ってその方向性に沿うような形で発動するのに対し、逆ベクトルのブーストはその方向性を逆算する形で制御しなければならないからだ。単純に手間は二倍で、制御はさらに難しくなる。

先の場合、まずキャロが発動させたのはこちらの空減術式への強化ブーストだ。風に抱かれる感覚は速度差による気流で、暖かな感触は増大した空気抵抗の摩擦によって生じた熱。そして、そこに発生した外と内との相対速度に術式で介入し、減速方向の速度をブーストさせる事でベクトルの逆算を省いた。

単純な逆ベクトルのブーストではなく、マイナス方向に働く力をブーストさせるという発想の転換。それを思いつき、しかし実戦で実行出来たのは、

――エリオくん、ね

彼が居たからこそだ。

極限までの精神集中が必要な時は、最も信頼できる誰かが支えてくれるのが一番いい。

キャロを介したフリードの制御と、その彼女が完全に魔法に集中できるよう安心を与える。殺伐とした戦場では、何か、誰か、拠り所の有無が命を左右する事さえある。

――そういう意味では、最高のパートナー同士ね、この二人は

銀竜とその背の二人、もうすぐこの手を離れてそれぞれの道を歩

んで行く事になる可愛い教え子に目を向けて、微笑みを一つ。

「どうしたんですか？あ、やっぱりどこか怪我を……！？」

とのエリオの声に、

「ありがとう。でも、言ったでしょ？大丈夫、ってね」

いつの間にか大きくなっていたエリオ。

目に見えて成長を続けるキャロ。

若い二人に背を向けて、シャマルは見定める巨大な魔獣に腕を伸ばす。

見せるべきは、この身にある最大限の力。

全力を出せる場であるならば、若さでは届かぬ高みを見せておいた方がいい。彼らが目指すべき高みとなり、いつか並び、そして追い抜かれる為に。

先を往く者の、それが使命だ。

「ま、なのはちゃんみたいな天嶮の山岳にはなれないけどね」

呟きながらも、淀みなく動く両手が描くのは、捕縛の式が幾つも絡むミッドチルダ式の魔法陣。

一つの術式を幾重にも折り重ね、魔法陣は厚みを増していく。

「チェーンバインド……？」

気付いたのはキャロ。その声に、シャマルは薄く笑みで応える。

よく気づいた、と。

複雑に絡む術式で構築される魔法陣を紐解けば、その基礎構築は確かにチェーンバインドそのものだ。自身の最も得意とするバイン

ド系の魔法。だが、あの巨大な魔獣をたった数本の鎖で拘束出来るかと言えば、それは無理だろう。

「１０本やそこらのバインドじゃあ、確かに無理でしょうね。でも、」

言葉を区切って、振り上げた腕で魔法陣の最後の一篇を完成させる。戒めの鎖から派生した、新たな魔法術式が発動の時を待ち、静かに光を湛えている。

光の円環に手を添えて、一息。

仕込みを頭の中で確認する。翻弄される風の中で、置き土産に残した魔力の欠片を数え、頷く。

「さあ。数の力、見せてあげましょうか」

魔法陣に力を込めて、それに連動する形で魔獣の周囲に置いてきた魔力の欠片に息を吹き込む。淡く光を湛え、出現したのは１００余りの簡易魔法陣。

無数の光が、リバイアサンを取り囲むかのように滞空していた。

「万条の禁戒（ミリオンバインド）！」

そして、魔法は発動する。

一斉に起動した魔法陣からは数え切れないほどの魔力の鎖が溢れ、そして対象の動きを封じる為に絡みつく。

その数、実に七万以上。

百万（ミリオン）には遠く到らないが、しかし、その一本一本が相互に拘束効果を補助する術式を組み込まれている為、最終的なバインド効果はチェーンバインド１００万本をさらに凌駕する。

その強力な効果に与えられた魔法位は、最上位の封印級指定。

漲る様な魔法の手応えに、歯を食いしばる。自身の持ち得る、これが最大だ。

オオオオオオォォォォォォォォォォ――――――――――！！！！！！

がんじがらめのまま、魔獣は吠え叫び、鎖を引き千切ろうと暴れる。

だが、その戒めを振り解くには至らない。

チェーンバインドには捕えた対象の魔力を拡散させる効果があるが、このミリオンバインドではその効果をを大幅に強化し、さらに、数に物を言わせた物量展開によりバインド効果を相互補助させ、そこに加えられる魔力凝縮の術式にて拡散させた魔力そのものを物理的な圧力に変換して敵を抑え込んでいる。

敵の魔力が強大であればあるほど、ミリオンバインドもその拘束力を上げていく仕組みだ。理論上では、無限の魔力を生み出すとされるジュエルシード級の魔力結晶ですら覚醒状態のまま確保出来るそうな。

だが。それはしかしながら、文字通り、机上の理論による話に過ぎない。

リバイアサンの巨体が唸り、身体をよじる度、バインドの鎖は一本ずつ千切れ、崩壊した術式に込められた魔力が燐光のように飛び散っている。

「っく、やっぱり、キツイわね……！」

苦痛と苦悶が表情に出る。

魔法の規模と術者への負担は大抵の場合、正比例の関係だ。

チェーンバインド１００万本に値する威力の持続は、それだけでも相当な魔力を消費する。敵から奪った魔力を注ぎ込んだとしても、

並大抵の事で補填できる消費量ではない。
故に、今は敵の力加減を見極めた上で魔法全体の魔力濃度を変化させて対応している。
敵が身じろぐ場所に魔力を充填させ、その他を薄くする。敵がまた動けば、それに合わせて魔力を移動させる。指一本で傘のバランスを保つ遊びがあるが、感覚としてはあれに似ている。バランスを取る傘の規模を数百メートル級に拡大させて、さらにこちらの魔力が底無しに奪われるおまけを付ければ、だいたい今の状況と同じだろうか。

「、っく！」

ばぢん、という鋭い音と共に、まずは痛みが来た。手の甲。赤い滴が皮膚を突き破るように弾け散っている。腱と筋肉が内側から爆ぜた音だ。
もう来たか、と。シャマルは熱を帯びる鋭い痛みを見つめた。

魔力暴走。
逆流した魔力が肉体の内側で急激に膨張し、爆発する現象だ。
今の場合は、敵に打ち破られたバインド魔法一本一本に込められた魔力が自然拡散し切れずに魔法回路を逆流してこちらに流れ込んだ為に起こったのだろう。
通常ならばこんな事はまずあり得ない。魔法陣には魔力の逆流を防止する術式が仕込んであるものだし、欠損が生じて破られた瞬間に魔法回路は閉じられ、魔法とのリンクは強制的にカットされる。
だが、今は違った。
敵の動きを完全に封じる為に構築された魔法陣には、余分な術式を組み込める余裕は無い。さらに、魔法とのリンクをカットする事は、ミリオンバインドそのものを破棄する事となる為、それも出来ない。

魔法の保持。
敵の動きに合わせた魔力移動による対応。
逆流した魔力の処理。
上級魔導師ですら難しい作業を並列で、しかも一人でこなすのは、いくら補助魔法に秀でたシャマルとはいえ無理な話だった。

痛みが血を滴らせるその間にも、バインドの一本一本は破られつつある。破壊の反動は、魔法の光を掴む術者本人、シャマルの手に裂傷として刻まれ続ける。
鋭い音と痛みが脳に響くたび、筋と肉が引き裂かれる感覚が手先から腕へと、徐々に上って行く。
無茶だったな、という思いはある。
もとより、封印級師弟の魔法とは、アースラのような次元航行艦に術式核を持った兵器として搭載される類の代物であり、それは例えば、アルカンシェルのような魔導兵器とカテゴリー的には等しいものだ。
魔導師が単体個人のレベルで行使するような魔法ではないと、それは自分自身も承知の上。
しかし、そんな無理も無茶も、全ては理解した上だ。

「くぅ、頑張れ、女の子！でえええぇぇぇぇぇぇぃ！！」

掴む光を両手に、血の滴を振り解いて、シャマルは背中から一本背負いの姿勢。魔獣に絡みつく無数のチェーンバインドが動きに合わせて引っ張られる。

「う、わ……！」

感嘆と驚愕には言葉も無く、エリオとキャロは豪風を引いて舞い

上がる巨体を見た。
轟、という大気が引きずられる音がする。
巨大さ故か、その魔獣の移動速度はやけにゆっくりと見えていた。
やがて、魔獣の身体がこちらの頭上天頂へと到達し、まるで黒い空のように見えるそれは、回転運動に合わせて上下を反転し、仰向けの姿でゆっくりと地上へ降下の体勢に入った。
背が地上へと向かう。
落下する。
落着の位置はちょうど、先刻まで居た旅館。

「あ、シャマルさん！そこにはヴィヴィオやフェイトさんが……！」

気付きの叫びはキャロだった。
届いた声に対する返答はシャマルの心の中で、

――あ、マズ！

魔法の制御で頭がいっぱいだった。
どうにかして落着の位置を変えようとするが、こちらの与えた加速に引っ張られる膨大な質量を押し止める術は既に無かった。

――逃げてーーー！！

心の中で悲鳴を上げる。
と。
爆炎。轟音。
立ち上った凄まじい紅蓮の光が魔獣を包み、落着の瞬間が僅かに遠のく。跳ね上がった巨体は影を落とす位置を旅館からその奥の山岳地帯、ちょうど、雷の柱が立ち昇る場所へと変更し、

――――ッズズゥゥゥゥ……ン！！！

落ちた。

山が崩れる。粉塵の津波が吹き上がる。魔獣の巨体が土石流と共に斜面を下り落ちる様は凄まじい音と震えの連続だ。

天変地異もかくやという被害の中で、何とか原形を保った温泉旅館の瓦葺きに立つ、二つの影がある。

風になびく、純白のマントに包まれた黒衣。翻る金色。

薄紅の騎士甲冑。紅蓮に燃える鬣。

「何なの、これ？なのは達は……？」

「夢の続きか？冗談にしては、笑えんな」

レヴァンティンから弾き出されたカートリッジが、カツン、と小さな音を立てた。

モンスターパニックｆｉｓｈｉｎｇ（３）

「シグナム！フェイトちゃん！」

届いた声に二人が仰ぎ見ると、歪んだ夜空には今にも泣き出しそうな顔になっているシャマルと、銀翼を広げるフリードの巨躯、そしてその背から顔を覗かせるエリオに、何故かお姫様抱っこのキャロの姿があった。

「……？？」

何が起こっているのか分からずに二人は首をひねった。

「て、天変地異でも起こったの？」

「分からん。……が、事態は早急のようだな、っと」

地響きを感じたのは言葉の終わりと同時だった。

鳴動する地面の振動に不安定な地盤が流され、足元の支えを失った旅館が傾き始めた。振動は止まらない。その為、建物の動きも止まらず、その建造物を支える柱が折れる鈍い音を聞き、シグナムはその場から大きく飛び上がった。フェイトも後に続く。

一線を切った後の崩壊は一瞬だ。流れ出す土は土石流となり、その巨大な圧力に押し流される館を眼下、さらにその下、土の海に呑みこまれている巨大な影を二人は見る。

リバイアサン。魔界にて呼ばれるその魔獣の名を二人は知らず、人の領域から観測するその全容は全長２００メートル超過の魚類という、突拍子もない光景だった。

思うことはそれぞれに、

――――ＳＴＭＣか？宇宙怪獣なのか！？

――――ああ、こういうの知ってるよ。もうすぐウルトラマンが来るんだよね……

未だ寝惚けの脳が覚醒しきれていなかった。

しかして魔獣も目を覚ます。世界を震わせるような大音を声として上げ、家屋の大黒柱に用いられる大きさの樹木を水飛沫のように振り払い、天空渦巻く豪風を鎧のように身に纏う姿は強大の一言に尽きる。

尾びれを空気にしならせ、台風のような気流の乱れを泳ぎ、再び巨体は空へと舞い戻る。

「う、わ、わ、動いた！？や、やっぱり、夢の続きじゃないんだね！？」

「ありえん、非常識にも程がをおっ！？」

台詞の途中、遮って、シグナムは背後から急襲された。攻撃方法はベアハッグであり、仕掛けてきたのはシャマルだ。

妙な叫びを上げたシグナムをきつく締め上げたまま、大粒の滴を目からこぼすシャマルは涙声で、

「ふえ～～ん、シグナム良かったーーー！もう、私、私、自分の手でシグナム達を捻り潰しちゃうところだったんだから～～！！」

「待て、離せ、落ち着け、泣くのと鼻水を私の甲冑に付けるのをやめろ！そして言ってる意味がまるで分からん！」

「そうだザフィーラ！ザフィーラは何処！？」

――――だから落ち着けと……！

背中に抱きついたまま、はっと顔を上げてきょろきょろ辺りを見回すシャマルにシグナムの心の叫びは届かなかった。

その代わりに、シャマルの悲痛な叫びは誰かに届いようで、皆の間を通り抜けた声への返答はすぐ傍から小さな寝息の呼吸音と共に、

「とっくに無事だ。ヴィヴィオにはかすり傷すらつけておらんぞ」

幸せそうに夢を見る小柄な体躯を背に、青い毛並の狼は傷だらけの身体でそう言った。

ほっ、とシャマルが吐息をつくのをシグナムは首筋で感じつつ、その視線はザフィーラを捉えている。

傷だらけになった盾の守護獣は浅く息を吐いていた。己の呼吸運動で背にある寝顔を崩してしまわぬように。

その身を護れと、主の命を完遂した盾の守護獣に、そうとは知らないシグナムは、

「何故そんなにボロボロだ？」

ザフィーラは目を伏せ、身じろぎをせぬまま大きな吐息を一つ。

動きを最小限に静かに息を吸いつつ再び視線を上げ、

「――――シグナム。一度でいいから、騎士の上下を超えてお前を殴らせてはくれぬか？」

「何の話だ、こんな時に」

一発でいいから。顔じゃなくていいから。
いつになく真剣な声のザフィーラと真剣に意味の分かっていない困惑のシグナム。騎士の上下関係が今まさに覆らんとするその瞬間は、しかし、残念ながらこの一時の合間には訪れそうにはなかった。

何故か、と言えば、答えは簡単だ。
直径数十メートル級の大口が、彼女らの鼻先５０メートルの距離に迫っていたからである。

「退避ィィィィィィィィィィィィィィ！！」

叫びはフェイト。
同時、ソニックムーブ全開。
衝撃波を残す速度が閃いた。
フェイトだけではない、その場に居た者全てが持ち得る全速力を駆使してその場を離れ、その直後、がずん！という口が閉じただけにしては大袈裟すぎる音を、またそれぞれが聞いた。
最も遠くまで移動出来たのは、やはりフェイト。次いで、フリードの翼が安全圏にある。シャマルを抱えたままのシグナムとヴィヴィオを背負ったザフィーラが共に、同程度の距離を移動して滞空していた。

「あ、危なかった……！下らん口論のせいで死にかけたぞ……」

「下らんだと……！？」

「蒸し返すな！交渉は家族会議の食卓にて、だ。今はあの非常識な物体の相手をせねばならんようだからな」

ならば良いが……。呟くザフィーラに対し、本当に何があった！？とシグナムの困惑もさらに深まる。

ともあれ臨時的な休戦協定を結んだシグナムとザフィーラは、戦いの行動を起こす前に、共に、己の背にある暖かい感触へと手を伸ばした。

「いかん。タオルケットがずれているな。この子に何かあったら、私は本物の悪魔に出会う事になるぞ」

「おい、シャマル。いい加減に離せ。これでは戦えんし、私は首筋が弱いのだ」

すやすやと寝息でザフィーラの背をくすぐるヴィヴィオはそのままで、ぐったりと荒い息をついてシグナムの首筋を無自覚に責めているシャマルが口を開いた。

「ちょっと、魔力が切れかけてて……。待って、もう少しで飛べるくらいに回復するから」

「……本当に何なのだ、この状況は。何をしたらそうなる？」

「ミ、ミリオンバインドを、ちょっとだけ」

は？

ひどく間抜けな声がまろび出た。と同時にシグナムは己の耳を疑う。

ミリオンバインド。チェーンバインドの最上級、封印級の指定を受ける高位魔法だ。

――確かに、カテゴライズは魔法の分類かもしれんが……

それは単純に魔法という項目の末端に加えられているというだけの話で、その実態は専用の魔導駆関に術式核を取り込んで発動させる魔導兵器にも等しい代物だ。次元航行艦クラスの艦船に装備されるような、高位の魔導師ですら反動で死に至る危険もある魔法を使ったと、背中にある小柄な騎士はそう言った。

無茶というか、無謀だ。

しかしその行為に対して、何故という疑問は浮かばない。その是非を問うほどには、シグナムも寝ぼけていない。

「成程、苦労をかけたようだ」

シグナムは視線を敵へ、くねらせた身を翻す巨大な魔獣へと戻し、しかしそれ以上動く事無く、しばしの間は背中をシャマルに貸した。

背中、甲冑越しの体温は平常よりも高い。魔法の反動で熱が出ているのが原因か。こちらの前へ回してしがみ付く手には、見れば鋭く深い裂傷が無数にあり、小規模の魔力暴走が起きたのだと推測できる。本来ならば、術者がシャマルでなければ、この傷は魔導師の五体をバラバラに引き千切るほどの深い致命傷になっていた筈だ。

――寝坊が過ぎたか？

シャマルの手から落ちる赤い滴が薄紅の騎士甲冑を伝っていた。それを気に留めず、懐から出したハンカチを傷だらけの手に巻いてやる。

「、っ」

「すまん、不器用でな」

いいのよ、と声がする。寄りかかる温かみが、どこか嬉しそうに、背筋の延長にある首元に頬を寄せた。荒い息が整っていくのをそこで感じる。

――――だから弱いからやめろと……！

思うが、言わず、ただ待った。

やがて、ふわりとした感覚と共に暖かい重みが背から消え、シグナムは振り向かぬまま湖の騎士の復活を知る。

少しだけ長く感じた時間は、しかし未だ、こちらへの再攻撃を開始しない空の化け物の姿を見るに、そこまで悠長な時間ではなかったようだ。

ただそれは、その程度の時間の休息しか取れていないという事でもある。

恐らく、今のシャマルは自立するのが精一杯で戦闘に耐えるほど回復はしていない筈だ。直の触れ合いにて得た情報は、彼女自身の、もう大丈夫、という言葉以上にその身の疲弊を知らせてくれている。

不在のツケで無理をさせてしまった。

深く思うが、だが、その事に対して後ろを振り向く事は無い。

引き抜いた剣を振り構える意気で、己の過失を、それでも構わんと切り捨てる。

為すべきを成す。

不器用な自分に出来る事など、所詮たかが知れている。

今まで背中にあった、そして、今もその背の向こうにある、その無事を守り抜く事が、今の自身に出来る全てだ。悔やみも恥も、その後で味わえばいい。謝罪はそれこそ、家族会議の食卓で、だ。

「行くぞ、テスタロッサ！」

名を呼び、返答を待たぬまま、シグナムはデバイスを振った。カートリッジ装填の動き。弾倉が駆動し、内部で弾かれた撃鉄がカートリッジを内燃機関に打ち込む。魔力充填。空になった薬莢が、排出される。

「遅れた分は、きっちりと働こう。――レバンティン！」

『Ｊａｗｏｈｌ（了解）』

魔獣の巨大な姿に向かい、シグナムは空を蹴り上げて飛び、頂点方向より速度を相対させて並んだ黒いバリアジャケットの姿を見る。

「気合入ってるね、シグナム」

「即興的にだが、守りたいものが出来た。知らん間に借りも作ったらしい。――なあ、一発くらいは甘んじるべきだと思うか？」

「二人で、ね」

ああ、と呟きが生まれ、前に向けた視界に更なる速度が乗る。
眼前には空を往く魔獣。
戦闘開始の合図も無いまま、二つの光が、加速する。

・
・
・

フェイトとシグナム。
並びの隊列を飛び抜け、先行したのはフェイト。金色の残像を残す高速が幾つもの魔弾を撃つ。数は十七。
初弾の八が直線の軌道を飛ぶ。次弾の四が曲線を描いて回り込み、終弾の五が上下を挟み込む形で往く。
閃光の着弾は一呼吸が終える間際の時間で成される。

「は、」

フェイトは息を吐き、

「、！？」

次を吸い込む気音には驚きがあった。
フェイトが見たものは三つの事象である。
直線を走った初弾が魔獣の鼻先に着弾したのがまず一つ。十分な攻撃の意志を乗せた魔弾の直撃を気にも留めずこちらへ向かう魔獣の姿が二つ。初弾から僅か遅れて回り込んだ次弾と終弾が魔獣へ至る前に掻き消されたのが最後に三つ。
それら三つの光景からフェイトが知るのは攻撃の無力と魔獣の頑強さだ。

――――硬い。それに、あの周囲を渦巻く風の結界……

どうするか、という思考がある。

経験値の中にその答えを探し、そしてその作業の合間にもフェイトの速度が緩まる事は無い。

飛ぶ。風を纏う魔獣の周囲を回り込むような閃光が尾を引き、その高速の中でフェイトは腕を振りかぶる。

フェイトが腕を回す運動の最中において、バルディッシュも己の形態を変じていた。自らの主がどのような攻撃を望んでいるのかを汲み取り、自己判断による意志決定がその姿を戦斧(アサルト)から大鎌(ハーケン)へと変える。フェイトから流れ込む魔力を吸って黒鋼の装甲版から金色の刃が延長した。

無言の意志疎通は高速の戦闘速度に無駄な時間を残さない。すれ違いの一瞬、数十倍に圧縮された時間感覚の中、次の攻撃を得たフェイトがその手を振る。

魔力刃。金色が閃き、風を切り裂く。着弾と爆裂。攻撃の結果が巨体と共に通り過ぎ、煽られる風に引かれる前にフェイトは足を宙に蹴り出した。跳ねたベクトルが側面方向に直角を向き、離脱。

風の余韻に髪を振り乱して、フェイトは背後を見る。

「ハーケンセイバーでもダメージ無し、か」

垣間見た結果を口にするのは、その事実を再認識して次へ繋げるためだ。また同時に、念通信の状態が芳しくないこの空間内で自身の得た情報を仲間に伝える目的もある。

「厄介な敵だ」

方向は直上、方角は南西。総括してやや頭上の右後ろから声が届き、フェイトはそちらを軽く見上げた。

声に気付いたからではない。声のする気配に気付いたから、である。

おおよそ、シグナムの行動は分かっていた。

魔獣に対して正面から向かい、側面に回り込んでそのまま離脱するこちらの動きに対し、この初陣に限ってシグナムは様子見の一見に徹するだろうと、そういう予測だ。

理由を問えば簡単な話で、目覚めの準備運動にも等しい結び合いに余計な手立てを加えて、こちらの予測を混乱させる動きを敵が取るのを防ぐ為だ。無論、これは自身の中だけにある予測で、実際の真意は問いただしてみなければ分からないし、聞いた所で正直に答えてくれる筈も無いが、だが実際に、その予想通りにシグナムはこちらを見おろす形で滞空している。

表情ごとこちらに向けているのは、見下すような視線にならないように、との彼女の気遣いだ。多分、意識してやっている事ではないと思う。主従と規律にはうるさい彼女の事だから、それが身に付いた習性なのだろう。

それと同時に、烈火のような熱い覇気が空気越しに伝わってくる。最大駆動などしておらずとも、抜身のレヴァンティンからは大気を震わすような剣圧が漂ってくる。

――――戦いたい、というよりも……

倒したい、という気迫がそこにはあった。

振り返る空には、ひれを立てて風を泳ぐ大怪獣がいる。

角度を変え、視線を滑らせた先には銀竜と共に距離を取るシャマルの姿が。さらに下、市街地のビルの屋上には移動したザフィーラがどこから持って来たのか、竹折りのゆりかごで眠るヴィヴィオをあやしていた。見なかった事にして、視線をシャマル達へ。

フリードとその背のキャロ、エリオはほとんど無事だ。戦闘とこの異様な雰囲気によるプレッシャーはかなりの物だろうが、しかし外傷は無い。あの怪獣相手にうまく立ち回ったのだなと想像できる。

対して、シャマルの方は重傷だ。傍目から見える外傷はかなり深

い。表情にはあまり出さないが、心的にも相当なプレッシャーがあった筈だ。あの怪獣相手に果敢に立ち向かったのだなと想像する。

シグナムが熱くなるのも当然だろう。無論、自分も。

だがしかし、そんな烈火の意志に、こんな状況でも、自分は良く気遣われているなと思う。戦場では度々思う事だ。先の結び合いにしろ、それ以前の現場にしろ、技量で追い付いたとしても、器量では永遠に及ばないのではないかと、そんな事を考える。

その事実を思う度、この心は嬉しさと悔しさが半分ずつ入り混じった複雑な感情を得るのだ。

――初対面は、敵だったのにね

初めての出会いは敵として。好敵手と切り結び、やがて仲間になった。今はかけがえの無い存在で、背中を預けるのにこれほど頼もしい存在も他に居ない。剣の加護を、とはシグナムが良く口にするベルカの祝福の言葉だが、恐らく、その加護とはこの人物そのものだろう。

なのはが居なければ自分の嫁に欲しいくらいだ。

そんな想いが、戦場に在るはずの表情を弛緩させる。その表情は薄く目を細めた笑みの形。戦の場に相応しいものでは無いが、何故だろう、この人物と飛ぶ時はいつも、心の何処かにこのような笑みがあるのだ。

「どうした？」

「ん。いや、シグナムをお嫁さんに貰いたいなって、ね」

「な、え、は？いや、テ、テスタロッサ、何を、いや、私は、え？」

しまった、つい。

頭上のシグナムの表情が見る見るうちに赤く染まっていく。常のシグナムなら阿保か、と叱責が飛んでくる所だが、今は完全に不意を突いた形で、闇討ちのような状態だ。完全な死角から斬り捨てられた剣の騎士の言は既になまくら同然に鈍っており、その、とか、えっと、とか、そんな曖昧な言葉の断片しか紡ぎ出せていない。

ああ、まずい。完全に動揺させている。

「その、えっと、ま、間違いなんだよシグナム。それにほら、私にはなのはが居るし、その、えっとごめん、もし期待させちゃったなら……」

「な、何だ、今、私は間違ってプロポーズされた上にセルフで振られたのか？はは、新しい自給自足だなあ、オイ、テスタロッサ」

ようやく、常と変らない眉を引いた険しい表情がシグナムに戻る。と同時に、名が体を表すその鋭い剣のような眼光が襟首を掴み上げた状態で目前３センチの距離でこちらを両断せんとギラついていた。怖い。

「ご、ごごめん。今のは、ほら、うっかりと言うか、ついと言うか……」

彼女のデリケートな部分を迂闊に触ってしまったのだろう、その怒りと憤りの表情は収まる気配が無く、何か、話題をそらさねば魔獣以上の脅威に今から自分は立ち向かわなければならなくなる。

仕方ない、と一息。吐き出す息に言葉を乗せて、

「その、シグナム。一つだけ、いいかな」

「何だ？」

「起きた時に下着、着けて来なかった？」

襟首を掴む手が離れ、がばっ、と勢い良くバリアジャケットのスカート部分を押さえるシグナム。驚きと羞恥の入り混じった目を見開いて、その剣の視線がいよいよフェイトを両断しようと振りかぶられる。

「み、見たのか！？」

「いや、だって見える位置に浮かんでるから、つい……」

……！、という声にならない声でシグナムはこちらを睨み、

「お、お前はどうなんだ！？」

「まず何よりも先に確認して身に着けたよ。フラッシュムーブで。見えなかった？」

見えなかった、と呟く声が聞こえる。日々の着実な努力が自身の技量に成果をもたらしている事実を認識し、フェイトは親指を立てて見せた。

「勝ち誇るな、ばか者！」

怒られる。が、シグナムの気は先の話題から逸れた様で、羞恥から来る照れ隠しの怒りだけが剣幕の切れ味には乗っている。

「まあ、でも実は時間圧縮で感覚を引き延ばすのを忘れてたせいで

下着を誰かのと間違えちゃったんだけどね。サイズが合ってなくてすごくキツイの」

返答はぶっきらぼうに、

「ああ、そうか」

気にせずフェイトは、

「わんこのパンツって、ヴィヴィオとヴィータのどっちかな？」

阿保らしい、と呟くシグナムの唇が、噛み潰すかのように、ヴィータだ、と動くのを見てフェイトは内心でやった、との安堵とやっぱり、との納得を得た。

前者はシグナムの意識が完全に前の話題から移り変わった事による安堵。

後者は、わんこ柄は可愛いが少しだけなのはの趣味とは外れているかな、という疑問に対して。なのはの趣味は熟知している。彼女は動物系よりもイラスト系が好きなのだ。

ヴィヴィオを預かって間もなくの頃、女の子っぽい下着をお願い、と言われて黒の豹柄を買った時の事を思い出す。うまく紐が結べないヴィヴィオにほどけにくい結び方を教えている最中、後ろから側頭部をレイジングハートでひっぱたかれた。教育に悪いとその後に散々怒られたが、

「でも私、昔からそんなのしか持ってなかったし、仕方ないと思わない？」

「何の話だ、何の！？」

激怒の剣幕は照れ隠しの為に通常の1．5倍以上も切れ味を増している。それは話題をこちらへと切り替えている証明だ。よし、と心では勝利のガッツポーズ。ここ一番を切り抜け、ふう、と一息。

「まったく、寝惚けるのも大概にしろ。既にここは戦場だ」

戦場でノーパンもどうなんだろう、と思うフェイトだがこれ以上の燃料投下は流石にまずいので口をつぐみ、首肯のみで返答を返す。ふむ、と一息、意気を吐き出すシグナム。その騎士の姿に笑みのような言葉を作り、

「じゃあ、真面目に怪獣退治、行こうかシグナム」

「……ああ、当たり前だ」

呼びかければ、若干、スカートの丈を気にしながら返る答えがある。

ああ、というため息にも似た感嘆の想いがその表情を受け止めるフェイトの中にはあった。

――楽しいね

空を飛ぶのは昔から好きだった。

誰かと飛ぶ嬉しさを知ったのは、なのはに出会ったから。

何かの為に、誰かを傷つけて、それでも戦う事をやめない自分の事を正面から全て受け止めてくれたのは、後にも先にもなのはただ一人だ。

大切なものを護る戦いの意味を知って、それでも結局、大切なものは何も残らずに、この腕の中に、何の温もりも残さずに、居なくなってしまったけど。

全てが終わった後に、何もなくなってしまった自分に差し伸べてくれた優しい手の温もりを覚えている。ただ一つ、胸の中に残った大切な何か。

だから、なのはと飛ぶ空は、嬉しい。心が躍る。

誰かと飛ぶ楽しさを知ったのは、シグナムに出会ってからだ。

敵として相対した彼女の強さは凄まじくて、護る為の強さを見せられた。大切な何かはいつだってそれぞれにある。その歩く道先がぶつかって、もし互いに譲れないなら、戦うしかないのだと思い知った。

何かを護り抜く為の剣は、重く、強く、かつてないほどの全力をこの身に課して、必死に追い付こうと、自分もなりふり構わず戦った。犠牲になるのはいつだって、護りきれなかった何かだと知りながら。その何かを、見捨てる以外の方法を自分は知らなかった。

全てが終わった後に残ったのは、情けない自分と、もっと何か方法があったんじゃないかという後悔だけだった。

結局、何も出来なかった。そんな自分を、しかし何も言わず支えてくれたのは、烈火の剣を受け継いだ騎士だ。

言葉数は常に少なく、訓練だと言うのに全力の剣を振るう騎士の姿は、まるで、後ろを振り向いて立ち止まりそうになる自分に何かを語りかけるかのようで。目を逸らすな、とそう言ってくれているようで。ただ不器用なだけだと、彼女は口では語るけど。

だから、シグナムと飛ぶ空は、楽しい。心が舞う。

――――強くなれる気がするって、こういう事だよね、きっと

今ある幸いを護るために、大切な何かの為に、今できる最善を尽くす。違わず、間違えず、見失わずに、誰よりも強く。一人では無理でも、誰かとなら出来る気がする。背中を任せておけるなら、後ろは気にせず、正面を向くことが出来る。目を逸らさずに。ただ、

真っ直ぐに。
だから直線に、今ある瞳は敵を見つめる。
隣には背を任すに足る剣の担い手が居る。

「――――倒すよシグナム、アレを」

「当たり前だ、テスタロッサ」

不足は何も無い。
倒そう、という想いが体を加速させるようだ。
この楽しい空に、邪魔な風はいらない。

モンスターパニックｆｉｓｈｉｎｇ（４）

空には二つの大きさが存在していた。
一つは天上の月。
歪んだ光を降らす青白い月に照らされ、もう一つの大きさは悠然と空の海原を泳ぐ魔獣の姿。
リバイアサンと、魔界にてそう呼ばれる２００メートル級の超常を、フェイトは見ていた。
隣にはシグナムが並び立つ。
揃いの相貌で空を往くその姿を見つめながら、並びのままシグナムが口を開いた。しかし、という前置きから来る言葉は、

「バルディッシュのセイバーが効かん、か。威力を絞った小技で太刀打ち出来るとは思わんが、これは予想以上だな」

「そうだね、ちょっと硬すぎかな。もしかしたら、防御力場が張ってあるかも」

「見た目からして非常識な相手だ、今さら何に驚く訳では無いが……」

「厄介には変わり無い、か。どうする？」

「正面から叩き伏せるしかなかろう。しかもこの状況だ、出来る限り短期決戦で終わらせて、私は主の下へ向かわねばならん。――――高町方式で行くぞ」

「……全力全開？」

シグナムの返答は即座の行動と共に訪れた。
返答はその通りだ、と。
行動はレヴァンティンの柄を鞘と連結させる動きで。
デバイスの内燃機関の中、既に打ち込まれているカートリッジの魔力を喰い、レヴァンティンが輝きの唸りを上げた。
光が鞘と剣身を覆い尽くし、それらの構造を魔力分解、再構築の後の合一はシグナムの背丈ほどもある長弓形態（ボーゲンフォルム）。
フルドライブモードだ。
うわっ本当に初っ端から行くんだ、と内心で感心しつつフェイトは軽く距離を取った。
強力な砲撃魔法はその周囲に激しい魔力変動を引き起こす。
特に、シグナムのフルドライブはなのはのスターライトブレイカーにも匹敵する魔力変動を巻き起こす為、無防備で隣になど立っていたら衝撃波で吹っ飛ばされてしまう。

フェイトの離脱を流し目で確認し、シグナムはさらにカートリッジをリロード。
余剰魔力を蒸気と共に吹き出しながら、シグナムの手には精製された一本の矢が握られていた。
構え。
水平に伸ばした腕に、垂直に大弓を立てる。
光の弦が一線を結ぶと同時、シグナムは矢をつがえてその光を引き絞った。

「――――翔けよ隼！」

凛と響く声が、直線の威勢を持って正面に飛ぶ。
視界の中、シグナムが狙うべき的は２００メートルもの巨大さを持ってこちらへ顎門を開いている。
風。突風が吹き荒れる予兆に、凪のような静かな風が空を渡った。

そして、来る。
空そのものを叩きつけられるかのような、魔獣の咆哮が。

「シュツルムファルケン！」

構わず、射った。
解き放たれた弦が光の飛沫をたて、矢そのものは紅蓮の色の閃光となった。
初速にて既に音速超過の閃光は、一瞬で大気の壁をぶち破り、背後の空間を丸ごと叩き割るかのような衝撃波を射撃の残響と残して飛ぶ。
フェイトの視界の中、見送る空に閃光の一線が引かれていく。
それは時間にすればほんの一瞬の出来事。
正面から吹く烈風の怒涛を二つに切り裂き、目標を違える事無く、紅蓮の威力は着弾する。
音の響きと光の炸裂はほぼ同時。
一拍遅れ、付加効果の爆裂が業火を噴き上げる。

「よし！」

ふん、といかにも涼しげにその命中を見るシグナムに成り代わってフェイトが右の手をガッツポーズの形で握り込んだ。

「完全に入ったね、今の攻撃」

「ああ。手応えも十分だったが――」

その時だ。
風のうねりに身を漂わせて、爆煙を割る巨体が攻撃の結果を乗せたままこちらに向かい来る。

額から背中の半ばにかけて、一直線に引かれた裂傷がその結果だ。
高熱で傷口は炭化し、それ故か否か、血の一滴も流す事なく魔獣は身を躍らせている。

「え……！？」

傷を背に持ちながらも、しかし魔獣の姿を見たとおりに表すならば平然の一言だろう。致命傷はもとより、決定打にすらなっていないように見える。

「直撃したのに！？」

疑問の叫びは、誰しもが当然のごとく抱く感想そのものだった。
信じられない、という思いがある。
シグナムの、つまりはSランクオーバーの魔導師が放つフルドライブの直撃を身に受けて平然としているなど、常識外というか、物理的にありえないというくらいの驚愕だ。

――――やっぱり、防御力場のようなものが……！？

たとえば結界のような防御壁が展開されていたとしたら、どうだろうか。
否、だとしても不可解は残る。
シュツルムファルケンは強力な結界破壊効果を持つ魔法だ。加えて、アースラ級の艦船をシールドごと貫通する速度と攻撃力を併せ持つ。
防御の力場が敵側にあったとして、その防御を貫通して本体を撃破するくらいの威力は備えている筈だ。

だとすれば、本当にあの魔獣は肉体の防御力のみでシグナムのフ

ルドライブを耐えきったと言うのか。

「化け物……、って、見たまんまだけど、本当に化け物だね」

「――――いや、そうでもないかもしれん、っと」

魔獣の吐き出した烈風を避け、シグナムが飛び上がる。

その動きを追うようにフェイトも空を下に蹴り出して風の一過を回避、さらにそのあとに続く魔獣の突進をフラッシュムーブで距離を取る事によって眼下に収めながら、体勢を立て直す。

「シグナム、そうでもないって、どういう事？」

「勘だがな。奴の吐き出す風が原因ではないだろうか、とな」

ふうん？相槌を打ちつつ、声に耳を傾ける。

「気付いているか？奴と、そしてあの纏う風の異常な魔力値に。恐らくは――――、その風が魔法攻撃の威力を減衰させるのだろう。まあ、だとしてもファルケンをあそこまで弱体化させるとは驚きだがな」

「成程、だからバルディッシュのセイバーも……。でも、もしそうなら益々厄介だね」

シグナムが最も得意とする攻撃は魔力付加による剣撃と、もう一つ、魔力砲撃による一点突破だ。

一発辺りの突破力で比較するならばその威力は六課の中で最強。

スターライトブレイカーの魔力弾殻すら貫通するシグナムのフルドライブを、しかし敵は大きく無力化してしまっている。

あの魔獣が身に纏う風に減衰効果があると仮定するならば、敵側の防御はこちらの攻撃全てをほぼ完全に無力化できるという予測に繋がる。

――どうりで、シューターやセイバーじゃ無理だったわけだ。魔法の規模を上げても、威力拡散する私の雷撃じゃ、ほとんど届かないだろうね

先の結果を鑑みるに、風の結界を突破してさらに相手に効果的なダメージを通すには、最低でもシュツルムファルケン級の突破力を持つ攻撃を用意する必要がある。

もしくは威力減衰の効果を受け付けない魔法か。

ざっと思いつくのは、ヴィータのギガントシュラークか、はやてのデアボリック・エミッション、そしてスターライトブレイカー……。

どう考えても、この場に居る魔導師には無理な話だ。

或いは、キャロの召喚魔法でヴォルテールを呼び出せば勝ちの目も見えてくるかもしれないが。

「……時間を稼げるか、テスタロッサ」

さすがに本物の怪獣大戦争はどうだろう……、と考える思考運動の最中、その言葉は隣のシグナムから発せられた。

「時間？うん、まあ、少しくらいなら一人でも」

「そうか。ならば、頼む。そうだな……、8、いや、6分もあれば十分だ」

6分。たったそれだけの時間で、あの化物をどうにかする方策を

用意する、と。シグナムはそう言った。
フェイトの内心には驚きがあるが、しかし信じられないとは思わない。
無茶を言う事はあっても、無理を請け負うような真似をする騎士ではない。
出来ると言った事は必ず成し遂げる、そんな彼女にだからこそ抱ける強い信頼は、フェイトの心中に疑問の余地など作らなかった。
了解、と返す表情には笑みがある。

「ちょっと、行ってくるよ」

気軽に言う。
任せたから、と。
わざわざ言葉にするまでも無い、そんな意味を込めて。

「ああ、頼む」

そんなぶっきらぼうな言葉に、彼女の信頼は隠れている。
その固い表情に軽く手を振り、フェイトは横の視界にシグナムを収めつつ接敵の為に高度を下げ――――ようと、そうした時だ。

「気ぃつけろよ」

何気なくシグナムが開襟したバリアジャケットの奥、胸の谷間からひょっこりと顔を出したアギトが言った。

「敵は強大ですぅ」

同じ場所からリィンも出て来る。

――――ずっとそこに居たんだ……

そういえば姿が無いとは思っていた。

「…あ、うん。頑張るから、そっちもよろしくね」

――――うわぁ、おっぱいの間から妖精っぽいのが這い出してくる……

何やらシュールな光景だった。

あれ、大丈夫かな?根拠は無いがそんな気分になる。さすがに前言撤回まではしなかったが。赤面するシグナムの横顔が妙に可愛かった。

「じゃ、じゃあ、６分後に、ね」

大丈夫かな?大丈夫でしょ。いざとなったらキャロに頼もう。

ともあれフェイトは動き出した。加速の術式を背後に。

接敵までは、僅か１０秒。

・

・

・

シグナムと別れ一人で臨む戦場の風の中。フェイトは纏う速度に身を任せながら魔獣の巨体を見る。

背に傷を持つ、大地と見紛う空飛ぶ姿。

時間を稼ぐとは言ったが、さて、アレを相手にどう立ち回るか。

基本はやはり一撃離脱。接敵は高速で、手にした閃光をきらめかせハーケンセイバーを飛ばし、魔獣の風に巻き込まれぬ内に安全圏まで距離を取る。

しかしこの戦法では敵に対する効果は薄い。いや、無いと言い切ってしまった方が正解だろう。

既に４回分の攻撃を繰り出したが、こちらの放つ魔力刃は悉く魔獣の鱗に阻まれて無残な燐光を散らすか、風の最中で掻き消えてしまうかであった。

シグナムの読み通りに、あの風が魔力攻撃を減衰させているのだろう。

だとすれば、それは流動する結界のようなものだと認識していい。阻むのではなく吸収する事によって威力の伝達を無効化する。魔力拡散力場という種類の結界があるが、それとよく似ている。ただしその防御効果はフェイトの知るそれらの結界とは桁違いだが。航行艦に搭載される規模の結界を更に上回る防御能力だろう。

――どうする……？

身を躍らす巨体を前に、フェイトは考える。

６分。その短い時間に、僅か、という表現は正確ではない。息を切り詰めるような戦場の最中で分単位の時間がどれほど長いか。

――今は…、

顔の側面にタイマー表示を一瞬だけ展開させる。カウントダウン

を初めて、未だ１５０秒。
残りは２１０秒。このまま無意味な攻撃を繰り返していては、その時間消費の途中でシグナムへの攻撃を許す結果となる事は明白だった。
注意をこちらに引きつけねばならない。
その為に必要なのは、やはり、先のシュツルムファルケンを超える一発だ。シグナムよりもこちらの方が脅威であると、そう魔獣に思い込ませる事が出来なければ時間稼ぎの役目を全うする事は出来ない。

目的は明確。
次に考えるのは方法だ。何らかの攻撃をあの魔獣に通すのには、今の段階で思い浮かぶ戦法は二つ。
風を凌駕するか。
風を突破するか。
時間が限られているので、結局どちらも力押し。さて、どうするか。
そう考える僅かな時間さえ惜しむように、フェイトは動いた。身を翻した魔獣の背を追うように速度を上げ、そして、動きの判断を決定させる。

魔法陣の光を身に纏って。
視線を絞る様に魔獣へ向ける。
身体全体のばねで溜めを作る様に、背と足を連動させて猫のように屈伸させる。
態勢としては、陸上でのクラウチングスタートの姿勢が最も近い。
右腕の振りで体の軸を安定させ、左腕のバルディッシュで照準を定める。
そして、静止の一瞬。緩やかに停滞する僅かな感覚は、加速を得る為の息継ぎの時間。

「はっ、ぁ、！」

息を吐き、吸い、作ったリズムで足を打ち出した。
そうやって選び取る、選択肢の二つ目。
風の突破を目掛けて、爆発した速度を背の向こう側に送り出し、
魔導師は気流の中へと飛び込んだ。

「、！？」

凄まじい風の奔流は、まるでこちらの存在そのものを拒んでいるかのように荒れ狂っている。流されそうになる身体を速度で押さえつけ、真空の刃に晒される肌を気にも留めず、

――もっと、速く

乱れる視界をただ一点に定めて、

――もっと、強く

空をける足を力強く、

――もっと、鋭く

大気を切る体に、最高速度の意志を込め、

「――駆けてバルディッシュ！風より疾く！」

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｍｏｖｅ』

全ての感覚が、ただ、速度の為に集約された。
意識と視界のみが空間を飛び越えるかのような、刹那の景色の移り変わり。
嵐のような風の中を、ただ一直線、雷光の速度が横切った。

「――――！」

抜ける。
風のその先は、凪の様な無風の空間だ。
速度制御の術式が一斉に展開され、燃え上がるような紅蓮の輝きがフェイトを包んだ。空気抵抗による減速は、超過速度で身体の制御を失わない為の処置。
紅蓮がフェイトを包んだのはほんの一瞬。数千度にまで達する摩擦熱と、制御不可の速度を抱えて燃え尽きた術式の魔力光を背後に、フェイトはバルディッシュをの構えを振り上げた。

黒い巨体は既に眼前。
デバイスの形状は限定解除（リミットリリース）、ザンバーフォーム。
術者の身の丈をゆうに超える3メートル強の両刃を発生させたデバイスを大上段に、雷鳴の加速を得る金色の斬撃が駆けた。
眼前が直前となり、風の中で詰めた息を吐き出す間も無く、

「っ！」

速度と切先が、ついに魔獣の表面へと到達した。
着地は、魔獣の後頭部に当たる部分。速度の威力を全て上乗せした兜割りは魔獣の鱗を叩き砕き、大剣の一撃を深々とその身に突き立てた。

「はっ、――――、」

止めていた息を全て吐き出し、真新しい酸素を胸に送り込む。すぐ頭上を気流の嵐が取り巻いているせいか、高度に比べ酸素は薄い。それを感知したバルディッシュが圧縮の術式をフェイトの呼吸器系に貼り付ける。

酸素濃度の上がった空気を身体の隅々にまで行き渡らせ、フェイトの視線は前方を掴む。

大地と見紛うばかりの黒い巨体が、鳴動するかのような動きで身をくねらせている。

叩き込んだ攻撃は、まだ、決定打にはほど遠い。

――まだまだ……！

さらにここから。フェイトは行動を起こす。

まずは突き立てた刃をそのまま、右の持ち手でカートリッジの弾倉を交換、リロード。連装式の弾倉が回り、魔力炉に打ち込まれた魔力を喰い、フルドライブのバルディッシュが再び活性化する。

輝く金色。

余剰魔力と共に吹き出す蒸気に髪を揺らし、整った準備の上で、フェイトは動き出す。

現在の体勢は、速度と衝撃を全て攻撃力に変換したため、深く身を沈めて脱力した、うずくまる様なものだ。

そこからさらに頭を下げ、肩を前へ。前屈姿勢へ変じた身体をバルディッシュで支え、足裏に発生した加速の魔法陣に意識を向ける。

――3、2、1、

ゼロ。

全身の屈伸を一気に解放した。

完全な脱力から生じる瞬発力の加速度が、フェイトの存在そのも

のを速度に溶け込ませ、一つの刃として術者とデバイスとは融合する。
魔獣の背筋を駆け抜ける、閃光の刃。
一線に引かれていく破断の痕跡。

鳴動する魔獣の背の上で。フェイトは足を踏み外さぬよう、雷電の速度の中に一瞬の方向転換を小刻みに繰り返した。
刻まれたステップの向かう先には、最後尾、三又に別れた魔獣のヒレがある。
ビルの高さほどもある巨大なヒレに、予測では激突する可能性が高い。
三又のヒレのいずれかを叩き斬ったとして、次の瞬間には残るどちらかの反撃を喰らう計算だ。安全に最後尾を突き抜けるには、何らかの牽制が必要な局面。
その為に必要なのは、僅かの減速と一瞬の停止。
しかしこの速度を止めれば頭上で渦巻く気流の中に取り込まれてしまうだろう。あの乱流の中で、風を振り切るほどの加速を得るのは難しい。

さあ、どうする。
今日幾度目かの選択がフェイトに迫る。
圧縮された判断時間の中、フェイトの決断は刹那。駆ける足をさらに踏み込み、

「はあああああああ――――！！」

止まらず、行く。
速度が狭める視界の中へ、まばたきの合間に眼前へ来る巨大な黒い影へと。
速度と距離が、零になる。

――――――――!!!

高速の交わりはほんの一瞬。
激突の音すらも、バルディッシュは斬り裂いた。

「、はぁっ、……!」

空気を一吐き、酸素の薄い風の内側で、フェイトの速度は真一文に斬り裂かれた魔獣の鰭を背後に置き去りにした。
しかし次の攻撃は既に向けられている。
迫る対の尾びれ。
叩きつけるように直上から。薙ぎ払うように左方から。勢いだけで突破したこちらの座標は、二つの脅威に対して最悪の位置を取った。

「響け、双雷!」

考えるより早く、身体が動いた。
弾倉に残っていた全てのカートリッジをリロード、オーバーロード寸前にまで高められた魔力の激流が、バルディッシュの炉心の中で光に変換される。
光の放出と、デバイスの変形は同時。
制限破棄（リミットブレイク）、ライオットザンバー。
フェイトの手には、二刀に分かれた片刃の剣が握られる。

「ライオット・スティンガー――――!」

双の魔力刃を、フェイトは振るう。
上天へと叩きつける右の一振り。

地表へ斬りおとす左の一振り。
最大出力の魔力を帯びたバルディッシュが、その二つの振りを極大の魔力刃へと延長させた。

閃。

天上の雲が断ち、地裂が百里を渡る。
光に遅れて響く遠雷が、両断した魔獣の尾を欠片も残さず吹き飛ばした。

「今！――バルディッシュ！」

『Ｓｏｎｉｃ　Ｆｏｒｍ！』

全ての攻撃の後、風の流れが変わる一瞬をフェイトは見逃さなかった。
吹き荒れていた風が不自然にその方向を変え、一点を、こちらを目指して渦を巻いて流れ込む。焦点部で激突した風は、炎を伴わない大爆発を巻き起こすだろう。自傷を鑑みない魔獣の攻撃。
しかし方向を変えた乱流の隙間、網の眼の様な無風の一点へと、バリアジャケットを脱ぎ捨てたフェイトが最後の加速を身体に打ち込む。

――間に合え！

大気そのものがぶちまけられた様な衝撃が空に響いた。
吹き飛ばされる風の中、金色の魔力光が風に千切れて消えていく。
燐光の破片は長く外に伸び、魔獣の巨体から離れて、遥か直下へと、

「――ふう、危なかった」

漆黒の魔導師に繋がっていた。
フェイトの手の中、余剰魔力を灼熱の蒸気と吹き出して、バルディッシュが通常形態へ戻る。自動的に排除された弾倉が足元に落ち、その融解した表装が白い蒸気を上げていた。

「ごめん、ずいぶん無理させちゃったね」

フェイトは語りかける。
装甲各部から蒸気を昇らせるバルディッシュは、常と変わらぬ簡潔な声で、

『Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ』

ん、とフェイトも頷きを返す。

「よし」

脱ぎ捨てたバリアジャケットを再構築し、フェイトは手元に表示させたタイマーのカウントダウンを見る。３７８秒。

「６分、――届けたよ。シグナム」

空。背に走る一直線の破断と、切り取られた三又の尾びれをダメージとして残す魔獣が、凶暴な唸りを上げて眼下のこちらへ身を捻らせている。
その魔獣よりもさらに高く、天頂に座する騎士が構えの切先を向けていた。
時間は繋いだ。
数百メートル越しの視線に、後を託すとの意思を込めて、フェイ

トは見上げる。

「あれは……？」

目を凝らす先にはシグナムが居る。

しかしその姿で最も目を引くのは、彼女の剣、ボーゲンフォルムの切先に留まる巨大な光と、そこに集まる無数の燐光であった。

光は、朱に輝く太陽のような魔力の塊。集まる光は同じく朱の輝きを持つ火の粉ような魔力の残滓片。

それはまるで、空を落ちて集う星々の光の様で、

「スターライト、ブレイカー……！？」

フェイトの知るその魔法に、よく似ていた。

モンスターパニックfishing（5）

魔力収束。

魔力フィールドを広域に展開し、空間に溶け込んでいる魔力残滓を自身の属性へと変換する事によって、領域内の魔力を己の物として収束させる高度技能である。

特に、体の内側では無く外側に収束力場を作り出す場合においては、収束する魔力残滓と空気の層とが光を屈折させ、あたかも、光が術者の方へと引き寄せられて見える現象が起こる。

その集う魔力の光の様を表して、“流星（スターライト）の輝光”と言う。

現象の名は即ち、一つの魔法を象徴する。

言わずと知れた極大砲撃魔法、スターライト・ブレイカー。

魔法の発動には前提段階として魔力収束のプロセスが組み込まれている。魔法の術式魔力に上乗せして魔法強度を底上げする目的と、魔法に自身の魔力を根こそぎ奪われない為の二つの理由からだ。

そして発生させた魔力核の外周部を収束させた魔力で覆い尽くし、強固な砲殻を形成する。

形成した砲殻は魔力結界と同等の性質を持ち、砲撃への攻撃干渉を防ぐ他、結界魔法に触れると相対消滅効果により結界をもろとも消し飛ばす事が可能である。

さらにそこで連鎖反応として、砲殻の消滅により内部圧力の上がっていた魔力核部が解放と同時に周囲の空気を吸い込んで縮退反応を起こし、甚大なエネルギーを瞬間的に放出し、大爆発。

その結果として、絶対的な結界破壊能力と都市区画規模の制圧能力とを併せ持つ、最大級の砲撃魔法が完成する。

――恐ろしい魔法だ……

一連の魔法理論を頭の中で組み立てながら、シグナムは眼下に狙いを見定めていた。

自身の手元、引き絞られた弦につがえた矢には灼熱色の魔力が集まっている。

精製したファルケンの矢に、リィンの持つ広域集束の能力を補助的に付加し、アギトの炎熱変換によって属性を自身と同調させた、疑似魔力集束効果。

それにより生み出されるのは、スターライトブレイカーを模した強力な砲撃弾だった。

――重い、な

その砲弾を構える手と、そして全身には軋みを上げるような負荷がある。

押し潰されそうなほどの魔力波を放つのは自身の形成した魔力砲弾からだった。

己の魔力のみで行使する通常の魔法と違い、空間内の他の魔力を掻き集める集束魔法では、条件次第で自分の数倍以上もの魔力を一発に上乗せする事が出来る。

無論、己のキャパシティを遥かに超える魔力を御する事は常人には不可能だろう。魔力暴走を起こした上で自滅するのが大抵の結果で、それ故に、単純な理論上にある筈のこの魔法が個人スキルと同等のように語られる。

それほどの魔力運用、それを平然と行う魔導師をシグナムは一人しか知らない。

――高町、なのは……

規格外の魔力量とそれを完全にコントロールする魔術センス、さらに集束魔法を扱う魔力運用能力。どれ一つ取っても一級の才能だ。それを全て、あの身体に併せ持つ高町という人物は、やはり管理局の中でも特別なのだろう。

異質と言い換えてもいい。

ともすれば己が身を滅ぼしてしまうほどの才覚を認めながら、しかしその歩みを止めぬ意志の力。

ならば。

と、シグナムは口の中で言葉をつぶやく。

「お前の意志（チカラ）、今この時だけ、私に貸してくれ」

引き絞る矢。その照準が小刻みに震える。身に集う重さはもはや極限で、剣の灼熱は朱く輝いて解き放たれるのを待っているようだった。

俯瞰の視界で見る戦場では、フェイトに翻弄された魔獣がこちらの行動に気付き、下方へ向けた体勢を捻りこちらに鼻先を向けようとしている。

だがもう遅い。

フェイトに託し、そして繋がれた時間は、今この時を以て完成した。

「リミット、解除。さあ、行くぞアギト！リィン！」

『ぶちかませシグナム！』

声は心の内から。

「行っけーーー！ですぅ！」

意気は己の肩口から。

「不死鳥一声！」

全ての覇気が揃い、

『ＢＲＡＶＥ　ＰＨＯＥＮＩＸ』

魔法は解き放たれた。

・
・
・

シャマルは空を見た。

フリードの背の上、エリオとキャロの二人を抱き込むような形で座る銀竜の上から。

つい数秒前までは闇と月と星とがそれぞれ存在していた、夜の上天を見上げる。

その彼女らを照らす光は、今は、星でも月でもない、朱色の輝きだった。

朱色は、荒れ狂う炎の流動だ。灼熱の色。紅蓮の光。そしてそれはシャマルのよく知る色でもある。

烈火の将。剣の騎士。二つの名を持つヴォルケンリッターの将が纏う魔力の輝きだった。

空気を裂く鋭い鳴声を響かせながら天上の最頂点へと昇ったその炎の輝きは、身に星のような光の落流を集めつつ流れの動きを一気に拡大させた。

翔音。

数十メートルの規模で一気に展開した紅蓮の両翼が、夜空の雲を全て払った。

翼に抱かれていた鎌首が月を見上げ咆え、陽炎揺らめく背尾がゆるりと伸び、炎の流動が鉤爪となって空を掴む。

朱の光に包まれた、それはまるで炎の鳳（おおとり）。

「不死鳥一声！」

灼熱の羽ばたきが大気を鳴動させて、

『ＢＲＡＶＥ　ＰＨＯＥＮＩＸ』

朱の不死鳥が、今、解き放たれる。

「――――、来る！」

誰かが叫んだと同時、魔獣も動きを速めた。

唸りの鳴動は烈風を呼ぶ前兆。開け放つ大口が、全てを消し飛ばすほどの風の砲弾を放った。

紅蓮の鳳はその攻撃を正確に正面に捉える。

双方の激突は、音を消し去る衝撃の拡散を生んだ。

「、っ！」

息を呑む瞬間。

詰めた息を吐くと共に見る激突の結果は、

「――翼が！」

片翼を消し飛ばされた、鳳の姿だった。

「まだだ！」

しかし叫ぶ声がある。

剣の騎士。その名に冠する片刃の剣を、正面に捉えた魔獣を貫くかのように突き出したその騎士は、真っ直ぐな瞳で見据え、咆える。

「羽ばたけ、我が剣よ――――！」

夜空から、地上から、風に散った己が翼から。星のような無数の光を身に集め、鳳は翼を取り戻す。

翼が空を叩くたび、その羽ばたきは熱波の衝撃を纏い、地上にまで達する風の連続を生み出した。

烈風が吹く。

天空を回り込んだ炎の鳳に向けられた魔獣の咆哮が、またも、その朱の半身を揺らがせる。

だが――――

「止まらない……！」

往く。
天に広げた翼を休める事無く、翼を削られようが、半身を吹き飛ばされようが、鳳は幾度となく空に蘇る。その度に翼を大きく、強く、成長させて――――

「魔力収束の、持続発動!?」

気付きの声を上げたのはシャマルだった。
魔力収束。
有効範囲内の空間魔力を集め、魔法強度を底上げする高難度のスキルだ。
スキルの発動は本来ならば発動前の準備段階に限ってのみ有効だが、しかし、空の鳳は今もなお空間内の魔力を身に集め続け、その翼を成長させている。
予測する理由は一つしかない。
持続発動。
術者の持つ魔術スキルを魔法そのものに添加する技術だ。
理屈はキャロの使うブースト魔法と同じ。だがその難易度は桁違いで、さらに安定性に欠く。その上、今、持続発動しているのは魔力暴走を引き起こしやすい魔力収束のスキル。魔法理論を学んだ者ならばその行動を、正気の沙汰ではないと評するだろう。同時に神業であるとも。

発動した魔法は通常、その術式核の内側に一定以上の魔力を蓄えており、その魔力量が多ければそれだけ魔法の強度は増す。逆に言えば、術式核の魔力が減少すると魔法としての威力は落ちることになる。一定値を下回れば魔法は魔法としての現象維持が出来なくなり、消滅する。

「けど、魔法自身が魔力を常に補充し続けられるなら……。いえ、

発動した時よりも更に多くの魔力を核に取り込み続けられるなら、魔法はいくら討たれようと、消されようと――」

幾度でも蘇る。

まるで、不死鳥のように。

「炎が……」

灼熱が、その彩りを翼として広げる炎の鳳が、高き声を上げる。

翼を広げた姿は、既に解き放たれた時の2倍にも成長している。

空を震わせる魔獣の咆哮が幾度目かの風を生み、幾度も立ち向かった炎の鳳がその風を翼で捕えた。

炎が膨れ、激突の余波が空を振動させる。

「受け止めた！」

エリオの叫びに、いいえ、と。シャマルは言う。受け止めるだけでは終わらない。蹴散らされる度に強く、羽ばたく度に大きく、ついにその翼はあらゆる風も脅威も全て――

「――呑み、込んだ……」

・

・

・

風。

膨大な魔力を含む、暴風の塊を呑み込んで、炎の鳳はさらにその翼と姿を拡大させた。

もはやその全長は強大だった魔獣を凌駕する規模になる。

「決着を付けるぞ魔性！」

叫びの声が空を渡り、凛とした響きを持ってその決着を見守る者たちの耳に届く。

行け、と。その内の誰かが声を発した。

応じるように、シグナムは突き出したレヴァンティンを引き戻し、剣を大上段の構えに持ち、そして一息に振り下ろした。

応じるように、炎の鳳も大翼を風に打ち広げた。まるで太陽のように空を照らす紅蓮が、空を叩く翼で駆け下り、鋭いくちばしを開ける。

魔獣の風が来るが、鳳の姿は既にその威力を凌駕している。揺るぎ無く、紅蓮は一直線に魔獣へと向かった。

――――――――！！！

激突の衝撃は、天に長く伸びる猛々しい鳳声のようだ。

くちばしの一撃で魔獣の背を焼き貫いた鳳は、それでもまだ暴れ回る魔獣の身体を自身の鉤爪で掴み、一気に翼を地面に向けた。

「！」

叩きつける。
灼熱と質量とが同時に落ちた市街の端に、怒涛と言うべき破砕の連続が巻き起こった。
砕けた道路の破片。割れたガラスの残骸。倒壊する建築物の瓦礫。それらが同時に飛沫と舞い、さらに灼熱の熱波で塵と消える。
シグナムはその様子をただ、結果としてのみ心に受け止め、自身の剣を鞘に納めた。

「――終焔。共に還れ、魔性よ」

不死鳥の、最後の一声が響く。
消滅は出現と同じく、またも火の中へと。
直径二百メートル超過の巨大な炎の柱と化した鳳は、甲高く、雄々しく、そして凛と響く鳳声を共に、魔獣を連れて天に還る。

「……倒、した……」

声は、誰だったろうか。
天へ還る朱の光を見つめながら、同じ事をシグナムもまた思っていた。
レヴァンティンの内部に残ったカートリッジと魔力を全て排出し、こちらも軽く一息をつく。炎の柱は徐々に勢いを失っていき、直に消えて無くなるだろう。ぶっつけ本番で試したにしては上等な威力だった。
成功するかどうかは、実のところ多分に賭けの要素が入っていたが、それも今となっては杞憂だ。

――しかし……

何か、疑問に似た思いが鬱積している。ゆりかご以来の全力だっ

たが、どうも、腑に落ちない感覚だ。不完全燃焼という訳ではない筈だが。

――まともに切り結んでいないからか？

剣と剣のせめぎ合いでしか充足を得られぬと、そこまで戦闘に狂っている訳でもあるまいに。

煌々と輝く炎の残り火を目に、ふむ、とシグナムは息を吐いた。

その吐息に合わせたかのように、心の内から湧く声がある。

『いよっしゃーーー！勝ったぜシグナムーーー！』

胸の内側から来る歓喜の感情は、融合しているアギトの心そのものだ。シグナムは意識はそちらへ向ける。内側から熱くなるような、そんな感情がこちらの心にも満ちていく。

――ああ。お前のおかげだ、アギト

アギトに向けた笑みの色を、次は表情に差して、

「――そして、リィンにもだ。助力に感謝しよう」

花のような笑みが返る。

振り返り、そして眼下を俯瞰すれば、そこには似たような表情を向ける仲間の姿もある。

――勝った、か。ああ、今は確かに、それ以上は必要あるまい

そう思うだろう、レヴァンティン。

剣の鞘を軽く撫で、シグナムは前を向いた。絆と言うべきその繋

がりを手繰り、念は通じずとも、その人物の居場所は分かる。

「さあ、行くぞ。馳せ参じよう、我が主の下へな」

嵐の前のｑｕｉｃｋ　ｂｒｅａｋ　ｔｉｍｅ（１）

煌々とした朱色に照らされ、にわかに静けさを取り戻した街道があった。

戦闘直後の緊張と、戦闘終了の弛緩、それらが合わさった空気の流れる街道には幾人かの人影が、朱の色に照らされて立っている。

フェイトもその幾人かの内の一人で、小柄から大柄まで揃いつくした集団は機動六課の面々である。

「大きなキャンプファイヤーだね、シグナム」

「ああ。前々から試してみたいと思っていた魔法だからな。試し撃ちが出来て良かったよ」

「ふうん。試してみた結果は？」

「威力は申し分ない。ただ、暴走が心配だな。魔力収束――つまりは、魔法にとっての永久機関を腹に仕込んであるようなものだからな。理論上は無限に威力増大できる計算だ。独立暴走したら誰も止められんよ」

「危ないってレベルじゃないよね。下手したたら星系規模の災害になるよね。シグナムの魔法で次元世界が危ないよね」

「なに、まだ試作段階だ。改良の余地はある。――通常空間では使えんがな」

ここが強力な閉鎖空間で良かったね、とその横顔にフェイトは返答を渡しながら周囲を眺め見た。

地面で翼を休めるフリードが居て、その傍らにはキャロとエリオ、シャマルが安堵の表情で座っている。
地面に伏して耳だけをこちらに向けているのはザフィーラだ。背中ではヴィヴィオが未だに可愛らしい寝息を立てていた。
隣に立つのはシグナム。その両肩にはアギトとリィン。
揃った顔を見回して、無事、という言葉をフェイトはゆっくりと呑み込んだ。次に思うのは、良かった、という安堵の気持ち。
実戦に出たのは十年も前の事だが、戦闘後に持ち合わせる感想は決まって同じだ。

「あ、皆！よかった、無事だったんだね」

自身の気持ちと同じ意味合いの言葉が後ろから聞こえ、それが既知の人物の声だと判断すると同時、フェイトは勢い良く振り向いた。

「なのは！」

と、まずフェイトが目にしたのは左腕を裂けたバリアジャケットの端切れで吊ったヴィータの姿だった。
ぱっと思いついた単語は悲惨。
四字熟語で満身創痍。
本来の役目以前に服飾としての機能すら半ば程度にしか発揮されていないようなバリアジャケットを羽織った格好のヴィータが、今にもぶっ倒れそうな足取りでこちらに向かって歩いて来ていた。

――――え、えっと……

何があったのか、という疑問に思考が一瞬だけ止まる。
そういえばなのはの声が聞こえた気がするけど？と、次の疑問が思い浮かび、そして気付く。

重い足取りのヴィータが、ずりずりと後ろに引きずっている物体に。

それは、木の破片で即席に作ったタンカというか、ソリというか、表現に困るほどオンボロな出来のそんな感じの何かであり、そこでフェイトはようやく見つける事となる。

タンカのような何かに乗って、力無い笑みをこちらに向ける白い魔導師の姿を。

「ヴィータ!?高町!?どうした、何があった!やられたのか!?お前たち二人でも勝てない相手がいるのか!?そんなに強いのか!?う、うおお……!どこだ、どこに居るんだそいつは――――……!!」

などと、背後から現れて急にテンションの高いシグナムの側頭部に肘鉄を一発打ち込んで静かにさせてから、フェイトはあらためて二人に視線を戻した。

「大丈夫じゃなさそうだけど大丈夫!?」

「物理的に頭いてーんだからややこしい質問するなよな……」

「えっと…、シグナムさん、動かないけどそっちの方が大丈夫なの？」

多分。頑丈だから。

結論付けて、フェイトは二人に駆け寄った。

何よりもまずは応急手当だ。背後の方ではシャマル達も驚きの声を上げていて、すぐに回復の魔法を準備してくれるだろう。だからその前に、僅かながらでも出来る治療を施したいところである。

なにせ、合法的になのはの身体を触るチャンスだ。

フェイトは手馴れた手つきで倒れたなのはの身体を痛めやすい部位を中心に見ていった。大きな出血は見られない。心配した骨折も無い様で、ひとまず安心する。足の火傷は少々ひどいが、しかしこの程度なら魔法で何とかなる。間接に熱がある気配も無いようで、後々に後遺症が残る様な傷も見受けられなかった。おっと手が滑って胸の方に。

「ひゃ、フェイトちゃんくすぐったいよ……」

「ごめんごめん。でも、外傷は意外と大した事ないかな……？それでも重症は変わらないけど。どうしてこんなに、って、聞いてもいい？だめ？」

すると、ばつが悪そうに機嫌が悪そうに、ヴィータは眉間に寄せたしわを深くして、

「別に、負けてねーよ。ま、強かったけどな」

「ふむ、そうか。それにしても、高町とヴィータの二人がかりで苦戦するとはな」

と、復活したシグナムが腕を組んでヴィータの前に立っている。好戦的な色を含む口調は、なのは達が戦った相手への興味を未だ持っているからであろう。おっと手が意志に反してお尻の方に。

「シグナムったら、すぐに興奮するんだから」

「すまん。どうもな、強者が居ると聞くと血が騒ぐと言うか、な、分かるだろ？」

「シグナムって時々サイヤ人みたいなこと言うよね」

「バトルマニアどもめ……」

ヴィータの冷たい視線に、私は違うよ?とフェイトはそしらぬ顔。おっと両手がいつの間にかすくい上げてこねる様な動きを。

「フェイトちゃん!」

「ごめん、なのは。つい無意識に……。で、話を戻すけど本当に何があってそんな事に?今までどこに居たの?」

「まあ、単純に敵が強かっただけだよ。んで――」

ヴィータが振り向いて見たのは郊外の山岳地帯である。旅館のあった山の程近く、魔獣の落着によって標高の半分ほどを削り取られた、ちょうど中心、魔獣が落下したピンポイント地点を指で示しながら、

「あの辺にあった山の中で戦ってたんだけどな。決着を付けようとした時に、シグナムが燃やしたあの怪獣が降って来たんだよ。ありゃびっくりしたな」

ヴィータの声の先にはなのはが居る。

フェイトの腕の中、なのはは、ぐったりと身体を預けきった体勢で同意の頷きを返し、

「うん。フラッシュムーブで逃げれたけど、あれはホント、ぎりぎりだったね」

「そうなんだよ。で、その後でこいつがいきなりぶっ倒れやがってさ。――この様だよ。あたしだって肩は上がらねーし体中痛いしで大変だってのに……」

「にゃはは……。だって、咄嗟だったし、残りの魔力は全部ブレイカーに注いでたし、ゆりかご事件からこっち、療養中で運動不足だったしで一気に全身が痙攣起こしちゃってめまいと吐き気と魔力欠乏でリンカーコアがダウン寸前で……」

「なのは、それって一般的には瀕死って言うんだよ？」

曖昧に笑うあどけない表情に、フェイトは言い様の無い辟易とした感情を抱いた。

泣いてしまいたいくらいに悲しくて、小一時間ほど説教しても足りないくらいに怒りがあり、しかしその感情を言葉にするならば、不安、というのが最も的を射ているのだろう。

原因は一つだ。

――また無茶して……

薄々は気付いていた、というか、そんなとこだろうなとは思っていたが。

気遣いは人一倍のくせに己を鑑みるという行為を蔑にするのが彼女の悪癖である。

その結果がどうであれ、こちらが抱くのは決まって不安と心配で、その事を分かっていても高町なのはという人物は振り返る事をしない。

なのはにとって最も大事なのは“皆”という曖昧な集合であるからだ。人と仲間と、そして絆と、あるいは向かい合った敵でさえその皆の中に含まれる事もある。

助ける。敵も味方も全部、なんて欲張りな事を言うくせにその為に自分が犠牲になるのに是非を挟み込まない困った彼女の、後出しで言われる、ごめんね、という言葉を聞くのにも慣れてしまった。

――――もう、ほとんどあきらめの境地だよ……

「いひゃいいひゃい……！」

はあ～～、という溜息を吐きつつなのはの頬を両側から引っ張るフェイトは、そのしゃがみ込んだ姿勢のままヴィータの顔を見上げ、

「でも良かった、戻って来てくれて。敵も倒したんでしょ？」

「いや。怪獣が降って来て見失っちまったからな。止めは刺せなかったけど、ま、あれに巻き込まれたなら土の下でお陀仏だな」

「でも、どうかな？あの人がそんな事で死んじゃうなんておもふぇ、いひゃいいひゃいつねりゃにゃいで～……！」

ぐにーっと頬を引っ張られるなのはの姿を半目で見て、ヴィータは、ふん、と吐息。忌々しそうな口調を隠そうともせず、言い放つ。

「人じゃねえ。……悪魔だよ」

・
・
・

悪魔、と。吐き捨てるようにそう言ったヴィータの顔をシグナムは見つめていた。

鉄槌の騎士にこうまで言わせる敵は、どれほど強大だったのだろうか。激戦の跡を残す騎士甲冑などよりも如実に、その表情が戦った敵の強さを教えている。

――羨ましいものだ

血が戦いを欲しているというのは半分冗談だが、しかし、命に迫る戦いの記憶は自分への経験値としてその脳裏に蓄えられている。

それは、以前の自身らには無かったものだった。

元より、ヴォルケンリッターとは、戦う為だけに創造されたプログラムに過ぎない。そこに勝ち負けの概念は含まれず、より効率的に、より機能的に、敵と戦いそれを損傷させる事が全てだった。

――勝利も敗北も、等しく価値の無いものだった……

プログラムにとっての最適とは、勝利ではなく効率だ。

今のように全力を尽くす事や、相手を認めた上で剣を合わせるような、非効率な戦いの経験は余分な物としてリセットされる。敵に敗れたとしても夜天の書より再構築された肉体にヴォルケンリッターの人格がインスタールされ、その都度、全く新しい“シグナム”や“ヴィータ”が生まれるのみ。

――まさに、使い捨ての兵力だな

所詮、兵士は使い捨ての駒なのだと言った皮肉があるが、まさに言葉の通り、ヴォルケンリッターとは究極の使い捨ての戦力として生み出された、一つのシステムの完成形である。

今ある自分も、実のところ何人目の“シグナム”なのかは分かっていない。

記憶の中で知り得る敗北と苦戦、それらが数少ない理由もそうだ。

討ち破ったのではなく、忘れて来た。過去に置き去りにして来た数々の人格と記憶と共に、その戦いも、もはやこの身に知る術は無い。

残っているのは、効率的に敵を追い詰める術と、プログラムのバグのようにリセットからこぼれ落ちた“シグナム”という過去が経験した敗北の残滓だけ。

だから。

己は常に戦いと強者を求めているのだと、シグナムは思った。

――私の強さを確認する為に、な。今の私が最強なのだと、唯一のシグナムだと、誇れる為に

ヴォルケンリッター。

夜天の王に仕える守護騎士のシステムは、もはや破綻している。

魔導書の編纂が行われて早十年。書き換えられたプログラムの先、もはや、これより新たに騎士が生まれ変わる事は無い。

ならば、今ここに居る自分が、シグナムが、今より過去の“シグナム”より弱く在ってはいけないのだ。

唯一、という言葉を以て確立した自分が過去より弱い存在である訳にはいかない。

はやてという家族を得て、フェイトやなのはという仲間を得て、

そして六課という絆を得た。これから先、まだ何かを得る事があるかもしれない。
戦う為のプログラムにしては過ぎた代物だと戸惑う事が無かったとは言えない。
だからこそ。
――私は、この身が砕け散るまで、戦場を求め続けるのだろうな。
己が身が最強である証明を、記憶に刻む為。
「覚えておけよ、ヴィータ。その敵の事をな」
・
・
・
ふん、と不機嫌そうに吐息するヴィータをシグナムは見た。
「言われなくてもな。あんな強烈な奴、そうそう忘れられそうにねーよ。――で、何でさっきからシャマルは土下座してんだ？」
「……」（土下座中）

寸分の狂いも無い完璧な土下座を極めているシャマルを庇うように、シグナムは一歩前へ。地面に膝を立て、ヴィータと同じになった目線でその肩に軽く手を置き、

「その、何だ……。シャマルも必死だったんだ。許してやってくれ」

ヴィータが首を傾げ、なのはがフェイトに頬を揉まれる奇妙な表情を見せる中、あ、と気付きの声を上げたのはなのはの背後のフェイトだ。

「でも、あれだよね、山に直撃させたのってシグナムだよね。ほら、寝起きのファルケンで弾いて軌道変えて……」

「な!?あ、あれは…、仕方が無かっただろ!ああしなければ潰される所だぞ!?」

「普通に退避してれば良かったんだよ。それなのに、シグナムったら意気揚々とレヴァンティンをフルドライブさせるものだから……」

…!?と絶句するシグナム。

ヴィータがそんなシグナムに冷やかな視線を送り、

「ったく、だから血の気が多いって言われんだよ、お前は。あれか、欲求不満か?あんまアドレナリンばっか出してっと身体に悪ぃぞ」

「ま、まあまあ、ヴィータちゃん。シグナムさんだって、悪気があった訳じゃないんだから……」

何故こんな空気に……!?とシグナムが絶句する最中、動き始め

たのはきっちり五分以上は土下座っていたシャマルだ。

「ううん、悪いのは私よ。私が何も考えずに投げ飛ばしたから……」

「そんな……、って、シャマルさんアレ投げ飛ばしたんだ……」

それが一番のびっくりだよ。なのはが言った。同意の頷きをヴィータが返すも、シャマルは眉尻を下げた申し訳なさそうな表情を崩さず、

「ごめんなさい……。私が考えも無しにあんなものを投げるから……。なのはちゃんやヴィータにそんな怪我までさせて」

「いや、別に怪我はシャマルさんのせいって訳じゃ……」

「いいのよ、なのはちゃん。気を使わないで。こうなったら私、持てる力の最後までを使ってなのはちゃん達を回復させて見せるわ！」

言うなり、シャマルは祈りの形で手を合わせて目を閉じた。

あ、ちょ……、と困惑するなのはをよそにシャマルの回復魔法はすぐさま完成した。流石は本職の回復系統などとシグナムが感心している内、地面にミッド式魔法陣が幾重にも展開される。

「癒しの風よ、守りの水よ、祝福の光よ――――」

なのはとヴィータの身体がその魔法陣の光に包まれる。暖かな光の感触と心地よい柔らかな風の香りに、シグナムも心なしか身の疲労が癒されるような感覚を得た。

魔法陣から漏出した魔力が辺りに魔術効果を及ぼしているのだろう。二人に比べて消耗の少ない自分にとっては、この程度の癒しで

も十分に効果的だ。
見れば、フェイトの方も気持ちよさげに目を細めてなのはの胸を揉んでいる。見なかった事にして目を閉じた。
まぶた裏に淡い魔力光を感じつつ、シグナムは聞く。
「謳いたまえ、奏でたまえ、我、望むべくは慈しみと心よりの癒しなりて――――、祈り、伝え誇る讃美歌（ソング・フォー・ユー）」
静かな歌の旋律が細く響いた。涼やかな飛沫の音が戦いに疲れた世界に響き渡り、そして光ははじけ消える。
後に残るのは、暖かな余韻と幾分か身軽になった体。
「すごい、シャマルさん……。全然動けなかったのに……」
と、フェイトに身を預けて横たわっていたなのはが起き上がり、それをフェイトが凄まじく残念そうな顔で見上げていて、その傍らではヴィータも吊っていた左腕の動きを確かめるように回しながら、
「おおー、治ってる……。悪ぃなシャマル、全快魔法なんか使わせちまって。お前もかなり魔力消耗したんじゃ……」
（いいのよ、二人とも。これくらいは私も役に立たなくちゃ……）
と、直立姿勢のまま前のめりに倒れて動かないシャマルの声が念話のような形で何処からともなく……。
「うおおーーー！？シャマルーーー！？」
「待てシャマルーーー！逝くなーーー！」
シグナムとヴィータは心地よさに細めていた目を全開に見開いて

シャマルに駆け寄った。抜け殻のように力無いシャマルの身体をヴィータは後ろからがっくがくに揺さぶりつつ、正面ではシグナムが往復ビンタをかまして名前を呼び続けると、うっすらとシャマルが目を開けて、

「ぅぅ、痛い……、あれ……？私、いま皆の事ずっと上の方から見おろして……。ああ、すごくいい気分だったのに……」

「魔力の使い過ぎだこの馬鹿！」

まずヴィータが叫んだ。

「我らは元は魔力生命体だ、内在魔力を使い切ったらリンカーコアごと消滅してしまうぞ！」

シグナムが険しい表情で言い、力無いままシャマルは分かってるわ、とだけ返答をよこした。

「ん……、でも、すごく眠くて……、少しだけ眠らせ――――」

もう一発ビンタをはたき込んで、

「寝たら死ぬと言っている！」

「寝ないから！寝ないから～！」

・
・
・

「――はあ」

シャマルの身柄をエリオとキャロに預けたシグナムが大きなため息をつくのをフェイトは見ていた。

ヴォルケンリッターのお母さんはシャマルの役目だが、苦労人はシグナムの配役だろうと思う。

率いる者の、それが常の在り様と苦悩というやつだ。

――ヴォルケンリッターの大黒柱だもんね……

と、何気なく思い、ふと思考が先に展開した。

――あ、じゃあシグナムとシャマルは夫婦関係なわけだ

想像すると、意外と相性の良い夫婦の姿が浮かんできた。

飯、風呂、戦う、しか言わないシグナムに献身的に寄り添うシャマルの図。今日は腕によりをかけたんですよ？楽しそうな毎日だ。

反抗期の娘と頼れる番犬も居るし。

――最近、ネタが無いとか言ってたから、ユーノとお兄ちゃんに教えてあげよう。夏は忙しくて無理だけど冬は絶対に壁を取るとか何とかぼやいてたし……

「なんだ？」

と、怪訝そうな声はシグナムのもの。

「んーん、別に。早く、はやての所に向かわなくちゃね」

「ああ……。だが、シャマルはここで一時休息だな。無理に動かしたら今度こそ召されてしまう……。――気付いているか？広域念話が出来るようになっているぞ。今しがた主にこちらの状況を報告したところだ」

（ほんと？聞こえる？）

（良好だ）

仮想遠距離の念話試験を交わし、空間の魔力状態を確認する。空の魔獣と戦っていた時よりかなり魔力波が安定しているようだった。

この一夜の事件が、終わりを迎えようとしているのだという事だろうか。

ほっと一息を吐き出して、ふと、フェイトは背後を見た。

「ねえ、シグナム」

ん？とこちらにシグナムの視線が向くのを感じて、フェイトは回した首を元の位置に戻す。

背後、半壊状態のデパートを指し示し、

「どうせ向こうとは繋がってない閉鎖空間だし、ちょっと物品の徴収に行くけど、来る？」

「徴収？わざわざあんな場所に、何を？」

いやあ……、とフェイトはおもむろにバリアジャケットの後ろ、お尻の部分を撫でながら、

「激しく動き回ったからけっこう食い込んで痛いんだよね。やっぱり、サイズ合うやつ穿いとかないと……」

「……」

「どうする？まあ、今のシグナムは私と違って開放感たっぷりでいいかもしれないけど……」

耳元までを赤く染めて俯いたシグナムは肺の底から大きなため息を外に押し出して、

「行く」

と、一言だけ呟いた。

嵐の前のｑｕｉｃｋ　ｂｒｅａｋ　ｔｉｍｅ（２）

ダンテは暗い空に幾つかの色を見ていた。
夜空の星の中に、長く尾を引く流星のような輝きの色だ。幾つかの彩りにきらめく色は残光を長く引き、一直線、こちらに向かっている。
その色の正体をダンテは知っている。
噂に聞いた時空管理局。彼女らが曰く、魔導師。そして機動六課とも紹介されたが、それはいまいち何の事かは分からなかった。
理解したのは別次元の存在とそこに居を構える大規模組織があるという事と、魔法という技術について。
冗談みたいな話の連続だったが、しかし信じるに足る確証をダンテは持っている。
先程まで共に戦った事実だ。
それに何より、魔界という別次元の大悪魔を親に持つ、この人と魔の混血に比べれば彼女らの方がよほど健全な存在と言えよう。魔導師などと大仰な呼び名を使ってはいても、ただの人間だ。自分の方がよほど冗談みたいな出自をしている。

「あ、ティア～、ちょっと足首のギア捻っちゃったからそこ回してくれる？あ、うん、そこ。待って、ちょっと伸ばしてロック外すから。……いいよー、そのまま１８０度くらいぐいーっと……、あ痛たたた！逆、そっち逆だからー！」

いや、待て。あれはどうなんだ？
少しだけ頭を抱えながら観察して最終的に出たのは、まあ人間という事で、という単純直結型かつ事なかれ的な結論だった。

――――泣いてるしな

痛みで。
ネバークライ、ネバークライ、と小声で呟きながらダンテは視界を戻した。
「――何か用でも?嬢ちゃん」
「軽い世間話でも、どうですか?」
いつの間にそこに居たのか。
はやては頭一つ分以上は目線の違うダンテの傍、二歩分離れた砕けた舗装の上に立って心胆の見えない笑みでダンテに会話のきっかけを切り出した。
「別に、構わないぜ。あー、ハヤト、で良かったか?」
「それはガンダムの登場人物や。私の名前は八神はやて。は、や、て」
「ジャパニーズは難しいんだよ、勘弁してくれ」
砕けた口調でダンテは言うと、足元に転がっていたコンクリートの塊に腰を据えた。目線がちょうど、はやてと同じになる。
「話っていうよりも、俺から聞き出したい事があるって顔だな」
「おや。そんなに性悪な顔してます?」
「いや。ただの勘さ。女運の悪さは昔からでな、ようやく免疫と予知が出来るようになったところだ」
「ほほう。して、予知の結果にはなんと?」
「来週あたりにデートしてるな。ジャパニーズ温泉には、コンヨク

という素晴らしい文化があると聞いた」
「あー……。でも最近はロリ規制激しいからダンテさん通報されるかも……」
「オイ待て。一体、俺は誰とデートしてんだ？俺の予知とかなり違う気がするぞ？」
「まあまあ、気にせんとこ」

にんまりとした笑顔になったはやてに、ダンテは苦笑を一つ返す。
Ｈｕｎ、と溜息を吐いて長い足を組み、身を乗り出す様な姿勢。

「まあいい。じゃあ――話をしようか？」

・
・
・

「話が早くて助かります」

と。
はやてもダンテにならい、その辺りに転がっていた瓦礫に腰を降ろした。
足も組んでみるか？と思い、バリアジャケットのミニスカートを

見つめてやめる事にした。舌打ちが聞こえた気がしてダンテの方を見ると、ダンテは銀のハンドガンを一瞬でバラバラに分解している所だった。

「……急にどないしたんです？」

「いや、ハンドガンの精霊がメンテしろって言うもんだからな？」

へぇ～……。

「Ｈｅｙ、レディやトリッシュと同じ目をするなよ。性悪になる呪いがかかるぞ？」

その二人は誰だろうかと気になったが、はやてはとりあえず話を進める事にした。

「……えっと、まずはあの悪魔が言ってた裏切り者の“血族”って言葉について聞いてもええやろか？」

「血族、ね。いい質問だな、嬢ちゃん。半分くらいは分かってるのにわざわざ聞いてそうなあたりがグッドだ」

何の事やろか、とあからさまに視線を逸らしてとぼけてみせるはやて。まあいいさ、と笑みを吐き出す口調でダンテは続きを語る。

「魔帝ムンドゥスを裏切った悪魔の伝説は話したろう？」

頷く。

魔界の軍勢が人間界に侵攻しようとした際に、その大軍の前に立ち塞がった悪魔の話だ。

「スパーダ。それがその悪魔の名前さ。魔界きっての悪名だよ」

「悪名？」

「ああ。そりゃ、人間にとっちゃ英雄だろうがな。悪魔たちからして見ればただの裏切り者なんだ。血族郎党子々孫々まで恨みを買ってもおかしくないだろ？」

ほう、とはやては一息。

「で、だ。そんな迷惑な悪名を背負って産まれてきた不幸な子供がこの世には居てな」

「それがダンテさん、と？」

「Ｊａｃｋｐｏｔ．やっぱり分かってるじゃねーか」

まあ、と口を濁すようにはやては呟いて、

「あの悪魔の反応が只事じゃなかったし、ダンテさんも人間離れしてる雰囲気あるし、……色々と変人やし」

ダンテは後半部分の台詞を全て聞き流した。

「――――でな？行く先々であんなテンションで絡まれるんだよ。スパーダの息子だ殺せだとか裏切り者の血は滅ぼせだとか。２０００年も前の事なのにまだあいつらスパーダスパーダ言ってるんだぜ？」

「恨み深し……。悪魔っぽいと言えばそんな気も……。まあ、専門

家の前で抽象的なイメージ語るのもおこがましいですけど」

間違っちゃいないさ。

言って、ダンテは空を見上げるように首を傾げた。

どこか遠くを。空よりももっと、遠く深い場所を臨むような、そんな瞳で。

「スパーダ……。いい加減に聞き飽きた名前さ。人も悪魔も、ただの昔話をいつまでガキに読み聞かせる気なんだろうな」

言葉の先は、こちらの方を向いてはいない。

返しを期待するニュアンスも含まれずに、まるで独り言のように発せられたダンテの声に、はやてもやはり呟きのように声を上げた。

空を見上げて。

尾を引く魔力光の数々を、もうすぐそこに見ながら。

「悪魔も。人間も。その悪魔（ヒト）の事が大切やったんやろなあ」

・
・
・

かもしれない、と。ダンテは無言の内側にそんな思いを得た。
悪魔から買った恨みが高いという事は、払った信頼もまた、相応に貴重だったという事なのかもと。

――人間の側も、同じ事なんだろうな

口の中だけで呟いて、ダンテは思い返す。世界各地に伝わる魔剣士の伝説と、それにまつわる事件の数々を。
最も新しい記憶は魔剣教団という組織で、叩き潰したのはつい去年の話だった。
ふとダンテはネロの方に目をやる。教団の生き残りの一人である青年は、瓦礫の上に座り込んで、剣の駆動部を解放、内部機構を冷やしていた。

――やるやる。手持ち無沙汰になると銃とか剣とか、つい弄りたくなるよな

ちょっとした共感を得るダンテの見ている景色の中、ガチャガチャと金属の擦過音を鳴らすネロの傍らにはスバルとティアナの二人が立っており、

「ねー、ティア。来年のボディメンテの時に私もネロさんハンドみたいなオプション付けてもらおうかな？春のプレゼンで技術開発部が作ってたやつがあったじゃん。右腕がとんでもない事になるやつ」
「あーあれ。カートリッジシステム積んだ一体型デバイスでしょ？ファーストブリッドとか叫んで場外まで吹っ飛んで行ったやつ」
「そうそう。最後の切り札的にどうかな？この右手が真っ赤に燃えるぅぅ！って」
「やめといたら？暴走したら体の右半分が吹っ飛ぶわよ？」
「うーん……。そこんとこネロさんはどう思うかな？」

「話のレベルが高すぎてオレにはさっぱりだよ」

ダンテは傾けていた耳と視線を正面に座るはやてに戻した。

「オイ、楽しそうだな管理局。ちょっと興味がわいたよ」

複雑そうな顔で、はやてはぎこちなく笑う。

「そ、それは…、何よりやなあ……」

そうして。

おや、とはやてが目線を高く上げた時だ。

「主はやて！御無事で何より……！」

空から来た光が地面に降り立ち、光と同じく色とりどりの衣装を着込んだ幾つかの人影がその中から現れた。

まず初めにはやてへと飛び出したのはシグナムだ。

ダンテは己の手に蘇る激しい剣戟の感触を握りしめていた。数日前の街中、突発的に発生した異空間の中で合わせた剣の重さがそこにある。

「ティアナ達も無事みたいだね。ダンテさんと、ネロくんも」

シグナムに続いて現れたのはフェイトだ。

よう、と軽く手を振って挨拶代わりとしながら、閃光のような魔弾をダンテは思い返す。

「うわぁ、こっちも随分もめちゃくちゃ……。大変だったみたいだね」

「ま、閉鎖空間だし大丈夫だろ。あ、変態。チッ、生きてたのか」

なのはと、ヴィータ。

相変わらず魔眼のような視線を向けてくる小柄な姿と、軽く微笑んで手を振ってくれる美貌が並んで立っている。

最後にザフィーラが現れ、

「命は全て、滞りなく果たしました。主」

「オイ、犬が喋ったぞ」

「狼だ」

注意された。

とことん不思議な連中だなあ。

楽しいと置き換えられる感情の動きで、ダンテは少しだけ口元を歪めて笑った。

嵐の前のｑｕｉｃｋ　ｂｒｅａｋ　ｔｉｍｅ（３）

「ダンテ」

一通りの報告をはやてに済ませたシグナムは瓦礫の上に座るダンテの方に足を運び、切れ長の視線をその赤いジャケットへと注いだ。舗装のめくれた地面に突き立てられた両刃の大剣を視界の隅に、前置きの言葉を久しいな、と口にしながら、

「ここでの戦闘、主力はお前だったと主はやてから聞いた。礼を言わせてもらおう」

「礼には理由がいるもんだぜ？俺は何もしちゃいないさ。あんたの主サマが無事なのも、他の誰かが無事なのも、全部そいつの実力と、まあ、運がよかったのかもしれねえな」

シグナムは表情を僅かに緩め、

「だが感謝はさせてもらおう。お前と剣を合わせた時はこれほどの使い手が地球に居るのかと思ったものだが、しかし味方になってくれて良かった」

「逆だよ。あんたらが、俺らの味方になってくれたんだ」

なるほど。

あくまでもこの戦闘は己の受け持つ領分であり、加勢したのはこちら側という訳か。

律儀だな、とシグナムは目の前の男に対する評価と納得を胸に得

て、初めて、その男の前で微笑と取れる表情を浮かべた。思っていたほど悪い人間ではなさそうだと。

「善人を気取るつもりはねえが、悪人と思われるのは心外だな」

「いや、ヴィータが散々な事ばかり言うものだからな。少々、イメージを誤解していた。――相当なロリコンだとばかり」

ダンテは深刻な剣幕を表情に刻み、

「やっぱ一度、話し合った方がいいと思うか？」

「望みとあれば席は設けよう。余地があるかどうかはヴィータ次第だがな」

「へそ曲げたお姫様の機嫌ってのは、中々元に戻らねえもんだからなあ……」

「あれほど手に焼くじゃじゃ馬姫も、そうは居まいよ」

くく、と。喉の奥で音を鳴らすようにシグナムは笑った。

話題のヴィータははやてを連れて共にティアナ達の所で戦闘の報告と雑談のような会話をしていた。自分の事が話の上に出ていると気配で感じたのか、ちらりとこちらを振り返る。

ヘーイ、とダンテが手を振った。

ゴーヘル、とむげも無く親指を地面に突き立てられた。

やれやれだ。とでも言いたげに、ダンテは肩を竦める。

吹き出してしまいそうになるのを堪えて、シグナムは少し息を吐いた。笑みの混じる吐息で、

「あれでも一応、人見知りをする奴でな。存外、気に入られているのかもしれんぞ？」

「光栄すぎて泣けてくるね」

我慢できず、結局吹き出してしまった。

「意外と笑うんだな。もっとキツイ印象があったんだがな……。あんたの剣の前に立った時は、氷水をぶっかけられたみたいな気配がしたもんだ」

「同じく、だ。ただの剣の当て合いぐらいで、あそこまで肝を冷やした事は無かった。戦闘の状況が加速していくと大抵はテンションが上がるものだがな。あの時ばかりはそれを躊躇したよ」

それは何故かというと、

「はやてのゴーサイン無しにハイになったら怒られるもんね。特に、本当なら今はオフの日だし、ここ、管理局の管轄外だし」

内心の理由を全て口にしたのは背後から現れたフェイトだった。

フェイトは、にっこりとした笑みの形を表情に、更に言葉を、

「そして今は、手加減込みの全力で模擬戦でも一発どうだろうと思ってる」

正解だ。

私はそんなの分かり易い思考をしているのか？と思い、別に念話でもないのにフェイトがまたも笑みを作った。

「嗜好が特殊だからね」

「今、私はひどく傷つけられているという認識で間違いないな？」

フェイトは屈託の無い笑顔でこちらにウィンクを寄こして、そのまま、表情をダンテに向けた。後ろ頭をはたいてやろうと素振りするが、フェイトが頭を左に振ったので右手は敢え無く空振りする。回避能力には定評のある奴だ。

「ほんと、管理局って楽しそうだよな」

「笑顔で殲滅♪が今週の課目標ですから」

そんなもん知らんぞ、とシグナムは思って。しかしそれ以上会話の邪魔はしまいと真一門に口を閉じて腕を組んだ。

「こんにちわ。旅館にも居たそうですね。会うのが遅くなってしまって、すみません」

「別に。俺はあんたらのゲストじゃないからな。気は使わなくていいし、俺も使わねえぜ？」

「一応、礼儀ですから。私達の街を守る為にわざわざ来てくれた、って。はやてが」

順番が違うんだけどな、とダンテは曖昧に笑って、しかし強く否定しようとはせずに頷きの動きを見せた。

「ま、くれるってんなら貰っておくさ」

・
・
・

ダンテとは少し離れた瓦礫の上で。
ネロは開放したレッドクイーンの駆動部分を夜風に晒しながら、目前に立つ女性を見つめた。
高町なのは、という女性。
数日前に知り合った少女の母親である、なのはママを。

「――――魔導師、ねえ」

その彼女が自分に語ったのは、前にはやてから聞かされた内容の修飾だった。
機動六課という組織。
魔法という技術。
魔導師という存在。
専門的になりすぎない範囲で、しかし前より詳しく。実態と理想を交えつつも、なのはの話は分かり易く、そして現実味を帯びていた。

「信じてくれる？」

説明の締めくくりに、彼女はそう言った。
特別な右腕を持って、悪魔などという非現実的な存在と銃撃戦をやらかしているとはいえ、自分という人間は彼女らにとっては認識外の一般人だろう。突飛な話を鵜呑みにしてもらえるかどうか、不安になる気持ちはネロにも想像が出来た。逆の立場だと、自分もまずはそう聞く。そんな説明をする機会があるとは思えないが。

だがまあ。
ともあれ、会話の成り立ちは時空管理局という組織についてだ。信じるかと問われ、そんな馬鹿な話があるかと一蹴するには――

「空、飛んでたしな。あっちの三人もビームみたいなの撃ってたし」

ティアナとスバル。そして大型の狼を引き連れて歩み寄るはやて。どうも、自分は信じるに足る確証を持ちすぎている。なのはの語った話のおよそ半分以上は彼女ら三人の戦いぶりで証明できる。
後は自分自身に信じる気持ちがあるかどうか。

「否定しても始まらねーしな」

どの道辺りの状態は異常の一言に尽きるのだから。
ここから先はどんな不思議も奇妙も大盛りで来てみやがれというものだ。
肯定の意を含んだこちらの言葉を受け取ったなのはは、笑顔の表情を作って目を細めた。元々の顔の作りが朗らかなので、その笑顔はまぶしいくらいに輝く。
至近距離のその微笑みはネロの心底をドキリと鼓動させるには十分なものだった。
微妙にバツが悪いような気分になり、ネロは思わず目を逸らす。

間違いを犯すつもりは無い。心には一人、決めた女性が居る。それ以前に子持ちの女に手を出す趣味も無い。

だが旅館に置き去りのキリエの事を思い出すと、こうして面と向かって他の女と談笑している自分自身に後ろめたいものを感じてしまうのは何故だろう。自分が意外に誠実である事の証拠なのだろうか。対話の相手が美人揃いというのも理由の一つかもしれない。

――――けど、もうディナーの時間だよなぁ……

この歪んだ夜の広がる空間ではまとまな時間感覚は得られないが、予測としてはそれくらいの時間であろう。腹も減っている。

旅行の楽しみは何かと言えば、ネロは真っ先に食い物を思い浮かべる。風景や風情よりも食欲に重きを置くのは、男ならそう不思議な事ではない。

特にここは異国の地であり、料理の旨さについては世界的に定評のある日本だ。日本食（ジャパニーズフード）は目的の一つでもあったし、キリエもそれについては文句なく同意してくれていた。

今日のメインで出てくる新鮮な生の海鮮などは故郷で食べる機会が無いので、ちょっとした冒険であると共に最大の楽しみだった事も付け加えておこう。

「海の魔物もサシミになっているの？ネロ、それだけは私ダメだわ。食べてくれる？いいでしょ？」

ふと。

タコの事を未だに海の魔物だと言って敬遠するキリエを思い出し、ネロは少し頭を抱えた。

今頃は表世界の旅館で二人分のディナーを前に居なくなった自分の事を心配しているかもしれない。ダンテの事は話していたので雰囲気から事情は察してくれるだろうが。いや、それだと余計に心配

するんじゃ……？置手紙か言伝くらいしてくるべきだった。

「なのはちゃん、ネロくんどうしたんや？難しい顔しとるけど」

「キリエさんに何も言わずに来ちゃったんだって」

「あー……。まあ、突然やったからなあ……。ドンマイやで」

「キリエって、あのぼーっとした姉ちゃんだろ？あたし達は全員こっちに来ちまったから、今頃は旅館に一人かあ……」

「言うたらあかんて、ヴィータ」

お前ら少し黙れ。

言おうとして顔を上げたネロの視界の中、なのはママの娘、奇妙な出会い方をしたヴィヴィオという少女を背に乗せた青い毛並の狼が妙に落ち着いた声をネロに向けた。

「安全が確保されているというのなら、それ以上は望んでも詮無い事だ。彼女を想うのであれば、まずは自身の無事を心掛けるのだな。帰還後に叱責されるのであれば、それは果報と思うといい。護るとは、そういう事だ」

「あ、ああ……」

妙に説得力のある狼にネロが戸惑っていると、背後から近づいたスバルが、

「でも、もうこれで終わりだよね？街に三か所、開いてた魔法陣みたいなのは全部消えちゃったし。悪魔ももう居ないし」

そうだといいんだがな。

言おうとした、瞬間だった。

・
・
・

その異変を感じ取れた者が、この歪んだ世界の中に、一体何人いただろうか。

それはほんの少し変わった風の流れであり、僅かに生じた地下の動きであり、多少の重みを増した空気の圧であった。

ほんの少しずつ表れた異変を、異常な気配として感じ取るにはどれもこれもが微細過ぎる変化であり、悪魔の気配に過敏なダンテでさえ、それを異常な変化だと判断するには多少の時間を要した。

そのダンテが表情に険を入れる直前。

まるで鼓動のように脈打ったソレの気配を機微に感じ取ったのはシグナムであった。

いや、そのシグナムの感覚を、今起こった異変を感じ取ったと表現するのは正確ではないだろう。

何となく感じていた違和感が微妙に生じた異変によって明確になった、というのが正しい。

そこでシグナムが得るのは、ああそうか、という気付きの感覚。

ここに至って、シグナムはずっと腑に落ちなかった違和感の正体へと神経を切り込ませる事が出来た。

気付いてしまえばそれはごく簡単な話であり、むしろ今までその事に思い至らなかったのが不思議でならないとさえ思える。
ずっと、その違和感の正体は明白なまま、この空間内に存在していたというのに。

――迂闊だった。あの化物を倒した後に、真っ先に調べて然るべき事だというのに……！

それは、この閉鎖空間内に突如として現れた悪魔達、そして刻まれた魔法陣から吹き出す異質な魔力の気配である。
それら異常な魔力の反応は、現れた三体の悪魔と魔法陣の消失と共に急速に沈静していった。
なぜ気付かなかった。
一時は短距離の念話すら通じなかった魔力異常が、拡散も中和もせずに、その原因と思わしき魔力体を排除した程度で収まる筈など無いと。
魔力の鎮静化。
念話の安定。
こちら側にとっては喜ぶべきその事柄こそが、この閉鎖空間内で起こった数々の事態の中で最も突飛な異常なのだと。

――どうして気が付かなかった！

思い、そして至るに時間は必要ではなかった。
自然に収まったのでなければ、何か、他の原因がある筈である。
閉鎖空間内に充満した魔力を根こそぎ沈静してしまえるほどの魔法を繰る者など自身らの仲間内にはおらず、ならば、他の可能性は一つしか無い。

――まだ他に、悪魔が居るのか……！？

仮定は、確信めいたひらめきをシグナムに与えていた。
その仮定を語って聞かせる間もなく、今度は誰の目にも分かる形で、異変が起きた。
それはこの夜、自身の身に起こった数々の事態をすらまとめて呑み込むほどの規模と不安を持って――

「!?」

叩きつけるかのように、強力な魔力の気配がその場を包んだ。
密度の高い感触は重圧にも等しい。
何だ、と。他の仲間に驚きと逡巡が伝播する。
反応できたのは、僅かに構えを取っていた自分と、そして――

「チッ、あれだけで終わりとは思っちゃいなかったけどな……！」

ダンテ。
彼が言い、立ち上がった瞬間に、複合された異常の数々が物理的な力として襲い来る。
それはまるで地の底から這いあがって来るかのような瘴気を纏い、状況に対応する仲間らの不意を突く様に、

「――下だ！」

そうして。
この夜、最大の異変が起こった。

嵐の前のｑｕｉｃｋ　ｂｒｅａｋ　ｔｉｍｅ（４）

突如。という言葉の通り唐突に、その場を不可視の圧力が覆い尽くした。

覚えのある感覚は、先ほどまで戦っていた悪魔達と似た気配を持ち、一体何が、との不安と逡巡の思考に身体は硬直する。

まずは周囲を確認しよう、と。

ティアナが視線を巡らせようとした時、下だ、という叫びが耳に届いた。

叫びの声は自分のよく知る人物のもので、咄嗟に振り返ると、バリアジャケットに加速の術式を展開したシグナムがバックステップ混じりの跳躍をしている所だった。

何があったのか。

まず疑問を持ってしまう己の迂闊さに歯噛みしながらも、一拍遅れた動作で身を跳ばそうとした時、ティアナはどろりとした感触に既に足が捕われている事に気付いた。

――何、これ……！？

分からない。

足元の視界にあるものは、影のような漆黒だった。自身のものではないし、辺りの構造物のものでもけして無い。

光ごとあらゆるものを呑み込んでしまうような深い影――瘴気とでも言うべき暗闇が、こちらの足首までを捕り込んでいる。

「……！」

怖気の混じる感触に肌を撫でられ、ティアナの足は完全に止まった。

しまったと思い、喉元で言葉を詰め、それでも何とか退避の方法を頭が考え始める。

猶予は無く、足元の暗闇の正体も不明。どのような異変が起きたのか、そしてこれからもたらされるのか、自身を取り巻く全てが一瞬で未知へ変わる。

それは、恐怖と呼ばれる感情だった。

焦る思考と不安。重く腹に広がる恐怖の感触。吐く息すら重苦しく感じるような状況の中、背後から、視界を一閃するように青い光が走った。

「――――ティア！」

聞こえた声に振り向いた先。

ウィングロードの上、加速をまるで爆発させるように。そいつは既に駆け出していた。

・
・
・

上空に退避したシグナムは、己の言動に後悔を覚えていた。

下だ、と。咄嗟に叫んだのは失敗だ。異変が来る方向ではなく、

退避の合図とその方向をこそ真っ先に伝えねばならなかったと言うのに。

――クソッ、気が緩んでいたか！

悔やみ、自身への叱責を心の内に生み、しかし既に事態は起こって、進行している。

シグナムは余計な後悔よりも行動する事を念頭に、周囲の状況を確認した。

そして生まれたのは、く、という歯噛みの音。

「逃げ遅れたのは、三人か……！」

地面からその暗闇が溢れたのは、まさに一瞬の出来事だった。

その一瞬に行動が遅れたのはティアナだった。

そして、戦闘ダメージが抜けきっていなかったのだろう、ヴィータが足元を暗闇に喰われ、なのはもまた地上に取り残されている。

「！」

シグナムの傍ら。空気が動く気配を生み、飛び出したのはフェイトだった。

バリアジャケットを脱ぎ去ったソニックフォームで地上へと戻る雷光に、待てと伝える程の時間は無い。

一瞬、という時間でフェイトは黒い闇に呑まれようとするその場に至る。

「なのは！」

白いバリアジャケットの腕を掴み、暗闇に足を取り込まれる寸前、

フェイトは振り回すようになのはの身体を宙へ投げた。
そして視線を次へと。
残されたほかの仲間へ向かおうと、方向を定める一瞬。僅かに宙に停滞したフェイトの体が速度を纏うよりも早く、暗闇から伸びた細い触腕が彼女のむき出しの右足を捉えた。

「く…！」

足を掴まれ、動きを止めた黒い魔導師は地に引きずり落とされる。
どうする、と判断の一瞬。
最も速く動いたのは、スバルだった。

・
・
・

生じた異変に対し、スバルは一瞬の反応を見せることが出来なかった。襟首を掴まれ、強引に身を引かれる感覚に疑念を生じたすぐさま、地面より沸き上った黒い何かがが視界に映り込む。
そして次に、背に軽い衝撃が来た。
視線だけを後ろに向けると、そこにはネロが居て、自分は彼の胸板に身を預けている状態だ。

助けられたのだと悟り、そして気付く。逃げ遅れた幾人かに。
ヴィータと、なのは。そしてティアナ。
っ、と息を詰まらせるような驚愕の最中、金色の雷光が目前を過ぎ去った。

「なのは！」

飛び出したフェイトがなのはを宙に放り投げ、動きを止める。次へ至ろうとする一呼吸で地面の影はフェイトを捕らえていた。
抵抗する事もできず焦りの表情を見せたフェイトの姿に、スバルは一つの事実に気付く。
暗闇が触れたバリアジャケットが火花のような魔力光を散らして分解しているのだ。

――結合が解除されて……、いや、もしかして魔力を吸収してる！？これじゃ、自力で抜けるのは――

不可能だ。
その事実に至ったスバルは、その暗闇の正体に疑念と恐怖を感じるよりも早く己の拳を宙に叩き付けていた。

「ウィングロード！」

首元を掴むネロの腕を半ば振り解くようにして。暗闇の上に一直線の軌道を描いた青い光の道に、スバルは飛び出しの一歩目から最高速度を叩き出した。
まず向かうのは、自身の最も手前で足を暗闇に取り込まれている、

「――ティア！」

手を伸ばす。
向こう側からも伸びた手をしっかりと、強く掴み取った。
腕力と速度で無理やりにティアナの身体を引き上げると、以外に呆気なくティアナの足は暗闇の拘束を脱した。
よし。と、心中で頷きを得た直後、暗闇の溜りから幾本もの細い触腕が伸びる。フェイトを引きずり落とした暗闇の手だ。
Sランクの魔導師すら拘束するあの手に捕まれば、自分の力では脱出できない。そう思った思考が瞬時、選んだのは前へと逃れる選択。
スバルは身体に最大の加速を叩き込んだ。
衝撃波のような風を背後に、ティアナを抱えたまま暗闇の上空を渡り切る。後ろの視界に消えるフェイトとヴィータも、何とかして助けたかったが。
しかしこれが今の自分の精一杯。
悔しくて奥歯を噛んだ横顔に、不意に、ありがとう、との言葉を受けた。こちらの腕の中、胸元に収まる相棒が向ける笑顔に、僅かばかりの笑みで応える。
当然でしょ、と。
そして、
「あと、ごめんティア！これ、止まらな――――！」
二人は、ビルの窓ガラスをフレームごとぶち破って中へ飛び込んだ。

・
・
・

吹っ飛ぶような勢いで駆けたスバルを横目に見つつ、なのはは体勢を戻すとフェイトの下へと向かった。足元に発生した桃色の翼が風を掴み、暗闇の上空から滑る様に身体を動かす。

その動きを掴むように、暗闇から幾つもの腕が飛び出した。

フェイトを捕らえた黒い触腕に、反射反応でなのはは足を振る。重心移動で傾いた体勢にアクセルフィンの羽が別方向の加速を与え、回避運動とする。暗闇からの手を避けた、横向きの急加速。いつもならば何の事はない動きだったが、しかし予測に反して身体の方は鈍い軋みを上げて痛みを訴えてきた。

「、っ」

息をつまらせ、なのはは跳ねる様に一旦空へ身体を退いた。

ネヴァンとの戦いのダメージがまだ残っている。シャマルの回復魔法を浴びたとはいえ、抜け切れていない疲労の蓄積に、身体が悲鳴を上げている。

「こんな状態じゃ……！」

地上にまでは降りられない。

ならば、と。既に用意していた次の選択肢へと行動を切り替える。

レイジングハートにカートリッジを装填、圧縮空間から展開したブラスタービットを高速機動で飛ばす。ビットから生み出されるの

は幾条もの光の線。ストラグルバインドだ。バインドはフェイトの身体に巻き付き、それを確認したなのははビットを急速に引き上げた。

「苦しいかもしれないけど、我慢してねフェイトちゃん！」

ビットのバインドに吊り上げられたフェイトを、なのはは空中で抱き留める様にキャッチ。

「大丈夫、フェイトちゃん!?」

フェイトは、少し荒い息を吐いて、

「なのは……。もっと、きつく縛ってもいいんだよ？」

「な、何を言ってるのフェイトちゃん？」

・
・
・

ティアナとスバルが共に窮地を脱し、なのはがフェイトに向かう

最中、シグナムもまた同様に動きを見せていた。
空を駆けるか、バインドで吊るか、幾つかの選択はあるが問題は時間だ。
他二人と比べて明らかに体格の小さいヴィータは、それだけ速く暗闇に取り込まれてしまう。
フェイトとティアナが足を取り込まれているのに対し、ヴィータは既に腰までを暗闇に覆われている。もとより無い猶予がさらに縮まり、

「――――構えろ、ヴィータ！」

その状況にシグナムが導いたのは荒療治の判断だった。
叫びの声を放ち、抜刀の体勢でレヴァンティンの柄に手をかけると、その体勢のままカートリッジをリロード。射抜くように飛ばす視線の先、こちらの意図を汲んだヴィータがグラーフアイゼンで防御の姿勢を固め、来い、と呼び声を上げた。

「断ち切れ、レヴァンティン！」

抜刀。
居合いの速度で鞘を走ったレヴァンティンは解き放たれると同時に複数の刃へと分離、連結刃へと変じたシュランゲフォームで、地面ごと暗闇をかち割りながら一直線にヴィータへと向かう。
狙いは一点に。
最もガードの固い、中心のポイントへと。
激突する。
鞭のようなしなりの先端で斬り込まれたヴィータは、構えた防御陣に猛烈な擦過光を弾けさせ、その反動に吹き飛ばされるような形で暗闇の拘束を脱した。

「まだだ！」

手首を返し、腕を押し込む。

その手元の挙動に手繰られた連結刃が蛇のような動きを見せ、宙に弾かれたヴィータを追って伸びた無数の触腕を切り払う。更に腕を切り返し、もう一薙ぎ。

そのタイミングで、ヴィータも空へと飛行の高度を上げて体勢を整えた。

「助かった、シグナム」

でも痛ってぇ……。と防御で突き出した腕をさすりつつ、アイゼンの本体に刻まれた鋭いひびを見つめるヴィータ。

「すまん。加減は苦手でな」

いいさ、とヴィータは答える。

「あんなワケ分かんねえ奴に喰われるくらいなら、腕や足くらいお前にくれてやるよ」

「威勢はいいがな、だがあまりそう言ってくれるな。私がお前達に甘える訳にはいかん」

それに何より、

「そんな事、主が悲しむだろう？」

・
・
・

一瞬で巻き起こった異変に、即座に対応して見せた彼女達の行動をダンテは見ていた。

迷い無い踏み込みで、あるいは咄嗟の判断で、そしてあるいは渾身を込めた一撃の重さで、それぞれに手を差し向ける行動の、その全てを。

皮肉の混じらない思考で思うことは、一つだ。

単純に、

――――すげえな

と。

不意の中に現れた異変に対応出来る者は少ない。抗える者はもっと少なく、立ち向かえる者はさらに。

総じて、悪魔とはそういった異変の最奥に潜む獣の事を言うものだ。

対応できただけで上出来。戦って見せたのは驚愕に値する。勝てたのは……どうだろうか、奇跡と言ったら彼女らは機嫌を損ねるかな？

「管理局の、魔導師ね。なるほど、上等な奴らだ」

「あったりまえや！」

ぐっとこちらに親指を立てて見せるはやてに、ダンテも大剣を掴む腕を掲げて見せた。

そしてそのまま、剣を肩に。置いた鋼鉄の重さを感じながら、ダンテは眼下を見下ろす。

新たに現れた悪魔の姿を。未だ全容を見せぬ、その忌むべき漆黒を。

だが、ダンテは笑っている。戦いに臨むのに恐怖を感じた事など無いが、しかし、今のような気持ちもまた同じく感じた事は無かった。

味方が頼もしいと、そう思った事など。

幾つもの戦場で、自分はただ一人だった。互いの背と武器を預けて協力し合ったのは、いつか殺し合った唯一の兄弟と、たった一度だけ。

その時でさえ、こんなにも強く剣を握る事が出来ただろうか。

――親父（スパーダ）、そういやアンタは、誰と出会って人間を好きになったんだろうな……？

強大な悪魔は、その全てが己に自負する力を持っている。悪魔の力とは、それは単純な破壊だ。砕き、壊す事しか知らぬ、原初的であって、それ故に強大な力。

対して。

人の持つ力は微々たるものだ。悪魔の足元にも及ばない。

しかし。それ故に人は多彩な力を持つ事が許される。何かを発明するのは人だ。世界の広さを変えるのも人だ。誰かを助ける事も、人にしか出来ない。何かを変えるのも、そして、変えたのも、それ

は全て人の持つ力だった。

――あんたも、出会ったのかな？こんな、スゲエ魂を持った奴らと。千年以上、怨みを残してもいいと思えるほど、スゲエ奴に

そうだったなら、幸いだ。少しは、今までの苦労が報われる。

「さあ、来るぜ！構えろお前ら！」

高まる魔力の気配に、ダンテは吠えた。

次の戦いが、始まる。

悪夢のｍａｎｙ　ｔｒｙ　ａｇａｉｎ（１）

その場に居る、全ての者がその音を聞いた。
それはアスファルトの舗装が捲れ上がる音であり、砕け散ったビルのガラスが降る音であり、砕けたコンクリートの落ちる音である。
音は連続的な響きを生み出し、共鳴のような振動を地面に広げている。
振動を呑み込むものは黒い水面だった。生み出されたそれらの音を全て呑み込む波紋の水面は、黒い夜に更に漆黒の飛沫を飛ばす。

「何だ、これは……！？」

異様。
シグナムの眼に映る光景はただその一言に尽きた。
表現するならば、沼、という単語が最もふさわしい。地面を砕き、物体を呑みこんで沸き立つ黒泥の沼だ。
しかしそこから受ける印象は、自然発生した水と泥の溜りとは、とうてい呼べないようなおぞましいものだ。
底の見えない黒色の内側に、“恐怖”という概念そのものを取り込んでいるかのような、肌を撫でる感覚がある。
覗き込むと取り込まれてしまいそうな気がして、僅かに背後へ下がろうとする己を抑え込み、は、と息を吐く。
息を吐くことで声を上げる溜めを作った自分に――否、この場で言葉を失う全員に向けて、まずはダンテが口火を切った。

「――ナイトメア」

声に、それぞれの表情が向く。
作っておいた溜めで、シグナムはその声に応えた。

「……やはり悪魔なのか？これも」

ああ、という肯定の頷きを見せ、ダンテはさらに言葉を語る。

「俺の知ってる奴らの中でも、飛びぬけて厄介な野郎さ」

確かに、とシグナムは思った。

大怪獣からこの不定形まで、随分と手広い種類がいる悪魔の様相は辟易せざるを得ない。しかも、剣戟主体の戦闘スタイルを持つ自分にとって、物理攻撃が有効そうではない相手は一番の苦手だ。加えるなら、敵の攻撃手段も不明瞭だ。自在に姿を変える様な特性があったとするのなら、それこそ面倒と言うものだろう。

そう言ったこちらの言葉に、しかしダンテは苦笑のような響きを返した。

「それだけなら楽なもんさ。いいか？コイツの武器は俺達の記憶だ」

「記憶だと？」

「ああ。アイツは取り込んだ人間の、頭の中にある記憶を吸い取ってそれを実体化させちまう。――覚悟しろよ？アレが呼び出すのは、ソイツの中にある、最悪の“悪夢（キオク）”だ」

まさに、ナイトメアというその名の通りに。

まったく、という呟きが口から漏れた。

「悪魔に常識など、通用せんという事か」

「今ごろ言ってんのか？」

寝坊のツケだ。
切り返して、シグナムは見た。
地面に広がる沼の様相を。
湧き出すように拡大を続けた勢いは既に無くなっており、今は静かな水面に、三つの波紋が生じていた。
底から水が湧き立つかのように、ゴボゴボと音を立てて。三つの飛沫が水面を乱している。
それはまるで何かが底から這い上がって来るかのようで。

地面に広がった暗闇の沼が、そして凝縮する。
流動を大きくうねらせた黒の水面が、不意に、爆砕するかのように水柱を昇らせた。
地面に湧き出ていた黒い沼は空へと至り、霧散するように破裂する。
地面には、その水面が存在した痕跡すら無い。
だが代わりに、現れた物が三つあった。

悪夢（ナイトメア）。
吸い取った“悪夢”は三つだった。
故に、顕現する“悪夢”の象徴も三体。

その“悪夢”とは、

第一期の小さいなのはと、

第二期の少し小さいなのはと、

第三期の大きいなのはであった。

沈黙……。

沈黙……。

沈黙。

ひたすら沈黙が続いた。

どうしようもない沈黙が、ずっと続いた。

シグナムは何の言葉も無くただ黙ってその光景を見つめるしかなかった。

ダンテでさえ、表情を引き攣らせた苦笑いで固めたまま、身動きをしようとはしなかった。

時は止まり、身動きは憚られ、呼吸すらも出来ないような恐ろしいほどの緊張がある。ある種の一体感を感じずにはいられないこの場を表すのならばそれは、

――――うわー……

と、そんな言葉だろう。

だって、仕方が無い。

液体窒素で瞬間冷却したかのように空気が凍り付いていて、さらにその上から微妙な雰囲気が全体を覆っていて、そしてそれを圧縮して押し固めるかのような重圧が上から掛けられているのだから。

動ける筈が無い。

物理的にもそうだし、精神的にも、

――――動いた者が、真っ先にこの状況にツッコミを……！

だから、みんな動かない。

それはそうだろう。気化したガソリンの充満する空間の中で、ツルハシを持って鉄鉱石に一撃を入れに行くようなものだ。無謀と無茶が入り混じっている。

そうして、誰もが身動きを封じられたまま、たっぷり二秒が経過した。

二秒って何だ!?と、シグナムはデバイスが知らせた刻限と体内時計とのウラシマ効果ほどもある時間のズレを感じつつ、ちらりと視線だけで、本物のなのはの方を見た。

「……」

唖然と驚愕が入り混じった、今の今まで、本当に長い付き合いの中でもまったくまるで見る事の無かった表情をして動きを止めている。

恐らくは。

――あ、くむ？あくむって、なんだろう？わたし、えっと…、そんなひどいこと、したっけ……？フェイトちゃんはともだちでしょ？あれ、ヴィータちゃんもなかまだよね？ティアナもそうだし……。あくむ？あくむって？げきついしたのがだめだったのかな？でも、だって、だって、だって……

そんな感じだろう。

あまりの事態に理解が追いつかず、現実を認めたくない心理が思考を拒絶しており、さらには三人それぞれに対して少し覚えのある行動というか、戦闘経験があるから、もうあらゆる意味でどうにもならないのだろう。

次に。

シグナムはフェイトへと視線を移した。

引き攣った表情。困惑の顔が、なけなしの苦笑を表に出しているが、しかし口元がまるで笑えていない微妙な表情だ。模擬戦の相手が予想よりも明らかに弱くて、思いがけないタイミングで直撃弾が入って撃墜した時などにあんな表情を見せる事がある。読心するのなら、

――やっちゃった……

そんな感じで。

そしてヴィータ。
頭を抱えてうずくまる赤い背中を、はやてがそっと抱きしめていた。
表情は見えないが、肩が小刻みに震えている事から見て、泣きそうなのを堪えている感じだ。慈母神のようなはやての表情に、シグナムは事の深刻さをさらに知る。

最後にティアナを見た。
死にそうな顔をしていた。顔面蒼白どころか、全身から色素がまるっきり抜け落ちて空気と同化しているかのような印象すら受ける。
今まさに死刑宣告をされた罪人のような表情で、しかも小刻みに震えながら泣きそうに顔を歪めている。隣にはスバルが立つが、しかしいくらパートナーとは言え、この状況では無力だった。

ダンテが意気揚々と悪夢だの何だのと説明をしたのも、今となっては災いである。
フェイト。
ヴィータ。
ティアナ。
三人の深層心理にある、“最悪の悪夢”が、高町なのはその人であると証明されたも同然なのだから。

そして。
そんな三人の深層から出でた三人のなのはは、くきくきと関節と身体の可動を確かめるかのように手足を動かしていて、その姿は、挙動は、まさに戦闘開始直前の高町なのはという人物の取る動きそのもので、

――ああ、本当にアレは高町なのだな……

という思いを強制的かつ的確に心に打ち込んできた。
沈痛な雰囲気が、徐々に針で刺す様なピリピリとした空気へと変わる。
いたたまれない、という単語まで夜空を飛び始めたような気がして、シグナムはそれとなく視線を本物のなのはに戻した。皆の視線も、自然と集まる。

そんなどうしようもない停滞の空気は、

「――――――、、、、」

沈黙に押し潰されるかのように膝から崩れ落ちてうずくまった本物のなのはが、声すら上げずに泣き出したのを契機に一気に動き出した。

「――ち、ち、ちちち違うよ！　ききき、きっと、何か、何かの間違いだよ！　きっとそうだよ！　あ、ああ、あく、む、だなんて、そんな筈ないよ！　ねえ、なのは？　なのは！？　なのはーーー！！」

地面に伏せて肩を震わせるなのはを必死で励ますフェイト。ところどころで声のトーンが上擦っている辺り、彼女も動揺を隠しきれていない。

「だってさあ……。あの時さあ……。炎の中からさあ……。あいつが無傷でさあ……。怖かったんだよぅ……。あたしだって怖かったんだよーーー！」

なのはにつられる様に、ヴィータははやての腕の中で号泣し始めた。

はやてはそのヴィータの頭を優しく抱きしめて、彼女にしか聞こえないような小さな声で何かを囁いている。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

そしてティアナは、もはや何かが壊れてしまっていた。

こちらから少し離れた所では、こそこそと集まったダンテとネロが、

「……なあオイ、ネロ。あのツインテの嬢ちゃんは何者だよ。悪夢に十割的中って、どういう事だ？」

「……俺に話を振るんじゃねーよ」

頭痛がして来た。

戦う前からダメージを入れて来るとは、さすがは悪魔と言ったところだろう。きっとそうだ。そうに違いない。そういう事にしておこう。悪魔め。忌々しい悪魔め。

――――何故だろうな。妙な罪悪感がチクチクと……

「――――くす」

と、そんな無邪気な笑いに目を向けると、崩れ落ちた本物とはまったくまるで対照的に爛々と目を輝かせて戦闘準備は万全だと言いたげに微笑む悪夢が三体、こちらの様子を見据えていた。

高町なのはの微笑みを浮かべて。

高町なのはの声色で笑い。

高町なのはの覇気で、

「それじゃあ、行っくよー！」

全力全開の前触れが、揃って三つ。

問答無用は悪魔の本性か、それとも本人の性分なのか。唯一確かなのは、時と状況がこれ以上長くこちらを待ってはくれないという事だ。

「――――ああ成程、確かに厄介だな！」

未だかつて無い戦いの幕が切って落とされた。

悪夢のｍａｎｙ　ｔｒｙ　ａｇａｉｎ（２）

さて、という嘆息に似た前置きを胸に、シグナムはどうするかと思考を回した。
目下のところ身に瀕した危機は三つある。
幼少期の高町なのはと、自分らと出会った頃の高町なのはと、現在の高町なのはだ。ややこしいのでしばらくの間は便宜的になのは（幼）、なのは（小）、なのは（強）と呼ぼう
――なのは（大）では少々、表現に語弊があるからな……
些細だが重大な問題だ。
さて。区別もついたところでどうするか。
本当にどうしたものかとシグナムは眉間にしわを寄せた。
奇妙というか奇異というか、本物のなのはには申し訳ないが同じ人間が同じ場所に四人も居る光景はひどく不気味だ。
いや、正確には人物ではない。“高町なのは”という姿の皮をかぶった意気揚々な悪魔が三体と、絶賛むせび泣き中の本物が一人だ。
――……、、、いや、まあ、分かってはいるのだがな……
さりとて一口で鵜呑みに出来るほど簡単な光景ではない。
例えば、幻術というものがある。網膜に映る光学情報を偽装する魔法だ。
応用すれば術者本人の分身を作る事も出来、ティアナが得意とする幻影もこの応用魔法だ。
そういった魔法に対処する場合は、術者の魔力を探ったり、挙動や声色の違い、気配の有無を機敏にとらえる事が重要なのだが……

――そういった違和感がまるで無いな。本当に、本物のなのはが居るようだ

姿形だけでなく声や雰囲気や魔力の感触までもがそっくり瓜二つ。双子だろうとここまでの近似はありえないだろう。

いや、そもそも似ているという表現すら正しくは無い。

近似ではなく、一致だ。

同一の存在が、本物以外に三つ。感想を添えるならば一つしかない。

「――こんな状況は生まれて初めてだ」

驚くというか、呆れ返るというか、

「悪魔は何でもアリか？」

今更のようにも思えたが、シグナムはその問いかけをダンテに投げた。

真新しい記憶の中から思い出していたのはクジラの化け物だった。あの大怪獣もそうとうに常識離れしていたが、今のこの光景ほどではなかったと思う。

――そもそも、あの化物に驚いたのはここが地球の海鳴だったからだ

数十メートル級の巨大魔導生物を相手にする事自体は、管理局の戦闘系魔導師ならばそう珍しい事ではない。戦場の条件すら、空間、惑星、時空などの要素で千変万化だ。

そのような次元を超越した経験の中にすら、現在の状況に類する

場は無かった。
　Ｓランク級の全力系砲撃魔導師×３（しかも全て同一人物）との戦闘経験は今日が初めてであり、もしかしてこれは貴重な経験なのかもしれないなあ、と。半ば諦観の感が入るこちらの表情に、隣のダンテは軽く視線を向けながら肩をすくめ、

「礼儀も常識も知らない奴らさ」

　そのようだ。
　ダンテに言葉を返す前に、

「――――行っくよー！」

　砲撃が来る。

・
・
・

　光の炸裂は音の爆発と共に来た。
　激震が風と瓦礫の破片を四方に吹き飛ばし、その砂塵の中をシグナムは前へ突っ走る。

不良な視界を剣で切り裂き、抜けた向こう側に既に三つのなのはの姿は無い。
どこへ、と疑問を思い浮かべる前にシグナムはバックハンドの剣撃を背後の気配に叩き入れた。飛沫のような破砕音が幾つか重なり、桃色の光が目前で散る。

――アクセルシューター……！威力と精度から見て、

恐らくはなのは（小）の攻撃だ。
戦闘機がミサイルの追撃をかわす為にフレアをばら撒く様に、離脱の瞬間に放ったのであろう。
目的は二つ。

――離脱の補助と、こちらの足止め……！

はたして、予測の結果はすぐさま来た。
身に降りかかるような形で、僅かに止めた動きに間髪を挟まぬ砲撃の桃色が、正面から。
こちらの胸を貫く軌道で来た砲撃に、しかし驚きはしない。
むしろ、この程度は当然、という含みを持つ笑みを表情に浮かべてシグナムは剣を正眼に構える。
砲撃の光が間近に来る。
刃を斜に、シグナムは剣身の側面で光を受け止めた。
魔力光の飛沫が激しく飛び散り、強大な圧力が手元に来る。強力に瞬く桃色は砲撃の魔力である。それに削られるように散る紫の光は自身が剣に注いだ魔力だ。
拮抗状態。
しかし静止の時間は一瞬で崩れる。
シグナムは砲の威力を剣に乗せたまま、手首を倒し、真横に振りかぶるような形で自身の背後へと剣身を逸らした。桃色の砲火は、

その動きによって傾いだ刃をレールとしてシグナムの側面を抜け、背後へと熱量を運び去る。風が通り抜けた。

髪が揺れる感覚を背後に流しつつ、瞬間、着弾と爆砕の音、衝撃波とさらなる風が背後から来て、

――ディバインバスターか、これは最も幼いなのはのものだろうな

戦闘の思考を一つ。

予測判断の材料は、砲の威力に足りなかった貫通力だ。

今の砲撃、圧は相応にあったが、それはどちらかと言えば押し込むような形のものであり、常の高町なのはが得意とする抉り込むような圧力はあまり感じなかった。

魔力を叩きつけるかのような、力技の一撃だ。

防御を貫いて攻撃を届かせる砲撃の形態は、高町なのはの研鑽とレイジングハートとの密接な関係によって形成されていったものであり、魔法に触れ、その才能のみで敵と渡り合った高町なのはでは持ちえないものだ。

「それでも、こちらの魔力防御を半分以上持っていかれたか。末恐ろしいな、まったく」

いや、その“末”が本人にまだ訪れていない事の方が恐ろしいのか。

どっちだろうな……、どっちもか。と考えるシグナムの視界の中、砲撃の爆風で掻き消えた戦塵の向こう、空戦軌道の白い影を抱く黒い広がりがある。

夜空だ。

高町なのはが制する、広大な天の空間へと、二つの姿が退避していた。

その飛翔の影に、シグナムは疑問の感覚を得た。それは、最も警

戒すべき一人であり、全力全開系のバスター系であり、最大破壊力を持つ、

――なのは（強）は、

「何処だ！」

「こっちだよ、シグナムさん！」

答えは、背後から現れた。

・
・
・

攻防の瞬間をネロは見た。

僅かに遠い距離では、紫炎の騎士と白い姿の魔導師とが相対している。

しかし、それは正対していない。

杖が剣の背を取る形での差し合いだ。

攻防の始まりは、シグナムの背後から現れた白い姿だった。高町なのはと同じ顔をした悪夢は、既に魔力の溜めを終えたであろう杖

の先端を彼女の背に向け、

「こっちだよ、シグナムさん！」

その唐突な出現に、ネロは少々驚いた。

超高速で移動する悪魔や空間を超えて現れる悪魔は見た事があるが、その悪夢の出現はそれらのどれとも違っている。

連続した映像フィルムの途中に不意に姿を書き足されたかのような、そんな現れ方だ。

「何、今の……！？幻術！？」

隣には自身と同様の疑問を口にするボーイッシュな少女、スバルが居る。

スバルは、胸の中にフルフルと小刻みに震える相方の姿を抱いており、全身から血の気を失いすぎてもはや純白の域に達しているその姿が無暗に気になったというか心配になったが、

「――――幻術？」

どうにかネロは言葉を疑問の形に作った。

魔法、という技術の説明は先ほどなのはから受けた。

単純かつ単一効果を発揮する、術式。

術式の複合並列処理にて高度な現象を引き起こす、魔法陣。

それら魔法の発動に用いられる魔力、など。

そういった説明の中に“幻術”という単語は出てこなかったが、ニュアンスでそれが魔法という技術体系の一端なのだという事くらいは理解できる。

「いや、幻術とはちゃうで。あれは、擬態（カムフラージュ）や」

と、声を送って来たのははやてだった。
スバルと同様に胸に少女の姿を抱く彼女は、自分とスバルの両方、さらにはダンテの方に視線を送りつつ、

「幻術は、言うてみれば光学情報の隠蔽や。姿を消したり増やしたり、色々な事が出来るんやけど、その分、魔力の気配が強くなってしまうもんや。シグナムクラスの魔導師相手に、その気配を隠すのは難しいで」

魔力の気配。
言葉に、ふとネロは己の右腕を見た。悪魔の接近に対して、この右腕は疼きを持ってそれを自身に知らせてくれるが、そういった感覚に近いのだろうか。

「――――で、擬態（カムフラージュ）ってのは？」

視線を戻すとダンテが問い掛けの言葉を作っていた。
はやては言葉に呼応するように一度頷き、

「簡単に言うと、ただの“見せかけ”や。こっちの意識下から自分自身の気配を完全に消して、そこに居るけど、居ないように見せかける。道端の石ころを気にして歩く人なんて滅多におらんやろ？擬態は、他者から見た自分という存在の序列をその石ころ以下にまで落とす、高度な魔法……って言うよりも、技術やろか？」

勿論、とはやては続ける。

「ずうっとそのまんまは無理や。いくら気配を無くしたとしても、そこにはちゃんと居るんやから。動けば即バレや。こっちから見破

る事も不可能じゃない。まあ、ちょっとしたコツは必要やけど、それが出来んシグナムやない」

だが実際にはシグナムは相手の用いた擬態を見抜けず、背後を取られた状況で相手の得物の切先を向けられているというのは、

「アクセルシューターとディバインバスター。アクセルシューターで足を止めて、ディバインバスターで決めに来たと思ったら、そのどっちもが囮やった訳やな」

単純な陽動だ。

しかしその陽動の流れに、神速の踏み込みを持つシグナムを巻き込むには、単純とは言い切れない行動と判断の折り重なりが必要になるだろう。

敵の行動を読み切るのが、まずは大前提だ。

その上で自らの危険領域ギリギリにまで踏み込ませる必要がある。

さらにそこへタイミングを合わせ、撒き餌をばら撒く。

よくもまあ一瞬でそんな連携が出来るものだと、ネロは感心に似た心情を動かしていた。他者に合わせるのが苦手な自分には無理な話だな、とも。

ネロが剣のグリップを強く握り直す、その間にも二人の魔導師は互いの攻撃を引き絞っている。

白の悪夢は砲門の火を解き、紫炎の騎士が振り向きの大剣を大上段から斬って落とす。

互いが、互いの呼吸を見ている。

擦り切れるかのような空気の摩擦をネロは肌で感じた。

両者が放たれる。

「！」

威力が交差する。

悪夢のｍａｎｙ　ｔｒｙ　ａｇａｉｎ（３）

シグナムは構えの向こうに光を見ていた。
砲撃の光だ。
魔導師の砲撃に対し、シグナムは大上段からの振り下ろしで対抗する。
自身のデバイス、レヴァンティンの刃には魔力反射の術式が組み込まれている。常ならば、敵の魔力防御を切り裂く為の装備だ。
防御陣や加護術式など、一定の魔力循環によって効果を維持する魔法に対して、セオリーに則った対処法は二通りある。
術式効果を上回る程の攻撃を叩き込むか、術式自体を攻撃するか、だ。
自身の得意技は前者の方だが、剣に仕込まれた反射術式は後者を想定して組み込まれている。
魔力循環を伴う防御陣では、その陣が破られた時点で緊急回路がバイパスで繋がれて効果を維持すると共に、術式内に外部の魔力が取り込まれての逆流が生じないよう魔力洗浄の機能が働く。
防御陣と攻撃魔法との激突が魔力光を伴うのは、これらの現象が一瞬で何千、何万回と行われている結果だ。
しかし魔力反射の術式で斬り込まれた場合、防御陣内部では反射された循環魔力による逆流現象が生じる事になる。魔力洗浄の機能は同種の魔力にはうまく働かない。
なので防御陣は内側から己の魔力による暴走状態を引き起こし形式崩壊する。
それが通常の術式運用だ。
しかし今、己が行おうとする行動はその運用から大きく外れる。
危険な賭けになる。

だがもはや、防御にも回避にも足りぬ距離で放たれた大砲撃に対するには、この判断の他に無い。

覚悟を決めろ、と、いつになく力を込めた手で柄を握れば、力強い鼓動を返す剣が己が手の内にはある。ガシャリ、とベルカ式のカートリッジユニットが内燃機関に魔力を打ち込んだ。

レヴァンティンも、こちらの判断を良く理解している。その上で最高の力を自身に与えてくれる。

ならば行こう、とシグナムは意気をはらむ呼吸を吐き出した。

迷いは無い。

構えの大上段から一直線に、

「――――叩き斬る！」

・
・
・

光が爆ぜる音をダンテは聞いた。

激突は正面からだ。

光の直射を正眼に捉えたシグナムが一線に剣を振り下ろした。

光の一直線は斬り込まれた刃を圧倒して押し込む。シグナムが、構えの根幹を司る後ろの踏み足を僅かに後退させるのをダンテは見

た。
だが、
――その踏み方は“退（さが）る”踏み方じゃねえぜ
半身を引く程度の僅かな後退は、ほんの一瞬の初速を得る為の距離だ。
はたして視界の騎士は押し込まれるかのように引いた後ろ足を軽く曲げ、その足のバネと地を踏む踵をもって剣をさらに深く叩き込んだ。
前進に向かう踏み込みが騎士の身体を前へと押し込み、その全身を砲の光が包み込む。
紫炎のような燐光が散っている。
「シグナムさんの、甲冑が……！」
背後には息を呑む気配がある。
スバルだ。
声に対する反応として、はやてが険の混じる口調で、
「レヴァンティンの魔力反射で砲撃の魔力結合を分解する気や！レヴァンティンなら収束の魔術効果そのものに斬り込めるから不可能な事やないけど、完全な力技や。押し負けたら、直撃……！」
焦燥の空気は、シグナムという騎士もなのはという魔導師の事も、聞いた話以上には知らない自分にも伝わってくる。
だが同時に、確かに知っているものも一つだけあった。
互いの剣を交わした感触だ。
打ち合った剣の重さはよく覚えている。それは、魔界で鍛えられた刃が焼き切れるかと思った程の戦闘の余韻だ。

身体の芯に揺らぎを得ている紫の騎士に、しかしダンテは思う。

――――そんなモンだったか？

違う。

彼女の視線が、そんな意志を込めてこちらに向いた気がした。

――――なら、見せてみろよ

ああ。

そんな気迫の入りを、ダンテは見た。

「――――紫電、」

騎士が踏み込む。

半ばまで斬り込まれた剣に膂力を乗せ、強引に、さらに前へ。

騎士の身体そのものが削り落とされていくかのように、散り砕ける燐光が強く輝いている。

大気の熱を飽和させるかのような桃色の怒涛に、その身は深く沈み、

「一閃！」

しかし騎士の一刀は確かに振り切られた。

砲が、両断される。

上段から落ちた剣の切先が地面を割砕し、砂塵を巻き上げ、左右に別れた爆砕の光がそれら全てを包み込む。

風が来た。

衝撃波とも呼べる風のうねりをコートに受けつつ、ダンテは視線を外さない。

長い髪を風に乱し、破れ千切れた着衣をそのままに、蒸気のような灼熱の煙を昇らせる剣をかざし、しかしその身の健在を誇る騎士の姿が、視線の先にある。

「――Ｓｗｅｅｔ，ｂａｄｙ」

イカしてるぜ、ベイビー

振り向いた騎士が眉尻をひそめるのをダンテは見た。

「誰がベイビーだ、馬鹿者」

・
・
・

飛翔の姿をシグナムは正面に見ていた。

砲撃を潰されたなのは（強）が一旦の退避として空へ飛び上がる。

広角に動かした視線だけで敵の位置を確かめると、なのは（幼）は右側の上空で次の攻撃の手段を展開中であり、その正対の位置ではなのは（小）が魔力をチャージ中だ。正面には杖を構え直すなのは（大）がフライヤーフィンの魔力光を足元に展開しており、

――ええい、なのはなのはと同じ顔ばかりで……！

やはりここは恐るべき戦場だと痛感する。戦闘条件が特殊すぎる。この戦慄に似た違和感の雰囲気も敵の策略だろうか。

「――まあいい。レヴァンティン、甲冑の再構築は可能か？」

砲撃を切り裂いた事で、自身の騎士甲冑に纏わせていた魔術防御が全て崩壊していた。その他にも加護効果や他にも障害が出ている箇所は山ほどある。

――物理衝撃干渉と、魔力障壁、あとは生命維持の調節機能か。随分とやられたものだ

細かい機能不全を挙げればきりが無いほどだ。

まだまだ自分はこんなものだな、と嘆息する。

砲撃級の魔法を正面に受けて形式崩壊していない時点で城塞並みの防御能力なのだが、自身の目標はまだまだ先だ。

と、システムスキャンを終えたデバイスが結果を告げる。

『６８．７４％ ｗｕｒｄｅｎ ｚｅｒｓｔ？ｒｔ（破損率６８．７４％）』

意外と軽微だなと思い、

『Ｂｅｇｉｎｎ ｄｅｒ Ｒｅｓｔａｕｒｉｅｒｕｎｇ（修復開始）』

騎士甲冑の内部を魔力が循環するのをシグナムは感じた。

５０％を超える破損状況からの修復は再構築によるリフレッシュ

では行えない。回復には魔力循環を基本とする修復状態を維持する必要があり、その間は騎士甲冑の防御効果は失われる事になる。
無防備だ。
しかしその状態に恐れは抱かない。
元よりこの身は、己と剣一つで構成される騎士という存在に過ぎないのだから。
ならば果たそう、とシグナムは思った。己が身に沁みついた本分を。

「さあ、行くぞレヴァンティン。――ここからが、戦闘だ」

・
・
・

戦場が動いていた。
まず一つ目の動きは空にある悪夢（なのは）の姿に向けて飛び上がったシグナムの姿だ。
対するように悪夢も陣形を取る。
なのは（強）が接敵し、挟撃の形でなのは（幼）が動く。その他の状況をなのは（小）の視界が広域に捉え、その視界の中では他の動きも同時に展開される。

「さあて、行くぜお嬢ちゃん（リトルガール）」

射撃が来た。

赤いコートの翻りと共に銀と黒の銃から射出される幾つもの弾丸が空に殺到する。

対する防御としてなのは（小）は防護盾（プロテクション）の魔法陣を右手に組み立てた。物理干渉の術式を組み込んだ防御の盾は、炸薬式の小型質量弾程度ならば傷一つ付かずに受け止める強度を持つ。

「――――盾（シールド）よ！」

なので、防御の判断としてそれを下方展開した。

半球状の光盾がなのは（小）の小柄な身体を覆うほどに広がり、左で持つ杖には砲撃級の魔法を撃てる魔力が既にチャージされている。

対応としてはこうだ。受け止めて、撃ち返す。単純で明快で強力だ。全力万歳。

だから構える。

そして銃弾の激突が瞬時に次々と行われた。

盾に銃弾の数々が至り、魔力の燐光が波紋のように盾を震わせる。

半円の形状は衝撃を分散して逃がす効果がある。魔力障壁を貫通できぬ質量兵器の威力では、この時点で与えられた加速を全て奪われて無力化される筈だ。

「！？」

筈だった。

盾に至り、衝撃を波紋として吸収された銃弾は、しかし、落ちない。

高速の回転を与えられた銃弾は盾の表面を抉り込むかのようにその動きを止めずにいた。盾の上では物理干渉の術式が効果を発揮している。

高速回転にてその鉛の身体を押し込んでくる銃弾に対し、その物理力を打ち消す様な形で発生する反発の力がそれだ。加えられる力を、同等の反力を持って相殺している。

その間にも地上からの射撃は繰り返されていた。

盾の上では着弾の衝撃が幾つもの波紋を生み、回転を得る銃弾は盾の表面で踊り続ける。

予期せぬ拮抗状態が生じていた。

――――けど、大丈夫……！

盾の強度にはまだ余裕がある。

質量兵器が最大の破壊力を示すのは着弾時であり、その衝撃は既に拡散させている。盾の上に残るこの銃弾もいずれは威力を失うだろう。

「！」

そして次の波紋が盾を震わせる。

しかしそれは、盾への新たな着弾としてではなく、

「先に、ぶつかった弾に……！？」

さらに、後に続く銃弾が激突する。

先に到達した銃弾は盾の表面で回転を抉り込んでいる。その銃弾に対して後続の銃弾が激突の衝撃を与え、幾つかの弾は衝撃に割れて弾け、しかしほとんどの数はさらに深く回転を盾に対して食い込ませた。

負荷が来る。
く、と歯を噛み、そしてまだ銃撃は終わらない。
次の着弾が来た。
波紋が生じ、盾が震える。まずい、となのは（小）は思った。
盾には今、二度目の銃弾による過負荷が生じており、盾に注いだ魔力はその銃弾に集中している。魔力の均等が取れていない部分に攻撃を受ければ、盾全体としてのバランスが崩れ、

「く……！」

押し込まれるような圧力が構えの右手に来た。
衝撃を均等化する事によって威力を無効化する盾に、歪みが生じたのだ。
つまりは、

「破られる！」

右手の位置をそのままに、なのは（小）は身体を跳ね上げた。
体制としては片手で段差を飛び越えるようなものであり、高く跳ね上がった足元で羽ばたきを得るフライヤーフィンにさらなる加速を打ち込んで、

「ん！」

飛び上がった。
足から昇る飛び上がりの挙動は、なのは（小）の身体を足元から前転の方向に回転させる。
術者との接続が途切れた防護盾（プロテクション）が撃ち砕かれるのを逆向きに回る視界の中に、なのは（小）は地上のコート姿を見た。視線を鋭く、その姿を照合（サーチ）する。

悪夢（なのは）としてではなく、悪魔（ナイトメア）として持つ知識と記憶の中、その姿は刻み込むように記録されていた。

「――ダンテ」

敵を確認する。

悪魔の敵。

己の敵だ。

「――ディバイーン……」

だから、なのは（小）は即座の攻撃を叩き込んだ。

回転を終えて体勢を戻した左手を直下に構え、チャージしていた魔力を杖に注ぐ。

光の円環が幾つか重なり、照準と構えのぶれを正してくれる。魔力が集まり、圧縮され、加速する。

溜めは一瞬で、解放は瞬間に。

「バスター――！」

砲撃した。

桃色の直光が伸び、爆裂の結果を地上に落とす。

しかし命中はしていない。敵は素早い動きで身を翻して直撃を避けた。後姿が眼下に駆けている。

さらにはこちらを仰ぎ見るような振り向きの動きに合わせ、コートが揺れ、二つの銃身が跳ね上がった。

銃撃が来た。

対応する判断は回避だ。

フライヤーフィンの羽ばたきに身体を預け、空中での位置をスライドさせる。さらに加速し、上昇の捻りを入れ、至近に迫る銃弾に

は即座の盾を展開した。
撃ち抜かれるが、簡易防壁の役目は一瞬の時間稼ぎにある。
その一瞬で、既に自分の姿はそこには無い。大空の広がりの中では、この身体はどこまでも自由だ。

「アクセルシューター！」

反撃を生む。

「行って！」

総数にして十の魔弾が飛んだ。
加減速による俊敏な動きで魔弾はダンテの姿を追尾する。
ダンテが銃を構え、銃弾が撃ち放たれる。正確な射撃は回避運動を取った魔弾の半数を撃ち落とし、生き残った半数すら踏み止まりからの剣撃で薙ぎ払われる。
しかし既に次の手は放たれている。
魔弾だ。
十発。
続き、もう十発。
さらには杖に魔力を注ぎ込み、射撃の魔法陣をその周囲に展開した。

「――シュート！」

射撃を撃ち込んだ。
この射撃は砲撃級の破壊力は持たないが、しかし連射と直線速度においては遥かに上回る。威力に関しても崩れかけのコンクリート壁程度は撃ち抜くものだ。
その砲射撃を、間断無いバーストシュートで放った。

連続五射。
地上に爆裂の連華が咲く。
撃ち手を捻り、肘先の動きで杖を跳ね上げて射撃の反動を逃がしつつ、なのは（小）は最後の一撃で粉塵と炸煙を薙ぎ払った。
爆裂の衝撃波が煙を晴らし、その奥に駆け出しの体勢で背を向ける赤いコートを見る。
逃がさない。
追撃の羽ばたきを得ようとフライヤーフィンが翼を折りたたんだ。
足を折り、空を蹴り出す姿勢を作る。
足元の羽ばたきが魔力の燐光を生み、加速する。

「っ！？」

その瞬間、なのは（小）は右手側の側面から強力な打撃を身に受けた。
体勢が崩され、加速を生んだ直後の翼が強引に制動の羽ばたきを打った。身が回る。足がフライヤーフィンにより勝手に蹴り出され、体勢が無理やり戻る。
何があったのか、まずは体勢を整える事が先決だと、なのは（小）は判断の思考を回す。急加速による上昇で俯瞰の視界を得ようとし、

「ふぇ、え？」

がくん、と身体が意に反して沈み込んだ。
何だ、と思い。何が、と見れば。足元には、フライヤーフィンの光翼を握り潰してこちらを掴む異形の腕がある。
冷たい青の色に燃えるその腕の先、地上に立つのは銀髪の下から獣の瞳を覗かせる、黒いコート姿であった。
誰だ、と思う。
悪魔の記憶には無い姿だ。

そしてまた、何だ、と思った。
悪魔と同質の気配を放つ、この腕は。

「――、」

黒いコートは何も語らず、腕をこちらの眼下へと引き込んだ。
身が引かれ、落下の軌道に入る。緊急回避。掴まれていないほうのフライヤーフィンを羽ばたかせるが、対ではなくなった羽ばたきは力弱く、体勢を引き戻すには至らない。

「Ｌｅｔ'ｓ　ｇｅｔ――」

く、と下向きに引かれる重圧に苦痛の声が肺から漏れた。
下降の軌道は振り回しの動きへと変わり、遠心の速度を受ける視界に風景が高速で巡る。焦点を定める事が出来ない。自分の身体がどういった動きにあるのかすら分からない。
しかし速度の至る方向へ動かした視界が、一面に広がる壁のような存在を認識し、

「――ｃｒａｚｙ　ｙｅａｈ!」

激突した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0742h/

Devil Nano Cry

2011年11月17日00時35分発行